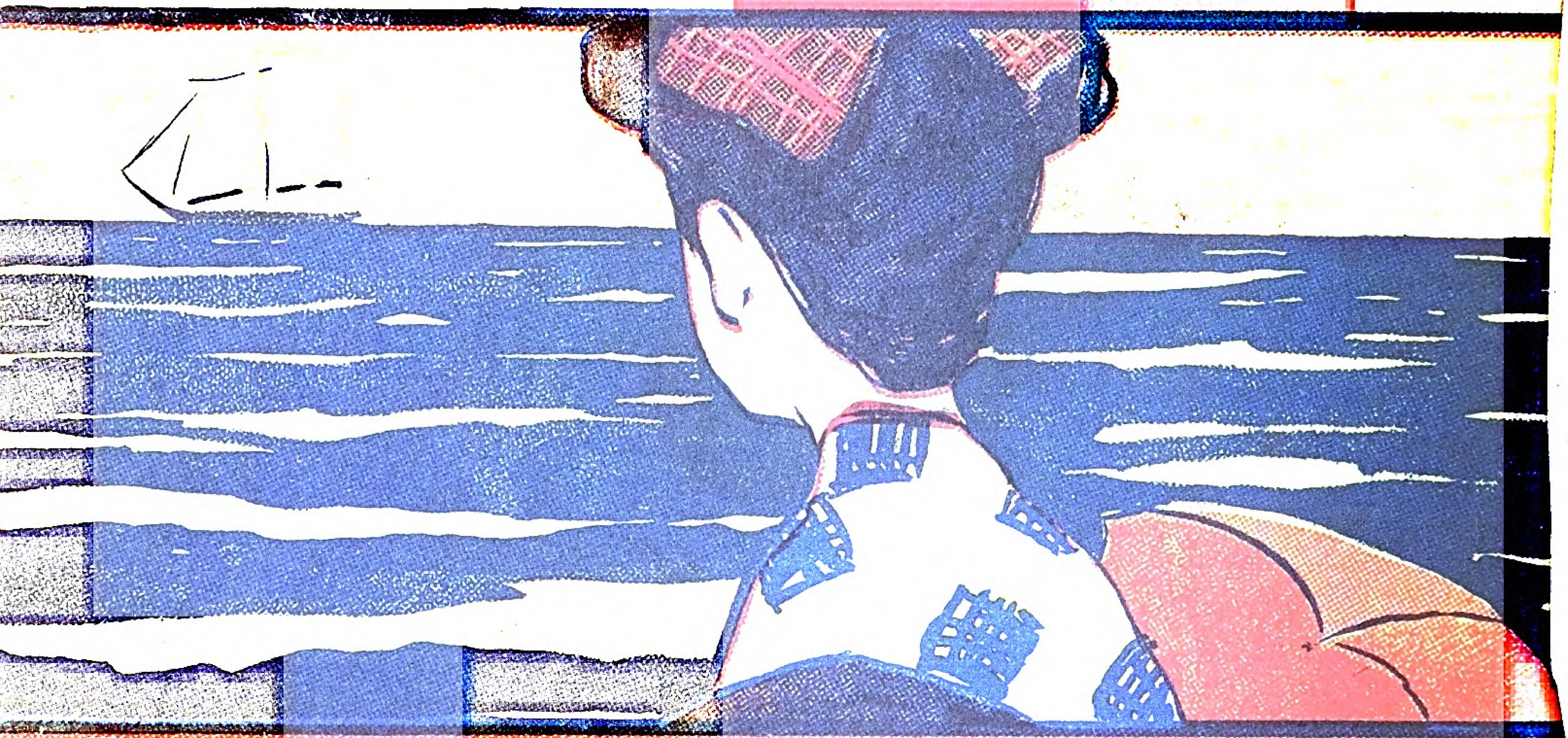


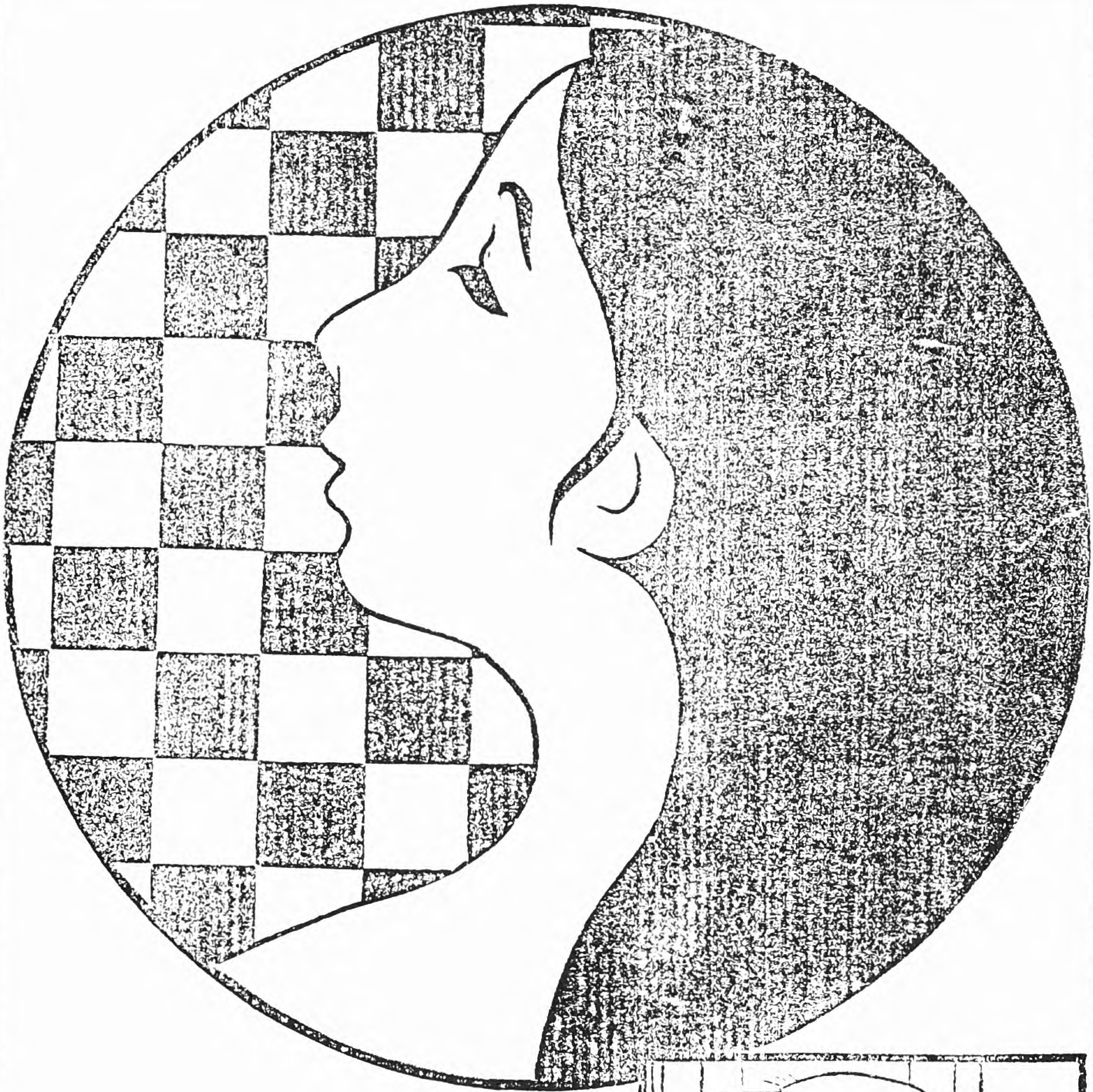
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

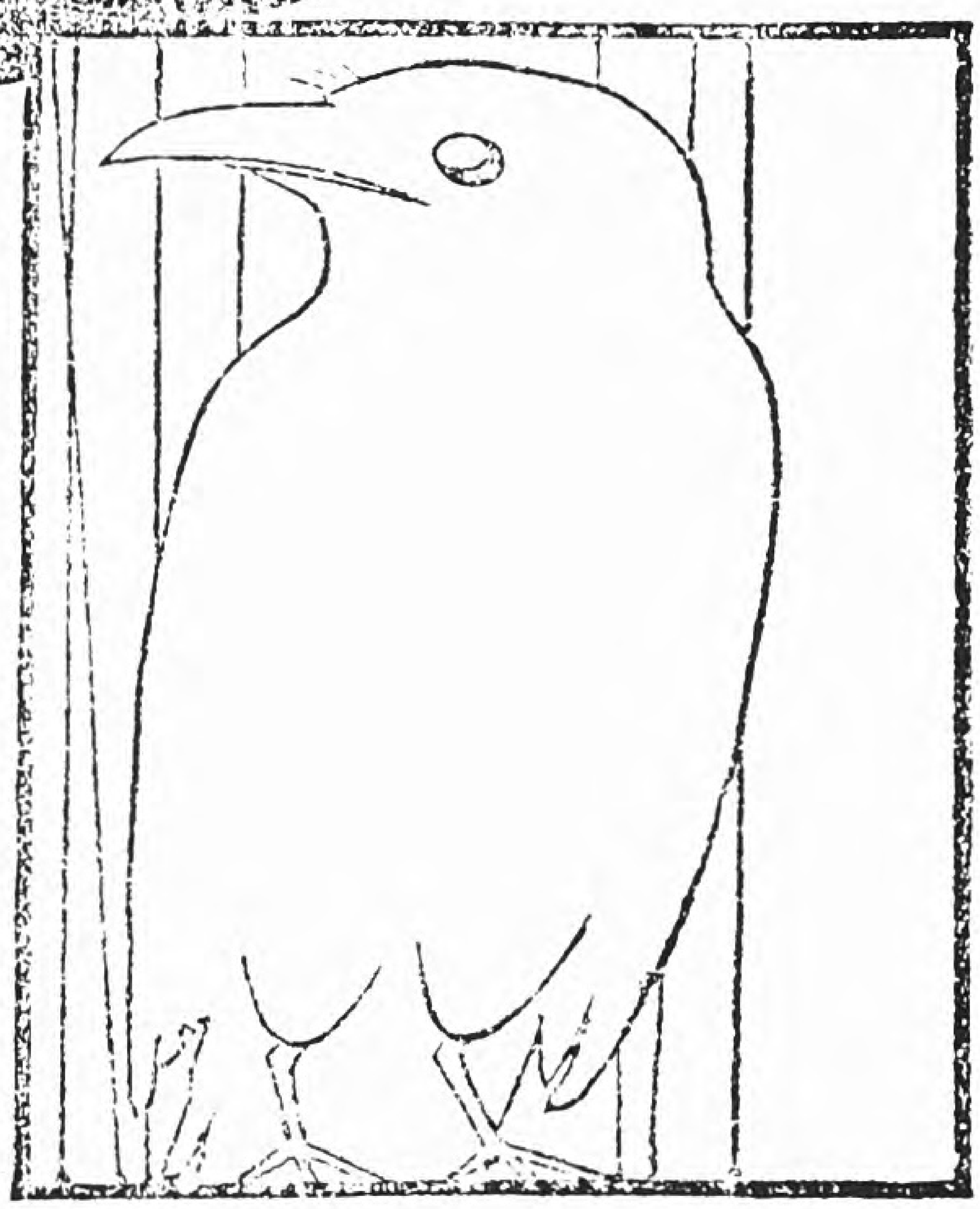
女子文壇

六月一日發行

第七年第七號

東京 女子文壇社發行





新圖案の指環

東京京橋
南傳馬町

大西白牡丹

振替口座 東京 九二九三番
電話京橋 三十番 三十一番

（一）



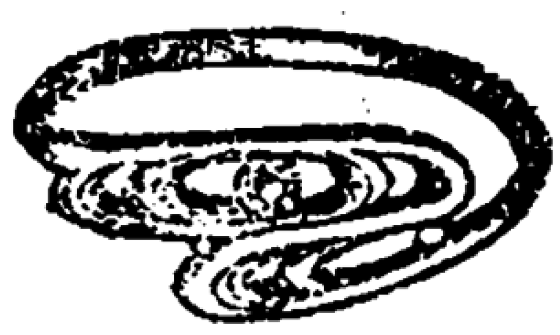
（一）十八金水透し純白ダイヤモンド入
金百貳拾五圓

（二）



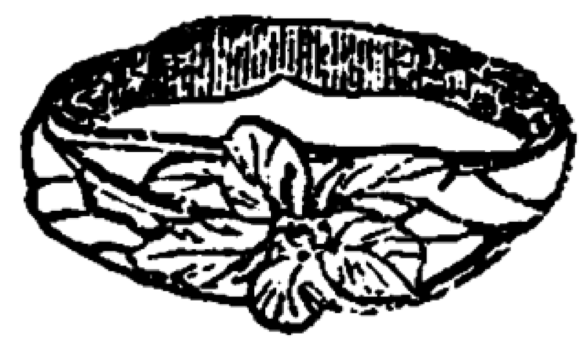
（二）二十二金扇子流の彫刻水は白金の色絵
金拾八圓

（三）



（三）廿金光琳の水すかし純白ダイヤモンド入
金貳拾圓

（四）



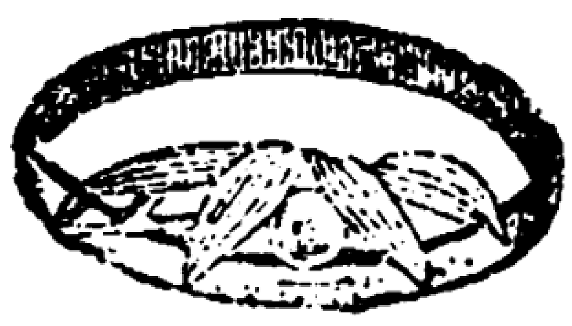
（四）廿二金すみれ彫刻、ダイヤモンド入
金貳拾參圓半

（五）



（五）二十二金いてう彫刻銀色眞珠三個入
金拾九圓

（六）



（六）二十二金竹の彫刻銀色眞珠入
金九圓貳拾錢

（七）



（七）二十二金つゆ芝の透彫眞珠入
金拾八圓

（八）



（八）二十二金菊水彫刻、かむろ菊白金の色絵
金拾七圓半

（九）



（九）十八金立田川彫刻青白の色絵
金七圓五拾錢

（十）



（十）十八金菊水の透しダイヤモンド入
金拾五圓

（十一）



（十一）二十二金秋草彫刻白金色絵眞珠入
金拾壹圓半

（十二）



（十二）二十二金光琳の水透し眞珠入
金拾圓

女子文壇六月號（第七年第七號）目次

口繪

△緑の丘（木版極彩色二十度刷）……竹久夢二筆

△寫眞版　△女子文壇第二回誌友會出席者と幹事△令孃。岡田博士令孃、徳川伯爵令孃、岡野氏令孃△花一輪。渡邊博士令孃△大谷伯別業伏見三夜莊に於ける貴婦人△日向代議士の家庭△緑の空氣。奈良の遊鹿、丹波の田植△令孃、大西氏令孃、茂木氏令孃、辻氏令孃△麴町高等女學校生徒の家事科實習△服裝の變化。

本欄

◎幸福なる時代に生れた女學生……遠山稻子
◎自己を尊重する米國婦人……柏樹
◎實力と虛榮心……伯爵 徳川達孝
◎神の愛に全身を捧げた……大關ちか子
◎茴香の芽と心……太田きし子
◎自覺……覆面女
◎おてんば日記……内藤千代子
◎贅澤（對話）……吉井勇
◎柳の前後……兒玉花外
◎新派の心持……原田暘谷

◎若き心のあやまち……ほとゝぎす
◎番町日記……山田邦子
◎木下夫人を弔ふ……寺田よし子
◎人間の生命と食物（つゞき）……澤田順次郎
◎女の勝利……水野葉舟
◎快晴……河井醉茗
◎繪の東京（三、月島の渡し）……荒井寛方
◎誌友會席上に於て……森田草平
◎女子文壇誌友會の記……幹事
◎化粧問答……藤波芙容

創作

△直（小說）……小笠原貞子
△氣迷ひ（小說）……松田妙子
△毒酒の匂ひ（小說）……若杉はま子
△弦上の矢（散文）……隼
△新しき世に（散文）……ひざくら
△留守居（散文）……賤の女
△篠笛……蘇生法師
△和歌……數百首
△快樂（詩）……籠の草
△薄暮（詩）……小ゞゝ
△散文（其二）……數十篇
△俳句……百餘句
△初作……數篇

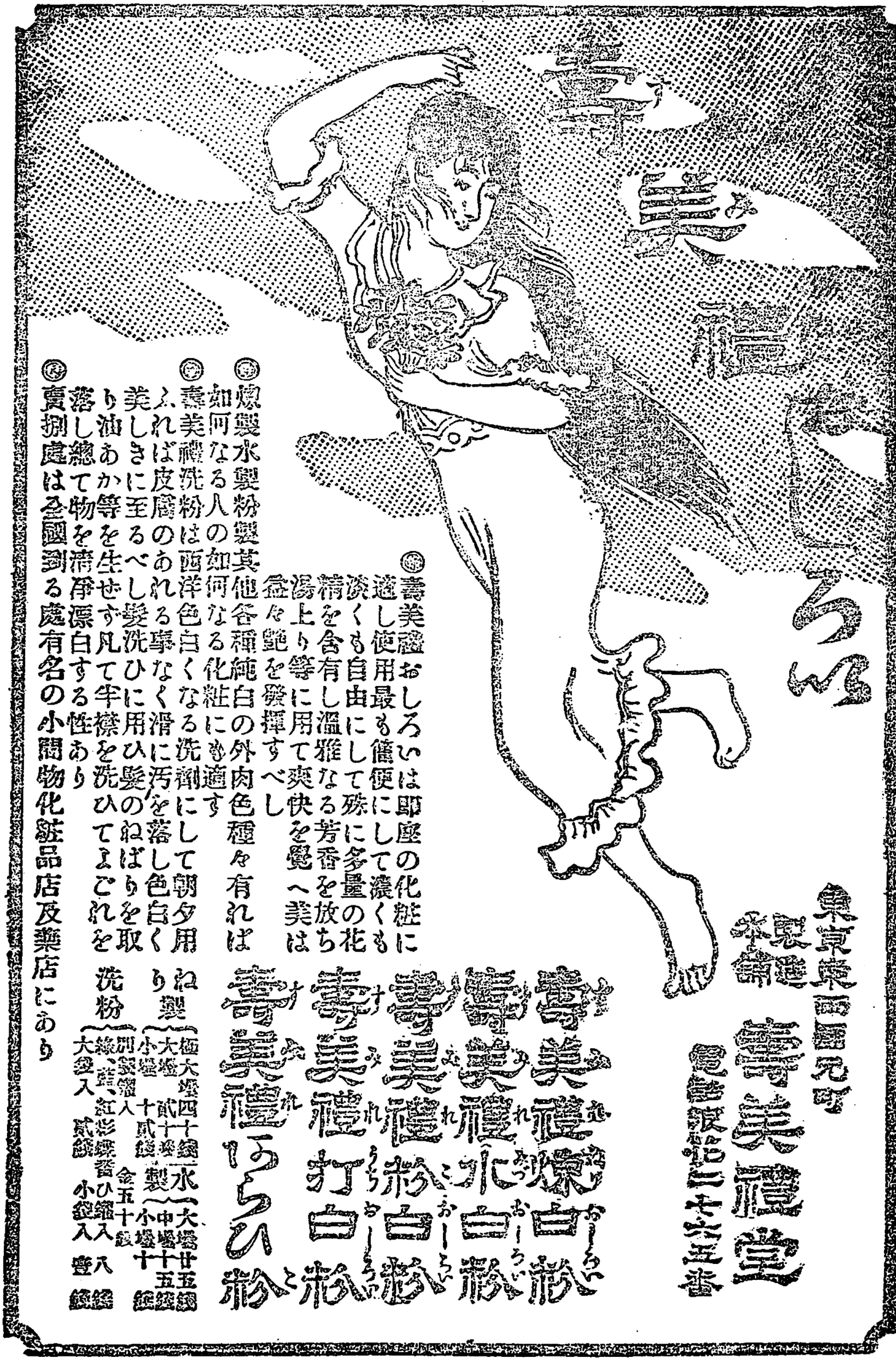
誌友くらぶ

△誌友會に就いて△交際△記者より△其他

雜報

△皇后御參宮△愛國婦人會總會△文藝委員會成る
△其他新刊、編輯通信等

日英大博覽會名譽賞牌受領





羽仁もと子主筆

婦人之友

六月一日發行　第一號　一冊金十五錢　郵税一錢五厘　六冊前金九十錢（十二冊一圓七十五錢）郵税共

◎如何なる結婚が最も幸福なりや（十大家の穩健適切なる意見）
其一 小崎千代子　其二 三輪田眞佐子　其三 栗 家 龍子　其四 棚橋絢子
其五 山脇房子　其六 有島幸子　其七 小此木信六郎　其八 金子筑水
其九 海老名みや　其十 木下尚江

◎夫の放蕩に苦める妻へ……編島 佳吉
◎娘には家事を手傳はせよ……井深花子
◎嬰兒を泣かせずに育てる法……羽仁もと子
◎家を上手に持つ工夫……羽仁もと子

▲私の見た西洋の家
▲唱歌に合ふ新式の舞
▲吉事の訪問と贈物は
▲留守居の心得（女中訓）
▲六月の總菜（三十日分獻立）
▲家政問答（質問隨意）

理想の生活（花子の巻）巻頭を飾れる一大文字……羽仁もと子

◎結核は子供に一番多い……醫學博士 加藤照麿
◎袴を恰好よく縫ふ工夫……齋藤春代
◎一圓五十錢で出來る夏の丸帶……柳子
◎甘煮は斯うすれば上手に出來る

〔畫報〕
▲初夏の富士（大下畫伯）
▲若き主婦の一日
▲鬼ごつこと隱れんぼ
▲子供の笑顔三十種
▲愛兒の發達（日本と西洋）
▲薔薇の園（今や滿開）
▲養蠶のいろ〱
▲女中の仕事いろ〱

◎女（雪嶺博士は毎號本誌に執筆せらる）……文學博士 三宅雄二郎

◎夫婦論（結婚の準備時代を如何に過すべきか）羽仁もと子

▲誰でも出來る懸賞問題
▲▲臺所改良の工夫を募る
▲▲寢冷知らずの案を募る
（一等 十圓　二等 五圓　三等 二圓）詳細本號を見よ

東京市小石川區雜司ヶ谷町　婦人之友社　振替貯金口座 東京一一六〇〇番

六月の巻出でたり

新婦人

第一年第三號 ● 定價 一冊貳拾八錢郵税貳錢五厘 六冊郵税共金壹圓七拾錢

華燭の夜

可憐解語の花今夜何人の爲にかひらく

コロタイプ 實寫眞

見るもの概目

花籠 石版極彩色油繪……河村清雄筆

花か詣か 天然色 額面用……波々伯部金洲筆

高貴御肖像 盛裝したる宮中女官 リッチモンド公園に於ける歌川若栄女史 女流

木版彫刻師大倉きみ子女史 重役を驚しれる女事務員米田雪子 單衣姿の德川伯爵令孃

洋裝の戸田伯夫人 顧眄の情を牽く子爵令孃 雅樂家柴田環女史 其他百

花絢爛の名流令夫人令孃 百二拾餘圖

讀むもの概目

女の見たる女……小島文子

女事務員より見たる銀行員……米田雪子

夏季に於ける化粧秘傳 藤波芙蓉 良妻賢母と高等教育……大隈伯爵

女房は古いに限る……佐藤博士 予は如何に日本婦人を見るか 藏原代議士

清少納言とは如何なる婦人か……尾島菊子 長谷川時雨 岡田八千代

掃除は目でします手でするな……幸田博士 首や胴を切てなざく趣味……大倉君子

附錄 家庭日記

六月分 温度表・晴雨表・獻立表・來客簿・舊暦附

懸賞案件 懸賞書簡文

發行所 東京本郷區龍岡町 振替東京三〇五八 聚精堂 賣捌所 全國各地到る所の書林雜誌店

イヨ〳〵夏も近づけり！

三越の陳列場もすべて夏らしくなれり。

夏らしい着物、羽織、帯地、半襟などを始めとし、夏らしい洋服、夏らしい洋傘、夏らしい帽子、夏らしい櫛笄、夏らしい化粧品、夏らしい寫眞は、夏らしくなれる三越へ御出で有之候はゞ、早速相辨じ申べく是非〳〵御來觀のほど奉願上候

中形浴衣地陳列會 は六月一日より開會

東京駿河町

三越呉服店

女子文壇第二回誌友會

（五月七日上野公園韻松亭に於て）





誌友會幹事

向ツテ右ヨリ、長曾我部菊子、寺田よし子、平塚白百合、早川花子、山田邦枝子、服部貞子、江森美子、木村あやの、若杉はま子、加藤筆子、小川せん子



醫學博士岡田和一郎氏令嬢和子



東京鋼鐵株式會社取締役岡野高治氏令嬢辰子



伯爵徳川達孝氏令嬢繡子

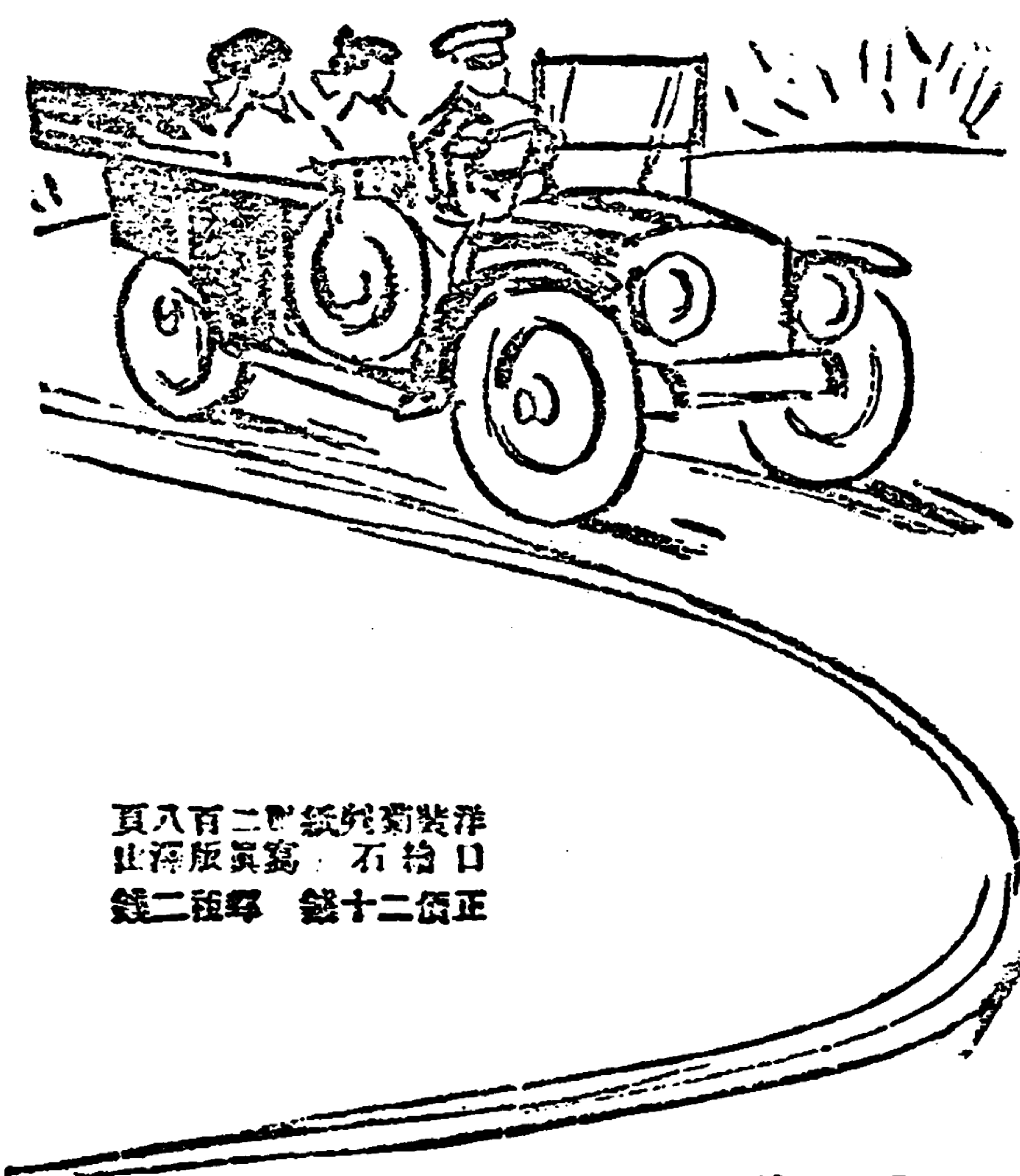
苟も文筆に携はる者は

文字に細心の注意なかる可らず

自動車に乗るような身分になつたも
常に女德の涵養と家政の指導とを勗むる

婦女界

を愛讀した
からである



洋裝菊判紙數二百八頁
口繪石・寫眞版挿入
正價二十錢　郵税二錢

東京 本町 博文館

第十卷第八號(六月一日發行)目次

●婦人が世界の形勢を知る必要(松村介石)●女と時勢の食物(望月嘉代子)●現代婦人評論＝市井の女傑(鐵拳禪)●活化と精神の典籍(沼野俊子)●日本印象記(中村春雨)●寫眞帖(紫苑)●新つれづれ艸(磯千鳥)●平和なる移民地の生活(在タコマ誌友)●定まる運命(葉山紫子)●夢にて逢ひし人(みさご島)●乳離の小兒に與へる食物●婦人の生活と謠曲の趣味(江木欒子)●家庭的寄宿舍の內容(小萩の園)●若き繼母の述懷(いさを)●日記の中より(常夏)●嫁いで來りし我家の家風(露草)●靜御前(物集梧水)●繪日傘令孃(さよ子)●雜記帳(與謝野晶子)●俳句に現はれたる夏季の女(吉野臥城)●西洋婦人の批評眼の養成(法學博士井上密)●解剖せる人間の羞恥心(源夏英)●廢娼問題(ブリデール夫人)●九州婦人の特色(不知火)●膓チブスの話(醫學博士二木謙三)●初夏の景物(藤澤の巷)●帝國劇場觀覽記([illegible])

花一輪



工學博士渡邊嘉一氏令孃邦江子

向て前列(右より)梅上沆子、大谷朴子、大谷温子、故大谷籌子、九條武子、大谷紅子、後列中央は大口鯛二氏



京都大谷伯別業伏見三夜荘

肺結核全治之奇法

全治者數千人に達す

（所謂新藥に非ず）

近時肺病の治療薬として續出する新劑は其數幾百千然も人體内に於て殺菌の効力あるものは本療法の外之を認めずとは有名なる細菌學の大家古弗博士の證言なり宜なる哉肺結核治療上の學理的見地より論及せば能く結核菌を殺滅するに足る濃度の劇劑は人間の臟器細胞を害するや論なし現に患者は所謂大家の新藥が其効果を奏せしもの幾何かありしぞ余は曩に仁義に富める多くの學者先輩の援助を得て肺結核競爭療法を企て歐洲各地病院溫泉地療養所等より多くの新材料を收集し茲に空前の新療法を發見し肺病患者寶典なる書物と全治の證據を刊行し五千巻を限り無代にて之を患者に分つ事とせり

大勳位 伯爵 東郷閣下題字
從一位 侯爵 久我閣下題字
正二位 伯爵 東久世閣下題字
正二位 伯爵 土方閣下題字

肺病患者寶典 全

世に不治の難病と稱せらるゝ肺勞患者が本療法の奇効に浴し全快の幸福を得し實例は既に數千の多きに達す抑々肺病の醫藥甚だ多けれど悲かな現今にては攝生的本治療法の如く大効を奏するものは他に之ある無しとは北里醫學博士柴山醫學博士鈴木醫學博士が極力唱導されし處にして如何に本治療法が最も進歩せる唯一の療法たるを知に足らん



本療法の奇効

○發熱盜汗 ○血管破裂 ○血痰不眠 ○食慾不進 ○呼吸困難 ○咯痰咳嗽 ○胸部疼痛 ○下痢貧血 ○喉頭痛 ○心臟衰弱 ○肋膜滲潤 ○胃腸障害

然れば肺結核、肺炎、肋膜炎、氣管支加答兒等に罹り前記の症狀を呈し醫藥効なく煩悶の人は決して失望悲嘆を要せず直に郵劵二錢添東京日本橋吳服町二番地順天堂藥院安原尙親宛申込ば全治の秘術を盡せる前記の大書冊無代送呈す

新發明美容藥 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても平素之を用ゆれば漸次肉體純白色に變化し肌を滑にし皺を伸しあれ及吹出物を治し艶美の容貌となる驚くべき効果を有す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は先に本劑を試よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の美容新劑價並製壹圓廿錢特別製壹圓八拾錢

飲んで色白くなる世界唯一輸入新藥

根本的色白くなる內服藥 サーサパリラ

價壹劑二圓七拾錢▲參劑七圓五拾錢▲五劑拾貳圓拾錢

英國ロンドン「バーゴイン」製ハ「サーサパリラ」は峻烈なる清血劑にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒痳毒リウマチス等の病毒及び男女の肉の惡血毒血且つ惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉ヒを純白艶美ならしむる奇効顯著の內服水劑なり(注意)從來種々の外用藥有的化粧水及諸大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白藥劑と「サーサパリラ」と內外双方併用せば奏効頗る迅速ヶ實なり

色白特効 ペーアス石鹸

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

此石鹸は世界第一等の良品にして化粧品の大王なることは苟も泰西の事情に通ずる者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず唯だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん皮膚を潤澤軟密にし色を白くし、粗糙質なるを治するは此石鹸獨特の靈効なり且つ此石鹸は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは館主の實驗に證する所なり、乞ふ昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗惡品と玉瓦混同視することなかれ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御注文を望む)

以上三種專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

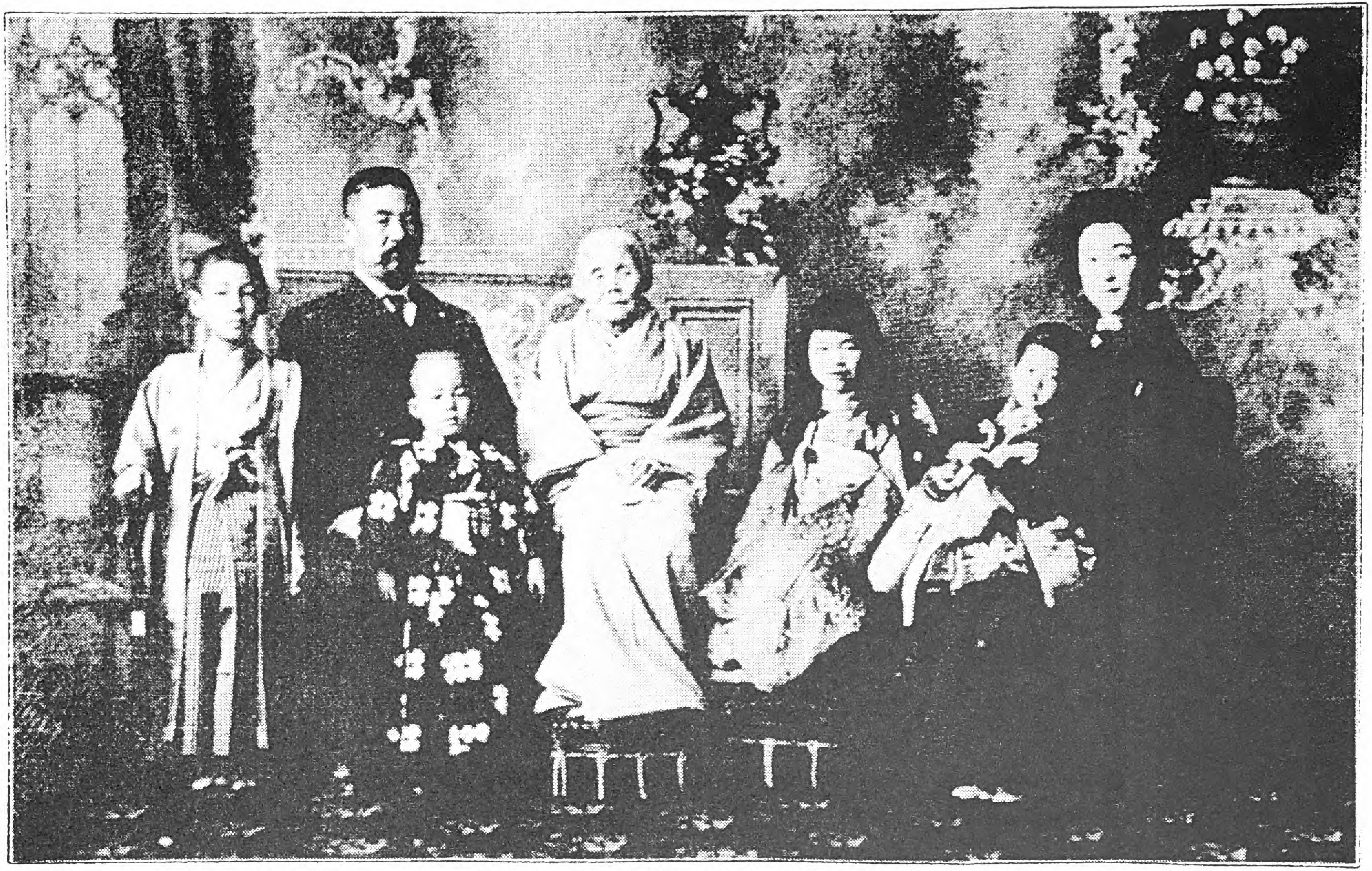
有効保險 前代未發 秘傳奇術

全壹册正價郵税共參拾五錢▲郵券代用は四拾五錢封送の事

(目錄は要)肺病衰弱の新療法●陰萎疾を必治する新法●陰○の隠れを治する法●消渇を必治する法●頑癬の必治法●人造麝香の製法●上等香水製法●香袋製法●美顔クリーム製造法●音聲を清良にする法●齒痛即治藥製法●髮の脫落するを止むる法●化粧石鹸製法●西洋白粉製法●毛髮必生法●臭汗治法●白髮を染る法●髮毛の光澤を美にする法●齒磨粉製法●西洋梳油製造新法●にきび即治●ェくろを落す法●ビットル酒製法●一夏日より內を爽涼にする法●羅紗類を汚せるインキ斑痕を除く法●白瓜を一年新鮮に貯ふ法●蚤を驅除する良法●氷を即時製造する法●百年長壽の奇法●生涯病に罹らざる奇法●人の生死を豫知する法●船中より海ゝ底ノ見る法●百日眠らず體疲へざる法●拔毛無き新法●腰入たる者に答へしむる法●禿頭病必治法●腰入りたる男女の心中を知る法●白なま〻即治法●八十の老婆を十八の娘に變ずる法●脚氣病必治法●妖怪變化を見顯はす神術●人體不死の奇法●千里一足飛行の神術●盜人を見顯はす神術●女に○れらるゝ藥法●硬き毛髮を柔軟にする法●思ふ女を○○かす藥●堅き女の氣を○○す藥法●陰○を長大にする藥法●そばかす必治法●女を○○にて泣す神藥●夢に戀人と語る秘術●見染し女を手に入れる神法●待人來る神術●一生戀中變らぬ秘術●悋氣深き女を治する藥法●閨中の秘藥●即座に男精を增す法●毒蟲に螫れたる時腫ぬ持効藥●斷食の仙術●神速に精力を強む法●即座陰身術●人を眠らす秘法即ち催眠術●顏赤く吹出物生ずるを治する法●過房を治する妙法●多情を抑ゆる秘法●色氣なき女に情を○せしむる法●記憶力を增進する法●女孕みの仙術●男女梅毒の有無を知る法●淫婦觀破の奇術●黑字夜光の奇術●老人終身破取りの奇術●腋臭を治する法●色を白くする內服劑新法●寶丹の製法●腹痛速治法●疥癬病の藥法●生たる鯉を遠國へ送る法●眼疾を治する法●黄疸を治する法●鮫肌を直す秘法●味噌の損じたるを直す法●痳病の治法●月經の不順を治する法●疝氣の妙劑●齒痛を治する法●陰部ゝ臭きを治する法●陰部の虱を去る法●にきびを去る新法●頭髮を長くする法●毛生藥の最新法●梅毒必治の新法●便秘必治の新法●下疳を治する奇法●胃病の新劑●百日咳の妙法●肺病必治の最新藥●中風を防の新法●凍瘡の妙法●衣服に酒ノしみたるを洗はずして治す法●火傷即治の秘法●シャクリ出治は●聲を能くする新術●自髮療治新法●土藏の鼠穴を塞ぎ再び明けぬ法●夜小便を治する秘法●頭瘡を治する法●耳だれを治する法●いぼを取る法●あざを拔く新法●乳ノ出る妙藥●陰部の諸瘡を治する法●虎列拉病療治簡易法●梅毒豫防の奇法●思ふ時目を覺す法●年齡により房事の度數●病氣前知の奇術●男女全體の色を白くし且つ髭美ならしむる法●葡萄酒を製造する法●宮を造るの秘法●一時に數十匹の鼠を捕獲する秘法●夏帽子洗濯新法●疊ノ汚染を落す法●新らしき鍋釜の鐵氣を止る法●簡易美顏術新法●衣服に油の付たるを落す良法▲以下拾法略す合計壹百四十法あり着金即刻送本す

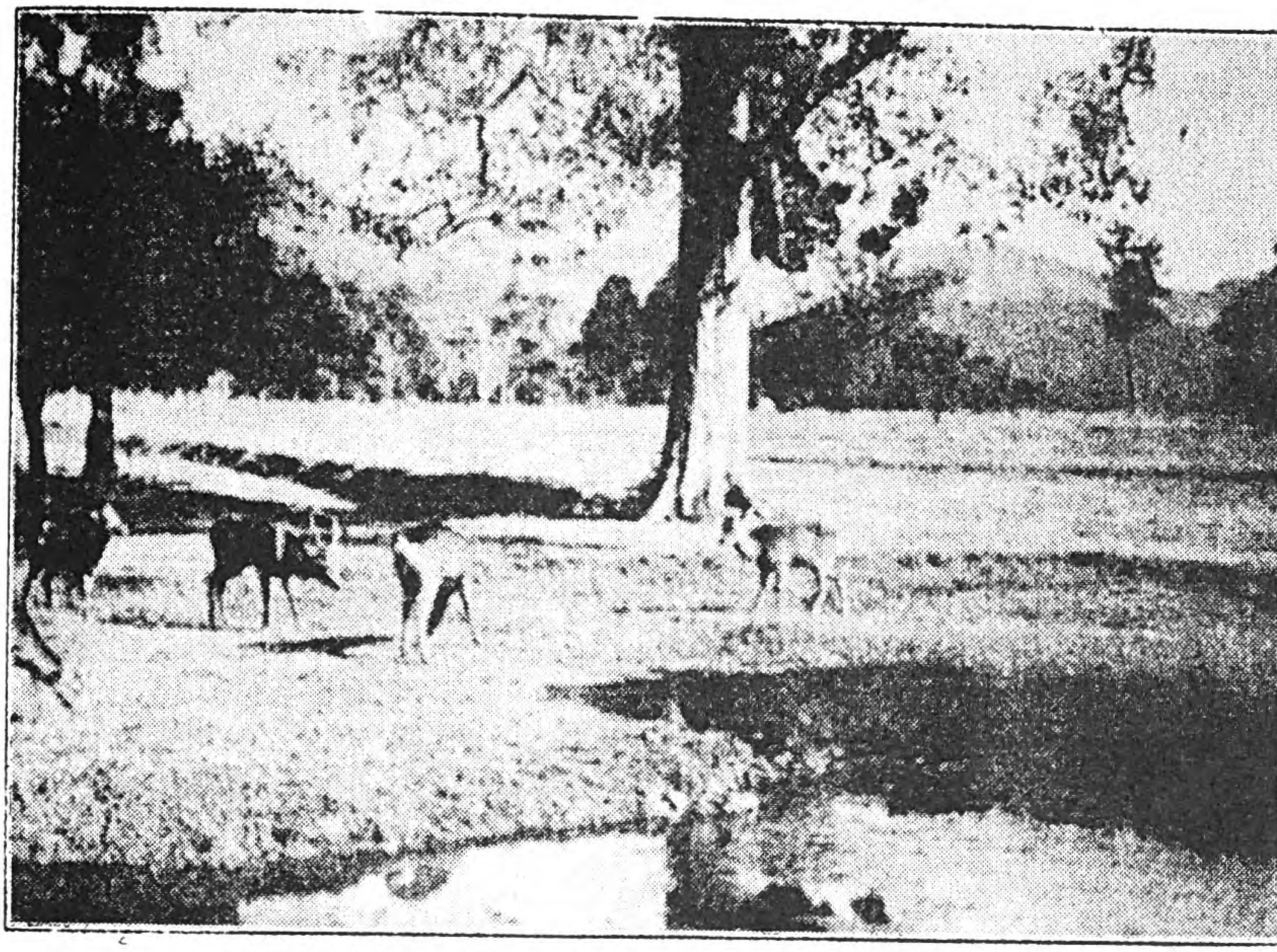
專賣元 東京神田區五軒町拾九番地 日新館商店

代議士日向輝武氏の家庭



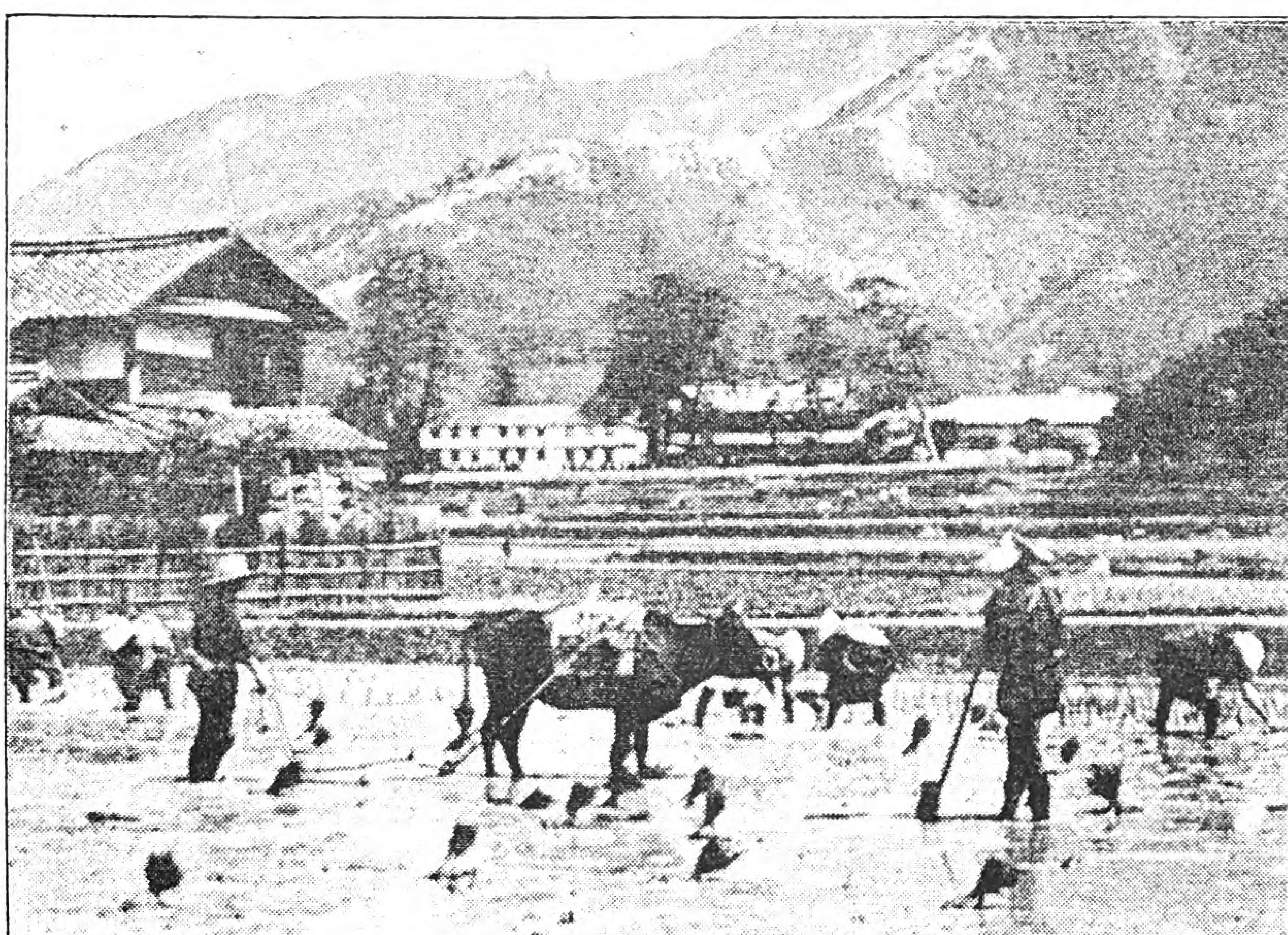
夫人きん子　令息　令孃ちゑ子　母堂　令息　日向代議士　令息

綠の空氣



（S S 寄）

奈良春日野の遊鹿



（菅 幸子寄）

丹波片田舍の田植

新學期開始

◎本會は眞面目に短歌を研究し試作せんとする初學者の爲に現代詩歌壇の名家が特に講演せられたる平易簡明なる和歌講義錄を發行し、懇切なる作歌の指導と、短歌に關する專門的智識を供給する。短歌に趣味を有する人、短歌を眞面目に試作せんと欲する人、現に作りつゝある人々の入會を待つ！

本會執筆講師

尾上柴舟○金子薰園○水野葉舟
太田水穗○岩野泡鳴○三木露風
窪田空穗○若山牧水○前田夕暮
其他有名大家數名擔任

此際至急入會者に限り入會金を免除す

和歌講義錄

全國新聞批評一斑

◎近年敷島の道を學ぶ者都鄙益々多きを加へ來れるは喜ぶ可き事なるも其作往々杜撰に流れて傑作を得るに難きは斯界の通弊たり今や大日本短歌會なる者設立され之が好指導たらんとす、其内容に輯錄せる材料悉く時代の要求を滿し、講述叮嚀眞箇初學者の良師友たり(小樽)◎新派和歌を學ばんとする者の好楷梯たるべし(山梨)◎苟くも和歌研究者には無二の良師友たり(北海タイムス)◎中學生程度の短歌初心者に便利なる點多し(新毎)◎和歌講義錄として斯程新しく面白きは類ひ稀なり(福民)◎我國歌壇の名士が揃へて講義振り頗る親切なり(根室)◎作歌法の指導に頗る懇切を極む、國風に志す者の是非とも必讀すべきものなり(北國)

見本附き會則申込次第無代送呈

東京市神田區旅籠町一丁目
大日本短歌會
振替東京一九五一五番

梅毒根治新劑

本劑(藥名ドクトル)は幾多の研究實驗を重ね多年辛苦經營の結果成功したる最新最良の藥物なれば現世紀に於る唯一の

ばいへ毒根治特効の新藥なり故に徽毒及徽毒に關聯して續發する諸症(即ちばいどく。ひゑ。かさ。しつ毒。かんそう。よこね。ようばいそう。たいどく。瘡毒。るいれき。骨がらみ。べんどく。ふしぶしのいたみ等)ならば如何なる頑固難症にても特別製分にて**誓つて根治**するこど確證す從來醫療賣藥等百方手を盡すも全治の効なくして困難せる患者は速に本劑を試服し其病毒を根底より驅逐斷絕し天賦の生命健康を保全せよ。

藥價壹劑分壹圓拾錢貳劑分壹圓九拾錢特別製分參圓六拾錢

陰萎病特効新劑(瑞西新輸入藥)

內服 トニチン TONITIN

本劑は瑞西國ウォルフェンスベルゲル社の發明新輸入に係り其主効は……男女**生殖機不能**即ち**陰萎病。腎虛。神經衰弱**……遺精。夢精。早漏。過房。元氣衰弱。老衰無力。生殖衰弱。生殖機能障害。早老者。精液精虫缺乏。不妊娠。冷症發育不全等に用ひ天下無比**可驚奇効**ある最新發見藥也**精力**を**增進**し生殖器を强健ならしめん、望む者は早く試よ峻烈偉大なる特効眞に**如電光**たる世にありふれたる無効賣藥と同一視すること勿れ本劑の卓効は高名なる醫師に就て承合せば明白也

拾錠入壹劑 藥價送料共壹圓九拾錢 郵券貳割增

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤くほてり、のぼせ症、卒中症等總て肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に減し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢 特別劑分九圓廿錢 着金即刻送藥す

世界唯一 痳病消渴の根治確證新藥

りん滅

痳滅は最も進歩したる最新の痳病消渴即治模範藥なり、本劑はありふれたる普通の賣藥と異なり殺菌學上効力頗る峻烈なる一新藥を主劑とし是を内服して**痳病消渴**の病原たる「ゴノコッケン」を忽ち**滅殺**する處方に基き製劑せし所藥に付輕症は壹劑重症は特別製分にて必ず誓て根底より**根治**するを確證す但し彼の舊式洗滌劑の如き迂遠無効有害の姑息藥と異なり奏効確實峻烈なるだけそれだけ藥價不廉なり用藥者豫め之を諒せよ 藥價壹劑壹圓拾錢特別製貳圓拾錢 郵券代用貳割增しの事

わきが 腋臭 全治確證新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても忽ち**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる恐なき廿世紀的欧良根治新藥なり速に試み苦腦を脱せよ、價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性的根治分貳圓參拾錢着金即刻送藥す

毛の必ず生る確證藥

本劑は獨逸醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髪生藥なり、即ち男女共禿頭の病、はつぼうはげの病、やけどの痕、頭髮及はゑぎわの薄き人、まゆげ口ひげの薄き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髮黑々と發生する特効あることを確證す本劑は從來ありふれたる雜多の毛はゑ藥とは其効力論同日に語るべきものにあらず眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉石混同視することと勿れ

特別製分 金五圓三拾錢 中瓶貳圓廿錢 小瓶壹圓廿錢

以上六藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)



茂木勇右衛門氏令孃浪子



大西五郎平氏令孃貞子



辻淺野セメント門司支店長令孃好子



麴町高等女學校生徒の家事科實習

らい病根治新劑

藥名……レプロイス

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多の研究を重ね數千患者の實驗に徵し苦辛經營の末今回始て完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚說に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ。輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

藥價送料共 壹劑分 五圓拾錢 特別製分 拾圓拾錢

美き聲の出る新藥

價送料共壹劑分壹圓拾五錢 特別製參圓廿五錢

發聲藥は古來甚だ多し然れども其の確効あるものは恐らくは疑はし獨り本劑の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり本劑は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の鎭劑也何程音聲惡しき方又は聲出ぬ人にても本劑特別製分を服すれば直に全治し充分なる美聲を發することを確證す

腦病を根治し記臆力を增進する靈劑

發明記臆增進丸

(藥價)七週分四圓五拾錢 五週分三圓六拾錢 參週分二圓參拾錢 壹週分八拾錢 (送料)各拾錢宛

本劑は獨逸大醫人クリーボワト氏の新處方に基き醫學的の元理に徵し多年實驗の上其奏効確實なるを認め今回發賣するに至りし前代未發の新劑なり故に本劑を服すれば腦病、神經病を根本的に根治し精神爽快智力活潑となり記臆力大に增進し人世百般の見聞更に忘るゝことなきに至る驚くべき峻烈なる特効ありて如何程の健忘者記臆力缺乏者にても一たび本劑を用ゆれば忽ち記憶力大に增進すること誓て確證する所なり論より證據實試一番速に其卓絶顯著なる奇効を知れ

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速に安全に快通に

流下する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を連用せば半年以上の月經閉止及び血塊にても必ず安全に流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し惡血毒血一を多年滯りの古血及掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は一劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効なる類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



世界無比

最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまず、いぼは拾日目に必ず美麗に除去すること保險附

新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顏面たりとも毫も痕跡を殘さず無痛に除去し得らることを確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用にて天然の美質を完うせよ來館者への感謝狀は山の如き全治者の及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物を示すべし實に世界唯一の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨はくろを除去し又一はそばかす、なまづいぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模樣を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用二割增し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

以上五藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

服裝の變化



三宅堂木村寅次郎氏夫人さら子

（女子高等師範出身）



夫人が清國肅親王の家庭教師時代の服裝



夫人が韓國滯在中の服裝


有ゆる化粧品の中
クラブを第一とす

女子文壇

第七年第七號

明治四十四年六月一日





幸福な時代に生れた女學生

遠山稻子

○二十年前の女學生

私共の學生時代と申しますと、今からざつと二十年前で御座います。二十年と申せば、隨分短く無い間で御座いますから、何事でもそれだけの年月を經る間には、非常な變化を見ますのは當然のことで御座いますが、其中でも女子敎育と云ふことは、二十年前には未だ漸く芽を吹き掛けた許りで、實に微々たるものであつたもので御座います。其が時勢の進運に伴つて、非常に急な進歩をいたして、今日では何れの地方でも、少し人家の稠密した市街には、必ず高等女學校の設けがあると云ふやうなことになつて參りました。從つて敎育の機關設備等も次第に整つて參りまして、今ではまづ完全なものに近く成りましたから、今日お學びになるお方は實にお幸福なことゝ存じます。

ついお話が外れましたが、私共の學生時代を今日から追想いたしますると、餘程妙なもので御座いました。其當時は男子の學生方は何うであつたかと申すと、皆裄丈の短い紺飛白の着物を着て、高い薩摩下駄を穿いて、丁度あすこにある西郷さんの銅像のやうな容姿を

して、「衣は骭に至り」など〻云ふやうな詩でも吟じて歩くと云ふ風で御座いましたが、私共女學生もやはり、それと同じやうな心で居つたので御座います。それで御座いますから、衣服などは、國元から母が送つて呉れます手織木綿をツンツルテンに着て、頭髪は油も碌碌付けずに、鏡にも向はず只くる〱と無雑作な束髪に束ねまして、只金のピンで止めますぎり、何の裝飾も用ひませんでした。勿論其當時には、今日のやうなリボンなど〻云ふものは夢にも見ることは出來なかつたので、只束髪用としては、ばらの花かんざしが有つた丈けで御座いますが、併し學生がそんなものを挿すのは、非常な恥のやうに思つて居りました。況して紅白粉などは以ての外なことで、見るも忌はしい位に思つて居りました。そんな風で御座いますから、人樣に對しても碌々御挨拶も出來ない、お世辭など云ふことは、無上の恥と心得て居りましたので、全然男だか、女だか、木だか、竹だか分らぬやうな、實にをかしな人間に成つて仕舞ひましたので御座います。

○女らしくなつた

然るに今日の學生方は中々爾うで無い、人に對しての應對ぶり、朋友との交際の手際などでも巧みなもので、人をそらさぬ圓滑なやり方には、私は毎時も感心申して居りますのでございます。私の先生の高崎御歌所長が前年或る地方に參られた時、其地の高等女學校から需められて、一場の演説をなすつたことがございましたが、其時には「らしく」と云ふ事を題にせられて、婦人は如何に學問が出來ても、やはり婦人であるから男子のやうなものに成つてしまつては不可、やはり飽くまでも、女らしくなければ成らぬといふことを説かれた處が、大變に歡迎せられて、何うか其三字を額に書いてくれと云はれて困つたと云ふお話を伺つた事が御座いますが、此點から申しますと、私共は「らしく」無かつた方で御座いまして、大變にお恥しく思ひますと同時に、今の女學生方の實に女らしいのに、私は感心して居りますので御座います。

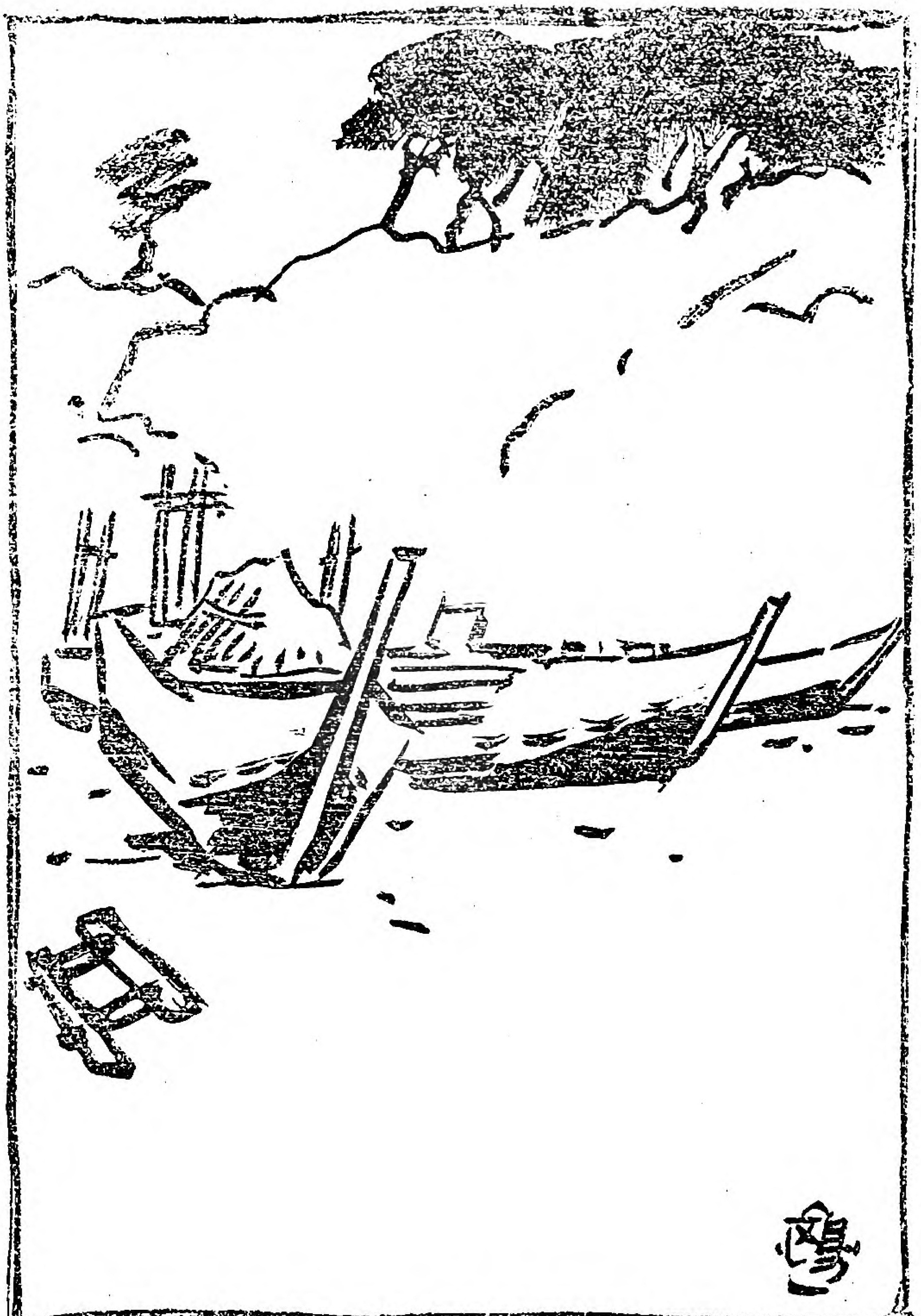
○先生を敬はない

併しながら一つ茲に如何にぞやと思はれます事は、今の學生の教師に對する擧動で御座います。私共の學生時代は先生を尊敬いたしました、單に表面許りで尊んだので無くして、心の底から先生は有り難いお方、貴いお方と思つて敬意を拂つて居りました、夫故先生の威嚴も今日よりは重かつたやうに思ひます。然るに今日の女學生方は何うも爾うで無いやうで御座いまして、動もすると蔭で先生の批難をしたり、嘲弄的の態度を取つて見たり、甚だしきは、先生に綽號を付けるなど丶云ふやうなことをする者さへ御座いますが、此點に至つても何うも以前より今日の方が惡く成つたやうに思はれます。單に教師に對してのみならず、父母に事ふる道に至つても以前と今日とは大變に違ひまして、先づ私共の育ちます頃は、親の權利と云ふものは非常に强う御座いましたから、私共は親に對しては、どんな無理なことを云はれても酷なことをせられて

も、決して之れに抵抗するの抗辯するのと云ふことは無かつた。親であるから何んな事を云はれても仕方が無いと、斯う思つて斷念めて居りましたから、決して怨みにも思はなければ、口惜しくも思ひません、只もう盲從的に從つて居つたので御座います。然るに今日では中々爾うは參りませぬ、已に法律が制裁を加へて、いくら親だからと申して、むやみに打擲したり無理なことを申せば許さぬと云ふことに成つて居りますから、自然子供の方でも意氣が昂りまして、殊に近年自由と云ふ空氣が盛んに這入つて參りましたので、いくら親だからと申しても、子供を爾う束縛すると云ふことも出來なくなつて參りました。從つて親が間違つたことを致すか、又は意見が違ふ場合には決して以前のやうに盲從しては居りませぬ、盛んに辯論も致しまするし、抗議を申込まる丶子供も御座いますやうに承りますが、併し之も煎じ詰めれば那方が眞個の孝行であるか、一寸判斷に迷ひますことで御座います。それに就いて一つの例が御座います。

○親孝行か親不孝か

昔孔子の弟子に曹子と申す人が御座いました、名は參と申して、非常な親孝行な人で御座いましたが、或時其父晳が瓜畑の草を刈れよと命じました、すると參は親の命を奉じて頻りに草を刈つて居りまする内に、誤つて瓜の蔓を切りました、そこで父の晳が大いに怒つて大きな杖を持つて打ちました、ところが打ち處が惡かつたと見えまして、參は其儘氣絶して仕舞ひました、そこで流石の父も驚いて、水よ藥よと介抱いたしました處、幸ひに蘇生致しました、けれ共、參は素より親孝行無雙な人で御座いましたから、其がために、父を怨むなどと云ふ氣色はなく、わざと平氣を裝つて父に心配させまいと心懸け



て居りました。

夫から其翌日相替らず先生なる孔子の許に參りますと、孔子は門人に申し付けて、參を今日は內へ入れては成らぬと申されました。そこで門人が其旨を參に申すと、參は不思議に思ひまして、私は何も先生に對して惡い事をした覺えも無く、又親に對して不孝をしたとも思はぬものに、何故先生は左樣に私を疎んぜらるるのであらうかと、大いに悲しく成つた。夫から同門の友人に就いて何うか先生のお怒りの仔細を伺つて戴きたいと申した、すると孔子の云はるゝには、いや參は、大不孝行者であるから、それで今日內に入れぬと云つたのである。其理由は、參が昨日父のために怒に觸れて大なる杖を持つて父が打たんとする時に、甘んじて其杖を受けたと云ふことであるが、それが卽ち大不孝行である、何故なれば、昨日一度氣絕しても、幸ひに蘇生したから善かつたが、もし其儘參が死んで仕舞ふやうなことがあつたならば、たとへ過失とは云へ、父をして子殺の大罪人と成らしめねばならぬでは無いか、夫では子の道が立ぬ、夫であるからして虞舜は其の父の瞽瞍が怒つて小さな杖で打つ時には甘んじて其笞を受けて居つたが、大きな杖で打たんとする時は、避けて一度も打たれたことは無かつたと云ふことである、それ位の譯の分らぬものは私の門人として置くことは出來ぬから、今日より破門すると云はれた。そこで參も、成る程之は私が足らなかつた、して見ると云ふと、いくら孝行の心は有つても、其道を知らなければ却つて大不孝に成ることが有る、と思つて、大いに覺つて、夫から先生に種々とお詫をいたして以前の通り、弟子の數に入り、後には立派な人に成つたと云ふお話が御座いますが、之等に由つて考へて見ますると、私共の若い時に親に事へた仕方は、丁度此の曾參のやり方と同じことで、何でも盲從して居れば善い、逆らはねば宜いとのみ考へて居つたのでございますから、孔子樣などからは大叱られに叱られたかも知れませぬ。却つて今日のやうに、いくら親だからと申しても、間違つたことや、無理なことを申した場合には、

やはり充分に其是否を糺して、或時は議論もし、諭しもした方が、眞個の孝行の道に適つて居るのでございませう。

○贅澤すぎるリボン

夫から終りに一寸一言加へて置きたいのは、近來世の中が非常に奢侈に流れて居る結果、其が學生方にまで押し及ぼして居るやうで御座いますが、之は誠に感心の出來ませぬことで御座いまして、既に御婚嫁に成つて、交際社會にお立ちに成る方とか、或は御良人の御事業をお助けに成るために、始終社會の表にお立ちに成らなければならぬ方は、之は何うも仕方が御座いませぬが、未だ御兩親のお世話



に成つて、學問をしてお在でに成る學生方には、流行

を逐うとか、美を衒ふとか云ふやうな必要は毫も有る可き筈は無いと思ひます。此程も三越呉服店へ參りました處が、一尺價一圓なにがしと云ふリボンが澤山ありましたが、あれを一掛分取りますと先づ五圓を要します、爾してそれが一本では足らなくて皆樣が二本宛おかけに成るやうで御座いますから、して見るとリボン代丈でも非常な高價に上るわけになりまして、中中容易なことでは、リボンも調へることは出來なくなります。それで私は此程考へまして、高い〳〵と申ながらも、皆樣がお求めに成るから、夫で賣る方でも愈々高いものを拵へることになるので、娘などへも、せめて學校丈はリボンを用ひさせないやうにしたいと思ひまして、丈長の幅の廣いのを取りまして、其をおさげの根に結んで、少し兩端を上の方に外してかけさせて見ましたが、存外上品で價は一本二錢位なもので御座いますから、經濟向きには非常によろしく、殊に外見も決して惡いことは無いのでございますから、何うか少し續けてやらせて見たいと思ひます。之は只私が思ひ付きましたから、一寸序に申上げます迄のことで、何も之は名案で御座いますから、皆樣も是非爾う遊ばせと申上る譯では御座いませぬが、何事でも斯んなわけで考へますと、割合に安價であつて、外見も上品で存外重寶なことがいくらも御座いますものですから、何うか皆樣もお考案遊ばして、善いお思ひつきが御座いましたらば、お敎へを戴きたいと思ひます。

未だ申上げたい事は澤山御座いますが、色々面白い餘興のお仕組もお有りの御樣子で御座いますから、いくら日が長いと申しても、お孃樣方のお還りの餘りに後れますのも宜敷御座いませぬから、今日はこれで御免を蒙ります。（女子文壇誌友會席上に於て）

夏のうた

西行法師

かきわけて折れば露こそこぼれけれ淺茅にまじる撫子の花

夏の夜は篠の小たけの節ちかみそよや程なく明るなりけり

ほとゝぎす人に語らぬ折にしも初音聞くこそ甲斐なかりけれ

五月雨の晴間たづねてほとゝぎす雲井につたふ聲きこゆなり

ひばり上る荒野に生る姫百合の何につくともなき心かな

時鳥聞かであけぬる夏の夜のうらしまの子はまことなりけり

水たゝふ入江のまこも刈りかねてむなでに捨つる五月雨の頃

自己を尊重する米國婦人

柏樹

○

亞米利加へ行つて劇を研究して居た人が此頃歸つて來ました。いろ〳〵の新しい話がありましたが、此所に紹介しようとするのは女性に關しての一節です。若い他國の男の眼に映つた亞米利加の女は、話を聞いて居ながらも成程成程と頷く所がありました。尤も此話は又聞きですが、しかし內容は取違へては居ないつもりです。

○

日本の女に馴れた眼で亞米利加の女を見ると、先づ第一に感じる事は、彼等が如何にも自己といふものを尊重して居る事です。其の尊重の仕方が、日本の女とは大分に違つて居ます。

○

一つの例を擧げると、彼方には日本で言ふやうな意味の流行といふものがない。これが流行だと聞くと、自分の身に似合ふ似合はないも考へずに、一概に其の眞似をする、卽ち流行が主で自身が二の次ぎになるといふやうな、日本に見るやうな輕浮な意味の流行は無いといふ事です。

尤もこれには理由もあります。御存知の通り亞米利加は、各國の人の寄集りなので、多くの血が混つて居る。皮膚の色、髮の毛の色、瞳の色など相應に違つて居ます。で彼等は自身の裝飾といふ事に就ては斯う思つて居ます。私の持つて居る天與の美を、最も自然に、最も力強く發揮させるには何ういふ物を選んだら好い

だらう。何ういふ物が私に一番調和を持つて居るだらうと。

其所で彼等は、自分の顔に似合ふやうに髪の形から、毛の縮らせ方、リボンの色までも撰擇する、それには高名な理髪師と相談までする。が一度これと極めたが最後、何時までも其れを守つて改めないのです。衣服の色の選び方などに至つては言ふまでもありません。

さういふ風だから亞米利加の女は、何れも特色が際やかで、くつきりと其の人々の美を發揮して居る。人眞似などはしず、自分の與へられて來た美を、大事に保ち、努めて發揮させて居るので、それが見る眼にも快いのです。

○

自己をさういふ風に尊重して居るので、結婚などゝいふ場合になると、それは大事を取る。自分と相手の人とよく調和して、雙方の幸福を保つて行かれるかといふ一點から見て、愼重な態度を以て相手を選ぶのです。彼方には失戀の爲めに、生涯老孃の寂しい生活を保つて行くといふ女が往々にあります。これなども、如何に彼等が相手を選ぶに愼重であるかといふ一面を證據立てゝ居るものです。

前にも言ふやうに彼方では、女は自己を尊重する結果、其の個性を鮮かに現はして居る。自分が鮮かになればなる程、所謂意氣投合するといふ範圍は狹くなつて來る、從つて相手が得難い。その代り一旦得た相手には自分の全體を繫いで行くといふ事になる、輕やかに思ひ返しの附くやうなものでは無いのです。

斯ういふ戀の上に於ける躓きは深刻ならざるを得ない、失戀の結果生涯老孃で居るといふのも、よく聞く所の拗ねた位の心持からでは無く、一度び逸れた矢は、唯一筋きり持つて居なかつたもので、事實として二の矢が次げないといふ趣があります。

此邊の心持の强弱も、何となく我國とは違つて居るやうに感じられます。

○

自己を尊重する心持は、自然の發露として自己の周

圍を尊重する心持とならなくては居られない。彼等は自分を輕く思はないと共に自分の周圍の者も輕くは思はず、其間にはつきりと見境を附けながらも、しかも同時に調和を保つて行く事が能く見えます。

よく洋行歸りの青年は、彼方の女はお世辭がよくて、逢ふ程の女が何となく自分に戀して居るのでは無いかと思ふと言つたが、それは事實です、全くそれ位にも思はれます。



男がさういふ誤解を以て何か言ひますと、彼方の女は嚴として、「それは感情です、日本人の好きな一時の感情で、戀ではありません」と、斷ります。男にさう思はせるまでの順應性と、しかも嚴として自らを守つて行く所、社交の進歩とは斯ういふものでは無いかと、今更のやうに感心させられました。

○

自己を尊重する事を解して居るさういふ人と人との間に結ばれる婚約ですから、それに對しては側の者は殆ど何も言ひません。言ふ必要が無いのです。

或る青年と婚約しようとした女が、其事を其の青年の親友に話しました。と其人は其の婚約に對して疑を抱いたらしい口吻を洩しました。と女は非常に不思議がつて、

「でも某さんは貴方の親友ぢやありませんか。親友は第二の貴方自身です、貴方は御自身を疑ふんですか」

と言つたのを聞きました。此れなども、自己を尊重すると共に自己の周圍をも尊重して行く氣分の漲つて居る社會にあつて、初めて見られる事だと感心しました。

○

斯ういふ風ですから、小さな客よびなどをするにも、某さんは何が好き、某さんは何が好きと、一々其好きな食物を承知して居て、苟くも其人に厭な物を強いるやうな事はしません。周圍の者を尊重するといふ意味に於ては、出來得る限りの事は必ずして居ます。

○

亞米利加に行つて見ると、男は固よりの事、女でも、其人をそつくら寫生すると、個性の鮮かに現はれて來るやうな人が眼を衝く位に居ます。彼方の作家は此方の作家に較べると、モデルを得るに非常にやすいだらう、と思つて羨ましくも感じます。が是れなぞも、めい〳〵が自己を尊重し、同時に周圍を尊重して、見境を附けて故なく犯し合はない、さういふ空氣の中にあつて初めて見られる事でせう。安じて、遠慮する所なく自分の個性を發揮して行く、周圍の者も其美を成させて行く、口で言へばそれ切りですが、日本の社會を見馴れた眼からは、つく〴〵羨ましいと感ぜずには居られませんでした。

日本の婦人も此頃は自己を尊重すると云ふことを知つて來たやうですけれど、まだ其自己と云ふことが的確と分つて居ないやうで、其爲に誤られてゐるのではないかと、蛇足ながら一言して置きます。

實力と虛榮心

伯爵　德川達孝

女子は必ず男子に嫁すべきものと云ふ思想は、深く日本人の胸の底に泌み込んで居て、更に之を疑ふものもなく、非難するものもなかつたのであります。昔の女子敎育は、皆此の思想を根柢として出來たもので、殊に彼の女大學などを見ましても、徹頭徹尾女子は必ず男子に嫁すべきものとして訓戒する外、別に女子に關して敎ふる處がなかつたやうであります。これは單に昔の敎育ばかりでなく、今日の女子敎育でも、多くは此思想を根柢として、方針を立てゝ行くやうであります。

更に進んで、社會全體の女子に對する調子は何うかと云ふに、今日の社會狀態では、未だ婦人の獨立に營み、獨身を以て事業に從ふといふやうなことを歡迎せず、却つて排斥する傾向があるのであります。女子は嫁して人の妻とならなければ、之を廢物視するの感想は、我國人一般に持つて居るのであります。

これから類推して見ても、世間の女子を有てる兩親が、其娘の結婚を心配するのも、決して怪むに足りません。また其娘が、所謂妙齡になつても良緣がないと非常に之を悲しみ、此上なき恥辱のやうに思ふのも亦無理ではありません。

古來の敎育此の如く、現今の敎育も此の如く、又社會の調子も、兩親の感情も亦然うでありますから、若き女子自身が、其冥想に陷るのも已むを得ないことで、あります。

けれども世界文明國の空氣を呼吸したものは、婦人

の地位と云ふことに就いて、もつと考を深くしなければならぬと思ひます。

それであるから、一方には女子に良き敎育を施すと共に、女子の有てる才能を發揮し、他方には社會が、もつと女子を獨立したものとして之を認め、相當の位置を與へ、機會を與へ、職業を奬勵するの必要があります。

今日以後の女子は、尙ほ多く敎育を受けなければなりません。學問は女子を生いきにすると云ひますが、必ずしも然うではない、眞の敎育を受ければ受けるほど、謙讓の德が具はつて來る筈です。生いきになるのは、生學問をするからであります。

女子の缺點は、自働的思想と、獨創的思想の乏しいことであります。假令ば人の話を聞いて、之を解する力はあつても、自分で意見を立てる力のないこと、また文學の上から云へば、能く源氏物語を讀み、土佐日記を讀んでも、自ら創作する力に乏しいこと。是等は女子の大なる短所であります。つまり實力の足りないことで、此は大に修養してゆかねば、女子の地位を高めるわけに行きません。

凡そ實力なくして地位を得、實力なくして權力を得、實力なくして尊敬を得やうなど丶思つても、それは到底不可能な話である。

此の實力が婦人の地位を高めると云ふこととの反對に婦人の地位をおとしいるものは、所謂虛榮心であります。世の中が奢侈になるのも、婦人が墮落するのも、社會の風紀を紊すのも、國家の紀綱を弛めるのも、其發端は此の虛榮心であります。

女子の虛榮心を挑發するものは男子であり、男子の虛榮心を助長せしむるものは女子であります、此の虛榮心といふもの丶爲に起る罪は、男女ともにあるやうです。婦人は男子の爲に保護されるべきものであるといふ思想は、中世の騎士時代に、騎士が婦人を弱者として保護したといふことが習慣となつて、今に及んだものでありませうが、其習慣が却つて害を爲してゐるのでありませう。

神の愛に全身を捧げた

（私が看護婦となつた動機）

大關ちか子

看護婦に成る婦人の心得と申まして、私は御存じの通り、キリスト信者で御座いますが、キリストの精神を心から受容れて、全身を先づ神の愛に洗はれたのでなければ完全な看護は出來ないと思ひます。

凡そ世の中に何が可憐さうだと申しまして、地に有りて病あるもの程、可憐さうなものが有りませうか、此憐れな者を慰め看護してやるのに、金の爲とか利の爲とか、そんな心得で居つては、罪が深いと存じます。

私たち人間は、神によつて造られました、此造り主なる神の有難い嬉しい愛と惠を思ふ時、どうして空しく之を受けて居られませう、どうぞして此御恩の萬一でも報じ度いと思ひました處が、父なる神は靈にましませば、只其戒めを報じて、其隣り人を愛さねばなりません。哀れなものを慰めてやらねばなりません。私が看護婦に成ると決心したのも此こゝろに外ならぬのであります。

私が始めて看護婦に成りました頃には、それは〳〵まだ看護婦と言ふものは名ばかりで、其實病人の叱り手の樣なもので有りました。

其頃はあの有名なジョンバラ夫人の遺志を次いで、ツルー夫人が櫻井女學校の内へ看護婦學校を起し、なほ日本の紳士からも基金を仰がんと、帝國ホテルに招待した上、懇々と說きましても、誰れ一人それに贊成してくれる方がなく、一文の寄附すらなき有樣で、事

實看護婦など丶言ふものは、夫に別れて衣食の道が絶えた婦人とか、或は目が片目だとか、鼻がまがつて居るとか、お嫁入の出來ない婦人が、仕樣事なしに成る位にしか考へられて居らず、又實に其通りだつたので有ります。それ故敎育ある婦人などは無論成りませんので、ツルー夫人がわざ〲歸米して、彼の地の有志家を說き、澤山の基金を得て、前申した櫻井女學校に看護婦學校を建てた時、入學者が私の外に只七人有つた丈けで有りましたのです。然し私たちは神の愛に勵まされ、よしや賤しい職業とみなされて居る共、我等が起つて先づ之を改良しやうと熱心に學びました。かくて一年の後、實地練習の爲、無理に願つて毎日大學病院へ交代に各科を見習にまゐる事に成りましたが、其時私は如何に看護婦に愛の精神の大切で有るかと言ふ事を感じましたらう。外科室に入りますと、私の心は祈りと淚で充ちました。其時乳癌で入院して居ました婦人と、十三で大股骨膜炎にかゝつて、腰の橫から毎日々々一杯のごはんが三倍にも成つて膿が出ます、先づ前後に見た事のない哀れな患者が居りましたが、其れに繃帶を卷きかへてやりますのに、其子が痛い痛いと泣きますれば「痛いのはあたりまへです、泣いたりなどするともつと痛くしますよ」と言ふ權もほろ丶のあいさつです。私は其言葉を聞き、其荒い取りあつかひを見て、如何に此心に深く感動したでせう。もとより見習生の事故、口を出す事は出來ません、只眞心から淚を以て主に祈つては居りました。乳癌の方の患者など、其繃帶を卷かれます痛さに、ごはんもろくろく喰べられないとないて居りました。其時にもあゝ繃帶を卷く一事にさへ、愛の心を用ひてすると、せぬとは、患者自分にはどれ程の差ひで有らうかと考へまして、今日まで私の敎へます看護婦は、何より先きに其精神敎育から始めますので御座います。それで先づどちらへ出ましても、眞心からの感謝をされまして、私も嬉しい事に存じて居ります。看護婦に愛の精神が無かつたらば、とても事成らぬ方がましで有りませう。聖書にも書いて有ります通り、愛は忍耐をし、和らぐ事をし云々。實に其通り『愛』と云ふ一つの精神を持つてさへ居れば、術は第二と申してもよろしいほどでございます



茴香の芽と心

太田喜志子

こんなに苦しいのならなぜさつき迄あのやうに笑ひ顔を人に見せてゐた、さう……九時十時……十二時が鳴つた今、痛くなつた瞼、重いのに、それでも思ひ昂つた心の一端でも記して置かう、恁う思つてはじめて筆を紙に下しはじめた。

我が儘でも何でも仕方ない、血を分けて下さつた父樣母樣、でもむごいではございませぬか、さつきまでの喜志と、今こんなにしどろもどろかき亂れた胸を抱いてゐる喜志と、どこにどこに、ちがひがございます。私が手のつけやうも無くなつてゐる心を見まもつて、熱くあふれ散る涙をどうする事もできず、咽び入つてゐる態を見なすつて母様、ふすまのかげで泣いてゐらした。悲慘、悲慘、あゝ、母は娘の、娘は母の、心をつひに知る事ができないのである、が、よしやよしやこれが解り合つたところで……あゝ、それが何になる!?どうならう、咽び入つた。

暗闇の吸ひゆく音シーンーシーンーシーンーと、澄みわたる耳の底に深く遠く。(ある夜)

私はもう物が言へなくなりました、と云つて涙の流れるばかりの眼をぢツとすゑた女は明るい光のもとを歩いてゐる愁人のやうに、たゞ安らかにこの呼吸する一ッづゝでもいゝから、其のまゝに心の働らく有様を味はひたいものだと思つてゐる、つく〴〵私はむごく生れたんだ、と心の裡で叫んだ。

動きたい! 動きたい! 動いてゐるところに自分の生命はある、あゝ活動!こんな苦しい叫びの貫いてゐる事を、自覺したこれからのち、どうしてぢつとしてゐられやう、私さびしくて困る、かう訴へたけれどこの心そこからの淋しさがどうなるものか。

伯母のまへに座つて襦袢の袖を縫つてゐて、たゞ千里萬里遠い所へ心は落ちてゆくのであつた。(ある日)

○

私は理窟はしらない、たゞ直覺そのまゝを文字に現

すことすら為得ない哀れな女であります。このごろではもう默つて仕まふより他に仕様がない氣がします、すべてに向つて唯熱い泪が流れるぎり……けれどこれが決して踏みとゞまつてゐる狀態ではない事を確に信じてをります。

　なぜこんなにやるせない氣がしますか、もつと苦しみたい、何か足跡ののこる、くるしみ、なげきでありたい。

　今し方から子供は廣庭に集まつて雪だるまを拵へるとてさわいでをります、ゴロン！　ゴロン！　と轉步してゆくたびに、重く大きくなつてゆく雪の塊、その跡を見て私の胸は強烈な何ものかの力に壓迫されましたあゝ新らしい努力のあとよ、土まじり小石まじり芥まじり。さうしてあの雪だるまは次第〱に大きくなつてゆくのだ。きツかりと黑くのこつてゆく轉步のあとの地の色、私は大ぜいの少女の群に立ちまじつてぢツと眺めてをりました。（校舍の窓より）

〇

　思つても、思ひ返して見ても、はづかしいこのうかうかした生活、「自分を信じられません」これほどはづかしい言葉があるであらうか。

　私は言葉を發する時、それは父樣母樣に云ふのでもない、そばに人のゐる時でもその人に語るのでもないが、何に向つて言つても決してまちがひではないし、決して不正でもないことといふ信を置いてゐる。

　夕日が細長く赤い松の幹にもゆるやうにしみ入る時いつでもその林の中の路を家に向ふ。今の私にはこの暗い深い林の中をほそく貫いてゐる路をふんでは、うねり〱のはての母の家に歸るほか仕方ないのだから今……こゝにどのやうな絶大な力のものが來て、この身を左右すると向つて來たつて一言も發しない。立ちすくんだ身はかたくこゝろをすゑてしまつて、大きく見はつた眼、それからは「充ちきつたこゝろのしづく」とでもいつたやうな、ホロリ〱と重い涙がこぼれるであらう。こんな事を思ひつゝうつむいて通る日が多い。

小鳥、小鳥、あの、つばさにもかくれたや
　ゆくゆくうたを、ならひつうたひつ、
林ゆき、松のみどりに思ひ入る
　面白きかなこのごろのわれ。

この手も足も自由にのばして唇も眼も生々としたはたらきをして見たい。うたひたい時うたひ、とびたい

時とぶ小鳥どもよ、小さいその頭、柔らかい胸には何がひそんでゐるや？（林の中にて）

○

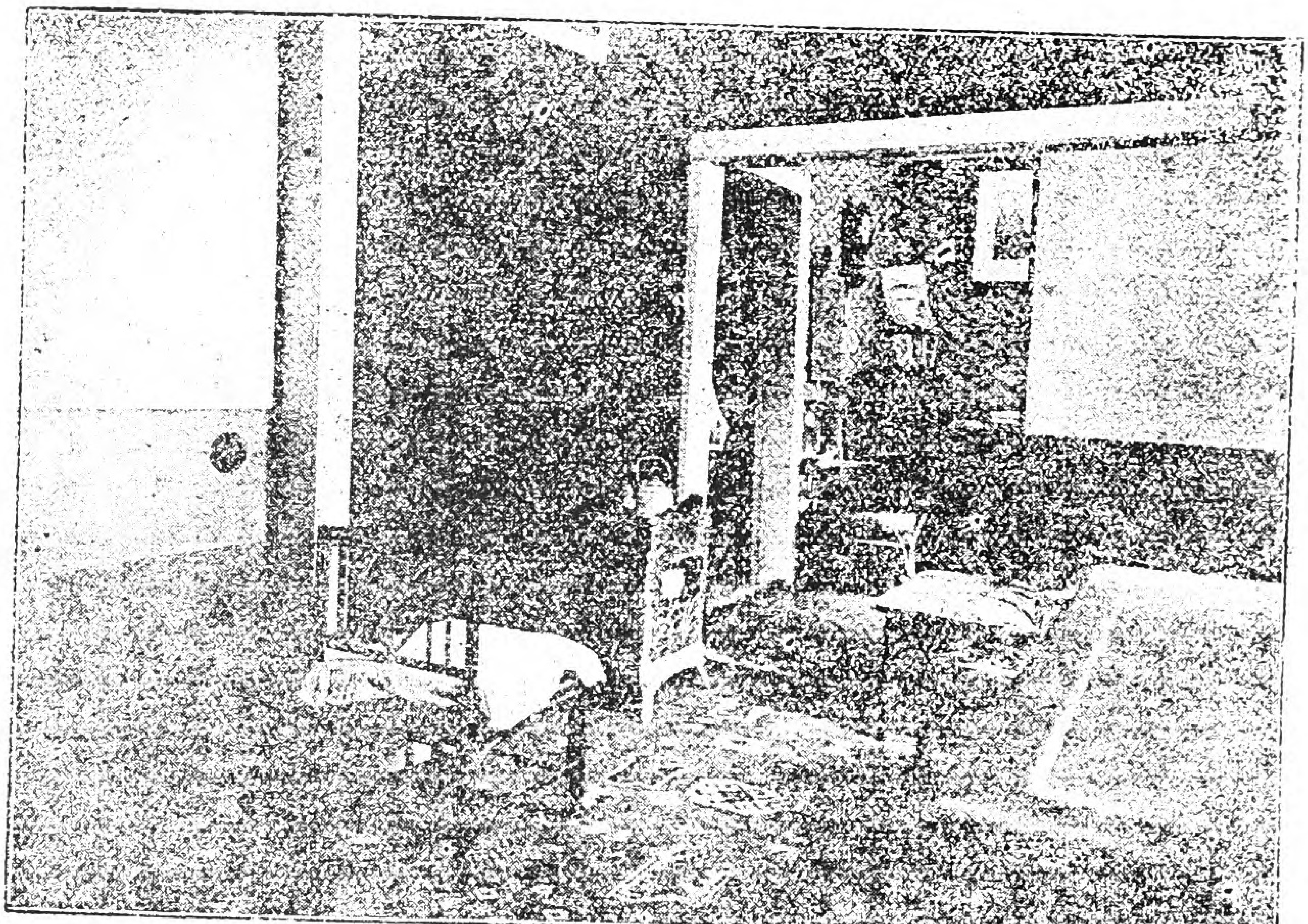
われら泣くとも泪も出でず苦しき心にうたをうたはん……
……（ある時）

○

私ねえ先生からこんなにして教はつてゐる事、また後になつてどんなに懐かしい思ひ出になるか、その針の手の動きの一ッ一ッにもみんな深い印象があつて。

と目をくり／＼させた一人は丸々と太つた手で袴の後腰を立てゝゐる。

さうね、ほんとに忘れないものね私もさうした經驗はあるんだもの、ギッシ／＼と音を立てゝ裁ち合せの箆を力ためて扱つてゐた私は「前幅は上着の方は五寸だつて云ひましたね、ではこれでようでざいます」と手わたして置いてそろ／＼と窓のきはに歩みよつて稍芽ぶくらみそめた、しだれ櫻の梢を見てゐるうちにゆらゆらと立ちのぼつて來た例のもの思ひ。



伊太利公使館内の一部

さつきの手の丸々した人の詩人のやうなあの生々した言葉、うれしい！しみ／＼さう思つた。廣庭の彼方柵の外の道路を旅の人らしいでたちをした男が三人南へのぼつた。旅よ、旅にゆく人よ、この窓によつておまへ方のゆくへを見送つてこんな熱い心を抱きつゝある一人の女をしらないでゐるのだ、しる筈もないけれど、そのゆく手にはま

あ何がまつてゐるであらう。あの山、あの山の頂を越えて行つたら、自分は胸もせいせいするであらうに、と、思ひはじめたのが旅を思ふ最初の疑ひであつた。白雲が高い頂をこえて遠くへゆく時、花もない女の胸はどの位に焦々した事であらう。桔梗ケ原の春秋、細い松林の暗い色暗い中に身を沒して思ふさま泣いて見たい、と思ふ。思ひつゝいく度咽び入つた事であらう。明るい光りがみち〳〵てゐるやうに思はれて、空想に耽つた我が思ふ武藏野の色、その一部をひろく占めてゐる、かゞやき充てる華華しい都の友から、たよりがあつた。

喜志樣、久しぶりでございますね、幾度も〳〵お手紙は讀んで、まだ帳面の中に挾んであります。

あなた、きつと時どきは思ひ出して下さいましたでせう、私があなたをお呼び申す心は、世の若き人の多くのやうな、華やかな浮いた感情ばかりではない、信濃と東京とに係も知らず、まして小さな弱蟲の私と思へば不思議な力をもつ心と心とでございます。あなたに手紙かけない時、私は不幸ですの、徒らな苦しみ空ッぽな泪、夏休みから私の健康はまるで奪はれました、二學期に登校したのはほんの幾日かでございました。

もうゆくまいかとも思ひます、小學校にゐた時分はどんなにか女學校の空氣が幸福に充ちてゐるやうに思はれましたらう、ほんとの事、入學してすぐ私は失望致しました。十四、十五、十六、と今、寂しい心に思つても恥かしいうか〳〵した生活、單に智識の上に於てだけでも私はつまりませんでした。たゞ學校生活といふ名が小さい私にはすてがたくなつかしいものでございました。もしも私があなたのお傍にゐたら、私はあなたの一擧一動、ちよつとのお唇のふるへさへも、見のがさず、きゝのがすまいとするでございませう。

此の苦しい泪、云ひ能はぬ思ひをあなたはどうぞ甲斐あるものになすつて下さいませ、私の肉は私の心は哀れな犧牲になつてをります。

母に叱られてお醫者樣へは通つてをります、けれど私はゆきたくない、が、妹も目がわるいので一緒にゆきます。「丸さんは姉さんよりも大きくッて、ハイカラで前がみがふるつてる」書生がからかひます、妹と云つてももう十五、おしやれもすれば何かも考へます、それが私はいやですの、悲しうでございます。

喜志樣、あなたにも御同胞がいらつしやいますのね私にもある……けれど私があなたにお手紙かく時、私

もあなたもひとり子のやうな心持でをりますの、たゞたゞあなたおひとりと。

私はかうやつてあなたにお手紙がかければ、幸福でございますわ、静かなこゝの通りを朝に夕に豆腐屋と、あさり屋が十人位づゝ通ります、一ッ壕を越せば、すぐ西は府下大久保、東と南は廣い監獄の原で、東京名物のからッ風は障子をこして窓かけをあふります。

永井荷風様のお宅は××町のはづれ、赤煉瓦の塀がすぐ見える所、場末には違ひございませんけれど、きれいな所です「監獄署の裏」で見るやうないやな感じは致しませぬ。私の目はまだパリーもロンドンも見た事はない。荷風様の



澳國大使館應接室

やうな贅澤な目ではございませんから。

向側のはづれに小さい西洋館があります「ナガイ」とゴチックでかいた丸い瓦斯燈がある小さなしやれた門の中には、蜜柑の木が一本かあいらしい實がぎッしりなつてゐます。すぐそこに入口のドアがありますの、そこには金髪の少女を立たせたいといつも思ふ、ピアノ、ヰオリン、ラッパ賑やかな合奏が朝起きるとすぐはじまります。屋根の上の脊の高い棕櫚の葉には、まづ一番早く原の方から金色の旭が反射します。

疲れた目はまぶしい、しばらく電車の音もきゝません都會の片隅に、天も見ず、柔かい地の色もみず、いつまでか

うやつて安からぬ胸をつゞけるのか。雄々しき喜志樣お笑ひ遊ばす？自分でも冷笑してやります。
人は私に早熟だと云ひました、痛い痛い涙は胸から泌み出ます、しかしそれは自分ひとりで堪へなければなりません、否定する事はできません。
はり充ちた心はすぐ破れてしまひます、自分の貧弱な頭を厭ひ憎むからでございませう。そして失望虚心、意味もない冷笑。私はあなたがうれしい、そして羨ましい、幼ない時分にいろんな本をよむのは、よしあしでございますね。都會の空氣もやがてそれでございませう。（下略）（離れ住みの中より）

○

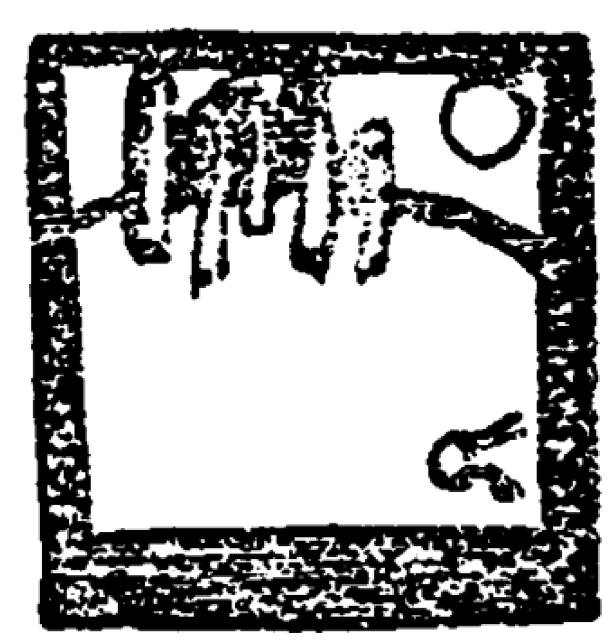
今、私のこれを書いてゐる所は校舍の裏の林の中、小松の生ひてゐる黃な芝生の上でございます。
わい／＼ガチヤ／＼と子供たちは、晝の一時間の休みを、天下一ッぱいになつてさわいでをります。地にはらばひになつてこれをかいてゐる心持、日ごろ私ののぞんでゐた行爲を今はじめて實行してゐる。
春といふに背かず、梅も、櫻も、木瓜も、福壽草も、落松葉の芽もみな一昨日あたりから、めつきりとふくらみました、大ていは明後日あたりになると、三分ほどに開く事と思ひます。風が和らかに吹いて、髮の毛の中まで梳きこんでくれます。高い松の幹になつてゐる松かさは、ヒユロー、ヒユロー、ヒユロ／＼とさま〴〵に鳴つてをります、この松の鳴る音、他にちよつとたとへられない音でございます。
今朝家を出て好な／＼松林に入つた時白くかわいた路、うねりの路、このみちが學校の門につゞいてゐると思つた時、今更らしく失望しました。淡い悲しみに思はずも目をとぢました。ほんのりとした天地の色、水中から天を見上げたとでも云はうか、白くまた青い、ぼんやりした空氣の色、杜も山もみな一樣に、たゞ柔らかい、とさう云はふ。
茴香の芽、れんげうの花、淡い色彩と香りとは、朝の空氣にしんめりと溶けて、靜かな／＼山の國、といふ感じが一層つよくひゞきます。
雨に濡れた櫻の紅いつぼみの梢、血のにじみ出たやうな色!! 雫の垂れてゐるガラス戸を透して見て、「まアあの血の出たやうな、生々しい色!!」とたゞさう云つた。
やはらかな南風の吹いてゐる日、細長い松の木立の中にゆくと、ゆらり／＼とをどりを躍つてゐる松の木、

ピキ〳〵――、ピキ〳〵――と枯れた古枝が、たえず折れて落ちる。青苔にみちてゐる林の中、足音のもれぬ苔の上「靜寂」といふ壯嚴な裡へ歩み入つた「我」を覺つた時、あゝ、自分は刄物で肉を破りたくあつた、熱い血しほの躍つてゐる若い女、我とわが胸を抱いた、深く〳〵辿り入つてやがて寢ころんでゐて。瞑想するに、血を躍らするに、すべて自由なる靜かなる林よ。熱い熱い泪は拭へども〳〵とめどなく散つて……。

泪は胸に充ちぬれど、君にやるべきすべはなし
月おぼろなる水の邊に、共にゆかずや手を握りに
わが吐く息もかぐはしき、野路に行ずや抱擁に、
あはれ女子の苦しみよ、あはれ女子のかなしみよ、
おなじき胸の君を得て
あつき泪はつきず流るゝ。

四十四年四月十二日、林の中より
都の友へ





自覺

覆面女

丘の上の櫻花散りて、小さな紫の實とかはり、綠の若葉は一日一日と塵に染みて漸う我世の春もたけて行く。あゝ我が十九の春も逝く。肩上げ取りし去年の春はそれは淋しかつた。かなしかつた。

淋しさや悲しさの思はるゝ頃は、まだ若いと思ふ。春が逝く十九の春が逝くといふ事は、今の私には何等の感じをも與へない。今年は、いつ草が萠えたか、花がさいたか、それも知らなかつた。わづかに、我が胸をかすつたと思つたのは、鳥の聲だつた。私は五年の寄宿舍生活にこんなにされたのだと思ふ。

私は、まだ社會は知らぬ。たゞ自分の育つた暗い家と、この寄宿舍とのみを知つて居るのだ。

我が家でも、寄宿舍でも、私は、陶器の人形の樣に取扱はれた。人はみな何故私をこんなにするのだらう。

大切にされる身は又なくつらい身だ。

幾ら女だつて世の人が思ふ樣な、馬鹿なものでない。

私が若い女だからいふのだ。今の女には斷じてそんな無謀な者はない。安心して放してもらつても、大丈夫、自己一身を他人のために反古にする樣な事はしない。いくら情に激したつて、自己を沒却するやうな者はない。良心、そんなものは、或は、情の壓迫によつて消えるかも知れぬ。しかし、私の身體と、心とを守るべく何物か存して居る。私の體は尊い體です。私の心はまたと得がたい心です。男子がいくら如何なる甘き企てしても、決してそれに欺かれる樣な、それにかゝる樣な事はしない。

或はその罠に接近する事はあらう。そんな事があつたにしろそれは我といふものを忘れた所業ではない。一種の好奇心だ。のぞきに行つても危ふさうだと知つたら、踵をめぐらして、もとの自分の位置にかへつて來る。

そして最もよく人目を惹く樣な處に、自己一人の姿を現すのだ。女が踵ヶ廻らしてもとの位置に、かへらうとするとき、男はこれを不貞操だと謗る。謗らば謗れ、いふがまゝにまかせて置く。女子として、かくなくては、如何して社會を渡れといふのだらう。野獸の樣な男に捕らはれてそれに操を盡せとかいふのだらう

女は固く自己の心の狀態と、身體とを守りつゝする事なのだから「女があれまで深く語つて置いて」といつた處で、それは眞のこゝろでなかつたといふ事は、明かな理由である。

陶物のこはれ易い人形の樣に、他人がしてくれれば、女自らはより以上に、自己を大切にしなくてはならない。だから、男子たるものは、女が我が思ひのまゝになるものとは、思つてはいけない。女には他に對し、自己に對する務がある。大抵の今の女は、自己を愛する。年長の人が心配してくれるのを待たずに、務めて居る。だから、もつともつと開放して貰つてもよいと思ふ。

女の寄宿舍、特に私の住む寄宿は、極端だ。若い女の氣力を、無視したやり方だ。

もし、若い女が、ちつとも自己を保護する手腕がないと思つて、かくして下さるものとしたら、危險又夥しいものだ。寄宿舍に居る内はよく先生が見て下さるから無事に過すが、一旦社會に出て見ると、以前の樣には行かぬ。

幾らでも、動機があるから、それにつり込まれるといふ事になる。さうすれば無氣力ならばそれだけ開放

すべきだ。私はいふ、「今の教育を受けた女は、決して、心配に及ばぬ。自己の爲には、又とない忠實なものだ」と。私自身は今のまゝ束縛されて居てもよい。

今後の者に今少し多くとはいはぬから、自由を與へてやつて欲しい。私共を最もよく知つて居るといふ先生が、かういふ工合に、私等を取りあつかつて下さるのだから、必ず社會の人はもつと酷う、私共をしばるに違ひない。しばらないとした處で、女子を無能な、一つの我が身をさへもてあまして居るものと考へて居るだらう。

誰でも、如何なる女でもといふのではない。眞の教育ある今の女は、自己防禦について、あらゆる手段と勇氣とを持つて居るのだと、明言するのだ。



莊田平五郎氏寢室

寢室の沈默

靜かな夜の講堂、頭をたれて、瞑想に耽る二百の少女、微かな息は皆和して、明るい電燈の光に溶けて行く。

この時一人一人の胸をそつと覗いて見るならば、恐しく異ふだらう。

肩と肩と觸れ合はせつゝ、此處に這入つてくるとき、手に手を取つてこゝを出て行くとき、年輩も略同じく、皆紅頰をして、黑髮かついだ若い女故、血の色も同じだらう。自分を自分が知つて居るやうに、互に知り合つて居るだらうと思はれやうが、決してさ

うでない。

たゞ一人の人の心をでも、明かに見たといふ者はない、こゝに集つたとき、各々異つた事を考へてそれを他にさとられない樣にと、心にもなき事を語りつゝ、寢室に歸るときほど淋しい事はない。

同じ寢室に夜每夢を結んで、一つ食堂に一日の糧を與へられ、同主義に壓迫されて、苦しみを共にして居るけれど、一つに見えるは形式ばかり、心の底は皆個個別々だ。

「共同生活だから、互に助けあひ、皆樣は一つの身體の樣に互に知り合つて居る間だから樂しい事だらう」といはれる、如何して他人の心が知られやう。

自分の體を作つてくれた父母さへも、子の心を、眞に眞に解して居る人はないだらう。況や、何の緣故もない他人が、互に知りあふといふ事は不可能だ。

何時の代になつたつて、自分は自分、他人は他人、心の狀態は皆固く獨立を守つて居る。

そして、決してあらはに、心の姿を現はさない、堅固な保壘城壁を、こんなもので堅めて居る。

城壁ならば、なるべく高くなるべく厚く、一人の人にでも、負けない樣に、他人が見て恐怖と驚愕を感じて「一步でも接近する事は不能だ」と思ふ樣にと務めて居る。

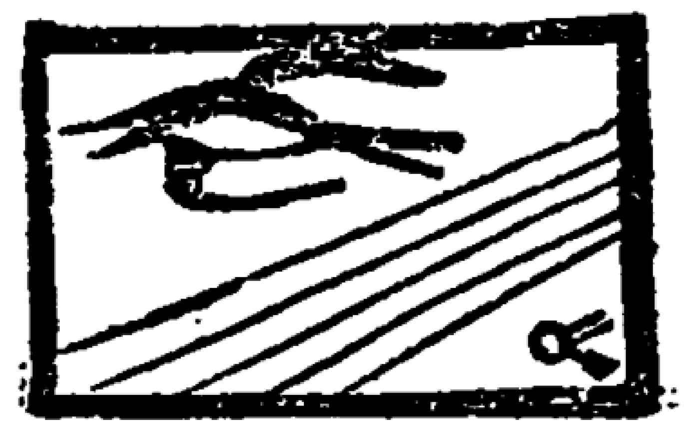
個人は一生懸命、あらん限りの力と知識を搾つて、心の獨立をはかつて居ながら、どうかして他人の城壁に登るか、さなくば破壞してでも、心の狀態を覗きたがつて居る。片一方は、見せない樣にとつとめ、片一方は、見やうとする。他人の心を見やうとしつゝも、自己の心が氣づかはれる。どんな動機で、他人が城壁を破るかも、計りがたいと思ふと、人のを見て冷笑するよりも、先づ自分の防禦が大切となる。

こんな風で他人の心を見る暇がなくなつてしまふのだと思ふ。

世が進んで、外面的に共同事業だとか、いろいろな團體が作られる樣になれば、なるだけ、それだけ、個個の心は、かけはなれて行く樣に思ふ。

決して私は社會を知つて居るものではない。

けれども、五年も共に住んだ若い女が、一人一人の、心の生活を保つて居る事を思ふと、同じき一つの屋根の下に仕事をする勞働者も個々別々に自分の心は、ただ自分の心を知つて居る許りで、暮して居るらしく考へられる。



おてんば日記

内藤千代子

七日。

春爛熳の花の色、散り來る花も光あり。毎朝八時、包み抱へて家を出る、インキを下げた角帽さんや、美しいお袴ひるがへして行く女學生達の、ぞろ〱通る本郷通りを、私は枝もたわゝに咲きほこつた大學構内や、高等學校の櫻をながめ乍ら歩くので、幾度足もとがお留守になるかわからない。一高の○寮の二階の窓の羽目板ね、まつ白く洗ひ出したやうになつてるところがあるでせう、あれは寮雨にさらされたものだつて、まさか。

　叔父樣の袷羽織を縫ふ。マチなどつけをへて「先生如何で御座いませう。」とお目にかける、山を引ぱつて打返してみて、「結構です。」と言葉少に。それでも私はかぎりないうれしさを覺える、年甲斐もなく……。けれど今日はそれどころぢやない、午後二時から一高對三高の野球戰、其時刻になると何だか氣がワク〱して、皆樣はちつともそんな事御存じなく、談笑してゐらつしやるけれど、あのワアーッ、ワーッと應援の聲、拍手の轟き、「勝つた方がホー、勝つた方がホー」なんかきゝつけるとたまらなくなつて、鐵砲附けの襟を縫ひ乍ら、心は何處かへ飛んで居た。

　お當番すまして五時頃歸宅、行き交ふ行人みんな野球見物のかへりのやうに思はれて仕方がない。△子樣からお返事が來てゐた、「千代樣！何故もつと御話遊ばしませんでしたの？私もつと〱、花やかな君とのみ御想像申上げて居りましたに………。御自重か、はた御愼しみ深く在すか………」何だか悲しくなつて了つた。

　晩食のおかずは茶碗蒸、三ツ葉のおひたし、ねぎのぬた。

　夜、義兄樣がおより遊ばしたので、いきなり

「兄樣ア、マッチいらして？どつちが勝つて？どうしまして？」と伺つたら、

「三、對四。」

「一高萬歳。うれしい。」

とさけんでみんなに笑はれた。

　はる〲遠征の三高の選手は宿にかへると、重なり

合つて口惜し泣きに泣き倒れたと云ふ。可愛想でもあるゝいゝわ、その代り明後日、ペンとの腕くらべには、きつと〱私も、かげ乍ら祈つて居りますよ。

だつてもねえ、三本筋に櫻の微章、白のユニホームの上からマントはおつて、群をなして濶歩して居たのを、二三日前から見かけて居るんですもの。まんざら他人のやうな氣もしません。

寢しなに夏みかん一つ食べたら、すつぱくて苦くて、すつぱくてにがくて、憤然として口をそゝぐ。もう水道の水もイヤに生ぬるくなつて來た。

八日。

紅雲榮ゆる春の水、墨堤十里、オール持つ手にヨウ花が散る。今日こそ待ちこがれた帝大ボートレース、行きたくて〱たまらないけれど、あの意地を張り通して、切符もとう〱引さいて了つた。私にお金があつたらば、來年のボートには、青の洋傘さして青の紋羽二重きて、リボンも鼻緒もハンケチもみんな青づくめ、ホ……人が狂的だと云ふでせうか。え？キリ〱スの化物みたいだらうつて、隨分よ。

土曜日で裁縫は十二時まで、パラソルかたげていそぎ足で歸つて來ると、森川町へまがる角で追ひ縋つたのはお納戸のお袴に編み上げ凛々しい紅リボン、あら香津子樣、ともう無意識のうちにかたく手を握り合つて居た。

肩すりよせて歩き乍ら語る。ふと先刻早退なすつた山田樣に出合頭、あわてゝお叩頭なすつたので、「あら今お出掛？」と云つたら、「まあ、羨しさうな聲してゐらつしやるわねえ。」つて香津子樣に背中をたゝかれた

だつて、しやなり〱と氣取つて、兄樣らしい方や弟樣らしい方達とつれ立つて、電車通りの方へ行く人達をみると、つひ決心もぐら〱して……。何しろとてもぢつとしては居られないから、香津子樣とこへ行つて半日を暮さうときめた。羽織だけ着替へて御飯も食べずに出かける、さなきだにボッと上氣してるのを、パッとかざした肉色の琥珀が、まつ白い顔に映じて、香津樣のお頬は櫻花のやう。

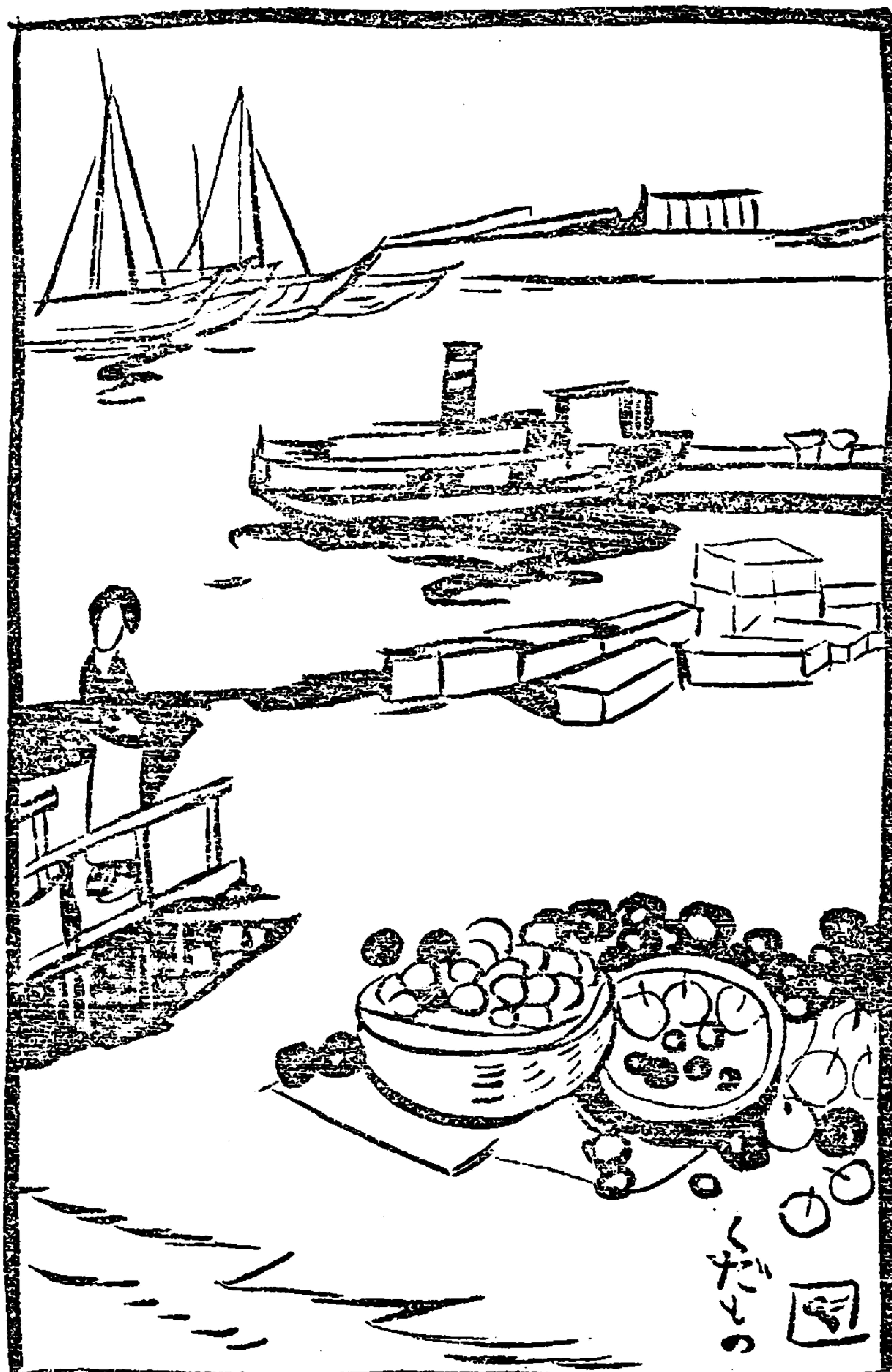
お茶を飲みカステーラを食べながら、南向きの四疊半、小ぢんまりした香津子樣のお室で、皮表紙や金文字の背をならべてぎつしりつみこんだ書棚から、手當り次第にぬき取つて、冷かして上げる。夢二畫集の春の巻に、『試驗に囚はれて』花は咲けども、鳥は歌へど、頭抱へて居る學生さん、これA樣のとこへ書いて上げ

やうかつて大笑ひした。大切なく卒業試驗、この七月には學士にならうと云ふ瀬戸際ですもの、靑息吐息で……お察し申上ますのよ。

ぱッと花瓦斯の光りを浴びて、肩にそよぎし下げ髪や、女神のやうな香津樣はキイ打つ度にきらめくダイヤ。

『光まばゆき春なれど、道行く人の面をみよ』二人よればおきまりの寮歌が始まる、家の方達には内しよでデツカンシヨをどなる。

『月はかくるゝヨウ、航路は亂るヨウ、たどりく、



エトロ島ソカヨウ！』

『あひやせなんだかヨウ、向ケ岡でヨウ、二本ラインの……』

姫御前の身のあられもないソカヨウ節私も一緒になつてピアノをたゝく。

お鮨を平げバナナをむきうなぎで御飯戴いて、徴發した『やどり木』をかゝへてみ、須田町のりかへ、十一時歸宅。

九日。

朝直ぐに新聞をみる、あら、敗けた、敗けた、靑が。口惜しくて投りつけた、樺も駄目だつたのねえ。

あまりバタ〳〵はたきでなぐつてお室の障子をやぶつた。

風が吹くと本郷通りはたまらない、ほこりがバラバラと頬に痛い。一日机の前で過す。吉原が晝火事だつて、二階に上ると煙が見えるさうだけれど腰もあげなかつた。母様からお手紙が來た、マア、母様がお筆おとりになるなんて何年ぶりでせう、代筆先生上京して了つて、困つてゐらつしやるだらうと思つたら、なかなか名文でいらつしやる。妹の書いたものもはいつて居る。

「あのあやめのそばのクローヴアね、いま青々大きくなつたてとよ、お庭の八重櫻もいま滿開できれいです、お姊様、おからだをおだいじにして下さい。」これでも尋常六年生。

夜、餡パンが食べたくて仕方がなくつて、買ひに出たけれど、どうしても店にはいりきれず、ぐるりとまはつたゞけで歸つて來た、手には十錢の銀貨を握つたまゝ……。

十日。

傘をかたげて足駄カラ〳〵。道行く人を見下すやうでほんとに氣がひける、背の高さ五尺六寸。

お晝のおべんたうのお菜がてりごまめで、なまぐさくて困つた。雨はやんで花ぐもり、紅筆に水ふくませてふるつたやうな大地の落紅、一高の小使の爺が鳴らす鐘の音に、濃艷な八重櫻がハラ〳〵散る。

歸宅後、唐人髷をといてウヰンナに直す、その方がよつぽどよくお似合なさると女中達が口々に云ふ。

十一日。

父様の御命日、大奮發の早起きして割引電車でお墓まゐりする。徒町で金杉行きにのりかへたら、乘るわ、勞働者が、しらみのこぼれさうなボロ〳〵絆纏、膝のぬけたもゝ引、鯉口、どろ足袋、異臭ふんぷん、肩を細めて我知らず眉をしかめた。すると兩はじの奴が笑ひながらわざと寄つて來る、たまりかねてまだ進行中に飛び下りて了つた。

お線香としきみを片手に、青柳の絲ゆるうみだるゝ下に立つ、生垣の八重椿がポタリと落ちる。

歸途に上野の山をぬけて、落花の雪をふみ分けやうと云ふ心ぐみであつたが、何だか空があやしいのでまた電車に飛び乘つて叔母様のお家へ行く。八重さんが學校なのでつまらないけれど、髮をとかして眞紅な四吋のリボンを結ぶ。それから足袋と肌襦袢のせんたく

する、雨がポツリ〱と落ちて來た。
お晝餐御馳走になつて、傘を拜借して、松屋へまはる。
紅絹一反と白の繻子入りモスリン八尺と、洋傘一本買ふ、オレンジみたいな白茶地の、共絲でぬひ入りの……柄は白くて曲つたの。昨年買つたのは紫がゝつた海軍色。食堂へはいつておすしとお汁粉を食べた。
三丁目で電車下りると、急に雨がふりつのつて横さまの大しぶき、家までに後半身びつしより、クリームの裾も何もめちや〱だ、氣の利かぬ事をしたとなきたくなる。
机の上に主待ち顔の手紙が三通。

誌友會の感想

平塚白百合

▲若い女の乳房を思はせるやうな柔かい春の空から、輕い足取りで霧のやうな雨が吹かれる。

▲お琴と三味線とに合乘りされて小さくなつた車の上から、二寸許りにはめたグラスを透して空を氣づかひながら、青葉の上野についたけれど、雨はやつぱり天と地と默契でもあるらしく降つてゐる。

▲この雨がつゞいたら……………かう思つて、かん泉殿の雨乞ひならぬ雨晴れの歌を、神命にさゝげる人はないかと思つた。

▲十一時、若杉樣と、雲井の雁樣と稻子樣と四人して夜雨樣のお出むかへに停車場に行つた。まへかた御通知があつたので。事なき夜雨樣の御姿は一年ぶりに見える事が出來た。

▲雨は上つて雲の去來はいとまない。

▲ぬれた青葉は群青色にかゞやいて、思ひのまゝあの中を步きたいと思つたけれど、幹事の一人といふ自覺に私の頭はせかれる。今二時間の後………。

▲大ていは一年ぶりでお逢ひした方許である。四月の雨の日ます子さまにはお目にかゝつたけれど。日本髮は幹事の中にます子さまの、ぬれ羽色のお島田と、山田樣のフツクラした銀杏返し。

「お變りになつてねー」

かう云ふ挨拶が引切りなしにきこえる

▲西洋時間でせうかなどゝ云つてゐると一時になつた。來會者はもう紅絹の長いふりをつらねて、若い輝やく瞳をふしめに隣つた人とさゝやかれるのもある。

▲開會辭は山田邦枝さんの物なれたなめらかなお言葉にのべられた。

▲水野仙子樣と私は或役目をもつてゐるので時計を見ながら森田草平さんの不參を待ちわびてゐる。山田さんは車でおむかへに上つた。

▲…………遠山樣のおこゑはしつとり落付いて丸味がある。慈母が子をさとすやうななつかしい柔かみがある。さうして强味もふくまれてる。

▲義太夫は千代萩に變つた。

▲紅い引き幕、緋にもえる高座、女義の聲は少し太すぎたけれど、鶴千代君と千松と、政岡にからんでの邊は誌友席のこゝかしこ涕泣のこゑにぬれて、私の瞳も重かつた。

▲ます子樣御姉妹の、あどけないさうして張りのいゝおこゑと、あでやかなばちさばきは、いたい迄に拍手の音が高かつた。

▲「内藤千代子は何處に居る」で夜雨樣がノートの端にかゝれる。「右側お島田に黑い帶した人」で私はかうかいてお目にかけた。夜雨樣は「はやぶさに逢つたか」とおきゝになる。ハーと私はこたへた。

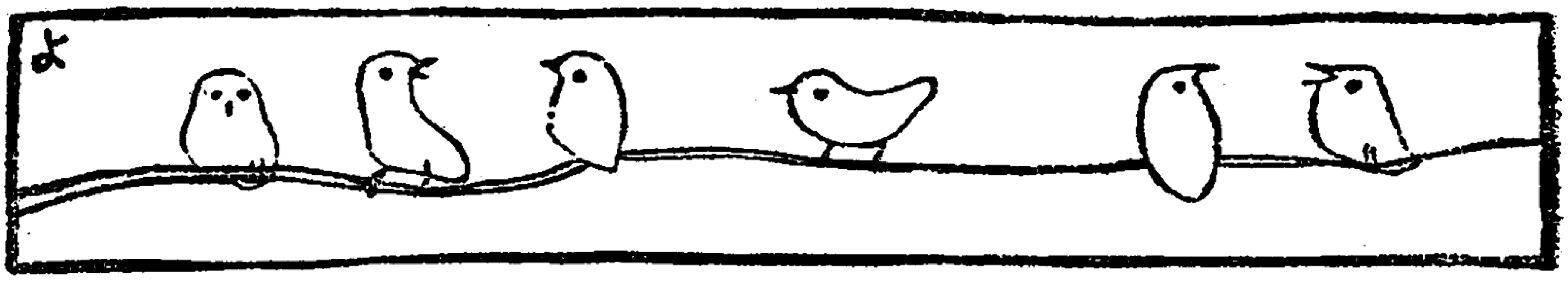
▲私はピアノもなしに熊野の曲を歌つた、强ひられてー、聲がふるへた、胸もふるへた。

▲十三絃の響は、平家の昔を語つて、情緒はゆるやかに嚴島の浪を廻つたあゝたのしかりし誌友會よ、さゝやきかへる若き人々、瓦斯の光かゞやく若葉の蔭を出でゝ、廣小路の人波に隱れて行く。

▲力づよい上野の鐘は耳もと近く撞き出された。

山　茶　花　　　　高安松英女史筆





贅澤（對話）

吉井勇

人物

第一の女（三十七八歳の衒學者的の女）
第二の女（十六七歳の無智の女）

場所

或る家の西洋風の客間。第一の女はこの家の主婦なり。

十一月の終り。夜。

二人卓を隔てゝ對座す。會話の調子はすべて叙情詩を朗讀する如し。

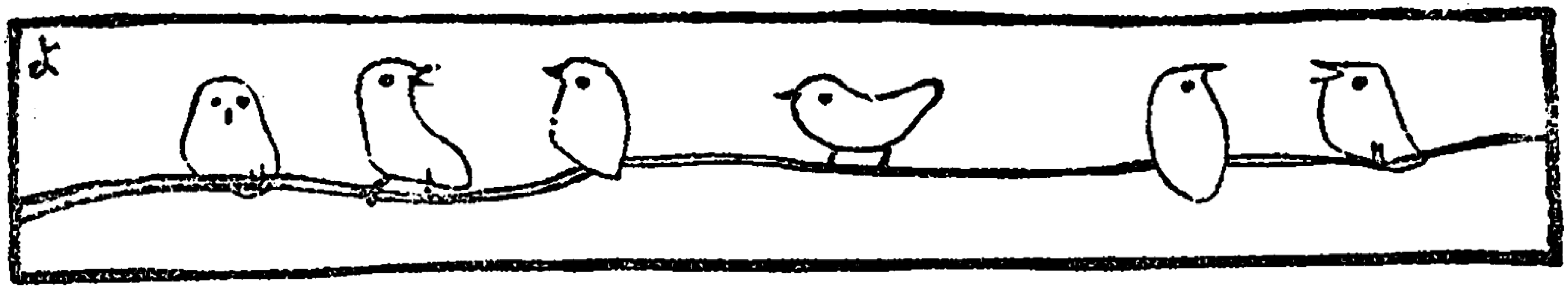
○

第一の女。（對話の續き。）それから私達は砂山の上に登りました。さうして月の光に輝いてゐる夜の海をみんな默つて見てゐました。（間。辨解の調子。）然しあなた誤解なすつちやあいけませんよ。これは唯或る女の經驗なのです。決して私の經驗では無いのですからね。

第二の女。（微笑。）さうお斷りにならなくつてもよろしうございますよ。私はまさかあなたがそんな事をなさらうとは思つてゐませんから。

第一の女。（やや不滿の表情。）さうですかねえ。私はもうそんな年を取つたんでせうか。あなたから今の話を殆んど否定されてしまつたくらゐに。

第二の女。何でございますつて。



第一の女。いえね。あなたは今私がお話した事を嘘だと思つていらつしやるのでせう。

第二の女。まあ。（短き間。）何で私がさう思ひませう。

（長き間。）

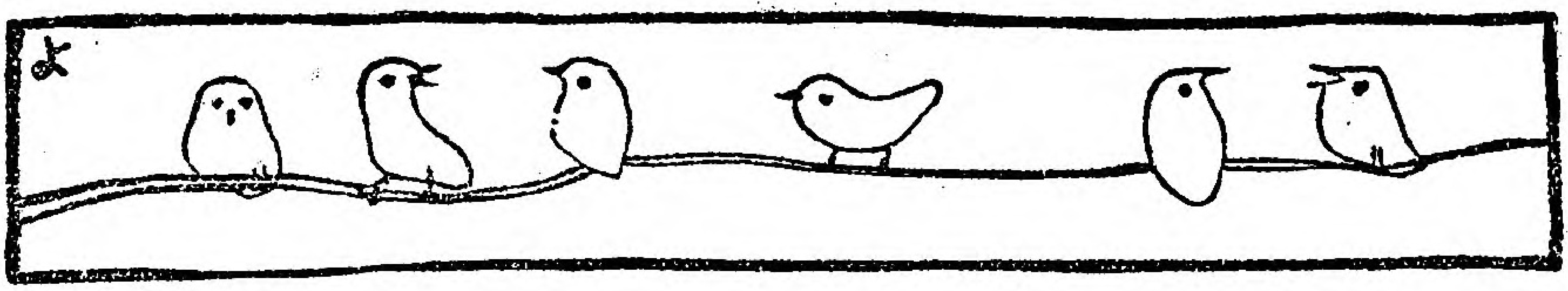
第一の女。それではね。御迷惑でせうが、もう一度今の事を繰返して私に話させて下さい。（願ひの調子。）ね、好いでせう。

第二の女。ええ。よろしうございますとも。

第一の女。（笑。）何だか變だわねえ。（間。）然し好いわ。私の事ぢやあ無いんだから。（叙情詩を朗讀するが如き調子の度を高む。）それは或る避暑地の事なのでございます。宅がまだ佛蘭西から歸つて來ない時分でございますからもう三四年前になりませうね。私は何だかつひ此間のやうに思はれてなりませんけれど。（間。）私は妹と二人でその避暑地の旅舍でひと夏暮らしたのでございます。その旅舍は丁度海から二三町離れた松林のなかにございました。（間。）名前を云へばすぐ分る家でございますが、もう或る避暑地と申上げたのですから、さうして或る女と申上げたのですから、やつぱりこの家も或る家として置きませうよ。

第二の女。私にはその方が安心して聽いてゐられます。

第一の女。さうですかね。（間。）それはその夏は全く面白うございましたわ。何だか毎日毎日時が經つのを知らない程でした。朝早く起きて海岸へ出ると、もう誰か散歩をしていらつしやいます。それから一所に岬から岬の間を一度ずうつと歩いて歸つて來ると、その間にはいろいろな方に會ふのでございます。さうして終には十二三人の人數になつて了ひますが、みんな若い人達ですから、その騷々しさつたら有りません。浪が來たと云つては笑



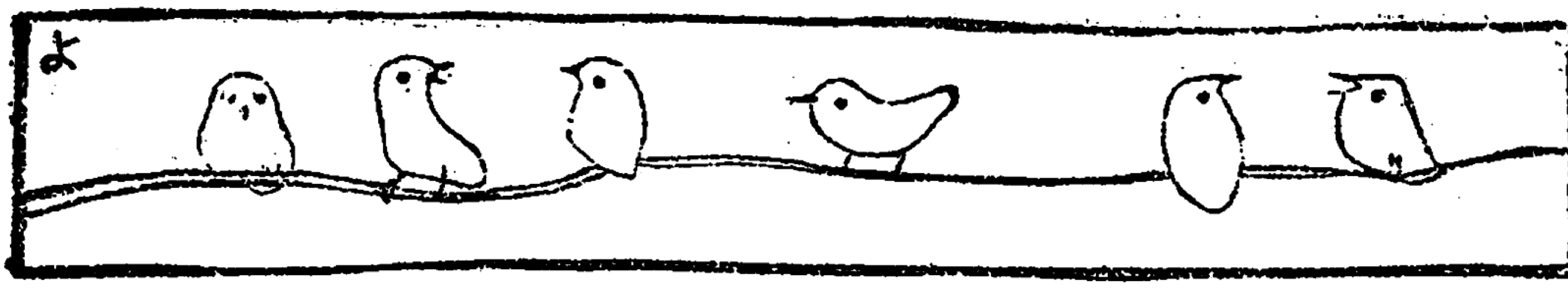
ひます。蟹が穴に隠れたと云つては笑ひます何でも『笑』と云ふ事より外に自分の感情を現はす事を知らない人達のやうでした。そんな風にして日が出てそろそろ砂が燒けて跣足では歩く事が出來なくなる時分まで、みんなで巫山戯散ら



して歩き廻るのです。さうしてみんな足の裏の熱いので、やつと家の事を思ひ出して急いで歸つて往くのです

第二の女（無邪氣に。）ずゐぶん呑氣な方ばかりなのね。

第一の女　ええ、ええ。誰だつてあの仲間に一度入ると呑氣にならずにはゐ



られませんよ。（間。）それからまたすぐ海岸にみんな出て來るのです。さうしてみんな一所になつて、その時もまた『笑』と云ふ表情を忘れずに、海のなかへは入るのです。その時、私はいつも黑い色の海水着を着てゐるものですから、何だか目立つて困りましたわ。（矜るが如き微笑。）

第二の女。如何して黑い色なんぞの海水着をお召しになりましたの。

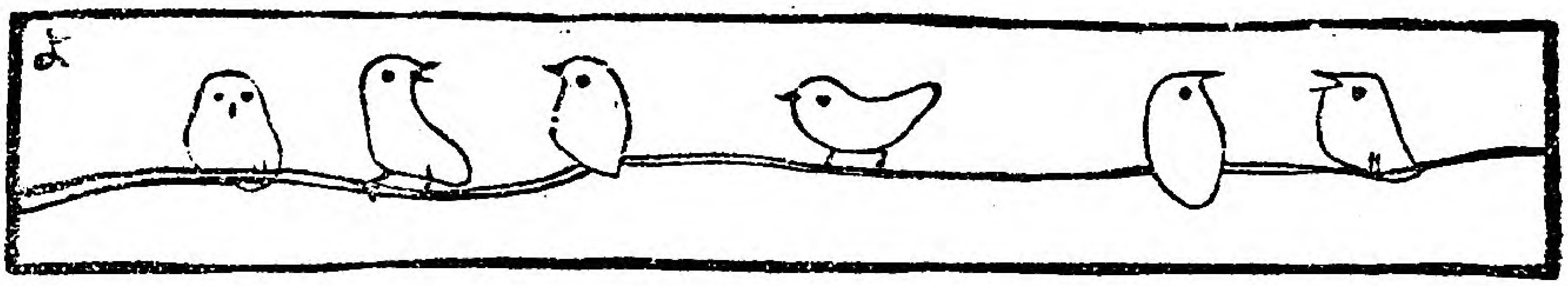
第一の女。それはもうその仲間では、私が一番お婆あさんなんですもの。

第二の女。（笑。）あんな事を。

第一の女。ほんとですよ。（やゝ長く考ふる間。）それからまだその時の仲間にはどんな人がゐるかお話しませんでしたね。（間。）それはいろいろな人がゐましたけれど、女は割合少なうございました。私と、私の妹と、それからもう二人。一人の方は私より一つ下の年で、ヸオリン彈ではかなり名を知られてゐる方でした。も一人の方は丁度あなた位の年で、まだ女學校に通つてゐる純粹の青襪でした。この方がいつも最初に『笑』の表情を尊重するのです。（間。）それから男の方は十人ばかりでした。その中でこの話の主要人物は、郊外に花園を持つてゐる若い農學士と、博士の父を持つた法科大學の學生と、この二人だけなんです。（わざとらしき笑。）さあこれからが私が話したいと思ふ所なのですよ。（間。）だがあなたつまら無かなくつて。

第二の女。いいえ。

第一の女。それぢやあもう少し聽いて下さいね（間。）もう避暑地時代の全盛期が過ぎて、少し濱が淋しくなつた時分でした。その農學士と法科大學生との間に、或る爭が出來たのです。その因はと云ふとその仲間の或る女に對するお互の嫉妬なんだつたんですが、二人は

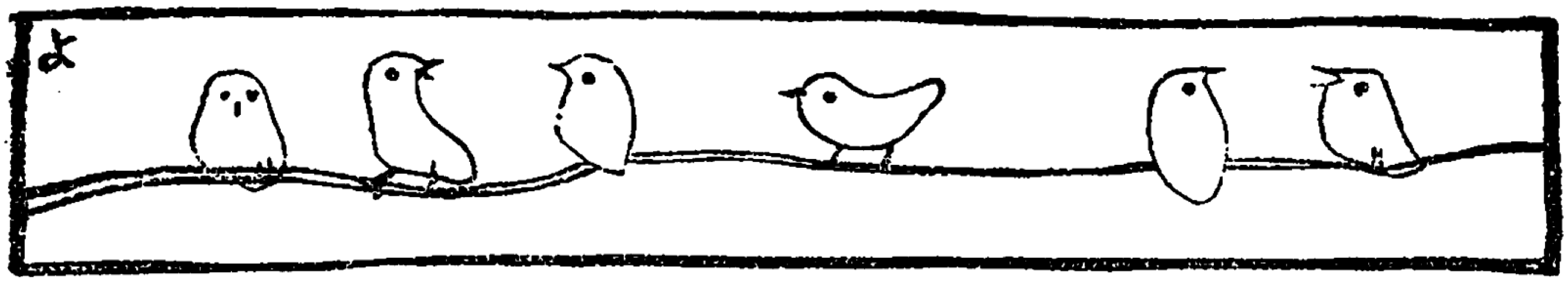


もつと體裁の好い口實を設けて、互に絶交するとまで云ひ出したのです。(間。)私は中に立つてどんなに困つたでせう。さうしてその爭の原因になつた或る女の困りやうは、私どこの騒ぎぢやありませんでした。もうその二人の男の顔を見るのが嫌で嫌で、直ぐにでも東京へ歸らうと思つた位だつたさうです。それもさうでせうよ女は二人の男に對して、一度も感情を動かした事が無かつたのださうですからね。



第二の女。(呟くが如く。)ずゐぶんな女ねえ。

第一の女。(辨解的に。)それも無理はないのですよ。避暑地の不思議な空氣の中に入ると、人に依つては非常に興奮する方もありますけれど、中にはまるで『感情』と云ふものが無くなつて了ふ方があります。その女も多分後者



の型だつたのだらうと思ひますわ。(やゝ長く第二の女の顔を見る。間。)然し或る女の胸には此時『驕慢』と云ふ感情が新しく生れましたさうして忽ち態度を變へたのでございます。先づ若い農學士を訪ねて、一服の緩和劑を投じました。それは『唇』と云ふものを與へたのださうです。さうして直ぐに又法科大學生の所へ往つて同じやうな事をしたのださうです(やや調子を強む。)さうして如何でせう。もうその翌る日の朝は、その女は二人の男を一所に連れて濱を散歩してゐました。それからその女は幾人の男にこのやうな事をしたか知れません。それからと云ふものは何時でも二人や三人の男は連れて歩いてゐました。

第二の女。(處女らしき驚愕。)まあ。

第一の女。(語調を變ず。)ねえ、あなたもまだお若いし、それに綺麗でいらつしやるんだから申しますが。(間。)あなたは『贅澤』と云ふ事をなさりたいでせう。

第二の女。いいえ。別段。

第一の女。(笑。)それはあなた噓を云つていらつしやるのですよ。女は誰しも『贅澤』がして見たい者です。(間。)それでね、あなたもどうせ『贅澤』をなさる位なら、今申上げた女のやうに、『感情の贅澤』をなさいね。(愛撫の調子。)ようございますか。忘れちやあいけませんよ。

第二の女。(頷く。)ええ。ええ。『感情の贅澤』でございますね。

第一の女。左樣です。(やや長き間。)併しその話もうずゐぶん前になつて了ひましたね。あの砂山。あの海。(思ひ出したる如く。)あ、これから先刻の話に續くのですよ。月夜の物語。(間)ね、分つたでせう。あれもやつぱり『感情の贅澤』と云ふ事の例に引く事が出來ますよ。

第二の女。もうその事はようく分りましたわ。(微笑。皮肉なる調子。)併しあなたがかうやつて昔の事をお話しになると云ふ事も、やつぱり『感情の贅澤』ではございませんの。

柳の前後

兒玉花外

櫻はむろん派手で佳い。しかし、柳の姿の綠でなよやかなのも、また色の具合が東洋的でよろしい。

東京で櫻はデカダンの詩のやう、名物の空ッ風にすぐ散つて仕舞ふ、柳は春から夏へかけて生命がながい。黄の芽と綠の枝葉と、宛ら妖女の垂れた指のやう力が充實してゐる、女と柳とは弱さうに見えても……。

豪華な江戸時代からの櫻に、淡紅い、青白い、凄い位美しい眼があるとみても、誰れか柳の枝に幾千の綠の眼が、着いて光つてゐると知るだらう。春の晴れたひる間は金星よりも鋭く輝やく。

東京の街の柳は、その春の芽の出た時、その光が最も強い。うらゝかな高い空から射す日光と、針の尖つた空氣とが、黄な芽に觸れて磨くからだ。柳の芽は、都會の少年の氣持のやうに、燃えてぞく／＼と顫へてゐる。

赤い洋傘をさして、柳のみどりの下を行く若い女よ、近代の女が、黄の芽に目のとまらぬ筈はない。戀か何にかしらぬ煩ひの紅い瞳が、鬱金色の柔かい芽に映つる、……春の熔かすやうな暖かい日光は、柳の幹皮と、若い女のふくよかな白い肌を射貫ぬく。

日に新らしさを增す、都會の街に並ぶ柳は、時代後れ、亦は老年のものでない。青年の姿を表現し、燃ゆる豐かな、若々しい男女の情緒を象徴してゐる。——見よ、光る綠の眼が揃つて、若い生命の人が行く！軟かい枝が手を伸さうと爲るではないか。

柳は都會の、しかも普通の巷に趣味がおほい。電車、

自轉車、又人車にも、側面から柔かい綠の色調をなげる。入雜つた音響、濁つた空氣を清新にする。春の風が情熱に荒狂ふときに、柳の幹は恰ど海底の亂藻のやうに苦悶する、塵を吸つて默つて噎ぶ。

あのやさしい木の根、都會の堅い、潤ひの少ない土地に、女の思ひのやう根を張るのは不思議な位、春になり例の黄な綿のやうな芽に、ぽか〱熱い強い日光があたつたら、擦れて、人間ならば必と發狂をするだらう。

淡紅色でも櫻は白い、白の艶陽の明るさに、めつたに人は狂はぬ。柳の芽が黄金の粉を吹き葉に變る頃になると、人間の腦味噌が攪亂され易くなる。やなぎの綠には魔力がひそむ、薄い火のやうな綠は劇藥の色に、青年の内部に深く影をさす。一たいに、春から夏期の草木の色は、人間の肉體と交渉がおほい、快樂の眼には已に一種の狂氣を注がれてゐる。――草木が天日に燒照されたよせいは潮のやう。――西洋の官能派の作家は強烈なる戀愛を多く溫室か庭園の内に描いた。

デリケートといふ言葉は、わが柳の姿に最も相當する。柔軟で、婉曲な、そして力強い熱を含む木は、現代の若い人に歡ばれやう。街道を歩いてするどい神經が柳に觸れ、細い幹に纏綿せぬいはれはない。優しい女ならばなほ更のこと、近代人の神經は鋭敏で何物にもタッチせずに措かぬ。あゝ、美くしい纖細い女の神經と、やなぎと……。

春の夕暮に、柳の綠は一いき沈む。艶な女が唯からだを便りなくして、物思ひして居る樣、都會の濃い濁つた空氣に、枝がみんな沐浴するやうでもある。斯る時、哥麿の浮世繪の美人が近代的情調をもつて、若い人の眼に朦朧とうつる。

佛國のボードレールの如な、若い詩人だつたら、必とかうした刻には、薄暗い地に影を這はす柳に對照して、大空の雲をおもふだらう。ゆらり〱と物に拘らす、靜かに夢のやう漂うて浮ぶ白雲に、柳よりもデリケートな思を飛ばして歌ふだらう。しかし、吾等にボードレールに似た、美觸な官能神經が發達してゐると

信じられぬ。松と櫻を賞へても、まだ柳に感じ到らぬ東洋人である。

西の山へ、春の赤い夕日は落ちた。熱の色の褪めたやなぎは、暫らく所在なさに宵闇に立つ。やがて道路に、軒燈と白熱の瓦斯が點くと、柳はまた目さめて、綠の息を白熱に吐く。あはれ柳は、晝も夜も輕い熱の刺戟から免れえぬ、やさしい憂鬱詩人のやうだ。

春が過ぎ、初夏になると、柳の葉は繁り、枝は丈夫に垂れてみえても、やはり柳はやなぎ、デリケートもローマンチックも失せはしない、綠はやゝ濃く色を增したばかり。こんもりと魔氣を中に隱してゐる。

こゝに於て、枝は日光よりも、煙る春雨からしだいに、夏の初めのたつぷりした雨の潤ひが欲しくなる。喜びに愁ひに涙しげき女詩人の、周圍を惱殺する樣子に柳は變る。風すら迷つて消え死ぬる。

切れるやうな夕月、惡魔ににた蝙蝠も、茂つた複雜した枝は調和してくる。夏の柳は、もはや若い人の神經を刺戟するよりも、濃厚な色彩からして感覺を呑むで了ふ、凄味がある。

夏の眞暗い夜の烈しい夕立、黑い亂雲、柳はかういふ情景としつくり合ふ。青白く射りくる稻妻をも迎へる。——佛蘭西の明るい輕快な所よりか、今は惡どい深酷な露西亞風を生む、夏の雷鳴の暗夜に濠端の柳の沈々默々。——

我國の樹木で、やなぎは露骨な單調で、また複雜した趣味に富んだ木だ。いかにも、而して情緒のゆたかな現實的である、男女兩性をかねた詩的で……。

西洋のアカシヤの木蔭はしらず、今日以後のデカダン詩は、必ずかうした柔軟な、變化と陽陰の深い柳のやうな樹から、盛んに産れて來るであらう。紅い歐洲の西の國にたいして、綠の熱を帶びた東洋的の柳も大におもしろい。

江戸ッ子の派手な意氣を表徴する、艶麗な櫻もデカダン詩に適しやう、みどりの濃い柳の執着力のある所は、之からの國民性から見て非常に興味があると思ふ。新たに進歩する都會には、新なる人間と、新なる空氣と、柳のやうな永久に若い樹木が必要である。櫻は野に山に庭園に、やなぎは怎うしても都會の街道に植る木だ。柳は極めて文明式の優柔な眞強い現實物である。

煙る春雨の柳の上に、ぬれ燕……。

うらゝかに光る日の柳に、神經のするどい若き詩人の眼……。

短歌評釋 新派の心持

原田楊谷

○　若山牧水

憫れまれあはれむといふあさましき戀の終りに近づきしかな

戀は對等ではない、隷屬である。自意識の勝つた近代人が、夢のやうな、麗はしい、センチメンタルな戀を、何處までも續けえぬのは、悲慘ではあるが、致方ない事實である。

この歌には、かうした寂しみと哀しみとが、しんみりと情緒ゆたかに歌はれてゐる。

獨り靜かに口ずさんでゐると、人事では無い、かう思ふ程切な哀愁が湧いて、自然涙を誘はれる。

その頃から、如何かすると二人の間には、ちよいちよい、憫むといふやうな言葉が交された。殊に手紙の中などには臆面もなく書きもし書いても來た。それが初めは、心からでもありまた戯談のやうでもあつたのに、この頃では心の底から眞にそんな事を思ふことが多い。さうなるといくらキスを重ねても、往復をはげしくしても、もう一秒毎に、遠く遠く、二人の心は相離れて取り返へしがつかない。

よく、夢の中に無形の絶壁を踏み外して、がつくりする事がある。丁度そのやうに、ふとした機會に遂二人の關係を批判して、愕然失望する、芥のやうに、自分の身が淺猿しうもあるし、馬鹿々々しうもある。そして燒原に立つたやうに、冷たい、やる瀬ない心許無さを味ふといふのである。

この歌には、眞面目な、寂しい、落日のやうな一種のユーモアがある。

いい歌である。

○　武山英子

乳の下すこしはげしき勞働に痛むと聞くも涙の落ちぬ

良縁があつて、合歡木の花の咲く頃、妹は姉に先立つて田舍へ嫁いだ。

とある舊家で、もの靜かな夕暮を背戸の森に蜩が啼いた。

いとけない妹は、人妻になると、翌る日からまめまめしく立ち働いた。紅いてがらの可愛い髷に、雪のやうな手拭を被つて、青葉の下に洗濯もした。

夢のやうに、日は一日一日とたつた。

秋の一日、久方ぶりに妹は實家を訪れた。姉の縁談もこの頃もちあがつてゐる。

姉妹は、人氣の遠い離座敷にしみじみと物語をした。

夕陽が、明く障子に流れて、遠く耳の底の方にものの聲が聞える。やがて夕暮が來るのであらう。

姉妹の瞳には、いつか涙がにじんでゐた。

――でも未だ未だ、妹は姉の前では小兒である。事も無げに色々のことを言つて仕舞ふ事が多かつた。それが一つ一つ、柔い姉の心に鹹水のやうに浸み透つた。姉の頰には、ピテイーの影が、風のやうに搖らいだ。

もう、涙に堪へないのであらう、姉は、それとなく面を外向けて庭を眺めた。濕つた土には、ほの白う秋の花がこぼれて、かすかなかすかな香を立てゝゐる。

かうした姉の心、奥ゆかしい姉らしい心。それがこの一首に漲つてゐる。慾を言へば、調子などに今少しといふ節が無いでも無いが、作者の心は十分に味はれる。

○　　金子薫園

夕なぎの波うちぎはのひたひたにさびしきことをおもひつづくる

濃くゆたかに茂り合つた四邊の草木を搖るがして、とりわけ午後などは、幾度となく、うそ寒い風が人々の肌を襲うた。

暑を避けた都の人々も、二人歸り三人去つて、殘り少なになり、宵になると天の川が高く鮮かに流れて、海邊の村落に早くも秋は來たのである。

とある家に室借りをして、一人の旅客は水泳ぎに熱中するでもなく、近在に遠足を試るでもなく、一夏が中、多くは籠り勝ちに過した。それがこの頃では一層甚しい。如何かすると、紙をのべてペンを採ることもある、聲を揚げて書を讀む事もある。けれども美し

い口髭のあたりと眉の根とには、爭はれない寂寥のかげと、倦怠の少しばかりと、深い身内の苦悶とが幽に顫へてゐた。

廣い桑の葉と蜀黍の葉とに冷い蒼い風を眺めて、めい、つきり籠つて日を消してゐる。彼れもまた、糜爛した文明の落日にさまよふ、漂泊者の一人であらう。

でも、兎すると、夕ぐれの渚に背の高いその風姿を見る事がある。

今日もそれである。

靜かに霧が下りて、夕凪の海の面には、深い寂寞の影と眞面目な不安の微動とが漂ひ、夜に近づくに從つて、霧は雨のやうに深くなる。ヒタヒタと小さい波が岸を傳うてくづれて行く。

かの旅客は、と行きか行き、ふらふらと砂の上をさまようてゐたが、やがて渚に揚げられた漁舟の舷に凭つて、肩からすつかり濡れるのも知らないやうに、俯向いてしまつた。

闇の中に、大理石のやうに冷たい浴衣のかげは、寂寥の焦點を作して、いつまでもいつまでも消えさうには無かつた。

○

内藤晨露

灰色のかなしみ空へ眼もはるに啼きつれわたる
海の上より

虛僞と墮落の外何物もない、現實の醜惡を呪つて、彼に北國の暗い暗い海へ走つた。

そして、露はな、冷たい自然の靈氣に浸つて、悲哀の快感を味ふのを、せめてもの心やりとした。

長汀、怒濤が黑く逆卷いて、晝もなほかすかな霧が鹽の樣に瞳にしみる。

彼は、晝となく夜となく、たそがれとなく、かはたれとなく渚に立つて、じつと腕を拱んで物思ひに沈んだ。

希望と絕望とが、相交錯して彼の心に烙印を押した。

冷たい力とやる瀨ない哀愁とが、心の底から湧いて自ら瞳が潤んでくる。

見渡す限り、海面一面絹絲のやうにもののかげが搖いで、眼も開いてゐられない。

彼はじつと立つてゐる。

「啼きつれわたる」といふ句は、眼に泌る程に哀しみの狀態を表はしてゐる。

かうしたシンボリックな表し方に、えて有り勝ちない、や味が少しもない。率直な印象そのものであるからであらう。

若き心の誤謬

ほとゝぎす

今、此の失望の悲しみを遣る爲に、古ほぐを搔き廻はして見ると、故一色醒川氏の手紙があつた。此の手紙を讀む時、更に蘇生つたやうに、自分の心の戰ひ甲斐ある事を覺える。

やり難き悶々の情あればこそ、折角遠路の中をお尋ね下され候にも係らず、何のお足しになるやうな事も申上げず定めし失望してお歸りなされし事と存じ候。

既に承りし一班丈けを以てしても御身の世に多からぬ、むづかしき境遇におかれ給へるを知り、又御身の性格の宜い加減に胡蘆化して世を送る事の出來ない、兎もすれば癖に障つて反抗するとやうの傾きにて在す事も、了するに難からず候ひき。

運命の暗き流れは如何に落ち行くや、もとより測り難く候へども、境遇の悲慘と性格の悲慘とを併せ有する程世に痛苦は可無之候、境遇の悲慘もとより悲慘なれど、或る性格によりてはさほどの感觸もなくして過ぎつべく、激烈なる悲慘は此の性格より來るに候。壓せられじとする反抗、佯らずして貫かんとする意地等、皆これにして、古へより『心から』など申すもこれに候。

御身とても若し其利害を打算するの念強くして、其邊を一考せば目を瞑りて平穩且平凡なる生に歸る事さして至難にも候まじ、それが出來ないのが御身のその性格による事ならん。さてそれが出來ない以上苦悶は必然の約束に候。よしなし其どん底にて悶え給へ、今の時憖じつか小なる型に入りし具體的解案は御身を小ならしむるの外、何の効もあらず。

若し敎會其他かゝるところにて『眞理は平凡なり』など云ふを標榜に、安價なる押賣をなさんとするも應ずる勿れ、若し救助を名として御身の手を引かんとするも手を與ふる勿れ。悶ゆるは無意味の事にあらず、無意味〳〵と叫ぶ事すら必ず零數を乘じて得ざる如き、空しきものにはあらず、心機の持ちやうによりてはそれが豫練となり、生命の糧ともなるに候、悶え悶ゆるうち自から何かの足場を見出し、一道の光明を得る日も候はん、自から見出したる眞理

の相ならで、他人の紹介するもの何の力か候べき。初めは唯此の苦悶に何處までも堪へて、喪心自ら滅ぼす事なからん事を希ひ候。どあつて最後に、死んでは駄目に御座候と書き添へである。

今此の手紙の一節を思ひ當る時が來たのである。醒川樣御存命中、丁度此の手紙を戴いた時は、苦悶の遣り場を宗教に求めてゐた。見るもの聞くもの凡て懷疑、最その懷疑を集めたる宗教にまで、私の心は迷ひ込んで行つた。宗教其ものは兎に角、宗教家といふものを餘りに高く買被つたからである。

一年の餘も通ひ詰める中に、自分の前に暴露された教會の内部、牧師の人格、怖るべきは姿無き宏大なる建物の中に、包まれたる空氣である。憎むべきは、神の宮殿を日夜汚しつゝ怖れざる僞善者ではあるまいか。牧師H氏は神學博士である、某々子爵の令孃をも妻君にした事があつて、其お蔭で社會に相當の地位を占むるに至つたとも世間ではいふ。H牧師に對する世評は、『シタヽカモノ』とのみで、誰も讃美しない代りに何の醜聞も聞かない。是は世間と自分との調和の巧い所以であらうと思つた。

あの猫撫で聲の親切でかし、然も其親切が捕へどころのないやうな親切である。使命とか救助とかあゝいふ美名の下に、幾人かあやまられたる若い人があらうと思ふ。口前の巧者な事は眉に唾を塗らなければ、此の人とは話が出來ない、天才だとか美人だとか散々に煽て上げて置いて、其上で甘い〳〵涙もこぼれるやうな親切をいふ。『ハヽア此の人の處世法は萬事此の手だナア』とうなづかれる、然し滅法界に煽てられるには流石に困り切つて返事も出來ない。

某夜牧師H氏の手紙を受け取つて見ると、二三時間他で逢ひたい旨が書いてあつた。他でと云つて行くべき處もなし、考へ込んだ末に早速私はH氏を訪づれた。

氏の家は電車から四五丁ある、牧師にしては贅澤な暮し向きをしてゐる。天井高く古風を帶びた、廣びやかな氏の書齋、流石に博士丈けあつて、次の間は書物にギッシリ埋められてゐる。氏は例の猫撫聲で、『まあ此方へお寄り』と褥をすゝめる。何時も〳〵逢ふ度に説明される事は、世に階級の尊い事、何と云つても物質の力ある事は爭はれないといふ事、階級、物質の効

能を並べた上で、今夜といふ今夜も、何時までも養家といふものと絶縁しなければ、貴孃は出世する事が出來ませんぞ、と云はれた。私はそれを聞く度に冷水を浴せられるやうな心地がする。

お斷りしやう、私の養家は賤しい稼業をしてる、けれども自分が大抵な主張は通さして是迄に養育して呉れた事を忘れる暇もなく感謝してゐるといふ事を『其家に生れたのならばそれは神の使命だから、背く事は出來ないけれど、育てゝ呉れたといふのならば、物質を持つてさへすれば報酬は充分なものなのです。』といふ、餘りに私は侮辱を感じて得堪へず、『先生それは餘りのお言葉といふものです、私の養母は、十數年辛苦を嘗め盡して育てた子の情と、物質とを取り換へて、喜ぶやうな女ではありませぬ』と切り込んで行くと、先生御機嫌を損じて、次は友の花子樣の事から、遠廻しくに結婚の事を問ひ詰めた。私は自分の正に考へてゐる問題の梗概を、かい摘まんで正直に語つた。するとＨ氏はさも意外だといふ表情をして、『俺は貴



君を買被つてゐた、養家、戀愛、然うした小い羈絆が斷ち切れない許りに、浮ばずに終るやうな人だとは思はなかつた。天才で美人で蠟細工の人形のやうな人だと思つて、私は貴君の將來に多大な望を掛けて、二三の有力な人々にも口外した程であつたのに、人間は世に立つのに、矢ッ張り素性といふものが大切である。養父母の事へ戀愛の事、それ以外に貴君は神の使命ある事を知らないのだ、一二の小い羈絆を脱すれば、あたら天高く飛べるものを、敎育こそないが私は貴君の才を信じてゐた。』と嘆息をお洩らしなさる。私は今夜程侮辱を感じた事はない、H氏の言ふところは一面眞理であるかも知れないが、天才も美人も聞き飽きた、細工物の人形とは失敬な、溫い血潮が通つてゐないと誓ひを立てた覺えも無い、敎育が無いといふ、氏は敎育といふものを常識だと思つてゐる。傳習だと思つてゐる。氏のみならず、世間一般の人が然うである、敎育が無いと云はれるのは却つて名譽な事であるかも知れない。

『先生、先生の仰有る、世に立つとか立派になるとかいふのはどういふ事です、もし幾多の犧牲を拂つた上で所謂立派に成れなかつたらば？扨て立派になつてどうするのです。立派とは果してどれ丈の意味があり、どれ丈自分の心に滿足があるか知れませんが、私は立派になる、然うした澱たるものゝ爲に、何ものを犧牲にするのも忍び得ません。』

と切り込んだ言葉は實にH氏の感情を害したのであつた。H氏の額には蛇のやうな青線が忽ちに現はれて先づ眼鏡越しに一瞥を與へ、聲も荒く、『何を仰有る、立派になつてどうするとは惡魔の聲だ、美と醜と並べたら貴君はどちらに向つて走る、直ちに美を取らうとするであらう、美に向つて走りさへすれば人間は間違ひがない、それが卽ち信仰で、さへぎるものは惡魔である。』と一喝せられて私は默した。美とは一體何をいふか、一方にのみ走るべく我等の眼は開き過ぎてゐる美をのみ求めて走つた人が、僅かに美を得たとは然も滑稽な疑問である。私は餘りに見くびられたやうな心地がした。

　それから永い〳〵間、讀書ランプの赤い炎を見詰めながら、殆んど浮の空で說敎を聞かされて、更けてから歸宅した。

　あんな人々に現代思潮を論じられては堪らぬ、彼れでも人間の部類別をすれば、思想家、宗敎家、神學博

士だから驚く。

　宗教家といふものは、どんな現代人の暗い解し難い苦しみも呑み込んでゐて、其の人々を見る事に敏なるものと思つてゐたら、矢ッ張りたよりにはならぬもの。然し其處には爭ひ難い時代の力といふものがあるから已むを得ない、けれども宗教家といふものは、あらゆる人間の圏内を脱してもう少し客觀的に現代人の心を解剖して欲しいと思ふ。

　若い人々よ、神の偶像を盾に着る、彼の僞善者にあやまらるる事勿れ。

　然し是は自分が餘り宗教家其ものを、人間以外のもの〻如に高く買つた罪である、依頼心の罪である。是で若い夢が、先づ一つ多く破壞せられた事になつた。

　私にはむづかしい理窟は分らなかつたけれど、宗教と云ふものにすがらうとした眞面目な心を、宗教と云ふものを傳へる人の爲に破壞されたことを、少くも遺憾に思つた。今更ながら醒川氏の言葉の味ひ深いことを思はずには居られなかつた。





番町日記

山田邦子

何を書いて見ても僞を並べて居る樣な、又力がたりない樣な、言ふに言はれぬ寂寥を感じて來た、友達と話をしても、こんな事は言はないでも好い事だつたと思ふ事が多くなつて來た。どうした譯だらうと考へて見たが、ふと「一轉機」と言ふ文字があてはまつて離れない、今は私の一轉機で有らうとひそかに心うなづいた。

*　*　*　*　*　*

ドトウ！と烈しく木が風に鳴る、重々しくけつたるい眠られぬ夜である。大風の騷いで居る夜を見たく成つて、そつと戸を開けた、空にはぼんやりと月が暈を被て居る。ドーウツ！黒い木立が風にゆれて大樣に動く、生暖い風の名殘は、強い菜の花の痛い樣な匂ひをパッと顔に吹き付けた、暖い樣で、寒い樣な、何んだか胸がむしられる樣で、私は其まゝ急いで戸を閉ぢると、床の中にたふれる樣に横になつた。薄い灯火がぼんやりと流れた、我が寢姿のあはれさがしみ〴〵と胸に來る、其胸は熱かつた。ぐら〳〵と目がくらんで來ると、腦は生腥いあたゝかいものに壓されて、全神經は痲痺して了つた。唇がわな〳〵と震へる、嚙んでも嚙んでも眞紅の血が流れる迄嚙んでも、痲痺し切つた神經は、只腦をしつかりと壓へ付けて居るものゝ、不思議な力にあらゆる抵抗力を失つて、只其力に動かさるゝまゝ、震へに震へわなゝいて居つた。風は此薄い灯火の光と、其中の若い女の全身を投げ出したあらゆる惱みとの一重外を、大きくかすつて吹きに吹いた。

……夜が明けて風がやんだ、けろりとした空のもとに暖い太陽の光が流れた。眠足りない夜の勞れに、ぐつたりとえんの柱に倚つて、ぼんやり鳥の聲を夢の樣に聞いて居つた、そして時々菜の花の強い匂ひを思ひ出しては、をのゝいて醒まされてゐた。

*　*　*　*　*　*

曾てゞ有つた、あなたは何故そんなに物を怖れるのです「あなたのからだはあなたの物では有りませんか

思ふまゝにふるまつてごらんなさい」と言ふ聲が聞える、ほんとにさうだつた！燃え立つやうにかう思つて左襟して髪を亂して一さんに廣い野山に走つてあらゆるものに强いく〜刺戟を求めたかつた。自分で自分を引裂いて流した血汐ではまだ足りない、打つてくれ、力一ぱい痛いく〜眞紅の血のほとばしるまで……きず付けられた痛さに泣きたい！こんな刄をふむ樣な鋭心にあへいだ時も有つた。

今再び、「何故にあなたは物に怖れるのですか」と繰りかへして言ふ聲が聞える、私は積み上げた赤煉瓦のいやな塀によつて「生る爲に」と答へて涙をこぼした。

* * * * *

あなた自身一番近い文句を書いてごらんなさいと言はれゝば「こゝろ悲し、こゝろさびし」「こゝろ、すさめり」「こゝろ、いためり」と書きたい。

○○子樣、此こゝろのまゝをあげたい、投げだしてゐる此心を、○さん、放たれんとして放たれず放たれざるうちにゐて放たれたい……のがれたい！としてゐる此私をあはれんで下さいますか、毎日泪の日を過してゐますこの泪は外に向つて流れないで内に向つてしみぐ〜と流れます、無光明！何んと意味深い文字でせう、無光明、たゞこれを目あてに私はどこまでもため息をつき乍らたどるのだらうか。

……女同志の手紙もかういふ樣になりました、あゝ!!

あゝ!!世の中は變つた、女も變つた!!

どこまでも行け！

* * * * *

梅はまだ咲かなかつたがどことなく春らしい暖さが流れて道にはしめやかな埃もあがつてゐた。

と或る大通りの磨きこんだ大ガラスに美しい幻、ハイカラな花店の前に立つた女學生二人「シネンシスよ」「ヒヤシンスももう咲いたのね」……二人共黒くはないがサラ〜と如何にも心地よい髪に眞紅のリボンがよく似合つてゐた、……愛すべき名、女學生よ!!と私は心にかう、言つてじつと見てゐた。

* * * * *

空を翔る鳥にも途がある、何故女の歩く途がついてゐないでせう、新しい女の歩く途が……。

私の考は壞されて行く、私の歩く途は何うなつて行くのでせう、私にも分らない、とんでもない違つた途へ歩いて來たとも思ひませんが、それでも此が私の歩く途であらうかと云ふことを考へてみる。

木下夫人を弔ふ

寺田よし子

更け行く夜に只一人、薄暗いランプの影にわが寫眞帖を繰返し〳〵見もてゆくうち、ふと眼についたのは今は世に亡き木下氏の夫人のお姿、ありし〳〵と在すが如き面影を見つめてゐると、しらず〳〵熱涙がはらはらと疊の上に落るのであつた。

あゝ思ひ出せば昨年の十二月七日の夜、私は夫人にお目にかゝつた、其時夫人は少し氣分が宜いと仰りながら、人は第一健康でなければならぬ、斯うして病氣になつてゐると、表を通る車の響や、新聞配達の鈴の音を聞いてさへ、わが身の病んでゐるのが悲しく不甲斐なく思はれて、堪へられませんと、しみ〴〵仰つた。何うしても此のまゝ死にたくはない、生きて再び夫や我が子の爲に盡くすだけは盡くしたいと繰返して言はれた。

病める身とはいへ、美しいお眼には輝きの色溢れて、淋しい口元に笑を湛へられながら、いつになく私をお留めになつて、十時過ぐる頃までもお話をつゞけられた。

今、思へば、それが最後のお別れであつた、其後再び三度御見舞申上ても、醫師の忠告で一切面會謝絶と云ふことであつた。

佳人薄命の例に洩れず、私がお慕ひ申す木下夫人は去る四月十七日、散りゆく花と共にあへなく此世を辭されたのであつた。

長くも、短くも、人間の生命は天壽なりとは云へ、夫人が二十九歳にして逝かれたのは餘りに短い一生であつた。母としても若く、妻としても若く、女としても若かつた夫人は、永久に若い魂を抱いて歸らぬ人となられたのである。

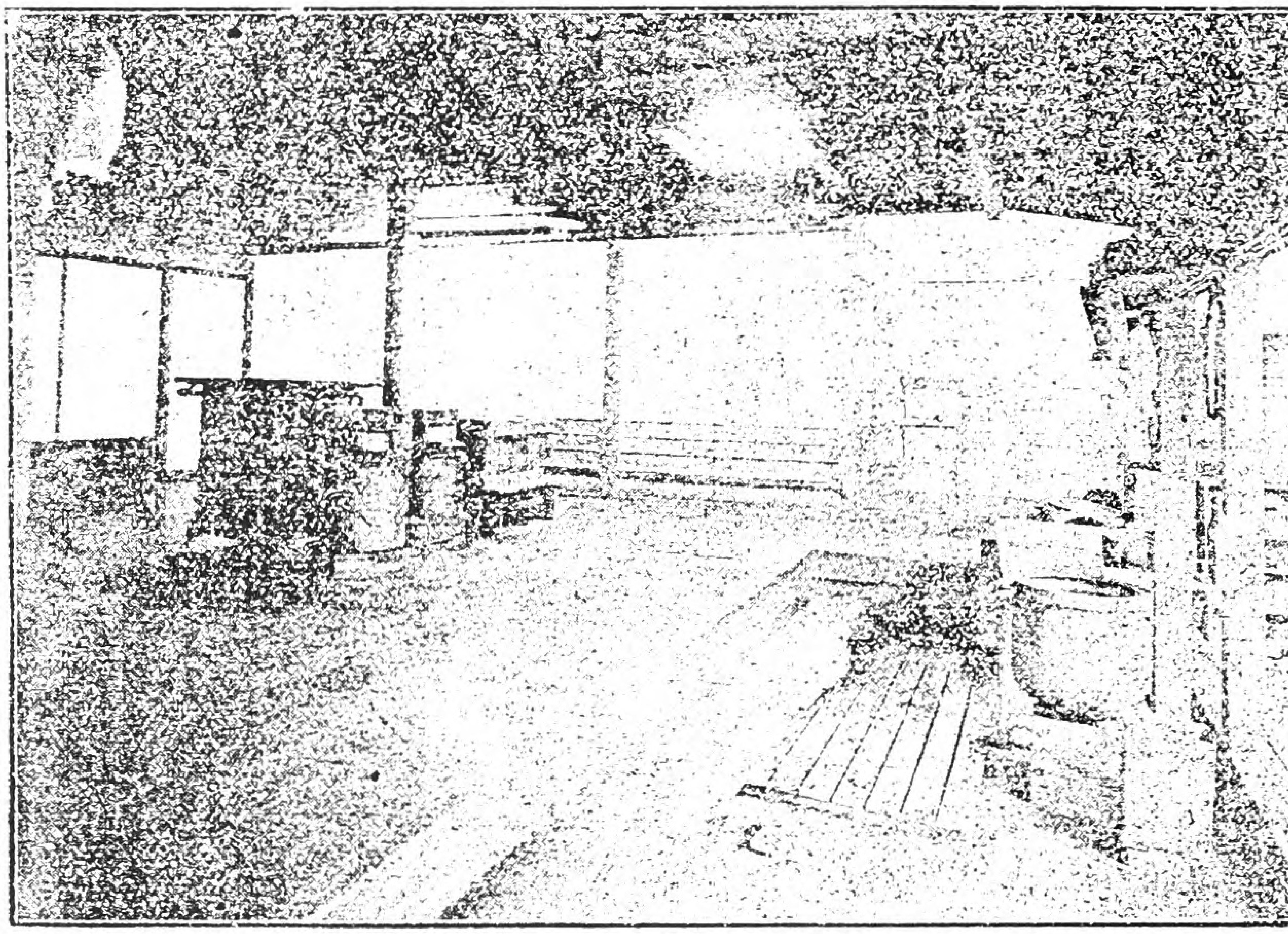
あゝそれにしても、木下夫人の一生は、夢のやうに美しいものであつた。一點の汚濁もない、一點の曇もない、實に女として敬仰するに餘ある方であつた。其性情は極く素直に、ひがみや、猜みの心は微塵も持つてゐられなかつた、純潔にして、充實した生活をなされたと思ふ。

私に筆の自由が利いたら、夫人の心持を能く傳へたいと思ふが、それもかなはぬ、たゞ徒らに悲み、傷ん

で、ありし世のお話の節々、お行ひの断片を思ひうかべては、其お人がらを忍び、而かも、もう夫人は世に在さぬと思ふたび、涙はとめどなく流れ落ちるのである。

夫人に一人の愛女がある、名を恵美子さまと云ふ、あゝこれこそ夫人が生きた形見、眼のすゞしさ、口もとのしまりたる、夫人に能く似かよひ玉ひて、まだ漸う四つの頑是なさ、アゝさん、アゝさんと亡き母を慕ひ、何處へ行かれたともわきまへぬ幼兒の、慕ひ廻るさまを見ては、涙より外に言葉もない。

他人でさへ涙こぼるゝもの況して御良人の君の御胸の中は如何あらう、推し測るだに私の胸は板のやうになるのである。



高橋義雄氏臺所

あはれ花散り、春去りて、世はほとゝぎす鳴くと云ふ青葉の頃となつた。日は一日〳〵と去つてゆく、歸らぬ人は何處に遠ざかつて行くのであらう。折しも机の上の一輪瓶に挿て置いた白百合の花を亡き夫人の心ともよそへて寫眞を其下に立て、つく〴〵眺めて在りし世のことゞもを思ひ浮べ、せめては我獨りの心の手向に、夜を更かすのであつた。

人間の生命と食物

澤田順次郎

(中)毒素と植物

植物にも毒を有するものが多くあります。例へばキンパウゲ（ウマノアシガタ）、ドクウツギ、シキミ、テフセンアサガホ（キチガヒナスビ）、タウゴマ、アセビ、タカトウダイ、クサノワウ、ヘビノダイバチ、ヒガンバナ（テンガイバナ）等の類です。野邊の草摘みに誤つて毒草を摘み取り、之れを食べて中毒した例が多くあります。特に注意しなければならんのは有毒蕈類で、クマベラ、ハヘトリタケ、モミヂタケ、ウスダケ等の如きは、食用蕈類と誤り易いから、爲に一命を損することがあります。

食物を調理し、或は之れを貯ふる爲に用ふる器具も、亦其の品質に因つて有毒となることがあります。例へば銅、眞鍮、青銅等にて造れる器物は、所謂綠靑を生じて大害を與ふるが如きです。亞鉛製の器物も長く食物を入れて置きますと、急性又は慢性の中毒を發することがあります。鉛で拵らへた器物は酸化して鹽類となり、特に鉛管にて水を引くときは鉛分が溶解して甚だ危險です。木製の食器は安全ですけれども、是れは亦不潔となり易い失があります。であるから食器は總べて陶器若くは硝子にて造れるものを採用するがいいです。

食事の際は能く咀嚼で、急ぐのは宜しくありません。分量は必ずしも節減するに及びませんけれども、食後直ちに運動することは嚴禁しなくてはなりません。是れ消化に要する血液を奪ふて、消化器を害すること大なるが故です。之れと同理にて、食後直ちに精神を勞することも避けなくてはなりません。勞働者は比較的胃病患者多く、學生に神經衰弱症の多いのは、食後の不注意に因ると謂ふも誣

言にあらずです。
食物は亦年齢、體質及び性に依つて擇ぶところなくてはなりません。幼年及び少年時代は所謂成長時期で新陳代謝の機能が最も盛んであるから、食量を減少するときは、營養不良となりて、十分に發育することが出來なくなります。老人の暴食も亦甚だ害があります。性別としては男子は蛋白質(肉類)を好み、女子は含水炭素類(澱粉質)を嗜みます。猶に鰹節婦人にお薩、何うでもそれは體質の然らしむるところです。
成年者の一日に食する分量及び其の食素の割合は、人々に依つて異なりますが、大要は次ぎの如くであります。

(下)婦人と消化力

食素	安靜者(男)	中等勞働者(男)	(女)	强勞働者(男)
蛋白質	二三瓦	二七瓦	二〇瓦	三三瓦
脂肪	五	五	四	八
含水炭素	一〇三	一三八	一〇二	一三三
總計	一三一	一七〇	一二六	一七四

右の表に據れば、强勞働時と安靜時とに於ける食物の分量は、一三三と一〇〇との比です。又中等勞働に於ける男女の食量は、一三五と一〇〇との比です。婦人の食量の男子より寡ないのは之れで分ります。
食量の上から言へば、女子の胃は男子のそれより小なる樣に思はれますが、事實は之れに反對して居ります。卽ち女子の胃は生れから男子の胃より大きく、且つ消化も速かです。小兒に就いて言へば、女兒は男兒よりも早く空腹を感じます、それは孤兒院などでは三度の食事も、女兒には間食を與ふる必要があると云ふことです。前に言ふた如く女子の蛋白質よりも澱粉質類を嗜食するのは、脂肪形成の爲で、女子の粗食に堪へる所以です。然るに脂肪が分解すれば、溫を發生しますから、女子は男子よりも體溫が高くあります。又女子の肥胖は脂肪から來り、脂肪の增加は赤血球の減少に原因するのですから、女子の脂肪は生殖機能の廢絕後、或は月經閉止後に來るが常です。女子の熱病に對する抵抗力の弱いのは、脂肪が多い爲です。肥胖を防ぐには、食量を減じ、含水炭素類の代りに蛋白質の方を多くして、運動を能くし、日に三四回づゝ深呼吸を行ふがいゝです。(完)



女の勝利

（妹に送つた書簡二通）

水野葉舟

四月二日。

今朝も新聞を見て居ると、何處かの女學校の先生が何時もの定りきつた御教訓を麗々しく話して居た。「此頃は女の學生が、又華美に流れて來た。」と言ふ冒頭で、持ちものが如何の、衣服が如何のと、述べてあつた。さう言ふ事は、僕等のにさへ耳について、うるさいやうな氣がされる。當の若い女の身であつたら、尚ほ聞き飽きた事だらう。こんな風に新聞や雜誌にたまに書いてあるのを讀むだけの事では無くつて、もつと、種々な方面から、種々な言葉や、方法で、攻めたてられる事なのだらう。

それでも、まだ東京に居るものは、それは、餘程寛大だ。さう言ふ意見が、實際には意外に權威がないんだからな。何の家庭でも、夫々家庭の人の意見と言ふものが、多少はあつて、さう、外から言つた言葉位では何ともなりはしない。又、先生の方でも、自分達の言ふ事がどの位の反響を持つて居るか位は、大抵、承知して居るんだから、外見には、何とか、彼とか言はれながらにも、自由な處がある。そこに行くと田舍の人は氣の毒だ。

まあそんな事は二の次だ。僕はこの「此頃又、女の學生が華美に流れて來た。」と言ふ言葉について大に賛成の意を表し度いと思つてるんだ。

僕だつてまだ若い男だ。道を歩いて居ると、よく女の事が目に付くさ。それは、種々な姿が目に付くさ。だが、隨分たまらない程變なのが多いではないか。そ

れはずつと傍に倚つて見たら、衣服でも、ショールでも、指にはまつてるものでも、頭のものでも、それは大變な効能のあるものがあるんだらうが、如何にも、如何見ても、その御本人を綺麗だと思はせる譯には行かない事が多いね。



僕はさう言ふ點から、その女學校の先生の言葉に衷心、賛成の意を表し度いと思ふんだ。此頃は――それでも、だん〳〵よい方になつて行くんだらう……だらうかもしれないが、實に女がお化粧をするのに、調和と言ふものが無いね。それはまあ尤な譯だ。何しろ、昔だつたら、世間が一體にちやんと調和が出來て居た。阿母さんに成る人は、極く狹い範圍の中で、娘の爲めに選擇をしてやればいゝんだし、間違つても、猿の着る衣服を娘に着せるやうな事は無かつたらうからね。色彩だつて僅ばかりのものしか無いし、習慣はちやんと極つてるし……娘の方だつて樂だつたらうよ。お儀式のやうな髪を結つて、極つた頃にお嫁入りをして、まあ、自分で何かしようと思ふ事は、その狹い中での考へだつたらうからね。

その昔育ちの人が阿母さんになつて、それが、俄にこの新しい世界に、出逢したのだ。目の前には種々な美しい色彩、珍らしいもの、便利なもの、何だか價値のありさうなものが、ごちや〱と目の前に並べられた。あれもいゝ。あのヱールと言ふものも、妙な流行物だが、あれも一つ買つて置き度い。西洋髮に結ふ時にはあんな櫛が必要だ。やれ、此頃は何が流行る……そんな風で、目まぐろしく氣を付けて居るんだらうがその高いお金を出して買つたもので、お化粧をして居る人は、衣服は衣服、帶は帶、頭のものは頭の物と、皆が別々にその人の身體に止つて、くッついて居るやうな氣がするね。

その何とも知れない姿で、得意さうに人の前を歩いて居るのを見ると、思はずあッと言ひ度くなつてしまふね。第一、氣にくはないのは、そんなに美しくしよう〱と氣をもんでる人が、何て言ふんだらう。その顏は！……いゝえ、顏が美しく生れて來て居ないから如何と言ふんぢや無いんだ。人形が衣服を着て居るやうに、キヨトンとした目付をして、何處かに、自分のお化粧に氣をとられて、氣ぬけがしたやうに成つてるぢや無いか。

僕はそんな女の人を見ると、がつかりしてしまふよ。だから、お止しなさいつて言ふんだ。やたらに人眞似をして、あれもこれも身體につけて見度くなるのは、無駄な事だ。そんな事をして、阿父さんの折角汗水をたらしたお金を煙にするのは、勿體ないつて言ふんだ。女學校の先生が、口のすッぱくなる程、言つてるのは尤もだ。そんなけちな、物を知らないみえぼうは、實にみッともないよ。お前なんかも、あんなお化粧は一切止しにした方がいゝよ。本當だよ！

二

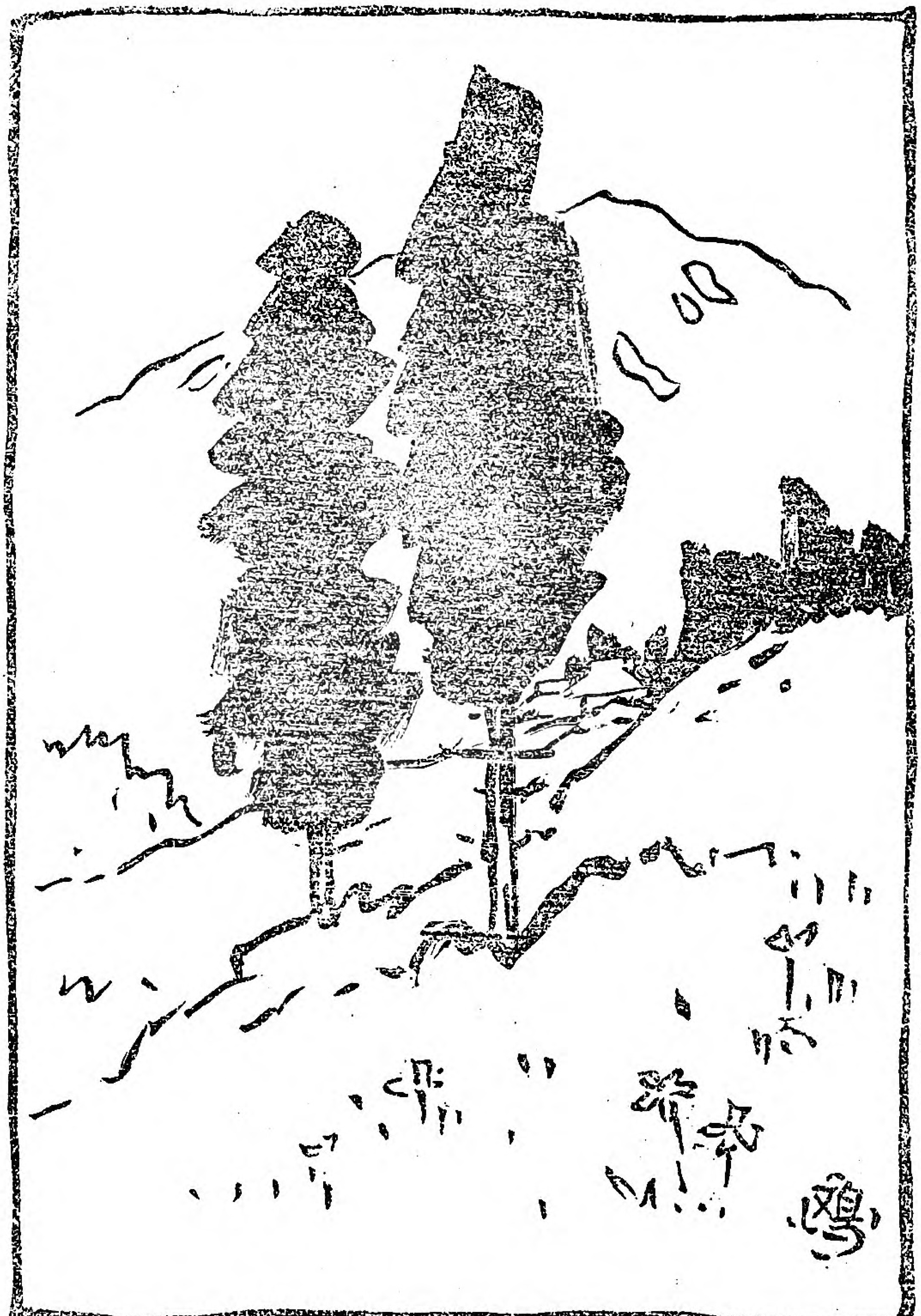
四月四日。

折返して、大變なお小言を頂戴したもんだ。澪ちやん、お前のふくれた顏が、そつくら僕の前に出て來たやうだぜ。隨分、いゝお顏ですね。あんまりそんな顏をすると、鼻が曲つてしまつて、今に、お嫁に行かれ

なくなつちまふせ。

「兄さん、口つてものは（いゝえ、筆つてものは）重寶なものね。平生は女は美しくなくつやいけないつてあんなに言つてる人が、こんなにも、雜作も無く勝手な事が、おつしやれるんですかね。兄さん何か野心でも、お出來でしたの？……何處かの女學校の先生にでも、おなりなさらうつていふの！……」有難う！……女つて言ふものは、中々氣の早いもんだ。それでは、お前なんか生きた無線電信だ

あゝさう〳〵千里眼になるといゝや。



僕は全く、平生言つてる通り女つて者は綺麗でなくつちや困ると思ふよ。それてこそ夢寐の間にも、女が綺麗でなくつちや困る事を思つて居ますよ。だから、女學校の先生の言つた言葉に賛成したんだ。

「兄さんはそんなに言ひなさるけれども、女學校の先生は私達を黒坊にしようと思つてなさるんですよ。」

成程さうかな。とにかくそんなに不平を言ふのなら、一昨日の手紙をも一度讀み返して見て御覽。僕は、如何な心持で、女學校の先生に贊成したか。

それはお前の言ふ通りだ。今の女學校の先生は、若い女を、煤煙で燻らして、黒坊にでも仕立て上げなくつちや、所謂、勤儉、質素の主旨にもとるものとでも思つて居らつしやるやうだ。かあいさうなのは女の學生さね。何でも彼でも、勞働者か何ぞのやうに、汚なく、煤ぼけて、武者振り付いたやうな顔付をしながらあの單純な中學教育位な學問をして居ないと、順良では無いと言はれるんだ。折かく、心を廣々と持つて、自分の身體の周圍、心の周圍を見ようとでもすると、すぐ封じられてしまふんだものね。お氣の毒なわけさ。

だが、そんな事は又、今度の次に書いてもいゝ。女は――男も勿論の事だ――美しくなくつちやいけない出來るだけの智惠をしぼつて、工夫をこらして、美しくならうとして欲いものだ。人間は少くとも、現在よりも、少しでも高等なものに成らうとして努力して居るではないか。

で、僕は斯う思つてるんだ。美しいつて事は、きらびやかにするつて言ふ事とは、全く性質が違つてるんだ。第一に、この身體の皮膚の色からしてだね。營養の事も美しい上での大きな要件だらう。それから、この身體を飾ると言つても、趣味が必要だね。一寸した處までに、用意の行き屆いたたしなみも必用だらう。ものの配合や、調和と言ふ事を考へるだけの鑑識眼も入るだらう？。それよりも、御本尊樣の御自分と言ふものを穴のあく程見て、批評しても見なくつちやね。自分がその周圍の人に如何言ふ感じを起させるか、その事も研究してほしいやね。そら、顔の表情、ものゝ言ひ方、身體の表情……人間の美しいと言ふ事は、お雛樣のやうな、人形のやうな顔ばかりが綺麗に片付いて居たつて駄目の皮さ。

この點から考へて見たら、此間の女學校の先生の言ひぐさなんぞは、あれは考へも何にも無い人の言ひ艸さ。澪ちやんがふくれる程の値のある言葉でも無いのさ

だから、お前なんぞも、せい〴〵お化粧をおしよ。綺麗だ、如何もあの人に一度逢つたら、快い心持がした、何だか懐しい美しい人だと思はれる、お孃さんにおなりなさい。そこが女の一番大きい勝利だよ。

もし、こんな話を聞いて、何處かそこらのミツシヨンのオールミスかなんぞが、冷笑したら、そんな萎びた杏の實はたべられませんと言つておやり！さよなら

口惡のMちやんから

誌友會感想

筆子

△雨上りの上野の青葉は美しかつた。

△私は全速力で馳けつけたけれど、もう遲かつた。とお琴の音がする、席上では、奈良朝時代とでも云つたお服裝を遊ばした格幅の善い方が、朗かな御調べ………。鼓村先生だなと私は直ぐ察した。

△河井先生に御挨拶しやう、夜雨先生はと思ふけれど、しんとした席上は、暫く梯子段の下に屈まつて控へるのやむを得なかつた。

△幹事の森に遲參しちや可けませんね、と山田さんから第一着の痛棒を頂戴した。

△一曲が終ると、四邊は流石にざわめき立つ、春の花園のやうな、あたたかさ美しさ、すると花の一人の高島田が、しとやかに立上つて、鼓村先生のお琴を採上て、あちらへはこんだ、紫のお羽織色彩美はしい古模樣の御半襟ーゴールドチエーン、萬壽子樣だつた、それがきつかけに一年ぶりでなつかしい誌友の方々と御目にかゝる事が出來た。

△あれ、あれが内藤千代子樣ですよ、と聞いた時びつくりして眼を見張つた、千代子樣には、想像があり、豫想があり、斷定がある、私の友の一人が二十五越した方と云つたのは、見事はづれたばかりか、千代子樣にお氣の毒である、私が最初緣側で透見した時は島田とふくらかな頰と、そしてオリーブのお召に高く黑地に紅入の御帶を結ばれた端しか見えなかつた。

△此日私は一向無能力であつた、たゞうろつくばかりで、さぞ幹事の皆樣には御邪魔な事であつたらう……長曾我部樣がこちらへと仰るので御一緒に席のお終ひで、義太夫を聞いた、其時よく千代子樣を拜見した、其後誌友でない局外の友に、千代子樣におめにかゝつた事を話したら、お頭の先からお足迄たづねられた、で一々敎へてやつたら、それぢや矢張り近代的の女性なのねといつた、近代的の女が近代的の文をかく別に不思議はないのだけれど………。

△今度の會は先ほどごたつかない樣である、けれど私は、折角お集りになつた皆樣が御懇意の方とばかり御話なさるほか、たゞ御行儀よく餘興を見ていらつしやるのを、見受けた。

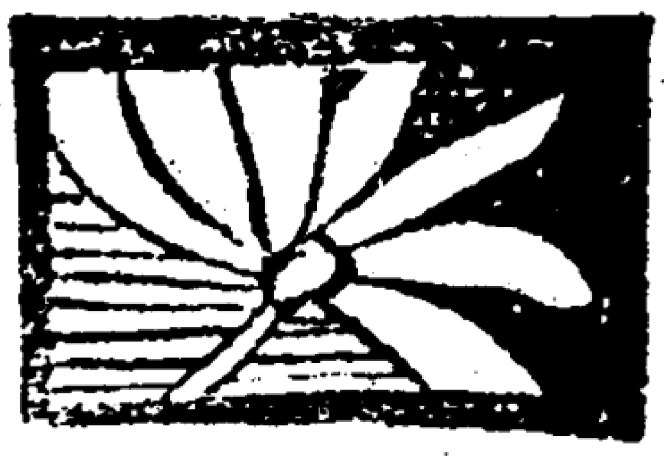
△山田樣は大變意氣にお成りなすつた、とは異口同音……この前の會には紫の女が多かつたと、あつた、今度は銀杏返しが大分多くを占めてゐる、そして夏近い故か誰方のおつくりもあつさりと、お品の善い方もあれば、本當に意氣な方もあつた、島田は貴女と私と二人きりですねえと萬壽子樣が千代子さんに笑ひながら仰つた。

△一時間毎に鐘樓で鐘がなる、まだ少さい時分よく大佛樣のまはりを廻つて、歡樂のさなかにこの響を聞いたものだが、近頃になつて、それと同じな心持を得たのは、はじめてゞあつた、不忍池畔を陰する青葉若葉は、いくらか雨氣を含んでしつとりと、何だか忍ケ岡の樣な氣がしてならぬと江森さんが仰る、さうですとも昨年の快樂がまた復興したのだもの、何にもかも同一に見えるは尤もだと思ふ。

△散會した。公園は電燈に色彩られた、私等は春の夜の夢みた心地で、第二の記念なる東叡の道を歩るいた、恒子樣菊子樣萬壽子樣はずうつと賑はしい廣小路へとお急ぎになるけれど私は獨り暗い坂を下りて、淋しい根津へ歸らねばならない、大きな葉櫻が、かさ〳〵と揺れて、眠つた樣に捨石が横はつてゐる、私の影法師はいつまでも動かなかつた、さよなら、お大切に、隨分御機嫌よう、雛子さん、さよなら……。もう遠くなつた黑い影が振返つた、夜の空氣にふれてお聲が、しんと胸にひゞく。たのしさと、溫い情に別れるの刹那の思ひ、私はいろんな空想をしながら、辨天堂の燈火を見ながら「蛇ケふところ」をすぎた。

快晴

醉茗





空論と俗論

世の所謂婦人問題を論ずるものは、多くは空論か、然うでなければ俗論が多い。誰でも解してゐるやうなことを右から云つたり、左から云つたりしてゐるだけで、其間に優れて驚くやうな説も見當らない。對象が婦人と云ふだけに誰しも一目拵へて物を云つてゐるやうで、煮え切らないこと夥しい。其處が婦人問題だと皮肉を云へば、それまでだが、未來の聰明なる婦人を養はんが爲には、婦人問題を論ずる者が餘りに空漠すぎると思ふ。

生活問題

婦人問題にせよ、男子問題にせよ、伴つて起る根本問題は生活と云ふことである。最近の生活狀態は社會の上下を通じて、他に何事をも考へ得させぬまでに窘迫しつゝある。生活の壓迫は、惹いて人道の壓迫となつてゐる、だから人間生活の狀態が何う云ふ風に變化して來てゐるかといふことを、能く研究した上で、それから來てゐる社會全般の弊害とも云ふべきものを指摘せねばならぬ。女子墮落の實狀なども、多くは此の生活の壓迫から來てゐる、誘惑は其處につけ込む一つの手段であつて、偶發的でない、何處かしら大いなる陷穽があつて、それに逐ひ落されるのであらうと思ふ。

色彩と音樂

女は色彩と音樂だと云ふ、洵に其服粧は色彩美にかゞやき其表情は音樂的である。色彩と音樂は藝術なり、女が藝術的興味の的となるのは此所以であらう。色彩を除き、音樂を除けば女性はない、今、世界の婦人は段々に男性化してゆくことも事實であらう、けれど全然男性化してしまへば女性の滅亡である。女性の滅亡と云ふことが遠き未來に於てあるか、ないか、そんなことは知らぬが、吾等の生きてゐる間は、男女兩性の爲に、人類の興味の爲に、藝術の爲に、美しき女性の世に存在すべきことを願ふ。

睨まれたる雑誌

『女子文壇』と云ふ雜誌は世間から睨まれるべき性質を有つてゐる。自由、破壊、解放などを唱へる女が集つて來る雜誌だから、自然危險視されるのであらう。けれども女といふものを家庭の隅へおしこめて、小さくなつて居よと云つても、然うは出來ない世の中になつたのだから、現れやうとするものには相當の機關を與へてやらねばならぬ。開南丸は南洋の氷壁に突進し、フアルマン式は所澤の中天に飛ぶ時代に、『女子文壇』が何程の冒險を爲すであらう。輕佻浮華の態度は愼まねばならぬけれど、自他ともに少しでも良く活き、多く働き、多くの事業をしたいと思ふ世の中に於て、臆病風にのみ吹かれて居ては、生き甲斐のないつまらぬことだと思ふ。斯う云ふと女はクリツとなり易いから自分の實力を省みず何か新しい天地でも拓けたやうに思つて飛出す恐れがあると云ふ人もあるであらうが、成程其恐れもある。けれども我等の唱ふる處は無意義の煽動でない、意義ある誘導である、現はれるべき自信のある者は現れよと云ふので、人類進歩の上から見て、尤も當然なる運動である。我等は斯く多望の地位に立つてゐると共に、又多難の地位に立つてゐる。今の若き婦人諸君は果して吾等の意を了會して、愼重に、將た堅固に、動くべきところに動いてくれるであらうか、徒らなる動搖に自己を沒却することはなからうか、頗る懸念に堪へぬのである。

世間の價値

今の世の中ほど秘密の少い世の中はない、大抵の事は隱されずに暴露されてゐる。それだけ世間と云ふものゝ價値が下つたやうに思はれるけれど、決して然うではない。昔は隱してあつたものを、今開いてみせるやうになつたゞけで世間と云ふものゝ價値は古往今來少しも變りはない、世間を知るほど、世間を尊重する念を薄くするのは、要するに自己を尊重せざる者である。

若し今の新しい女の中に、世間を尊重しないやうな傾向がありとすれば、矢張一つの誤りであらう、尤も私の謂ふ世間とは價値を認めた世間である。



繪の東京（三）

月島の渡し

荒井隨方

古い船……だが、是に乘らぬと
何しても對岸へは到けぬでせう。
此儘流れて行くのならば
左様！あなたと一所に行くのならば
眞赤に日の沒る水つゞき……
極の限までも乘つてゐませう。



誌友會席上に於て

森田草平

此間河井さんが見えられて、今度の女子文壇の誌友會に出て、何か話をしてくれとのお話があつた。ちよつと出てさへくれたら何んなにか宜いと云ふお話であつたので、初めは座興から、とう／＼此んな所へ出て參りましたが、ほんとうに五分間くらゐの短いお話をします。

元來斯う云ふ場所で話をしまするのは、ほんとうのかはきりで、自分ながらまづいと思ひます。何んなに話がまづいかは、今直ぐにお分りになるだらうと思ひますが、兎に角はじめます。

最初河井さんからは、何か文藝の話をしてくれよとのことでしたが、私は目下つまらぬ作をして居りますし、何うも文藝に就いては話したくない、そんな話をする興味がない。それで私は目下私の考へて居ることをお話したいと思ふ。

世の中には、自分にはそんなことは言つくして了つて、自分には何の興味もないことで、聽く人にのみ興味があり、聞く人の爲になる話をすることの上手な人がありますが、私にはそんなことは出來ない、自分の問題でなければ、何うも話をする氣分になれぬ。それで此處においでになる方の中で、何人か私と同じやうな心持の方が、一人でもおいでになつて、私の話に同意して下されば、それで滿足しませう。或は然ういふ方が一人もないかも知れません、其結果、私は遂に一人しやべりをしたことになるかも知れませんが、それでも仕方がない。



それほど勿體つける話でもないのですが、そんなことでも言出さなければ、話が初められません。

或る人が今日ほど宗教的な、また哲學的な時代はないと言ひました。此はちよいと聞くと、をかしいやうに思はれますが、一面の眞理のあることだと思ひます。今日は基督が説教して廻つた時代、また親鸞、法然などの聖僧が説教をして廻つた時代と同じやうに、或はそれに勝つた宗教的意識の旺盛な時代だともいへる。成程今日は我等は信仰の標的を失つた、併し然う云ふ時代といふものは、信仰が固定した時代、即ち單にお役目に經を讀み、お役目に佛事を營み、それで濟んでゐた時代に比べたならば、今の時代は何れ程宗教的意識が旺盛であらうかと謂ふことが出來やう。哲學も其通りで、我等の時代は凡ての哲學を失つた時代である。此處に謂ふ哲學とは形而上學のことで、本來の哲學と云ふものは此形而上學の外にない。今、大學で教へて居る心理學とか、論理學とか云ふものは、哲學とは云へない。元來哲學史と云ふものは、哲學の滅びて行く歴史を書いたもので、或る一人が起つて、一生かゝつて漸く或る哲學の體系を建てると、次の時代には次の人が出て來て、それを破壞して了ふ。また新に建てると、また次の人が破壞してしまふ、而して最後に、凡ての哲學が打ちこはされて了つた。こんな悲慘な歴史も滅多にない、吾等は悲壯な感を以て哲學史を讀んで居た。而して今の時代はつまり懷疑の時代に入つた、惡い意味の懷疑の時代は昔から哲學のない時代であつたが、善い意味の懷疑の時代は、少くとも哲學的意識の最も旺盛な時代と謂はなければならぬ。

此二つは只次にお話することの前提として申したので、世間では能く今日を墮落した時代だといひ、或は倫理的意識の衰へた時代だと云ひますが、果して然うであらうか。成程我等は生活の標的を失つた、何事をするにも一生懸命になれない、心に空虚を感じてゐる。併し斯う云ふ時代は、前と同じ筆法を用ゐたら、これほど道德的な時代はない、今日ほど倫理的意識の高潮に達した時代はないともいはれやう。我等は何一つ無

意識には出來なくなつた、一々反省する、その倫理的價値を考へずには何事も出來ないやうになつた。畢竟我等は自意識が强くなつた、我等の眼はさめた。只今淨瑠璃の千代萩が餘興に出たやうであるが、我等はもはや彼の政岡のやうに、また彼の千松のやうに、主人の爲めとさへ云へば、何の反省もなく、歸するが如く死ぬことは出來なくなつた。然うするには我等の自意識は餘りに强い。併しあゝいふやうな充實した生活と云ふものは、實に羨ましい、我等の空虛な目的のないあはれな生活に比べて、千松の短い一生は何のくらゐ意義のあるものであらう、



出來るなら我等もあゝなりたい世の中には婦人に覺醒せよ眼をさませよといふ聲もあるやうだが、何處に覺醒する必要があるか。若し婦人が昔の女大學に敎へられたやうな生活に甘んじて只夫を天として仕へ、何の不足もなく、何の不滿もなく、一生を終ることが出來たら、これくらゐ羨ましいことはない。また此れ位充實した生活もないでせう。何の必要があつて我等は覺醒するか、我等が眼さめたのは決して自ら好んで眼をさましたのではない、いや／＼ながら詮方なしに覺めたのである。無理やりに覺めさせられたのである此點が世の道學先生又は經世家

の間に誤解されてあるから、隨つて其等の人が對症療法として、我等の前に提供されるものが、何の意味もなくなるのである。我等は生活の標的を失つた、而して新しい標的を探りあてるまで、暗中摸索をしてゐるのである、暗夜の捨小舟の如く、砂漠に行き暮れた旅人の如く彷徨してゐるのである。此狀態は如何にもあはれな、なさけない狀態であるが、決して我等の倫理的意識が衰へたのではない。決して道德的に墮落して居るのではない。若し我等の此の心持に相應して新らしい社會組織に改めることが出來たなら、我等も此んな淋しい、たよりない生活から脫して、充實した生活に入ることが出來やうと信じてゐる。また再び政岡のやうな、千松のやうな充實した一生を送ることが出來やうと思ふ。今は所謂過渡時代で、過渡時代の犧牲と云ふものも出るであらうが、世の道學先生又は經世家は犧牲を敵だと思はず、憎い奴だと思はずに、それをいたはつて、愛撫してやつてもらひたい。其等の犧牲こそ前に云つた所謂道德的、倫理的意識の強い者どもで、只の、のらくら者とは違ふ、只の放蕩息子や、只の放縱娘とは違ふ。其等の前に古い既に權威を失つた道德をおしつけて、再び昔に返さうとするのは愚でもあり、無功でもある。何故ならば、我等は然ういふ舊い道德に從ふことが出來たら從ひたいので、わざとそれに反抗してゐるのではない。昔のやうな狀態に戻ることが出來たら、傍から注意される前に自分から歸つて行きたいので、戻りたくても戻れないのが、今の我等のみじめな狀態である。そんなことをするよりか此の高潮に達した倫理的意識に誓つて、一日も早く新しい道德、新しい社會を建設するやうに努めて貰ふのが、先見のある人々の任務でもあり、義務でもあらうと思ひます。

　それで斯う云ひ放しにしたゞけでは、何だか只破壞的なことを言つたに止まつて、少しも建設的の意思が無いやうに思はれますから、蛇足ながら、何うして其新しい道德、新しい社會に進むか、私の卑見だけでも勿論纏つたものではないが、少し述べて置きたい。

　既に我等の意識は強くなつた。自己といふものゝ意

識は、何うしても離れることは出來ない、畢竟其れは何うすることも出來ない。それならば、無理に此を抑へるよりは、寧ろ此の自意識から出立して、新しい道德に進むべきではなからうか。自意識と云ふものを、最も惡い方面の利己主義から出立しても宜い、我等は畢竟利己主義の動物である、それと同時に、正當の觀念は決して消滅するものではない、卽ち正當を守らなければ、自己が滿足しない、此の利己主義と、正當の念とをうまく權衡してゆくやうにしたら、それだけでも、社會と云ふものは充分立つてゆくだらうと思ふ。併しそれだけでは未だ何うも餘り殺風景に思はれるので、私はも一つ新しい道德の要素として、美を擧げたいと思ふ。極めて獨斷的の話であるが、我等が美を要求する、つまり美から來る快樂を求めると云ふことは是は餘程根づよいものであらうと思ふ。美しいといふことを慕つて、醜きを厭ふ、例へば犧牲の精神なども其邊から芽を出したものではなからうかと思ふ。つまり善惡の外に、美醜と云ふものをも、道德的、倫理的判斷の要素とする考へである、此等のものが發達して行けば、自愛と他愛とが遂に一致するものであると云ふやうなことに歸して、此處に新しい道德が成立ちはせぬかと思ふ。此等のことは極めて獨斷的な自分一個の考へを申述べたまでゞ、自分にも纏つた考へといふものはない。

それで今私は甚だ纏らぬことを述べたのであるが、多少でもそれと同じやうな考へを抱いてゐる方がありましたら、其人と共に再び新しい旅程に登りたいと思ひます。（完）

京都誌友會

豫告の通り五月七日に京都でも誌友會が開かれました、會場は北野の一福庵、開會は二時になりました、花人樣の文學上のお話があつてそから餘興に移りました。幸月樣のバイヲリン、次に小林てる子樣の八雲、五十鈴川、細田らん子樣がつれびき遊ばした、それから寫眞を撮りましたり、お話をしたりして、暮れるまでの時間を樂しく過しました、間々に蓄音機をやりました、來會者は二十名あまりでした、私は眼を少し患つて居まして涙がこぼれるので困ります。一寸概略だけお知らせいたして置きます。（要司村ふく報）

女子文壇誌友會の記

幹事

開會前

五月七日、女子文壇第二回誌友會が開かれた、是より前、廣く誌友の間に頒布されたプログラムに依ると、當日の順序は左の通りである。

一、開會の辭　山田邦枝子
一、挨拶　河井醉茗
一、談話　森田草平
一、談話　遠山稻子

餘興

一、箏(鈴木鼓村氏出席)
一、義太夫(菅原傳授手習鑑寺子屋の段)
一、踊(北洲)
一、常盤津
一、謠曲

頓て其日にもなると夜來の雨は、尚ほ歇まず、細雨霧の如く滿都を籠めて、會場なる上野公園韻松亭の邊りも、新樹より滴る緑の雫しめやかに、空翠流るゝが如く、凡てのものは濕潤を帶びてゐた。

午前十一時二十五分、上野驛着の汽車で常陸より横瀨夜雨氏が來た、停車場まで出迎へする者五六人。

午後正一時開會の筈であつたけれど、一時頃には未だ出席者が少い、それも道理、雨の爲に躊躇したり、途中が捗取らなかつたりして、後れる人が多いのである。

雨は殆んどあがつた、折々薄るゝ雲を透して、淡い日光を見る、露を含んだ青葉の輝きと、浮立つやうな女の着物の色彩とが相映發して、美しく光線が顫へてゐる。午後二時數分前、開會した。

開會

開會の辭は山田邦子が述べた、圓轉滑脫にして會場

に親みを加へた。これは二三分で濟んだ。
次で鈴木鼓村氏の箏曲が初められた、曲は『須布ふる山』絃聲雨三聲、忽ち二時を報ずる上野の鐘は耳もと近く響き渡つた、殷々たる鐘聲と、嘈々たる絃聲と、ハーモニーを成して、餘韻漸く消ゆる時、絃上の響爽かに若葉を渡る、會場は眞晝の寂靜に沈んで行く。
曲が濟むと、河井醉茗氏の挨拶があつた、記者の職責の大切なことに就いて一言を添へられた。



次の遠山稻子氏の談話は、妙齡の女學生に適切な注意であつたゞけ、會衆は肅然として謹聽した、女史の談話ぶりには誠實が籠つてゐたから、皆嬉しく思つたであらう。（談話の大要は巻頭に載せてある）
空が晴模樣となつたので、刻一刻と會場には人數がふゑる忽ち正面に赤毛氈を掛けた一段高い床が出來た、後ろには幕が張られた、見臺が据ゑられた、三味線が置かれた、彼方此方で『本式だわね』と私語く聲がする、愈よ此ところ義太夫の初りである。用意が大變であつた。

語る人は花はづかしき十七八の少女、藝名は豊竹東房、番組は俄に變更して千代萩御殿場となつた。

語り進んで政岡忠義の一段となり、とは云ふものゝ可愛やなの獨白のあたり、滿場水を打つたる如く、武士道に鍛はれたる犠牲の情緒に動かされて、涙ぐむ婦人を少からず見受けた

義太夫が終ると直ぐ『皆様お待ちかねの誌友の佐藤萬壽子さんの常盤津をいたします、唄の題は歌徳惠山吹』と口上宜しくあつて、拍手の間に座に着いた萬壽子さん姉妹、姉さんは三絃、妹さんは唄、僅に十一歳と聞いたが節廻しのあざやかさ、唄ひ終ると暫くは感嘆の聲に充ちた。



暫くの間も置かず、順序にあるものは着々と進行して森田草平氏起つて談話を初める、態度風采微塵も氣取つたところなく、座談でもするやうな様子で、まゝ警句を挿みながら、思想上の談話を試みた、論題は極めて眞面目なものであつた。（談話は別項に記載）

後の餘興をやる間に、寫眞を撮影した。隱れた人や洩れた人や、寫らなかつた人も少くはない。

一同、席に復するのを待つて、藤間嘉舞次の踊『北洲』があつた。名にし負ふ藤間一流のさす手引く手のしなやかさには、瞬きする間も惜しい位であつた。たゞ惜むらくは疊の上の素踊で、舞臺もなく、背景もなく、地も一人であるから、何となく引立ちかねた、若し其等が揃つて居れば、何んなに立派に見榮えがしたであらう。

幹事の一人、平塚白百合さんの新曲『熊野』は聲が美いので、皆な聞惚れた、用事最中に出たのだから隨分無理でもあつたらう、中途にして止したのは惜しかつた。

最後に鼓村氏の『嚴島詣』の演奏があつた、開會の最初には後れて來て聞き落した人もあるので、再び大喝采を博した。

時に豫定の散會時間を過ぐること約十分、此處に滯りなくプログラムの通り凡てを濟ませて、娛しき集會は閉ぢられた。

散會後

會が極めて靜肅に閉ぢられると、お鮨の折と、林檎と、お菓子とを或はオペラバツクに入れたり或はハンケチに包んだりして、それ〴〵會場を出で、三人連もあり、五人連もあり、一人と云ふのは殆ど無く、誰彼となく打連れ立つて上野の山を下りるのであつた。



佐藤萬壽子姉の常盤津

大半散じ盡くした大廣室には、電燈華やかに輝いて未だ名殘を惜んで語つてゐる誌友の誰彼が、お互に初對面もあり、久濶を敍するもあり、紹介と、名乘合とに暫くは賑はしかつた。

夜に入つて雨は名殘なく晴れ、折から十日頃の月影は上野の杜を薄らかに照らし、不忍池畔のアーク燈は、木立越しに星のやうに輝いてゐた。

＊　＊　＊

第一回の時は出席者名簿を調製して一々記入を請ふたが、今回はわざと芳名を記さなかつたから、確に幾名の出席者と云ふことは分らぬが、約百二三十名の間であ

つたらうと思ふ、午後二時過ぎに既に下足の札は百以上を數へてゐた。

終に臨んで當日の來賓諸氏、及び出席者諸君に、厚く感謝の意を表す。

尚ほ左の諸氏より誌友會の爲に、特に寄贈を忝ふした、此處に幹事一同を代表して深謝す。

▲金五圓　辰野工學博士夫人▲金五圓　江木法學博士夫人▲金貳圓　越後眞柄弘子▲林檎壹函　木下家▲金貳圓　北原十三男▲花束　城南の人▲金壹圓　中村春二▲祝電　前島優梨子

別記

☆　夕ほし

○唯もう耻しくつて夢中でございました。どちら向いても美しう光るおん眼がまばゆくて、顔のやり場がございませんの、どうしてよいか逃げて許り居りました。

○頼みに思ふ美耶樣は何處へいらつしやつてゐるのか、廊下に立つたり椽の隅に小さくなつてゐたり勿體なうございましたけれど、詩壇三星の一星、章子樣を立ン坊のお連れに願ひました。

○邦枝樣、白百合樣、貞子樣、仙子樣は目を廻はして居らつしやるのに、でも何か致して宜しいのか分りませんですの、遠山女史のお話しの濟む頃、漸く美耶樣いらしつた。

「同窓會如何なさいました？」

「三時から行くつてさう云つてやつと脱けて來ましたのよ、だけどもう行きたくないわ、夜雨先生いらつしやつてゝよ、お目に懸つていらつしやい」ですつて。

「まあ飛んでもない事を仰有る。」

と云つてゐる内に花子樣がいらしつた。

○如何しても行けと御意遊はして止みません、「先刻から三度も御催促なのですよ光榮ぢやありませんか、さあお起ちなさい。」

○私はもう泣きたくなつて了ひました。人に逢ふのは裸になれと云はれるより辛うございますのに、靜江樣、恒子樣、章子樣達、十本の柔手は私の身體を取り巻きました。絕體絕命捕虜の女は小羊のやうに手を引かれて先生のおん前に座りました。亂れた髮もその儘に袂を顔に當てゝ滑りにげて…………………。

○よろこび、羞耻、悲哀の海を、微かに流るゝ我知らぬ絕望の潮に、冷たく波うつ胸は涙すら出ませんでした。

○去年は灯火が點いてもいらしつてたといふにあのやうに早くお歸り遊ばして、柱によつた面影の失せた柱を凝とみて、我が罪のやうに悔いました。あなたは心配性ね、あまり御心配なさらない方が好い事よ、と霞町の君はいはれます。

○華やかに美しい皆樣をみる毎に、あざみのやうな、だにのやうな、合歡木のやうなわが性を、顧みず………否、呪はずに居られませぬ。

○青山へ伺つたのも、私にとつては必死の思でございました。隔てなく先生とお話し遊ばす誰彼樣が、どんなにお羨しうございましたでせう。去りし日は夢とも看過されますけれど、夢の刺激はあまりに強うございました。

○上野から歸つて、今日まで我ながら分らぬ日を送つて居ります。出席を呼ばれる毎に、西井さん、西井さん、前の友に後をむかれて驚いてハイと御返事申しますの、先生は西井さんどうかなすつたのですかつて仰有つて笑つてらつしやいます。ハッと思ふと苦しい程動悸がして……。

☆

萬壽子

▲雨あがりのしつとりした空氣に觸て私の魂はよみがへつた。上野の山は青葉に濡て活々としてゐる柔い土の香が懷しく身にしみてすがすがしう靨を包む。ある歡喜と、羞らひと、悲哀と、悔恨とに胸が顫ふ。蛇の目持つ手に力を入れて俯き乍ら歩いた

▲華かな美しい色彩！強い濃艶な活々した色彩、眼が眩む、黑い髪に、白いかざしに、薔薇色の頰に、かゞやく瞳に、紅の唇に、派手な衣裳に、若き日の誇は溢れて居る。羞らひに嬌態して微笑む美しき人々、これだけの若い女を集めたのを誇に思ふ。きちんと座つて、一ト言も云はずに皆な默つて居るけれど、何かしらかう言つて居るやうだ、靜寂でない、若い氣が室一杯に朦々と渦巻て居る、床しい女の香り、甘い囁き、私の頭は熱して來た、胸がをどる、他の幹事の方々が忙はしさうに目まぐるしく往來するのをよそにして私は二階へ昇つて了つた。

▲ひやくする廊下に凝と座つて胸を抱いた。悔恨の涙は眉毛をひたす、——弱者よ！——と叫んで冷やかに嘲笑つて見た、身をひきしめらるゝやうに淋しい。弱いからだ、強い者は平氣な顏をして居る。

幼き日の強者？あゝ榮える者は必ず滅ぶと云ふ、十一歳の時やめたまゝだ、八年、既う八年になる。何日も強いと思つたのは誤りだつた、二日前始めて三味を持つた時の情けなさ、何處に昔の面影があらう、茫然として涙も出なかつた。

▲今彈く三味の前に八年前の私を知つて呉れる人は只の一人もあるまい、居ないはうがよい、もし思ひ出をたどる人が居たなら、どんなに私を憐れむだらう、いやだ、いやだ、憐れまるゝのはいやだ、下手でいゝ、過去に小さい日の誇はある、けれど、



平塚白百合の熊野聯吟

けれど、それが今の私に何にならう？

☆

内藤千代子

△前夜來青葉若葉に雨そゝいで、ぬれ色うつくしき上野山？でも私等があの正面の石だんを上る頃には、傘も邪魔になつてコートの裾にはねの

あとをとゞむるばかり。お恥かしいが東照宮つて何處か、韻松亭も知りません、よく歌留多會の開かれるところだとはおぼえてゐますけれど。

△高い足駄をふみ返しながら、二人は歩きまはりましたの．とう／＼巡査にたづねると「韻松亭は大佛樣の……」と手をあげて敎へてくれた。女子文壇誌友會々場とある貼紙を見出した時のうれしさ、一種の誇りをおぼえて、今更のやうにおぢ／＼しながらも、玄關へ上る、受付に机をひかへておらした方は若杉樣とあとできいた。何だかもう眼がくらんぢまつて、何誰がどうだか見分も出來ませんでしたけれど『平塚樣』と呼ばれて輝くやうな姿をお現はしになつた方、思はず瞳を上げましたが、すぐ「此方へ」と御案内下さる。クリームのリボンと白茶のおみ帶、白を重ねた紋羽二重の裾さばき。思ひしにもまして美しき君よ。會場のお座敷にはもうずらりと居竝んだ誌友の君達、繽亂として艷をきそふ。友の櫻子の君はすりよつて臼井花子樣に御挨拶する、芙蓉のまなじり、丹花の唇、白面靏眉、ルイザ風の束髮にして、振をこぼるゝ時色のお袖、匂やかに笑を含んでお座をゆづつて下すつたので、櫻子樣と二人、お座蒲團の半座を分け合つて座りました。

△遠山樣のお談話は、私自分達のお話に夢中になつてゐましたからよく耳にはいりませんでした。お茶をはこんでおらした小川せん子樣「あれが夢の女樣」つて花子樣にさゝやかれて「エヽ」と云ふまにしづかに前へいらして、細い指を重ねてお名のり遊ばす、ふつくりとお羨しい樣な桃割に銀丈長、お袖の長い小豆色のお羽織、まだ肩あげさへ取つておらつしやるお肩のあたりのきやしやたちな……。

△しほらしい方、可愛い方、それは／＼いゝお眼つきをしておらつしやいますの。

△長曾我部樣が臼井樣のお傍へいらしたので、櫻子樣が袖をひく、私も御辭儀をした。物しづかなお聲しておやさしいお言葉つき。佐藤萬壽子樣は思ひきり根上りの高島田、何だか元祿風？と云ふやうな氣がしました、引詰のお下げに薄色のお羽織召した河野樣、私最初からきつとさうだと思つて……お袴はきの江森樣も、きつとかういふ方とおもつてました、一目みて直覺的にさう感じた方はやつぱりさうなのでした。一番思ひがけなかつたのが山田邦枝樣、濃いお髮をまはりの澤山出たいてふ返しに、お羽織、白いお顏、すらりと高いお背恰好、物なれたおとりなし。この日水野仙子樣も日本髮でお羽織なしで、いろ／＼斡旋なすつておらつしやいました、あの赤いおみ帶のお後姿がつよく印象にのこつて居ります。

臼井樣に、「夜雨先生は？」つて伺ふと、

「おらしてるのよ」

「まあ」ひしと櫻子樣の手を引よせた、思ひつめた氣のゆるんだ故か、何だか悲しくなつて了ひましたの。

△義太夫の千代萩。あまり大きな口を開けたり、顏をしかめたり、髮も簪もふり飛ばすばかり首をふり立てたりするのが滑稽でならなかつた。

△森田先生のおはなしは、何を有仰るのかと思つて一生懸命になつてききました。寫眞を撮すつて庭へ出た時も、私は臼井樣とならんでぼんやりしてゐました、もう立ちくたびれて氣取る事も忘れて了つて、きつと口でも開いてたかも知れない、後の方だからよかつたけれど。紅紫とりどり、レンズに向ふた百人近くの花のあつまり、道行く人も驚いたでせう。

△りんごやお餡が配られる、尾島樣の御姉妹は私等のぢき右の方におらつしやいました、妹御の千代子樣つてお美しい方。

△をどりの北洲、あざやかなおん手ぶり、面白く拜見しました、この時

までいず、まだ夜雨先生もおらつしやる事とばかり信じて居りましたのは。

△あゝ、私は戀しい〳〵月波の君にもつひにまみえずをはつたのでした、袖に顔をおほふて友の膝に縋りました。先生もあんまりな、傷めるおんたのも、誌友會のためならば、ためならば……。

△かうと知つたら早く御挨拶に出ればよかつた。たつた一目でも、あゝ先生。

△時間もせまつて、平塚様が美しい水のやうに透きとほるお聲でお歌ひ遊ばしたのも、鈴木皷村先生のお箏曲も心にはとまらずたゞワク〳〵して……、やがてしとやかに山田邦枝様が立って閉會の辭をおのべ遊ばした、追ひ立てられる様で憎らしい様な氣がした、私はいつまでも〳〵歸りたくなかつた、ならば此まゝ夜一夜語り明しても……。

△河井先生に一言お禮申下げたくあとにのこつたので、幹事の方達とも御挨拶し合つた。槇子様や筆子様や夕星様ともお話した、折から電燈が輝き初めて、片隅にあつめられた座ぶとんばかりが山の様、人散ぜし後の大廣間！

△私はまだ一度も會などへ出た事はありません故、どう云ふものか存じませんけれど、豫想外に靜肅な愼ましいあつまりで御座いました、手落なくとゝのふた會でございましたけれど、私もちつと皆様とお話がしたかつたのですわ、餘興ばかりを拜見に上つたのではございませんものを、お餡の折を頂きに上つたのでもございませんものを。

△日はすつかり暮れて了つた、私等は槇子様も菊子様も御一緒にこゝを出た、茂り合ふ若葉の梢、渡り來る夜風のそよ〳〵と髮の毛を吹く。



☆

百日紅

▼若杉はま子様　お目にかゝつた刹那直ぐ靜かなお方だと思ひました、骨細の愛くるしい御様子、服粧も餘り派手でなく、お召の格子縞〃袷白つぽい丸帯を涼しさうに結んだお姿は、丁度谷川にゆらでおる姫百合のやうでございました。あまり冴え〴〵とした表情でもありませんが、物言ひははき〳〵と、愛嬌も相應におありです、物蔭に立つて懐中から紙おしろいを出して時々お顔をおなほしなさるのを見受けました

▼服部貞子様　まだ度々お目にかゝつた譯ではありませんが、毎も男まさりのやうな方と云ふ感じがします、私は此方を見ますと、私の別懇な獨逸婦人に會つてるやうな心持がいたします。お髪は高からず低からず銀杏返しに結つて、小紋更紗に濃い牡丹色の帯を締め着物を少し短か加減に着られたスタイルは、田舍娘？

岐阜誌友會の記

幹事の一人

○東西北は稻葉山脈につゞく山ふところ、南は一面に廣々たる濃尾の平原、松の並樹街道もよその白壁もちらほらのぞいて、眼下には飛驒街道の白き道が走つてゐる。

○女子文壇誌友會々場とおくめんもなく大書したのを板にはつて靑葉のとぢた入口に立てかけた、人が少ないので一々出迎が出來ないから、こりや一つ飾りをかねて筆に物いはせ樣として、靑に赤に紫と白にそめぬいたきれいな短冊を一面につるした、さあどうぞとか、よう來て下さいましたとか、御遠慮なく、どうぞずつとこちらへ、などゝ書きたてた。

○早や二時になる、さあかるたはやめて下さいといふ、此かるたは小倉百人一首のかいてある札の裏に速製で、女子文壇第百號にのつて來た名家のうたを書いたもの。

○今山智惠子さんが開會の詞を仰有つた、やさしいお聲で、君が代の合奏がすんでから、來賓に談話を願つたけれど突然で何もないと仰有る、再三申上げても御遠慮ぶかいこと、次が幹事の談話と書いてあるけれど、皆さんがいやだ〳〵と仰有る、あんた〳〵つてつゝきなさるけれど別に腹案がたつてないから、本社から下すつた祝詞朗讀でごま化して式を終つた。

○樂屋へとんで行つて活人畫する人の髮を昔風に、元祿みたいだつて笑ひながら上げて上げた、この分を一の宮の佐分さんに當てゝあつたけれど大阪へ行くからつて斷つて來たから、河合さんにやつて頂いた、前で結んだ朱珍のおみ帶、禮姿の虎御前、並べては老いての尼姿白い衣に墨染衣、お花と珠數もつて御高祖頭巾はうす藤色ちりめんのしんなりとまゆ毛かくいていゝ尼さんだと思つた。

○次が田舍者の東京見物、靴下のそこをぬいて下の方だけ股引にした。父樣のきものを一枚と帶を一本母にかくしてそつと持ち出したのときかへて端折をした、それに赤い毛布を着た處はどんなだつたか私は眞面目で居たが幹事が冷評してふき出してしまふから忽こつちも笑へてくる、髮にこまつて男髷にゆつてあまりの毛を曲げて髷へへし込んどいた後藤さんを案内の令孃にして其つれに九つ許りのふぢちやんを後藤さんにうつるハイカラ孃にする、よかつたとはきいたがお世詞かもしれぬ。

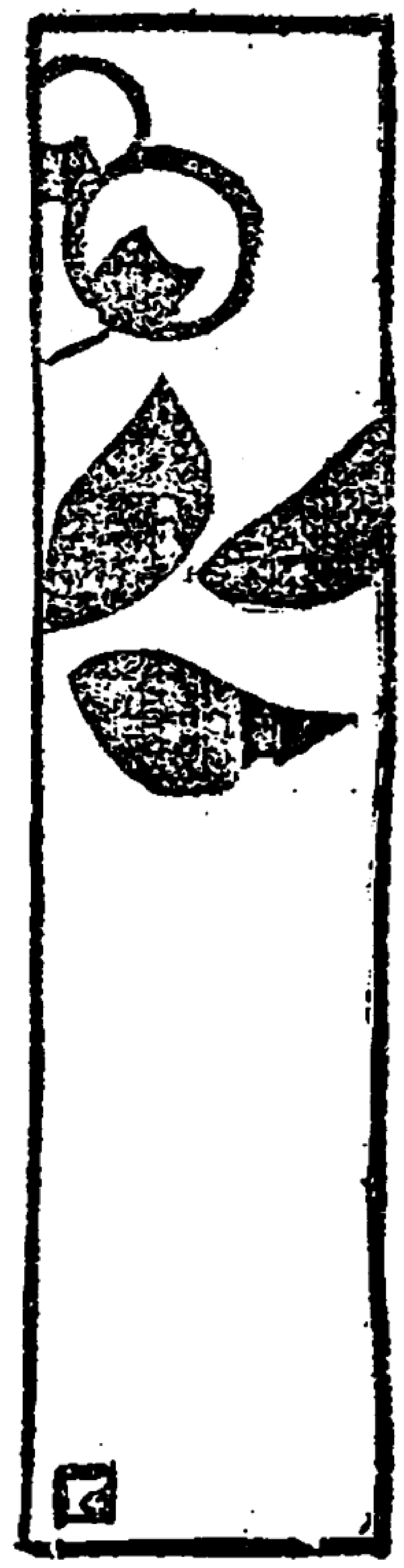
○福引が漸くすんでうどんの立喰ひやら、團子の横ぐひ、おまんぢうがおちた、夏みかんに手のしなふ孃ちやんもある、おうどんがなぜ君が代だといふ人がある、長いからだと笑ひながら、とうがらしがからすぎたつてむせ返る人、團子をとられたつて笑ふ奥さん。

○中島さんの彈琴、連獅子、日蔭狂言は確信つていふの佐野天聲さんのさきの方をぬきにしてやつた。

○散會にして後しまつにかゝる、話乍ら、今朝三五野の尼寺へお衣かりに行つて活人畫の說明にうんざりしたといふ人がある、何ぢやお衣、どうするんぢや二輪加でもやるのか、お芝居かや、いゝえ昔の人のなりをして一寸みせてすぐぬがせてしまひますの、藝題物かやつてね、つて、ほんとにしまつにいけなかつたわなんて。

○今日の樂しき會合に際して、柴田夫人は紅白のリボンを記章用に寄贈して下すつた、西濃の方田中蛙骨さんは川柳雜誌の切符五ケ月分にお金を二圓五十錢贈られた、松本寫眞師は定價を半額に勉強して下すつた、特に御禮を申上げておきます。

○出席者　田中蛙骨　柴田夫人　岬田美緒　佐藤さだ子　中島歌子　今山智惠子　村山米子　西鄉ふみ子　林はる子　林きく子　松本かつよ　河合りう子　後藤あや子　戸谷つる子　高橋はるの　後藤時子　篠田はる子　立川花子　所かずへ　篠田とみ子　棚田やす子　棚田とみ子　山田はな子　松本とし子　名和花枝　水尾華子



化粧問答

化粧研究會
婦人修容會　顧問　藤波芙蓉

化粧品店主へ　論より證據、本欄に紹介して貰ひたい、慫慂して貰ひいたといふ品物を、私の手許まで送つて下さい、私はそれを精密に實驗した上で可なりと認定したものは、何も賄賂がましい御心配を頂かずとも、化粧界のため進んで紹介の勞を採ります。折箱やネクタイを送られたが故に、その化粧品が精良だといふ論理は、野莫の私の頭には這入りません。

質問諸子へ　化粧に必要な藥劑も買つて上げられぬこともありませんし、又その藥劑で化粧料に調製して呉れとの御依頼なれば、私の時間の許す範圍に於いて御需に應じもしませうが、それには何かの方法を以て本誌の愛讀者であり又は誌友であるとの證據を添へて仰せ越し下さい、斯くするは私としての女子文壇社に對する義務であつて、同時に讀者諸子の權利を明にする所以であると思ひます。猶今後は御年齡を御書添へ下さい、それによつて藥劑の加減分量を考へねばなりませんから。

直接拙宅に御訪の方へ　これまた本誌の愛讀者たり誌友であるとの證據を御示し下されば、時間の許す限り、何時でも喜んで御目にかゝり、化粧上の御質問に應答致すことを拒みません。住所は牛込赤城下町一〇ですが、目下改築中、同東五軒町六に假宅を構へて居ります。

問　一、私は顏の割合に眼が小さくて困りますがパッチリとする化粧法はありますまいか、二、丸い鼻はドウしたら見よくなりませうか。三、夏季に日に焦けぬ簡略な法を教へて下さい。四、千代ぬれ羽は效力ありませうか、而して染めた結果、毛髮に害を及ぼすやうなことはないものでございませうか。（千葉、ちせ子）

答　一、二、詳しく博文館發行の新式化粧法中に述べて置きましたから夫れを御參考下さい。三、コールドクリーム若くはキセロールクリームを御塗りなさい。四、染髮の效力はあります、けれども其原料にフエニーレンヂアミンといふ染料を使つてありますから非衞生的の副作用あるを免れません、現に警視廳より大概今月一ぱい位で販賣を禁止さるゝ筈です。

問　一、粉白粉を幾度もクリームの上に塗つたら（塗るにあらず打つなり）氣持の惡いやうなことはありませんかしら。二、頸にもクリームを塗つて粉おしろいをつけるのですか。三、冬瓜は何處で賣つてますか。四、胡瓜を煮たものは一ケ月位腐りませんか、どの位で効めが現はれますか、胡瓜のない時分は、どうしたら宜いでせうか。（日本橋京子）

答　一、そんなことはありません。二、左様です。三、冬瓜子のことではありませんか、それなら藥店にあります、冬瓜なれば八百屋で賣つて居る筈です。四、グリセリンを三十プロ若くはサリチル酸を二プロ程入れて置けば腐りません、効能は其人の體質によつて一定して居りませぬ。御許様を存じ上げぬ私には、シカと日限をきつて保證の言を呈するわけには參りません、カラスウリを代用になさい。

問　私の髪は太くてよくふくれる髪ですが、髮尻に少々癖がありますすなほな毛に直りませんものでせうか、又スヌーダは何處で賣つて居りますか。(京都、つゆ)

答　縮毛でなく癖毛なら、京橋銀座尾張町明進堂といふ文房具店の荒川如水といふ人に、藤波から聞いたが癖毛直しを譲つて呉れと御賴みなさい、それを塗ければ直ります、スヌーダの賣所は存じません。

問　化粧の剝げぬといふコールドクリーム及びキセロールクリームは何處にて求めましたら宜しきや、化粧料や藥品の製法は、其の處方を藥屋に持參致せば調へてくれるものにや、新芽色おしろいは如何なる色の人に適するものにや。(東京、野菊)

答　キセロールは三越、丸善、白木及び兩國の紅屋にて賣つて居る筈です、コールドは目下贋物ばかりですから自製する外ありません、化粧料の調製は藥店で出來るものと出來ぬものとあります。新芽色のは如何なる色の人にも常用すべきものでありません。

問　私は女子でありながら口髯が生へて實に困りますそれを拔き取る方法を御敎示下さい。(平壤の愛讀女)

答　トルコルズマを御塗りになれば綺麗に脫毛して了ひます、けれどもこれは硫化砒素といふ恐るべき毒藥で製すのですから、素人には調へることと出來ません、聞けば朝鮮の女子は一般に或る部の毛をペロリ拔去るとのことですが、幸ひ御許様は其地に在つしやること故、その藥劑を御求めになつたら便宜でせう。

問　私は手も足も兩頰も眞赤で、冬季には紫色に變じますが、何とかして赤味を去る方法はないものでせうか、又白粉などを使はずに艶よく色白くするものは御座いますまいか。(山口、赤顏女)

答　御尋ねのことはチヨイと茲で御答の出來る問題でありません、それ等のことに就いては、拙著「新式化粧法」の中に詳しく述べて置きましたから、それを御覽下さい。



女子文壇 紀念第百號

☞五月一日發刊 好評

◎現代婦人百八人一首……肖像筆蹟挿入
◎男子も女子も家庭の仕事が減じて來た……文學博士 大塚保治
◎將來の男女の關係……法學博士 上杉愼吉
◎好んで藝術家になるに及ばず……文學博士 井上哲次郎
◎西洋の若き男女の交際……美術學校教授 藤島武二
◎脚本『祇王』……山崎紫紅
◎近頃の婦人問題……鳩山春子
◎母としての自覺……日向きむ子
◎屏風と日本畫……文學士 澤村胡夷
◎女庭訓……文學士 中村春二
◎正直に語る男子の見立……ほとゝぎす
◎人の生命と食物(上)……澤田順次郎
◎日本百文豪……記者
◎寧樂……窪田空穗

◎與謝野晶子論

- △婦人の作物に現はれたる色彩…………和田英作
- △短歌の爲に生れた人…………森田草平
- △强烈に我が生を愛す…………窪田空穗
- △尋常一樣の女流作家に非らず…………藤島武二
- △心持は貴族式、實際は謹愼な夫人の生活…………馬場孤蝶
- △和歌の創作三千餘首…………河井醉茗

◎我が好む演劇と音樂

…………名士四十八人

◎門（落人、細道、破三味線、嵯峨、秘密、寮宮）…………竹久夢二

◎世界百文豪…………記者

▲何のまゝに現はしたる若き女の身の上

△何故吁姫や初花に生れなかつたらう（市子）名家の令孃と言はれる苦痛（寂たみ女）△父は大酒家、母はヒステリー、其間に出來た私の個性（羅巾女）△青春の去りゆく時（斷崖の人）△生命より深い愛はないでせう（草の門）△鉾の亂行に離散したる一家の悲運（重子）△華やかな時代（かげろふ）△涙多くなつたのも病身の爲め（木村浜花子）△眞實にお可哀想な百合子さん（佐分兼彰）△早く身の治りをつけたい（島守女）△春の寄宿舍（靜江）△浩を救はん、（露花女）

◎創作

- △小説……（水野葉舟選）
- △日記……（横瀨夜雨選）
- △和歌……（與謝野晶子選）
- △詩……（服部嘉香選）
- △花……（河井醉茗選）
- △動物に對する感想……（溝口白羊選）
- △俳句……（内藤鳴雪選）
- △詩の言葉（鳥）△木瓜……（蘇生法師）

▲女子文壇追想記 △山田ポ子、△長曾我部菊子△加藤重子、△平塚白百合△ふゞき野

▲化粧問答（藤波英將）▲誌友くらぶ▲第二回誌友會案內▲雜報

▲口繪▼

滿願の日 竹久夢二筆

本誌が企てたる新しき試みにして、明治の新錦繪とも稱すべきもの本誌二倍大、奉書摺、木版極彩色十六度刷

寫眞版 口繪は十二頁皆光澤紙色刷

▲表紙太田三郎▲插畫渡邊與平山中古洞、大下藤次郎、岡本一平、竹久夢二、萬代恒志畫伯の筆

◀紀念第百號に限り 紙數三百餘頁 定價金三拾錢 送料貳錢五厘▶

（○發行所 東京京橋區大鋸町十、十一 振替口座第一七二九番（電話京橋六〇七番）女子文壇社 ●最寄書店品切の時は本社へ直接注文を乞ふ）

都會の婦人

◉女子文壇紀念第百號發刊を祝する爲め本中の御注文に限り破格の廉賣す

廉賣 價金拾錢 送本料壹錢五厘

▲菊判二百餘頁 美麗口繪挿繪多し

本書の内容

東京の趣と東京の女▲芝居の書割のやうな不忍池畔 馬場孤蝶▲新しい觀察の盡きざ
る都會 蒲原有明▲大いなる未成品 戸川秋骨▲西と南の郊外 吉江孤雁
▲張りつめた力 小川未明 **街頭を歩める女の印象**▲植物園で逢つた女 北原白秋▲僅に殘
▲雪の夜の銀座 服部嘉香 れる印象 水野葉舟▲街の夕月 森川葵村▲
三人の女(對話) 吉井勇▲◉詩に現れたる都會 河井醉茗▲暗愁に囚はれたる都會の女性 深村文學士▲
油繪に入る女 木下杢太郎 西の郊外より 水野千枝子▲南の郊外より 荒川遊子▲日比谷太神宮結婚式
の記事 遊蝶花▲上野より(對話) うす雪▲**東京印象記**▲銀座 くに子▲神樂阪 白百合▲魚河岸
婦人席にて さわらび女▲東海道線 羅漢柏 葛壽子▲日比谷 春子▲根津 筆子▲不忍
濵子▲芝公園 やゑ子▲谷中 霞子▲神田 樂子▲**都會の渦捲**▲濁つた室に
西片町 千歳▲美しい動物園 しげを▲深川 ふぢ に漂ふ**若き女の眞情** 輝く電燈 やゑ子
▲入京記 きく子▲闘ひ疲れて 白山吹▲熱涙冷涙 湖畔の女▲造物主は何故私の鼻の土を儉約したので
せう 常世草▲心の活動寫眞 夕ぼし▲湯屋の三助に不快を感ず 荻花▲開放されたのか落伍したのか 薬
隠れの花▲欺かれたる工女の懺 **都會の實際的生活**▲生活の階級 霞子▲卒業式の前
悔 沼倉馥子▲東京大阪京都 きく子 つゆ草▲バザーの當日 静江▲某子
爵邸に遊ぶ 白菊▲**創作**▲(小説)卵涙 花子▲(散文)山みち 野ちみ 章子▲(詩)白鳥 田中落葉子▲
お嬢様のお供 森英子 (歌)灰色の波 原田琴子▲(俳句)木の芽 玻瑠子

東京 京橋區大鋸町 **女子文壇社出版**

(振替口座第壹七貳九番) ◉發賣所◉各地書店

地方の婦人

● 女子文壇紀念第百號の發刊を祝する爲め本月中の御注文に限り破格の廉賣す

廉賣 價金拾錢 送本料壹錢五厘

▲ 菊判二百餘頁 美麗口繪挿繪多し

本書の内容

地方婦人の自重を望む 下田文學士 ● **女が中心になつて働く** 横井農博士 ● 行ける處まで行き得ない 田山花袋 ● 女性の自然の觀かた 小島烏水 ● 天然の美と婦人の美 大下藤次郎 ● 私の故郷 尾上文學士 **海豹島の婦人生活** 岩野泡鳴 ● 下京の女兒 玉花外 ● 杉坂峠 澤村文學士 ● 雲雀鳴く野 夜雨 **煽風器** ▲ 富士登山は宜い經驗 目賀田逸子 ▲ 鳥の鳴く廣尾の奥 仲小路八重子 ▲ 田舍では讀書より仕事 遠山稻子 ▲ 周防の德山 武田貞 ▲ 氣が利かぬ代りに人情に厚い 中村若子 ▲ 幼い時は山へ成長すれば海へ 岸すみ子 ▲ 信飛境上の深山旅行 辻村靖子 ▲ 暑い方に向ふ 中野仙子 ▲ 嫁して後忍耐強い京都婦人 松岡いと子 (小說) **漁父の母** 小栗蕣子 **賣り桑** 水野仙子 ● 海岸 河井醉茗 ● 琵琶湖 しのぶ ● 雨 川路柳虹 ● 伊豆の海岸より 中村文學士 ● 淡路の生活 一色醒川 ● 驛鈴 **色彩**的區分したる**大阪**市の**婦人** みどり女 ● 神戸 羅溪柏 **東京近縣**の女の特色 遊蝶花 ● 都會より地方へ 長曾我部菊子 ● 嬌の旅日記 靜江 ● 農村の處女が最も活動する田植時(伊豆、伯耆、近江) **富山と岡山の女** 下枝子 ● 本州の南北兩端より(薩摩、北見、) ● 五年以前 山田邦子 ● 諸國通信(肥前松浦、××町、和泉の南、伊豫松山、常陸下館、駿州小山の各地より) **山岳と海岸** ▲ 熱海 ▲ 房州の潜 ▲ 越後の海 ▲ 秩父 ▲ 高尾 **地方の現在** 石油の噴出 蒲原早蕨 其他 **都會に憧憬れつゝある若き女の叫び** ▲ 私の淋しい心を察して下さい 北斗星 ▲ 行きたい〳〵と思ふ一念 桃の花 ▲ 擂鉢の底のやうな土地より 上田けん子 ▲ 嚴格に過ぎたる家庭 白露子 ▲ 船中より身を投んとしたる其後の私 汀女 ● 創作(和歌、小品文)

東京 京橋區大鋸町 **女子文壇社出版**

● 賣捌各地書店 (振替口座第壹七貳九番)

今の婦人

●女子文壇紀念第百號の發刊を祝する爲め本月中の御注文に限り破格の廉賣す

廉賣 價金拾錢 送本料壹錢五厘

▲菊判二百餘頁 美麗口繪挿繪多し

本書の内容

●美しい血　佐藤ますこ
●與へられたる生命　山田邦子
●木梛　長曾我部菊子
●大川端　鈴木春子

▲美しき色彩　執筆婦人九名
●見るも夢、覺むるも夢の女　若杉濱子
●面がはり　前島ゆり子
●母に縋りて

▲若奥樣の生活　白木紫子、枝の小鳥、きみ子
◎賣約濟　うすゆき
◎死なれぬ女　山崎千代子
●現代婦人の進歩　河井醉茗
●良人の選擇に迷へる女に與ふ　原とし子

▲婦人登山記　翠玉かつら子
●私の心を縛つて欲しい　迷へる女
●白き月の沈む頃彼女は眠れり　貝野道子
●獨寢の枕に響く霰の音　初月夜花
●正氣か狂氣か　秋扇
●教會を脱したい　芳子
●女學校の窓から覗いた世間　白雨女
●涙を呑んで運命に從ふ　神保千代野
●單調なる生活に倦む　野に降る雨
●覆面を脱ぐ　築土の草
●私の運命を左右した試驗の力　秋香
●危うく戀の波に浚はれんとす　夕がほ
●引いて歌ふや獅子の曲　さつき
●夢の記　蔦の葉
●三人女　芳惠子
●遊學を志の貫かうとする初一念　星子

◎夜の自然を愛す　吉田紫花
◎覺めたる日記　安永泰子
●懷姙日記　越路女
●苦勞人の面影　船田譽子
●私の離縁された一事始終　小夜時雨
●劇
●早婚の爲に生じたる吾家の悲　新田文子
●嫂の冷たき心を悲む　島守女
●姑の我を折らすも少しの呼吸　月見草
●子供を持つても忘られぬ文學　はまゆふ
●細君評判記　さくら貝
●袖香爐　横瀬夜雨
●朝しづく　三加島葭子
●七世の後も　原田琴子
●栗の實　葵耶子
●小品文、詩、和歌、俳句

東京 京橋區大鋸町 女子文壇社出版
（振替口座第壹七貳九番）　●發賣所各地書店●

諸嬢及び奥様の良參考書

婦人ノート

本書の內容

【裁縫】◎普通の着物も縫へないやうでは嫁にも行かれぬ（松亜紫花）◎裁縫と機轉、吹雪野）◎何より好きな裁縫（田舍女）【音樂】◉生田流と山田流の區別（櫻井銓子）【育兒】◉仲子の育て方（笹の露）◎子供本位の敎育家の家庭（美智子）◎子供を白痴にした若き母の罪（島の女）【學校】◎新に寄宿舍に入らんとする友人に注意する書（海たみ）◎往復三里の學校通ひ（文香子）【衞生】◎處女の衞生と旅行の衞生（むらさき）◎看病の心得（N女）◎化粧法問はず語り（鈴音）【園藝】◉櫻草の栽培（牧野理學士）◎無邪氣で珍しい家庭公園（新田文子）◎養鷄（むらさき）【運動】◉何時でも出來る室外運動（中川女子高等師範學校長）【圖畫】◉郊外寫生の話（岡野學習院女學部敎授）【詩歌】◉萬葉集の佳作（深村文學士）◎詩を作る呼吸（金田代志子）【作文】◉文章の今昔（河井酔茗）◎何うすれば文章が上手になるか（燕子）【出產】◎二つの生命（聡志緒）◎始めてお產をする方へ（若き母）◎三度のお產にて得し私の經驗（みどり）【職業】◉女子就職の領分（海軍少將中村靜嘉）◎仕事の苦痛（白山伏）【化粧】◉顏の美しくなる食物（北原十三男）【料理】◎お芋の料理と御飯焚き（さつき）◎臺所の一週間（笹舟）【家政】◎家庭心得其をり〳〵（萬野菜女）◎日に一錢づゝの貯金（北利子）◎商家の店と奥（はる子）◎吾家の室內に掲げて置く各種の表（紅梅女）◎家庭の秀才となりたい（春野胡蝶）◎時間の屑を利用せよ（みきよ子）◎母のをしへ（佐分猟彰）◎母の留守（はまくら）◎肉體の痛み心の傷み（山茄）◎家庭の心おぼへ（野の花）◎感心な奥様（內海千鳥子）▲對話女髮結所の朝（うす雪）外數篇▲和歌數百首▲ノート（東京、英語、文學、滑稽）

全二百餘頁美裝

定價金貳拾錢

送料壹錢五厘

發行所 東京市京橋區大鋸町 女子文壇社（振替東京壹七貳九） 賣捌 全國雜誌書店

六月號出づ!!!

青年文學界の覇王

拾壹卷八號!!!

趣味津々

秀才文壇

讀者文藝滿載

正價 一冊拾參錢 送料一錢五厘 三ヶ月分六拾三錢 半年分一圓卅五錢

◎自家文學觀……文學士 坂本四方太

◎創作雜話……小川未明

◎歌と日本の笛……北原白秋

◎新作小說……三木露風

◎畫の見方……正宗得三郎

◎謠曲から觀た足利室町時代の世態……文學士 東海林蕉南

◎千九百十年の夏の日記より（トルストイ）……土岐哀果

▲初夏の歌……近藤元

▲膝の手……尾山秋人

▲初めて逢つた文壇の人々……S K生

◎吳の人に（小說）……栗原玄影

◎日曜日……能見野石

◎懷しい句……今小路非村

秀才文壇第二增刊

高評 青風號

正價貳拾錢 送料一錢五厘

發行所 東京神田旅籠町一 文光堂 （振替口座東京一九五五） 最寄書店に無くば直接本社へ注文を乞ふ

創作

小說

水野葉舟選



○直（天賞）

小笠原　さだ子

「しつかりおしよ、家のものが可愛想だからさ」

直はいつもの茶店で辨當をつかつたがどうも胸につかへる樣なので、其はよしにして店先のごみのかぶつたガラス蓋の箱の中から、大福を二つ許りつまんで食べて、お茶許りガブ／＼飲んだ。しばらくボンヤリとつまさきを見て居たがため息をしながら思ひ切りわるく腰を立たした時後からお神さんの元氣のいゝ聲がきこえた。

直は苦しさうな顔をゆるめもせず、無言のまゝねずみ色になつた汚ない手拭を頬かぶりして「牛込區」「汚物運送車」と白く書いてある箱車を引出した。

外は風もなく好く晴れた、暖かな春の光は明るくそこらに滿ちて居る。椿だの櫻だのゝ花は垣根をこして道路までつき出して美しく咲いて居る、華かな洋傘や美しく着飾つた群は幾つとなく直の前後を歩いて居たけれど直はそんな事に頓着するどころでは無かつた、胸のところがもゆる樣に熱くなつて居て脊筋や腋の下が妙にソワ／＼してかすかな風もゾッと身にこたへる

舌がてはばる樣にかわくので直は少し歩いては井戸や水道の水をむやみに飮んだ、そしてフラ〳〵する足をふみしめて歩いた。

若松町、辨天町鶴巻町と歩いてゆく内には後の車の重量が増す許りである。

直はフト二三日前に總領の子が店先のものをさらつたとかさらひ損ねたとかで暗い處につれて行かれたのを思ひ出した、いつも父について來て車を押してくれたのが今日は一人の爲か一層苦しく思はれた、思はず「チョッ」と舌打をした「間ひやうしの惡るい時には惡いものだ」と思つた。

此二三日は殊にはげしくせきも出る、時には美しい血も出る事がある、直は其を見る度に體のぬくもりが冷えてゆく樣に感じた。

四五日前仲間のものが「可愛想に直も長くはあるめエ」と云つて居たのがチラと耳に入つた時直は別に驚きもせずに

「成程」と思つた。

彼はミルクホールや支那料理などが軒を並べてあるせまい人通りのうるさい町に出た。

はげしい香ばしい支那料理の香も美しくかざり立てた洋物やの店先も少しも彼の感覺をしげきしなかつたたゞもう自分の身の苦しい事に許に神經が集まつた。

早やく此てはれかゝつた樣な體をソッとやはらかな蒲團の上に横たへて見たい、どんな小さな空地でも草原でも有つたなら此車をうつちやつてものび〳〵と横になりたい、直はガラ〳〵と云ふ後の車のにぶい音をききながらこんな事を考へながら歩いて居たが、

「ギヤッ」

と云ふ不意に耳をつらぬく樣な音が耳に入つた、と同時に、

「アッ大へんよし坊が!!」

するどい狂氣の樣な女の聲がつゞいた。

直はハッと思つてふりむくとたん、チラと車の轍に赤い血汐がついてるのを感じた、此瞬間非常な驚きと恐れは彼のつまさきから一直線に頭をつらぬいた。

彼の心は電氣にでもかけられた樣にビリ〳〵としびれた……が不思議にも彼の足は渾身の力を出して歩き始めた、逃れよう！と云ふ念はガラ〳〵と云ふ車の音とごつちやになつて直の頭をついた……。

「オイ待ちねエ」

太い男の聲が後からきこえたけれど直は目をつぶつ

たまゝ苦しさもいたさも忘れて急いだ。

「オイ此野郎！」と云ふのが耳もとで叫ばれたかと思ふと太い赤い手でしつかと梶棒をつかまれた。

「何んでエ」にぶい目で直は相手の顔をにらんだが體はワナ〳〵とふるへて居た。

「此野郎！どうするか見て居ろ！」



（地賞）永き夜　井上元子

たくましい男の手は直の横顔を否やと云ふ程なぐつた。

「オイ一所に來い、知らん顔をして行かれると思ふか、此馬鹿野郎！」

商人體の赤ら顔の男は跳のまま仁王立につツたつて憤怒の極に達した樣に太い額の靜脈がピリ〳〵と動いて居る。

直はのどをしめられた樣になつて何か云はうとしても聲が出なかつた、夢中の内にもにぎられた男の手をはなさうとした。

「オイ何とか云はねエかよッ、オイ」
云ひつゝ男は直の手を強よくひつぱつたが直はしつかり轅棒にすがつて車から離れまいとして居る。
グワンと云ふと再び目の廻る程ひどく直はなぐられた。
「なぐつたな！」
直はよろけさうになつたがキッと身がまへをしてから叫んだ。
「なぐつたからどうした、畜生！、サアおれと一所にきやアがれ」
男はグッと車の棒を上に押上げて下から直の體をひつぱり出さうとした。
往來の人たちは
「何です、けんかですか」
「子供を車でひいたんです」
などゝさゝやきながら集つて來た。
直は眞青になつて懸命の力を出して車にすがつた。が、とうていかなはなかつた、忽ち逞しい男の手は直のやせうでにガッシリかみついてズル／＼と五六尺直の體をひきずつた、直はそれでもせめて車の輪にすがらうとした、が其手もすぐにグイと後にまはされて終つた。
直は非常な暗い運命が突如として自分の上に落ちて來た樣に感じた。
「おれを、どうするてエんだよ」
直は苦しさうに體をかゞめながらそれでも出來るだけの力を出してふみ止まらうとした。
「だまれ！、するだけの事をさせねエうちはゆるすものか」「するだけつたつて……あゝ全くあやまちなんだからゆるしてくれ……エ全くわるかつたのだからかんべんして」片手をにぎられたまゝ地べたに膝をついてうめく樣に直は云つた。
「おれはこんな病人なんだ、エあやまるからゆるしてくれ、こんな貧乏でどうする事も出來ないんだから」
直はしりでみをしながら云ひつゞけた。
男は勝ほこつた樣にやせぼけた直の體をずる／＼と引ずつて行つた、見物人は面白さうに二人のあとへヅロ／＼とついて行つた。

○氣迷ひ（地賞）

よこはま　田　枝子

濡れた敷石に兩側の店の灯がチラ／＼映る仲見世の

通を歩く頃には頭が茫として、顔の色も青ざめてゐた。「お榮さん、醉たの？」律子は握てゐた手を引張る樣にして白粉臭い顔をお榮の耳元に突よせた。「え丶何だか頭が變にグラ〳〵するの。」……「あら醉つたのかしら？……いけないわね、誰か藥持つてゐるかもしれない、あの連さん……一寸。」と呼びかけた。二人の少し前を流手なインバネスに新らしい中折をかぶつた大柄の連三と、角帶に無地鐵の羽織をきて、セルの前掛を長目にかけたお店風な粹作の粂吉とが何か冗談らしい事を喋り乍ら歩いて行た。「呼で？」と連三がふりむくと粂吉も立止まつた懷手をして、口に小やうじを咬んでゐる。粂吉の顔は小じんまりとして、敏活らしい眼付だつた。「貴方がたは、ズン〳〵行つて了て、ご覽なさいな、お榮さん醉たつて苦がつてるわ、粂さん貴方が惡いのよ。さあ何うかしてお上げなさいよ。」律子は仇ぽい顔で一寸睨む眞似をした。「俺が下手人か、冗談ぢやないよ。だが醉たの本當に？弱いな。」云乍ら粂吉はお榮の傍へよつてきた。「お氣の毒ねエ。小吉さんみたいな强者と太刀討は出來ないのよ。」お榮は握拳で輕く額をたゝき乍ら眉をよせてわざとらしく拗ねた顔をした。「巽うからかんで出ましたネ……」科白じみた聲をしていつて笑出した。「實際粂さんは水性だから油斷がならんよ。斯うみえても僕なんざ實意があるんだから……。」「憚樣其れでも好いつて云つてくれる女があるんだからねアハヽヽ」粂吉は威勢の好い聲で高笑した。そして袂の袖口から小さい寶丹の罐を出して渡した。「すまないのねエ。」とお榮は他人行儀な顔をした口中へ含んだり頭へなすりつけたりして又歩き出した。「ねエ、今夜こそ泊らせるいよ。歸さあしないわもう。」律子はかたくお榮の手を握りしめた。「見込まれて捕虜になりましたな。」連三が橫から笑つた。「……」とお榮は無理に笑顔した。堅苦しい事を思て、きまり切た型にはまつたライフをするために、貧弱い肉體一つのために淋しい變化のない努力許りで生を終すのは馬鹿だ、什う生き樣と好き勝手だもの、自分の心さへ充實してゐれば其で好いのだ……世間が何と云つたつて結局苦るしまずに死ぬのが幸福なのだ、勝なのだ、かまふものか。這那事をやたらに繰返して其れでもまだ未練らしい謀反氣が心の底にウロついてゐる樣に思へるのを無理にもぬり消して了ふとあせつた。そして粂吉たちが下らぬ事を云つて笑興ずるのをお榮は一緒になつて、出來るだけ高い聲で笑つてみた。然し其聲が

什うも渇いて了てゐる樣で寂しかつた。「三つ違ひの兄さんと云ふて暮してゐる中に。」唐棧の半纒をきた角刈の男が節をつけて唄て行つた。「オホ……何て間が好んでせう。」律子の聲には若い艷があつた。「一旦殿御の澤市さんか。アハヽヽ」「こいつあ好い。ウワハツハヽ」通りすがる人がふりむく程三人の聲は冴えてゐた。お榮はもう無理にも笑へぬやうに思へた。皆が騷げば騷ぐ程イラついた心持で寂しかつた。窃とぬけ出して、獨りになつて勝手な處が歩きたいと云ふ心持もした。其時は觀音堂の裏手の處を歩いてゐた、空が暗くて風の生温い晩だ。「什う？きもちは。」少したつて粂さんはお榮の細い肩の上へ手をのせて優しくきいた。お榮は何だか泣き出したい樣な氣がした。默つて俯むいてゐた。「惡い？可愛想だな。どこかで休まうか。」と云てのぞき込だ。「もう今夜遲いでせう。」「ナーニ時間なんぞ好いさ。今夜はどうせ遊ぶんだもの。」「……」お榮は「今夜！」と云ふ詞が今さらに悲しい樣な慄を感じさせた。「あゝ、時々鐘が鳴る、詩的ネ。」と律子が云つた。「本釣鐘か、凄い處だネ。」と連三が云つた。「お榮さんもつと騷がないか。一向浮かないね。」粂吉はつと傍へよつてお榮の指の先をしつかりと握つた、お榮はかすかに身悶へして苦しさうな吐息をした。

六區の興行物の裝飾電氣が池の水に映つてゐた。パツとゲバ〳〵しい樣にあかるい灯の下を押合ふ樣に群集が動いてゐた。「大勝館の女辯士は素敵にハイカラで美人だつて噂よ、でらん遊ばしたら如何？」律子は連三の袖を引張つた。「目の毒だから辛棒しませうよ。」「あゝら。」黑い眼を呆れた樣に見張つた。房々した束髮の遲毛が白い額にバサ〳〵落ちかゝつて、丸い顏が何となく可愛ゆうチヤミングに見えた。其時お榮は、もう身體なんか目茶〳〵なのだらうけど、あゝした放縱な其時〳〵に變つてゆく樣なライフの女も全く好い人間なんて什う生きたつてかまはないのだ……又這那風に思へると急に生々した心持になつてきた。「私ねエ粂さん、ビールが飮みたいの。グツと胸がスクでせう。」お榮は晴々した眼をして粂吉の顏をみた。「エツ本統にかい、氣持は好いの醉たのは？」粂吉は不思議な目をしてお榮の顏を眺めた。矢張り青かつた。「飮まう飮まうサ松葉の蛤鍋で！愉快々々。」連三が呼ぶ樣に云た「お榮さん、大丈夫？ビールなんか飮んで！。律子が心配な顏をした。

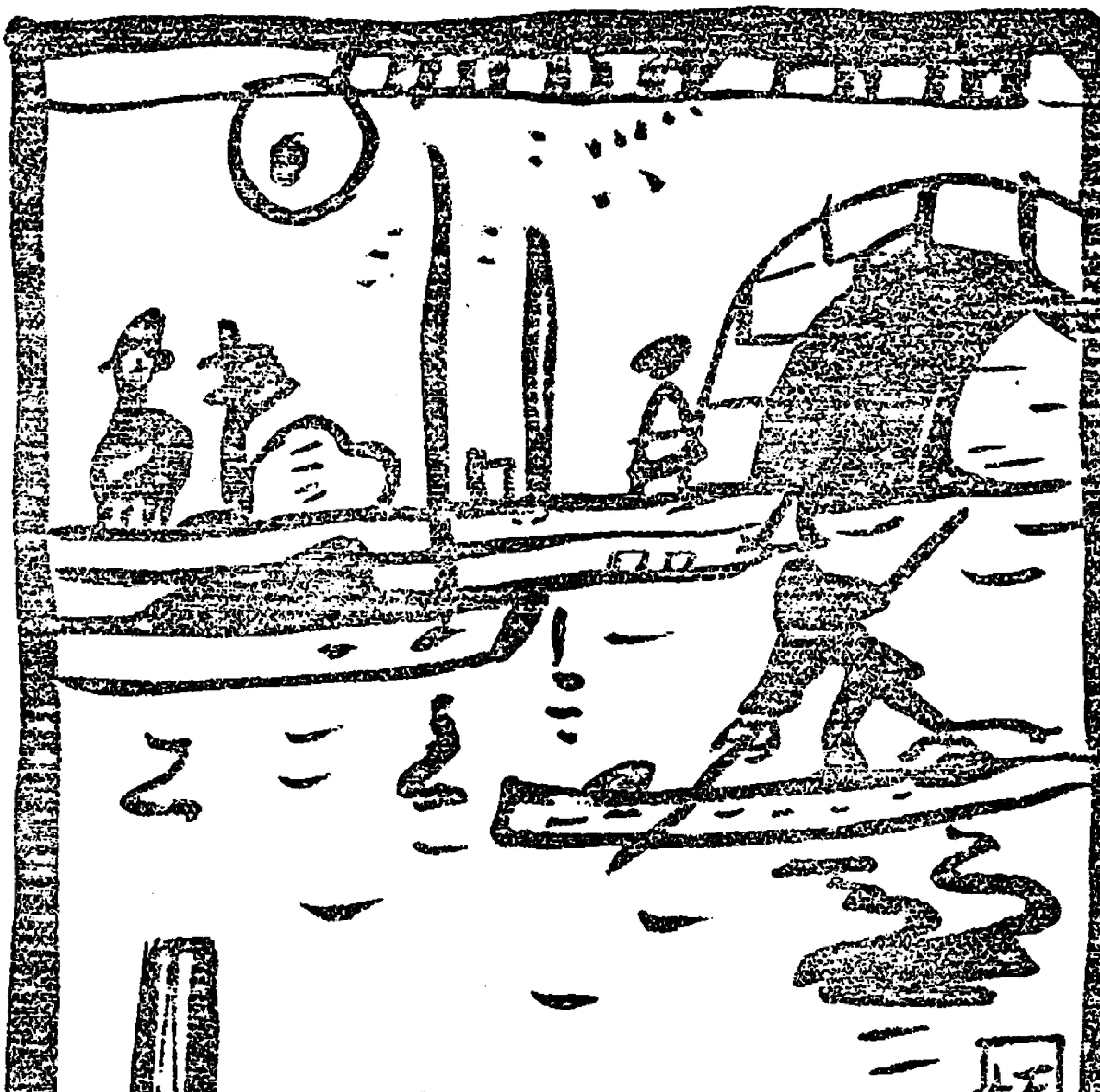
○毒酒の匂ひ（入賞）

はま子

名物の西風は毎日々々吹き荒んでゐる。

今夜も家毎に大戸を落して灯の影をも洩らさない。夜のふけると共に花柳街は愈々聲をひそめて地廻の小唄一つ聞えない。

『何てえ暇な晩だらうねえ、提灯をお入れよ。』と縮れ毛の女將は下女を搖り起した。居眠りから覺めた下女は御神燈を軒からはづして、



（入賞）　橋下にて　京橋　鈴木よろづ子

『女將さんお燈明の油宜う御座んしよか。』

『あ、閑な晩にや消してお了へ。』

お女將は新聞から目を放して然う云つた。

其晩、唯一人お茶を引かなかつた淸香は、紋付の肩をすぼめて、寒さうにお座敷から歸つて來て、

『姊さん皆出ましたか』と女將に聞いた。

『今夜は非道かつたのよ。』と不平らしく云つて無理な笑顔を淸香に見せた。

淸香は別段誇るやうな色もなく、鼻唄を鳴らしなが

ら藝者部屋へ入つて行つた。

『姉さん。』と暗い顔をして壁に凭れてゐた年増を呼びかけて、

『ほんとに濟みませんでした、今夜は幾ら賴んでも駄目だつたのよ、あのけちですもの、それに懷中が淋しいんでせうよ、それを私が知つてるから、無暗に費せられないの。』

と、如才なく辯解云つた。

淸香は悧怜者である、幼い時から苦勞に苦勞をしつけて來たせいでもあるが、人の感情を惡くする事が何よりも怖ろしかつた。其代り淸香は人を圓く取り扱ふ事が上手である。

七歳の時から白河へ賣られて、それからそれへと渡り歩いた。非道な養父は淸香が其町に居馴染んだ頃になると、何處からか金を持つて來て連れてゆく、此の商賣止めさしてくれる事かと思つてゐれば、又他の土地へ前よりも高く賣る。

けれども淸香は割合に擦れてはゐなかつた。田舍藝者には珍らしい程の顏立も、好い咽喉も、少しも自覺してはゐないので、偶には『淸ちやん、お汝程の美貌で其腕前で、斯んな處に埋れてちや惜しいではないかあの萬龍を御覽な、素は土浦の漁夫の娘だけれど、東京で名を賣つた許りに、今はあれお前さんも知つてるだらう』と。

幸福が其處此處に轉がつてゞも居るかの樣に、云ふものも多かつた。

『あゝ、私は何にも要らないのよ』

と情なく顏を背けるのが常である。

『私や幸福の餌差に引つ掛かつて、幾度も釣られた事があるんだもの、其果てが暗いわなにはまつて、藻搔いても〳〵出られやしない、私や何にもいらない、居馴れた處に凝としてゐられゝば、それが何より幸ひだと思つてるの。』とさも思慮のありさうな顏でいふ事があるが、それは眞實淸香の心持。

此の町で上等の客と云へば、百姓の大盡殿で、汗脂肪から絞り出した首財布の金子を、一文でも多く攫み取つて振り蒔くのが、淸香姉さんたる役目である。その癖淸香は自分の懷中へは決して客の金子を入れるやうな事はしない。それ丈又借金が月日を追つて積つてゆくけれど、それをどうして返したらとも、痛切に考へた事はない。

『あゝ詰らない、私ね淸香姉さん、斯んな處で商賣し

たつて仕様がないわ。』と半玉の桃子が分別顔は、小憎らしく姉さん達の目に映つて、

『おやア何かい、東京へでもゆきたいの、そろ〳〵色氣と慾が出て來たねえ。』と年增のが冷評しても、半玉はツンとして長文句の手紙を書いてゐる。

『桃ちやんお前は長い手紙書くわね、家へ遣るの、他の土地へ行つて賣れなくて揉まれて御覽、そりやア辛いから、眞實だよお前さん。』清香は帶の間から御祝儀の紙包を取り出しながら、沁々と斯う云つた。

『ナアニ姉さんて云はれて見たいんだよ。』

他のが混ぜ返すと半玉はヤッキとなつて、

『そんな事ぢやないわ、どうせ遠くへ行くんなら米國でも支那へでも賣られて見たい。』

『えゝ米國、外國だの西洋だのアメリカだの一體何處にあるの、桃ちやん米國なんてお前さん知つてゐるのえ、外國の方かい』

清香は美しい瞳を瞠つて、眞底から力を入れて半玉に聞いた。

其後半月許りして、半玉は父親が來て自由廢業をさせてくれた。

酒と紅粉の香の入れ亂れた、放縱な空氣の中に浸つて、知らず〳〵清香の全身が腐れ果つるのではあるまいか。首に白い布を卷いて藥瓶を携へ、朝はやく、花柳病院の門を入る、彼の女の姿を見た者があるとて、町人はとり〴〵の噂をして居た。

選評

葉舟

▲四月廿日、例によつて、諸君の原稿が一包に成つて届いた。今日は又西南の風のひどい日だ。今月は割合に投書が少かつた。それを一通り目を通した後に、以下の十九篇だけが殘つた。これを順々に批評して行く事とする。全體として、第一は取材の範圍が廣くなつた事。第二は手法が複雜に成つた事。第三は「洞察」が深くなつて來た事。自分はとも角、全體のレエルが上つて來た事を思つて、ひどく快く感じられる。

▲「老孃」(東京、小桃) 例の反抗心、寂しい心、妹の結婚に對する衝動……などである。が、この人の文章には行き屆いた、柔味と、匂とがある。この作者の感受性の豐さが、何處かに含まれてゐる。そこが、この作をさう何でも無いものでも無くさした。

▲「焦心」(東京、ひなげし) 此作には反省と言ふものが少しも無い。田山氏のよく言はれる、離れて見ると言ふ事が決してない。そして一方には又、眞に思ひ込んだ處も無い。口先でものを言つて居るやうな作だ。

▲「紙切」(愛知ゆかり) この紙切に書いてあつた一句で、弱い女の心のおびやかされると言ふ、その手法の機智を面白く思つた。しかし、全體としては人に失望させるものだつた。

▲面影(福岡、袖の浦人)　あまい作。

▲毒酒の匂ひ(東京、はま子)　題の恐ろしいのに比べては、內容は何でも無いものだ。藝術の創作に對しては、も少し、微細な、愼重な態度をとつてほしいものだと思ふ。さら〳〵と書き流してしまつた、無雜作な筆逸者と言ふ處は、人を動かす力が無いものだ。人間の見方についても、極くコンエンショナルだ。言葉の間に、ものを見る目に、更らに自然を洞察したと思はれるふしがない。シリヤスな處が無い。しかし、この作は、比較的にまとまつて居る。

▲直(東京、貞子)　この作はいゝ。やはり自分の言ふ處は、印象が、その胸に燒き付けられた、その力が弱いと言ふ事と、まだ粗雜であると言ふ事とである。が、この作者は近來、足早に進んで行くやうであるのが嬉しく思はれる。

▲お末さん(東京、智代子)　定りの無い反抗心が書いてある。何處かに、眞實の顏が、チラと見えた。それがよかつたと思つた。

▲二階の音(豐橋、日●子)　この作は前半なとゐ。後半は現象があまり、不合理に插入されて來た感がしたので、唐突で、聯想の鎖が切れたやうな感がした。この作者も變換の機に臨んで居る樣子だ。研究、研究、研究が必要だ。よく見る事、よく考へる事、そしていゝ書を選んでの讀書を、その上に對してのいゝ相談相手にしてほしい。

▲曇つた日(松山、光枝)　幼稚だ。だが、努力したら伸びる人だ。

▲手紙(福島、春子)　この人も筆逸者にすぎる。立つて居る位置が、あまりに淺すぎる。だから、饒舌に聞えるのだらう。

▲雨の日(東京、水仙子)　何處かにいゝ處がある。古い、粗い作だ。しかし、これだけでも、描く力があれば、こゝから踏み出して、もつと進んでほしいものだ。

▲一夜(大阪、枯尾花)　この作を見た時には、ともかく、出來上つた一つの身體には見えた。それに血が通つて居ないので、生きたものと思はれなかつた。

▲氣迷ひ(橫濱、田枝子)　この作の人生觀めいた事が、極く淺薄だ。だが、この作者の描く才は認められる。この人に向つて、自分はよく「生と新しく」と言つた。それを大分心に懸けて書いて居られるやうだがあの言葉は餘りの、抽象的な言葉にすぎて、目標とするのには、見當がつきにくかつたでせう。それをよくはつきり言つて見たいが、今は充分に言ふ機會が無い。たゞ生き〳〵したと言ふ事は「自然」を出來るせけ鋭く洞察して、それを複製したと言ふ事である。新しくと言ふ事である。新しくと言ふ事も、その發見の新しさである。人の感じ得ざる境まで到達すると言ふ事である。藝術の目標はこの「自然」である。(天然だけではありませんよ。凡てを含まれて居る自然ですよ。)今迄、藝術界の凡ての人が、智識を盡して論じ、その頭の働きを盡して研究した創作も、一つにたゞこの目標の中から、その人の眞實を握らうとしたのにすぎぬ。そこをよく考へてほしく思ふ。そしたらば、あなた方――梅子と言ふ人も同じく――の作が、も一轉して來るだらうと思はれる。で、この作はこの作者のとして中位のもの。

▲お滑(土佐、はざくら)　可もなく、不可もなし。終りの感想めいた句は邪魔になる。全體としては整つて居るが、枯尾花と云ふ人の作に言つた評をくり返して言ひ度い。しかしあれよりはいゝ。

▲赤くなつた顏(東京、藤井豐子)　一寸氣のきいた作だ。生々して居る。

▲食客(東京、くれたけ)　この人も、もつと熱心になつて、廣い世の中を見るやうに心懸けてほしい。この作には大分力があつていゝと思つ

たが、まだ立つて居る處が低すぎる。

▲こんな人々（金澤、むらさき）大分上手になつて來た。まだ生きたヒラメキが無い。

▲雨の夜（逸陽、山鹿菊野）今、歩み出した人だ。この儘、マツスグに向いてお歩きなさい。

▲兄妹思ひ（横濱、伊都子）幼い。子供の肌のやうに柔〳〵つて、他覺が無い。

○薄茶
（前號のつゞき）

梅子

「さうかしら…………「今日は先生は誰れ？お勘先生？おや〳〵何にも嫌味は云はなかつた？……それあ珍らしいや……」と花幸は笑た。



裁縫所にて　水戸　玉川すま子

「幸さんお會席の咄しをきいて？お勘先生に……そして貴方行く積り？」とお袖が云た。「行かずにあ、いられないもの……少し馬鹿らしいけど……」と云ふと、「其お會席とやら會費は何程ですえ……」と、お稲は赤や白や花色の拔き絲を唇へくはへた儘、かう訊いた「二圓？だつたねお袖さん……考へると詰らない咄しでさあ……」「先生の方だつて多少氣が引けると見えてね、皆さんは、料理の事許り考へて高いと思つてござる方もある樣ですが、其道を敎へて貰ふと云ふ事も思

て御座らんと、どもなりません……だつてさ……料理丈けなら、圓助もかゝりあしまいしさ、餘りお勘の守が儲け過ぎらあ……おまけに年中皮肉な事ばかり云てゐてさ……」とお袖は續けざまに喋舌た。「全く嫌やな女さねえ……何しろあのお勘のために弟子が大分減たもの――老先生の事を思はなきあ、退て了ても好いのだがね。老先生もお人好し過ぎらあね。此度の會費だつてお勘の守が一人できめたに違ひないんだ……」「お勘先生と老先生とは大分年が違ひますかね？後妻だつてね……お勘先生は……」とお稻が口を入れた。「さうです……まあ恰度若先生と夫婦だと云た方が、本當にするねえ……あれぢや。だから娘の弟子にあいやに師匠面しやがつて、若先生や、成念寺の良信なんかと、親しく口でもきいて、ゐ樣ものなら、それこそ……をかしいつたつて……お袖さんなんか、綺麗な方だから猶だらうよ……」と花幸はクス／＼笑た。お袖は嫂の前では、滅多にそんな事は云はぬ積でゐるのに、口輕の幸さんのために、思はず赤面した。

「其程でもないのよ……だけど幸さんの事は賞めてゐるよ……女形の樣な顔してますねつて……あら本當に……お奢んなさいよ……」と笑た。お稻も笑た。そして今更の樣に花幸の顔を見た。色が白くて、眼が線を引いた樣に細くて、口元が小さかつた。女形と云ふ言葉を思ひ出して又笑ひたくなつた。幸さんも笑ひ乍ら

「お勘先生なんかに賞められても一向有がたいものか……だが冗談でなく、良信の事は、本當に思てゐるのだよ……お勘の守がさ……」「おほ……厭やらしい……本當だろかねえ。」とお稻は面白ろ相に、小袖を其儘わきへ置いて、火鉢の方へ膝を進めた「まあ一服……」と花幸が煙管の吸口を袖口で拭てお稻に出した。お稻一寸會釋して受取た。「さうかもしれないわ……けど良信樣は一向素氣ないの……好い氣味だね。」とお袖が云た。「其良信さんと云ふのは、成念寺の納所さんだろ？一度見た事があつたと思たが……」とお稻は一寸考へる樣な眼をした。「まだ廿三四の一寸きれいな若道心だね袖ちやん……男振りは好いけど、何故あゝ、煮えきらないだらう……」と幸さんが云た。「全く、そして若いくせに、よくお茶なんかをあゝ熱心にやられたものね……尤も此の町では、魚銀の主人迄がお茶三昧に耽てゐるのだから、まあ坊主なんかは、よく知ておかねばならないだらうけど……何故あゝさばけないのだらう。」とお袖は俯向いて、火箸の先で良信々々と灰の

上へ書き乍らから云た。「其坊樣、お袖さんなんかに、口をきゝますかえ？」とお稻は、俯向いて火箸を動かしてゐた、お袖の襟元をみつめ乍ら訊いた。「きくものですか……」と、そしてお袖は、今日も良信に逢たけれどと咄さうとしたが何となくやめて、「何しろお勘先生は莫迦ね――」と、つかぬ事を云て、「若先生も、あれでは餘り、點茶のお師匠樣らしくないわ……もう少しおつとりしてゐなくては――私嫌ひさ。」と云た。「おやおや若先生は、お袖さんがお氣に入りだのに、すまないせ……」と花幸は笑た。「それでは、袖さんはお勘先生には憎まれ役づらね。」とお稻は幸さんに向て云た。「まあさうでしよね。」と幸さんが云ふと、「あゝ蒼蠅い〱寧そもうやめ了ひたい位だけれど……やつぱり全でやめると云ふ事は何だか出來なくて――」「矢張り何か、面白い事があるでづらもの……」とお稻は何處か冷やかす樣な調子にもきこえた。「處が何にもないの――」「それなら何も、高い月謝を出して、嫌味ばかり聞きに行くには當らんぞね……莫迦らしい。」と云て、吸殼をぽんとはたいた。「をかしな嫂さん。何も面白いから習ふの、面白くないからよすのつて云ふのぢやあるまいし、厭やでも覺えておく必要があるから、やつてゐるのでせう……面白くないからやめて好いのなら、何もしずに寢てゐた方が一番だは……」とお袖は一寸氣色ばんでから云ひ乍ら、お稻の吸た吸殼へ癪だと云ふ風に灰をかぶせた。「まあ好いやね、何もそんなに憤氣にならないだつてさ。」と幸さんがお袖の顏を見て云た。「もう〱お袖さんには、てはいで何も云はん〱……」とお稻は又、ときかけのお小袖を引きよせて、やけに糸を引いた。「まあ〱若い中だに何なり面白い事をした方がいゝわ……。」とお稻は常の調子で云た。「全くよ若い中だわ――」とお袖は強い調子で云て「ねえ幸さん、それで又お會席には一體何人程來るのでせう？」と調子を變へてから訊いた。「まあ私たちの時にはいつもの顏ぶれさ……關夫人と、おきわさんと、良信君と私等位な處だらう……幾度にも別けてやると云たからね。」「そして若先生かお勘先生かゞお亭主役か……面白相ねなか〱。」とお袖は微笑して云た。「面白いとも、そして途中でお酒が出てさ、隣りの者とお酌を仕合ふんだつてよ大方……」「隣りに座た人と……まあ何だか變ね。」とお袖は幸さんの顏を見て笑た。「お袖さんは、誰れの隣りへ、座りますえ？」とお稻が糸を引き乍ら、つかぬ事を訊いた。お袖は何となく赤面

した。それが如何にも心を見すかされでもした樣に口惜しかつた。「私は良信さんの傍へでも座りませうよ……ほゝゝお勘先生が妬くかしら？あゝ莫迦らしい……」とお袖は呟やく樣に云た。（をはり）

○赤くなつた顏

京橋　藤井豐子

銀座の裏通りに小杉と云ふ一寸した八百屋がある、お美代は此家の前を日に幾度となく通ほる。と云ふのは此の家に、細面な、眉の濃い、目のぱつちりとした、鼻筋の能く通つた、口元に何處となく愛嬌のある此年十九で、此度中學五年になつた、實と呼ぶ息子が居る。お美代は別に戀して居るではないが顏を見るのが、何んとも言へぬ樂みなのであつた。

お美代と云ふは此年十八で、惣十郎町の某旅屋の女中である。

此夜も客の使に銀座の三河屋へ麪麹を貰ひに行くのである。

「今日は一度も顏を見ないから――」と一直線に行けば早いものを態々廻り道をして前を通つた。が、まともに店の中を覗く事は流石に恥しい。で見ない振りをして横目で覗いた。と今しも小僧合手に何事をか話して居た實は、お美代の姿を見るより、小僧の首を外の方へと捻つた。そして何にか小聲で囁いた。と小僧は、

「あの女ですか――」と叫んで、笑つた。

「馬鹿ッ――」と實は制した。

お美代は此小僧の叫びや又笑つたのや、實が小僧を制したのを、聞いたり見たりしたので、扨ては自分の心を知られたかと今更顏を紅くした。が又自惚れても見た。

「向ふでも私を思つて居るんじやないかしら――自分の心を私に感付れるのが恥かしくつて、あんな大聲で制したんじやないかしら――」斯う自惚れて見れば、歸へりも又通つて見たくもなつた。

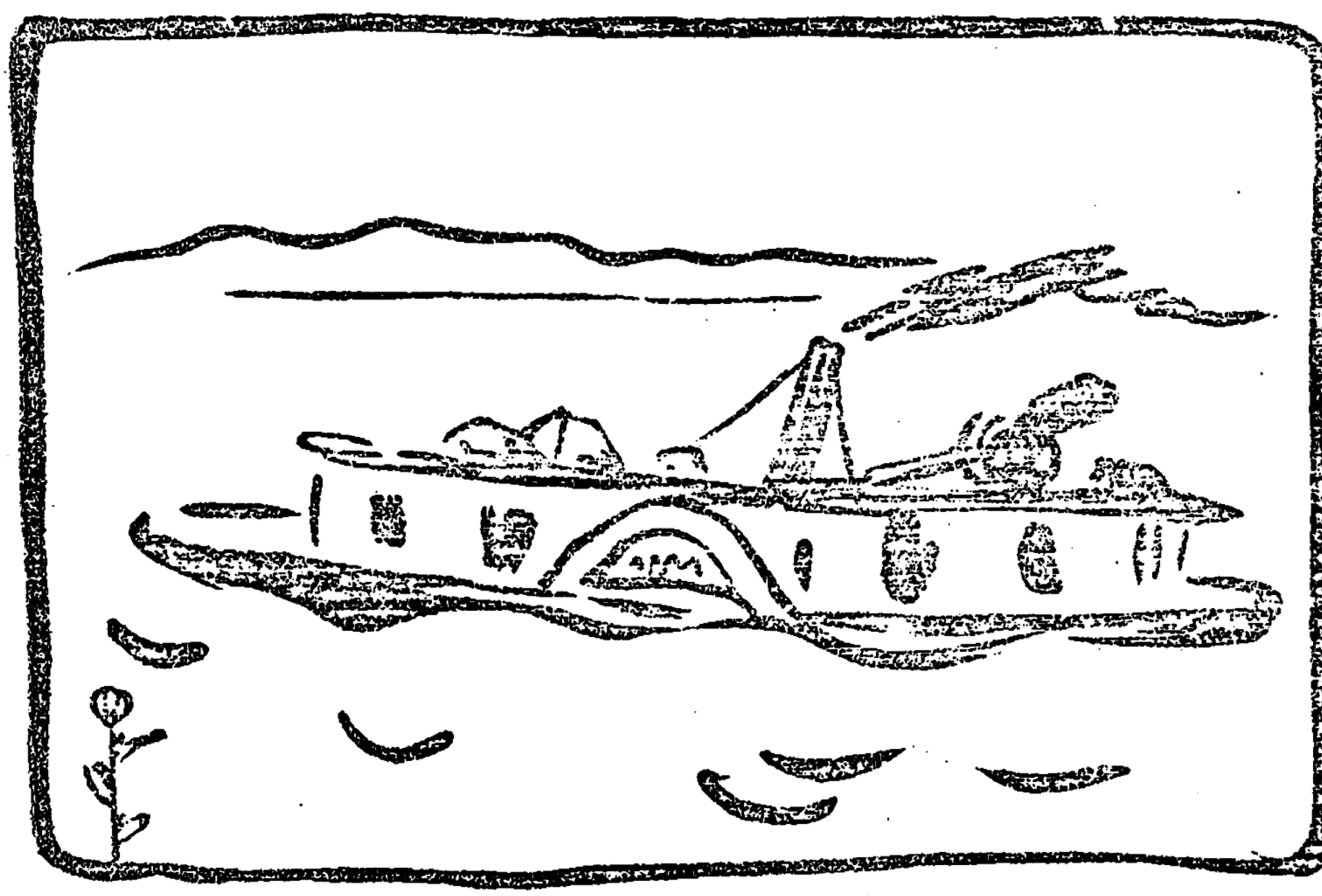
* * * *

行きには左程感じなかつた胸の轟きを今更の如く覺えた。そして漸次近づくに連れて、顏や耳が照り出した。

やがて前へ來た時横目で見たが、實の姿は見えなかつた。聊か落膽の氣味で首を長くして、店の中を見廻した。

里芋を泥の中へ轉がしたので、バケツで洗つて居つ

た小僧は其れと見て、
「姉えさんッ――貴さんが宜敷くつて――」と笑ひながら斯う吐鳴つて、其のバケツの水を、足にかかれよとばかりに撒いた。
お美代は胸へ釘の百本も打たれた如うに、鼓動が激しくなつて、水の足にかゝつたのも氣付かずに紅く照つて居つた顏を一層強めて嬉しいやら、恐しいやら、恥かしいやらで、無我夢中に家へ駈けて歸つて來た。
歸りの遲いので、客から催促されて、心配して居つた、二三の女中は言ひ合した如うに目を丸くして、
「お美代さん――何うしたの此んなに遲くなつて、お客樣大變憤つて居らしやつてよ――」と誰先きとなく斯う言つた。
「…………」お美代はハア／＼と息をはづませながら、胸を叩いて居る。



信濃川長岡市　百合子

其の中の一人がお美代の持つて居る袋を、ひつたくるやうに取つて、一寸袋の口を開いて、
「あらまア――すつかり握り潰ぶして――まアいつたいお美代さんッ此夜は何うしたの――」と言ひながら急いで梯子を昇つて行つた。
尚ほもお美代は顏を紅くして、息をはづまして居るので一番年增の女中が、
「何に茫然りして居るの――其んなに顏を紅くしたり――息を切つたりして、眞實に何うしたの――まア大變――裾から足から水だらけじやなくつて――何うしたのさ其んなに考へて――屹度情夫と密會して居る處を、嫉妬者に水で

もひつかけられたんでせう――ホヽヽホ」と百も承知と云ふ面持で笑つた。

「あら――お鶴さんひどいわ――」と言つたお美代の顔は、嬉しみに造作がくづれて居つた。

○お清

土佐はざくら

四里隔たつた友の家へガタ馬車にゆられて行た日のことでした。

馬車會社を出て、町を東へ踏み出さうとした時、『嬢さん、嬢さん』と呼ぶ女の聲が、騷がしい人聲の中から起りました。私は格別氣にも止めずにずん／＼歩いてゐると、今度は『長野の嬢さんぢや御ざいませんか』と云ふ聲がだん／＼私の方へ近寄つて來た。

自分の姓だけれど、此邊で私の顔を知つてゐる者はない筈だから、私は矢張り行きつゞけまして、横町の角をまがらうとした時に、『長野の嬢さんぢや御ざいませんか、光子さんぢやありませんか』

名を呼ばれた私は、びつくりして立ち止まつて、洋傘を除けて見ると、色白の女でした。

『嬢さんひどいぢや御ざいませんか、どんなにお呼びしても、默つて歩いてお出でゝ、たうとう此所迄追かけて來ましたぜよ、おゝしんどい……』

如何にも動悸のをどつてゐさうな胸へ、一寸と手をあてた。

『まあだれかと思うたらお前かへ、けんど私は、お前さんが此へんに居ると氣づかんもの、まあ機嫌がようて？』

『アイ、ありがたう御ざいます、皆さんも御機嫌がようございますらう、今會社の向ふに居りましたら、妙に嬢さんにかあらんと思うて、おつかけて來ました、まあ見違へる樣にお綺麗になつてお出でますこと』

きよろ／＼と私を見たり、私の着物にさはつたりしてゐる。

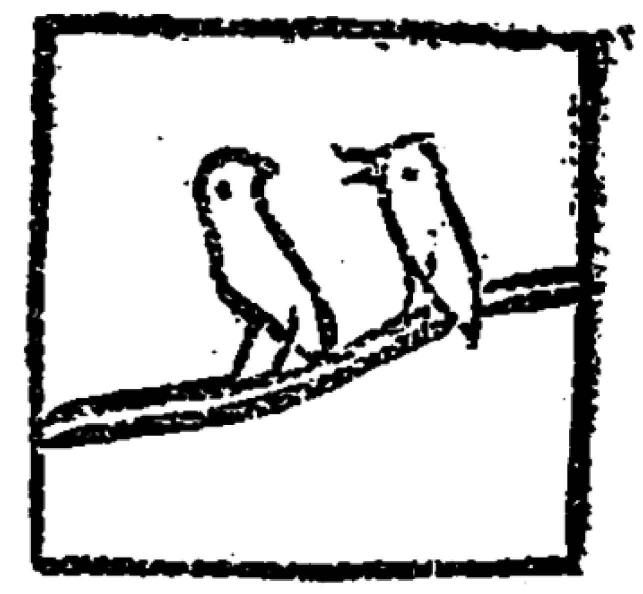
以前私の宅に居つた下女で、お清と云ふ女でした。

ともかくも宅へ來いと云ふので、私はお清について行くと、つひ四五軒あとの魚の干物を賣つてゐる家でした。先を急ぐ私は店先へ腰掛けまゝで談しました。

足かけ五年、一昨年の秋迄、よく忠實に働いて居りましたが、月の明るい夜に、美しう化粧したお清の姿は見えなくなりました。同時に隣の佐助さんの姿も見えずなつたのです。（つゞく）

散文

編輯局選



○弦上の矢(天)

牛込　隼

…………

たゞ今沈んだ心にかへつて申上ます。

むかし、美しくやさしくいらしたお胸は今はもう破れたとは言へ、その切れ切れのお言葉の中から、私はなほいたましき悲しき音樂を聽きます。

これまでのおいのちは實に苦痛ばかりでいらつしやいました。けれど、お上に目をおほふべき翳さへないことをおもうていつまでも〳〵わたくしはありたうでございます。

事實、はじめて私におあたへになつた印象魅力は、その悲哀の美しさでございました。師とお呼び申してからも私は智識とか修養とかに――便宜を得よう、いたゞかうと思つたことはございませんでした、たゞ柔かなお心と私の幼いあこがれとが、月波の野と東京の隅とをつないでゐたのでございます。

貞操といふことに一顧もあたへない自分ならば、おつしやるまでもなく、世の多くの人からもつと〳〵痛い罵詈を甘んじ受けなければならない……まして詩の教へ子として多くを期待していらしたものを……。けれど、依然として自己の身を心に任すべきものは運命の手以外、自らの手以外、ひろき宇宙に無いのでございます。わが心に起る奇蹟を絶對に否定し得ぬ以上「わが孤獨の生涯」を斷言することはできませぬけれど、只今の私の心に、志なき生涯は寂しい不幸だといふ人もありますが、そんなことは問題ではございませぬ。

處女の純潔とは偶像のやうなものではございますまいか、私にはその眞相その標準がよくわかりませんが意識的に無理にそれを守らうとするのは却て不自然だらうと思ひます、戀する人は戀せよ。

純潔を誇りて、心すねたる年老けし處女よりも、人の妻の方がどんなにかなつかしく思はれませず。私の信仰はたゞ一つ「自己に對する貞操」「自ら欺かず」これより外にないのでございます、それは終に夢となるべき者でございませうか。すべて現實につき當つて見るより外私に卜ふすべはありませぬ。女の常道と私の心と調和する日は終に來ぬかも知れぬと思ひます。來れ

ばその時はたゞかはねばなりませぬ——信仰を破るか破らぬか、それぱかりは運命に任せうべきことではでざいませぬ故。

あなたは惡い運命にお生れになつたのねえとYさんもおつしやいました、私は私の苦しく障礙多きひとりの道を憂へませぬ、伴侶なきを寂しいとも思ひませぬ私はやつぱりひとりなのでございます。

が暗きやすらひがいつまで續きませう？實生活に入る日はもう一年の後に迫つてゐるのです、破れた家の殘骸はやがて私の肩にかゝつて參るのですもの。きし子樣は結婚問題が起てからめちやくちやに心を破られた御ようすで、若き日の夢の一つ一つうち壞されてゆく其姿を見るのがうれしいとおつしやいました。

あゝわがやう先生。

小さかつた敎へ子の爲にこの運命を泣いて下さいますか、祝福して下さいますか。

「槇子さまおよろこび下さいませ、こゝに自覺した一人の女は危くも命つなぎとめて、わが信を固く守つて光明を認めつゝ悲壯極まる旅にかしま立ちします。ああ蒼海は……天涯は……私を——一人の女を泛べて橫濱から日本の地を離れて……蒼ざめた心に詩も新しく湧かせませう。悲しき私の聲がもし聞かれるならば、槇子さま、私の幸福を祈つて下さいませ、女の身一つで三千里外に旅立つまでになり來つた心を瞑想してかへりみて自分ながらかなしい。あゝわが行く道！いゝえ、いゝえ、生命のあらん間は決して倒れやしない、此心は此身を支へてゐるのですもの。けれどこの悲みは多くの人に知らしたくない、槇子さま夢見る人に語つたとて何になりませう、水無月十二日のあさ」と友は書いて來ました。水無月十二日の朝！おなじ目さめたる若葉の胸よ！春風二十四番、春の花は美しき夢物語をきく如き儚さを傳へつゝ咲いて又散りました、許されなばその圓き肩を抱きて何ゆゑ永久に幼き子にてあらざりしかと慰めむ。されど今なほわかき君をすでにく心傷ける泪の人とはゆめ思ふまじと悲しき師の君はおつしやつた。あゝ私は嘆くまい、厭ふまい、散つた花を、女にむでき鋭心を。寂しらは私の歩むべき道である、聲どもり肉痛めども同じ胸はをどつてゐます力よ勝利よ、いかに強く慕はしきわが初夏の人よ……

童貞といふことは長い間わかりませんでした、處女といふのと同じでございますか。夫婦、結婚、こんなことも考へねばならぬ日を悲み月を悲みます。人生の

最大問題でせうけれど、多くの人は私同様まだわからぬうちに、實行を先にするのぢやないでせうか、そしてそれがほんとうの道順でせうか。

欺かれてゐてもいゝとおつしやつたけれど、もし眞に私の心に奇蹟がおこつたらすぐ明らかに申上ます。それまで變化なき私を信じていらして下さいまし只今はわが胸に手を觸るゝ人あるを思ふさへ怖ろしく心がふるへます、山田邦子さまが處女が操を守るのは本能的だとかいたのは眞理でございませうか。○先生はあなたは水のやうな心だといふけれど、私は氷だと思ふ、實に清く美しい、汚れた物がついても中へは入らぬ、が氷は角がある、物にぶつかる、角を缺いてもしつくりと物にあてはまらない融通が利かない他人に益を與へることもできないといひますけれど。



河岸　京都　小林しげ子

私はひとりなるが故に狭い世界にゐて、思ひのみ空を走つて從つて獨斷的でした、オプンハートを願ひながらともすればロマンチックに囚はれてをりました。運命の悲い人はひねくれていけないとＪさんのよく仰るのが耳

に障ります、よい境遇にいらす方で、昔は純なる少女心から熱い〳〵愛情を寄せてくださいましたけれど。

もうおあたゝかくなりましたのに、なぜにおわるいのでせう、お母上さまの爲に、師を思ひまつる人々の爲に、お大事になすつて下さいまし。ララが九人のきやうだいは今机の上にねてをります、どうぞララに風をひかさぬよう……。

卯月十六日雨はれし夜。

此作者の手紙は、今一つ太田きし子さんの『尚香の芽と心』の中にも出てゐる、此方は夜雨氏に與へたものである、或る主要なる部分は抄略してあるから平素の作から見ると多少精彩を缺くやうだけれど、例の如く根柢は確かである、未だ十代の君の書いたものとしては、寧ろ早熟に驚くほどであるが、自分は飽くまでも此個性を尊重せしめたいと思ふ(醉茗)

○新しき世に (地)

麻布　ひ ざ く ら

入らつしやいなね、どうして嫌なの。顔をのぞき込む樣にして仰しやる、幸さんのお眼は潤んで、あはれみの色が溢れて居る。策盡た皆樣はもう勝手になさいと言はぬばかりだのに。幸さんと母樣は、どうかしてどうかしてと、思ふらしくした御樣子には、後でしみじみ泣かされた。

なぜ行くのが嫌なのだらう。お花見に。

あゝ美子を伴れて來たら、あゝ美ちやん居たらばと思ふ樣な事も多く、お眼にもお耳にもふれるでせうけれど、皆んな私には、つまらない。

窓に凭れて、有るか無しの風に覺されたやうに、散る櫻の花を見て、落花の下に打ち興ずる人々の遊びを思つた。藤色縮緬の羽織をめした幸さんの、黒縮緬の羽織をめした母樣の、姿を思ひ浮べた時は、今朝重て出されてすぐしまはれて終つた。濃紫の我が羽織をいたまずに居られなかつた。寂しき少女のために作られし、夜は悲慘なるかな。寂しき少女がやがて、色衣をこと〴〵く葬る時が實現したら、友は皆葬りの涙を惜まぬであらうけれど、骨肉ならぬ人の涙に何にがあらう、其の時はさう思ひながら、私も泣て終うのではないのかしら。

誓約が信ぜらるゝものならば、永久と云ふ事も、不朽と云ふ事も、たゞ文字の形骸にすぎないのであると思ふ、かたき信念さへ覆へされる事があるのだもの、私の胸には總べての事が、迷ひとなつてわだかまつて行く、どうしても私は、わからない世の中をのがれて一歩新しき世に生きたいと思ふ。

淸寂のたびに一人出で立つ姿の調へられた時、私の胸に抱けるある光りは、一倍の輝をしめし一倍の力をあたへられ、一倍の誇りを握る事が出來るのだけれど父樣が母樣がやうやくに丈延びし一人子に、自から小

笠をかぶせ杖をあたへて、たゞ立つ我が永眠の姿を見るにもませし、お歎きに耐へて下さるだらうか。

處女のまゝ終りたいと云ふ人を、嘲笑する資格は私にもないのだけれど、其の空虚な言葉を純潔なる處女の、信實な叫びであると思つて居た頃の悶えは、まだ淺かつたのである。

眠れる瞳は空に向けて體は柱に凭たれたまゝ他目からは像の樣に見えるかと思ふほど、呼吸を靜めて行くと、靈と肉とがたがひに牽引しつゝしだい〳〵にはなれて行くのが、はつきりと見える樣に思はれる、其所に何物をかとらへ樣とする時、不斗呼吸がくるつて、眼を開いて終ふ其時ほど、やるせない事はないのに、なぜ私はそれを繰り返へすのだらうと、思ひながら、柱に凭れて居たら、不斗孝さんの事が思はれた。睦まじき、肉豊なる少女と、肉貧しき少女との行末を考へて思はずにつこりした。

身を以つて奮鬪せんとする　強者の華やげる胸と、心を以つて奮鬪せんとする弱者の清らかなる胸と、いづれの頭に早く桂冠の輝を見るであらうか。どつちが信に光輝ある生涯を殘して墓を作るであらう、君の最高の希望は知らないけれど。私はたゞ、萬年の後に咲く花の香にふれんと思ふのみ。

仕度までさせてすねてお花見に行かなんだ孃樣の記事です、女の覺醒と自覺が氣まぐれであることは到底爭はれない、といふとお怒りになるかも知らないが、私は短い目でよじ子さんの變化が口ばかりでないかどうかを見たいと思ふ（Ｘ）

○留守居（八）

たま賤の女

「これは昨日停車場で合はせて來たのだが、こゝの時計はあまり進み過ぎてゐるから置いて合せるがよい」と本家の兄さんが置いて行つて下すつた、金側時計をそつと机の上に載せて、縁側の隅から踏臺を持ち込み欄間の高さに掛けてある、滅多に止つたことのない三十三年前横濱から買つてきたのだといふ、柱と同じ色の緣にくすぶつた、古い八角時計をわざと止めてしまつた。カッチンと繰り返してゐる金色の分銅を握つたのが何だか生きてゐる金魚でもつかみ殺したやうな氣がした。微かな音でもまるつきり絶えてしまつたので急に家の中が冷くなつたやうである。それにたつた一人留守居してゐるのだから變に淋しくなつたと思ひながら、開けてある雜誌に目をおとすと極めて小さいもの響が待つてゐたやうに、細い針を動してゐた。たぐまつてゐる鎖を引くやうに掌へ載せて見る、手答ある重みがあつて、滑かな裏面の蓋が心地よい手ざはりである。

自分のだとすればこんな大なものと言つてすぐ嫌惡

の感を起すのであらうに。

がたがたと荷車が庭へ來た音に障子を開けるともう引いて來た四斗樽を下ろすばかりに細引をたぐつてゐる、年頃の小僧と二人がかりで臺所へ入れてちやんと呑口をつけてくれた。夕がたまで誰も酒を買ひに來なければよいと思ひながら、若草のところどころ白く光るやうに風に吹かれてゐる前の山を、朝と違つた心持で眺める。まるで銀粉が降つてゐるやうな霞が自分の立つてゐる軒からいつぱいに立てこめてゐるばかりか紅い蕾ばかりであつた櫻の枝には、まだいくらも風に吹かれないと言つたやうな花がふりかけたやうに咲いてゐる、ぼんやりしながら流れるやうな浮ぶやうな白い雲を花よりか遠く見てゐると、珍らしい懷しい、何だかわからない音が近づいてきた。あゝいい音だ、あらどうしようと考へる咄嗟に「留守ですから」と斷ると若い男の憎げの無い顏のが二人、一は月琴を一はなみの琴を持つて、何か突張るものを横負ひにした後姿を見よといふやうに踵をかへして「あゝ」と此處までは入つてきたのに、と言はぬばかりの嘆聲を洩らしながら出て行つた。三年のうちに唯一度きた琴彈に何か怨でも殘されたやうな氣がして悲しくなつたから時計を思つて中へ引込む。日ざしは恰度ふひる頃になつたが……。

此の君の文の乾き切つてゐるのは幾度か生死の境を通つて來て笑ふことも泣くこともすくなくなつたせいであらう、戀人の言葉から今は其心を動かすことはできまい、況んや(X)

○白日の遊里

よこはま　冷　花

煙れる太陽に、高樓の硝子障子は無慘にもいたましく身動きせず、暗き千本格子は陰鬱に欠伸し、紫に黄に藥の廣告紙ちらばれる亞鉛塀の內、白日の遊里は曇れる額越しに、おそるおそると上目づかひする。

かすかに塵埃の立つ大通りの片側を、むなしき足取して小學校の生徒が行く、水色の空には「あそび」に似たる白雲が悠々と微笑の口をすぼめ、其處よりひゞく音樂と、娼妓病院の黑板塀の、チョークの跡のたゞれたる笑ひとの衝突の中に、四月の白い櫻は放心した。

光る入口の板の間に、鼻緒の太いふくよかな上草履亂雜として、「三日月樓」の大時計は二時を指し、寢衣の褄を取れる櫛卷の横姿よぎれるあとに、靜寂として中庭の稻荷の小祉、白き光線のうちにきまぐれの夢を見る。

重たき鎖につながれたる肉體を、けだるげに障子の內に夜を待つ人々よ、逆運のいたみに心の目を失へば「時」は容赦なく獸の血を注射し去り、引手茶屋の掛行燈にもゝ色の灯のともれば、脂粉ほどこせし女のむく

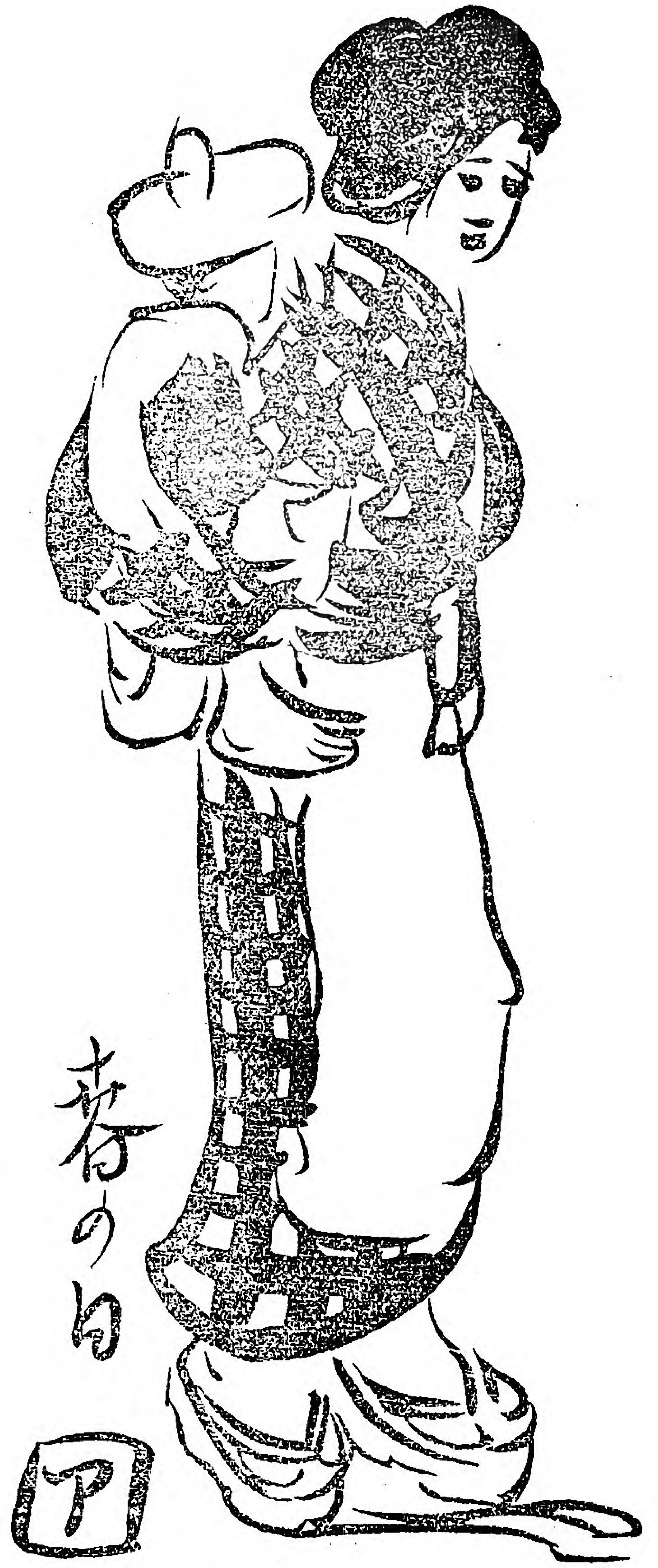
ろ、金の屏風に居並び、そよ〱と暗き方より夜の風起れば、神風のカアテンはゆれて、とりすましたる白き顔見ゆ。

藁灰の如き生活の中にも、まことの戀の金粉はとばずや。あひゞきの夜に、めかくししたる窓の下を、流しゆく太竿のやるせなき狂亂に、ビイドロの如き幻影はくだけ二つの魂の接吻の音して、唇にふるる毒の盃を見ずや

とある窓に頬杖つきて、水色の煙をはける女のふざけたる目、來かゝりし處女の、憐憫と悲憤とに濡れるまなざしにそゝがれて動かず、裏路の石灰ぬれる大きなる芥箱には、憂愁の影の如き女乞食の食欲うごけり。

亞鉛塀の外を橄欖の葉の色したる自由の大河流る、太陽はたはむれて銀をまき、とまれる船には家族の者あり。家なき人の幸は、遠き港にあぢきなくたゞよひまどろみし川の名も知らず、油の如き水面をすべり行く時。

健康診斷すみし醫者の、「若葉樓」を出でしあと、糜爛したる女の視線の外に、庭のものかげ小き草のライフ生る



春の日　廣島　後藤あさ子

私はこの人を長曾我部菊子を終始惡ろにするといてた開白井花子さんと間違つてゐた、あまりにキザな文章で氣がついたのである、遊里の白日は絶好の題材だ、何故女として書を作るのかなかつたらう。悟い悟れ邪道の人。(X)

下手な現代の詩を散文になほしたやうではあるが、併し此の位ゐ豐富な文字を持つてゐる女性は少い、好き嫌ひは別問題として、女性が此れだけの文字を自由に使ひこなした技倆には歎服する、確に才人の傑作がある、幸に自重せよ（醉茗）

○逝く春の夜

京都　しづか

「今鳴る鐘は芝か上野か
　ありやあさ草か……」

十日餘りの月光はさながら湧き立つ泉の如く地上に漲る、立ちよらば花の蔭に袖は雪ともなりぬべき逝く春の夜、遠く幽に、いや目のあたりにも淡い霧の樣なものが立ち迷ふて、今流して行つた許りの歌の主は次第に輪廓がぼやけて、瞬間の胸に宿る幻影か淡い墨の滴りか、あるかなきかの影になつて、多情な夜の氣分に醉ふてうつとりとたゝずむ私の目路を遠ざかつて行く、今の黑谷の初夜を聞いてふと浮んだ歌なんだらうあざやかに流して通る時、私は關東者だなと思つた。靜に土を踏む草履の音が何となくさう思はしめたのである。灯の下にせつせと針の手を動かしてゐらつしやる母樣の前に座つて兩手を膝に置いた儘、御湯から歸つた許りの心地よく疲れた體をぐつたりとして、折柄なりいでたあの鐘の音を何の雜念にも妨げられずきゝとれた時、やはらかにゐこつた歌の聲、私はつと氣儘に立ち上つた、さうしてそつと外へ出たのだつた。

　綠濃き松と今宵らは花ちり〴〵の老櫻の間に　鐘は幽玄な音を納めて重い沈默にかへつた、歌の主も我が見る月光の中から消えてしまつた。

　一人反對の方角に步みながら、芝か上野かありや淺草か、私は二度も三度も口の中で繰り返した、何と云ふ恨めしい樣な悲しい樣な歌なんだらう。あの刹那不思議に動かされて美くしい情の動搖に滿ちた心を、だんだんに强い悲哀がひたして行く。俗に云ふ渡り者の類か捨鉢の樣な職人世活の旅から旅に移り行く心の底には何時も一種孤獨の遣瀨ない悲哀がひそんで居るに違ひない、かゝる夜の鐘の音に追憶の悲しかるべき旅の人よ。私の瞼は何時か熱かつた、春の夜の安らなるべき夢の間にさへ面影の身にそひて忘れ難き君は、東都の人となり給ひてより早や二年近く、曉に夕暮にはた初夜に御あたり近くひゞくは芝のか上野のか知らねど、黑谷の鐘は七年の君が京の住居に深い追憶を殘してゐるであらう。忘れじとの御誓を命に淋しき孤獨の中に終らんとする我が生涯よ、淋くも悲き明暮の鐘はよく我が心にそふて鳴る。幼き日より禪僧の堂に入る時なる相國寺の鐘は十五夜の月の東山をはなれる頃、建仁寺のはやい更けて床に入る頃にと、聞き馴れてしまつた。何心なくきゝし幼なき儘の胸に、憧憬や悲しみや淋しさや涙の味を敎へたのは誰れ、敎へられねど何時しか悲哀にふけり易く、更に持つ放浪の心よ、ひとしほはげしく强く痛切にしておいて、人は東に去つたのである。

　花ある處へ行きたいと思ふ、でなければ鴨川端の柳

の蔭へ、ほしい儘なる心を抱いてこの月のかたむく頃迄彷徨ひたい。遠くゆく水を見つゝ、無情なく東をくぎりて立てるかの山なみをあふぎつゝ、けれどそれは只夢の樣な空想として葬られた。次第に更くる夜を女の一人歩きは許されぬ、ふと灯の蔭の淋しげな母の顏が霞の樣に心をおほうた。うなだれて靜にもとの道を歸る。

何となくうるほひのある文字である、旅の者の小うたを材料に捉へたのは新しくはない、けれど此一文には何處か情味がゆつたりとして居る。（記者）

○南國へとあこがるゝ人に

平塚白百合

――綠青玉をとろ〳〵とかして、水と空と山と野にしいた、南國に行くんだ。

冬と憂愁のくにの人々よ、さよなら！

若い人はかう云つて叫びながら、美しい音色の鈴を結びつけた橇をかつて、胸の血を跳らせながら南國へとあこがれてゆく。

私は橇の上の若い人に云ふ。あなたはリンゴの花さく、北國の美しい平和な神秘的な春をでぞんじですか、リンゴの實が結ぶ頃のゆたかな北國の秋をでぞんじですか、牧場の遠く海の見える札幌の夏をでぞんじですか。

椿の花の赤い南國もいゝでせう。けれどリンゴのほの紅い花のさく林もお忘れなさいますな。暖潮にゆるむ筋肉より、男はやつぱり寒潮にきたへられた筋肉が雄々しいではございませんか。

水鳥あそぶ水邊にねむるよりはラッコ追ふ小船にたたかふ方が、私はよりよく好きますの。

信天翁群る青い島よりも極光のひらめく荒い島が、どんなにふさはしい事でせう。

なぜあなたはそんなに、南國へ、南國へといそぐんでせう、アカシヤの並木ももう柔かい芽をふいて、胸のあかい小鳥のうたふのも程なくですのに。

橇はまあ雪をけたてゝとぶやうです。何かはやるあなたの胸に北國のシンボルをあたへたいと私はあたりを見まわしますの。

もう一度ふり返つて下さい。凍えた銀色の街路と氷山のやうな山岳と。

アカシヤの梢がブル〳〵ふるへながら、あなたの橇の上に細い枝をずらして最後の握手をしようとしてゐるではございませんか。

あゝ何日の日か君はかへりますのでせう、南國へとあこがるゝ若き人よ。さらば!!

好い散文詩だと思ふ（記者）

○草三つ葉

野の女

光盲ひたる曇り日の夕の庭は、だん／＼と暗くそめられてゆく綠の悲しみに、ふかい沈默のさまを見せてゐる。矢張、こんな色の日であつた。今、牡丹畑の門のある所に、すぼけた四郎さんの家があつて、若い時は美人だつたらうと思はれる、顏立の佳い瘠せた小母樣が、そゝけた疊の上で、がら／＼と、一心に絲繰りをやり、其の前の雜木林の小徑で、四人の子供が、何かして、遊んでゐた。突當りの、丈高い草でおほはれた狹い溝の向側には、竹籔が青い壁のやうに立つて、鈍色に沈んだ林の內に、小米櫻の白が、斑な明るさを見せてゐた。乙女椿は、もう旣にちり、山吹の花が、處々に、花櫛のやうな形をして、たわゝに咲いてゐた。お百さんの顏は白かつた。お芳ちやんの顏は黑かつた。二人ともお下げに綺麗なりボンをかけて、女のやうな四郎さんと、面白さうに話しをしてゐる。ひとりはなれて、溝ぶちに踞んだ七八つのお煙草盆の子は、寂しさうな眼をして、足元の婆嫁菜をむしつては捨て、むしつては捨て、籔の內を透かして見たり、羨しさうにみんなの方を見たりしてゐた。籔の內では、お芳ちやんの姉さんが、野生三つ葉を摘んでるのが、ちら／＼見える。「あたしも、いつて摘みたいけど、何だか恥かしいもの……」と、少女は、ぽつと頰を染めて、いつまでも其處に踞んで居た。恰度、數多の石で、自分のぐるりを塞がれてゐるやうな壓迫を覺えて、どうしても「今居る所」から、動きが取れないのである。お百さん達は遊びに方外てゝ、ちつとも此方を、かへり見ない。少女は、ます／＼、いら／＼した心もちになつた。どうか、早く、このまはりの石が、くづれて欲しい、さうすれば自分は逃げられる。我儘の出來る世界に入られる。軈て、少女の願ひはかなつた。ぐら／＼と、耳にきこえぬ音たてゝ、みる／＼石はくづれはじめた

「はアちやん！飯事しないこと？」

と、お百さんが、忙がしく、白い手でお出で／＼する。

「えゝ……」

「いらつしやいつてば？」

と、太眉ひそめて、お芳ちやんが唇を反らす。

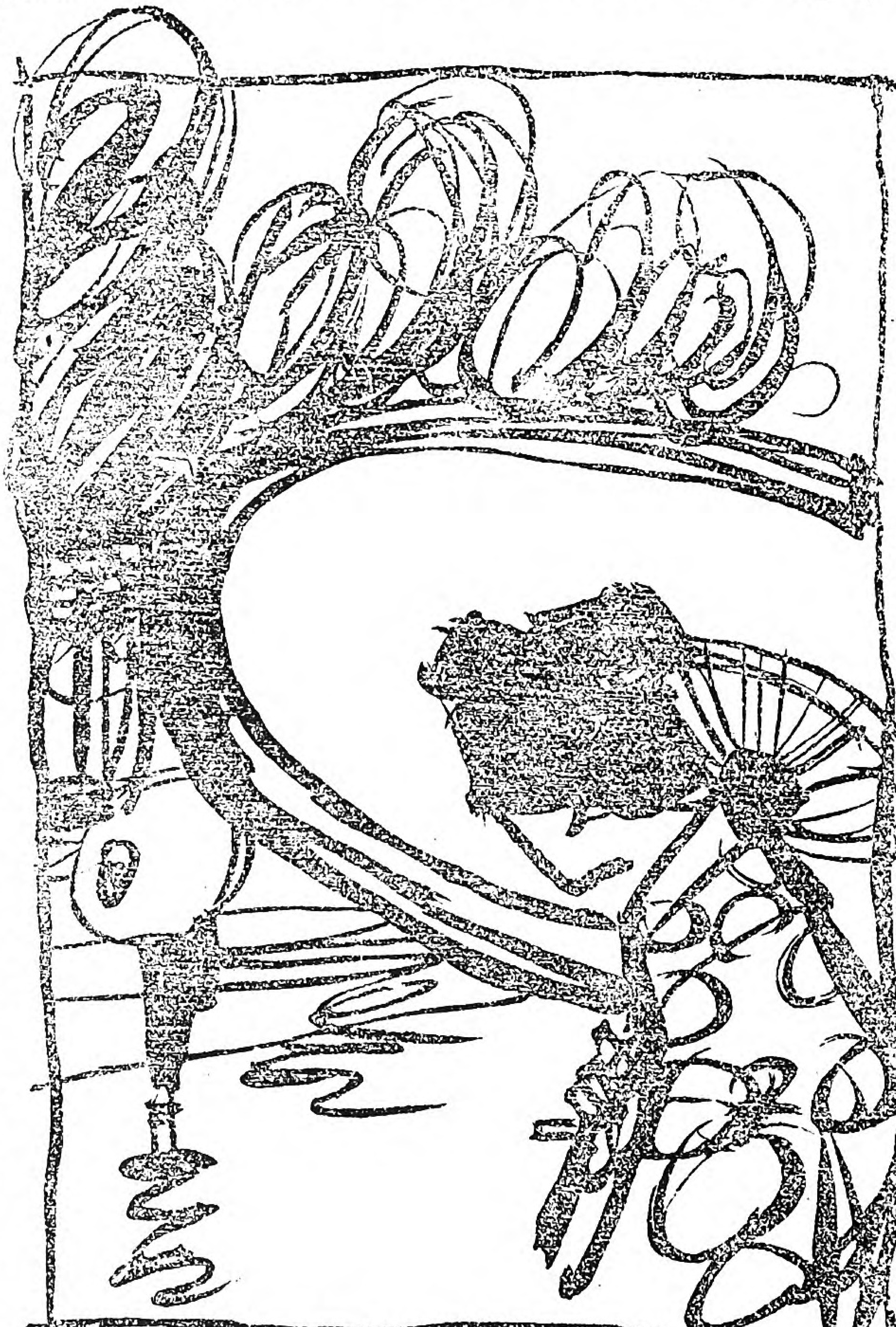
「えゝ……えゝ……」

と、女の子は、恥しさうに、短い袂をくはへて、步き出すと、お芳ちやんは、一寸、可笑しさうにお煙草盆を見て、

「あのネ、四郎ちやんが旦那さんに、私が奧樣、お百さんがお孃樣でねえ、はアちやんが女中！」

「女中！口惜しい！」と、少女は、ワーッと、袖で顏を抑へて、何物にか、つき飛ばされたやう、無意識にどん／＼自家へ驅けてゆく。四郎さんは、面白さうにそれを見送つて、「いゝナ俺旦那樣だい！」と、石の上に飛乘つて、萬歲と云はぬばかりに兩手を上げた。

少女は「口惜しい！口惜しい！」と、一切夢中で、駈けてくると、ぱたつと、門で足が止つた。そして、つと、垣根にはね返された。「馬鹿！何故泣いた？」と、心で叫んで、間が悪さうに、そうつと、山茶花の葉をちぎつて一寸なめて下に捨てた。何だか赤い目して丶は氣まりが悪くて家へ入れないので、つと林のなかに入つた。どう考へても、口惜しくて〱仕方がない少女は思ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、夕方迄で其處ら中を彷徨つてゐたが、鍬をかついだり草とり笊をもつたりして、歸り仕度をはじめると、はぢかれた樣に駈け出して、家へは行かず、胸をどらせて、さつきの竹藪へ、いつて見た。苦も無く溝を跨いで蜘蛛の巣を拂ひ〱



春雨　神奈川　角田ふく子

若椎の木の植込をくゞり拔けると、小さな草ぶき屋根の裏手に出て、水涸れた溝のなかは青草で塡まつてゐる。少女は「三つ葉！三つ葉！」と目を皿の樣にして、其のなかをかき廻したが、みなお芳さんの姉さんが摘んでしまつたと見えて、少しもない。少女は、非常な損をしたといふやうに、深い〱溜息をついて、土のついた小さな自分の手を、不思議相に見たその少女は、私であつた。

友の大方は、人妻となつた。柔弱な心身をもつた四郎さんは、役所の給仕、筆屋の小僧、醫者の書生と、轉々として、適齢の身を以て、何のなすなく暮してゐる。武藏野の一隅に巢くふ、賤しき貧家に、四五人の子の姉と生れて、

私は實に不幸な女であつた。烈々たる智識欲の熱火も境遇の惡水に消され〳〵て、今尙ほ、不遇に泣いてゐる。噫々、全力をふるつて生きなければならぬ、得られぬまでも、氣高き心となるべく努めねばならぬ。美しき、虛僞の花輪に飾られし幸福などを願ふのではない、唯々、何者にも愧づることなき、一個の「人」となりたいのである。さるにても、暗い〳〵今日の日よ、思へば私の一生も、かういふ色の運命たるべく呪はれて居るのではあるまいか。

また冗長のところがある、小說なら小說で宜いのだが、小品文の形式を取つてあるものとしては、もつと省筆を要する（醉茗）

○葉櫻の蔭

英子

都の雜踏を此處に劃つて所謂十里の墨堤を洗つて行く隅田川、枕橋を境に一歩踏み入れば自ら別天地の感がする、蒼穹一點の浮雲もなく滔々として來り又去る川の面を見ると直ぐ春雨に濡れてや水も靑く行くの句を思出される。あゝ船がくる、と見る間に鼻の先きへ來て了ふ、パシヤンと竿を突き込むや、パッと氷の樣な飛沫が上つて人はッ、ッ、と舳先まで脊を見せて行く、やがて凝脂滑らかな面をスーッと別けて行く跡から、午後の日ざしがぼんやり從いて行く、煙管くはへて船頭殿といふ句のそれとは情趣が違ふけれど何となく口吟まされた。其角庵芭蕉庵例に依つて變りはないけれど、これのみには五風十雨々害をなして樞くち軒くづれて、又之を修覆した跡が年々多くなる。これが電車に乘り活動寫眞を見る現代人の胸に澁味といふものを忘れさせぬ元祿時代の所謂茶人の住んだ跡なのかと驚異の眼を見張らぬ者があらうか。所々の石などに、白露の句がほりつけてはあるが、其位の者が如何して宗十郎頭巾を被つて道行を被た其人の面影を思浮べる助にならう、何となく物を言ひ殘した時の樣にぢり〳〵する樣な淋しみを感じた。女がざるにあさりを入れたのを持つて通つた、襟足が綺麗だつた、上には名殘りを留める落花が點々として繪の樣な感じを與へる。長命寺の櫻餅は相變らず甘い、櫻の若葉の芳烈な句が頭にピンと響いて其儘恍惚として眠つて了ひたい樣であつた。少し行くと道が曲がつて居る、眉墨優な業平朝臣が我が思ふ人はありやなしやと言つた處である、當時の都鳥なる鷗は今猶ほ川面をかすつて飛んで居るけれど、此處のよしず張りに言問ふべく來る人の幾人が、やさしい思ひに都鳥の行方を見守るのであらう。隅田川原の空氣、昔も今も變つて居やうとも思はれない、古へ朝臣の目に映じた鷗は、或は今彼處を飛んで居る鷗であつたかも知れない、其時の業平の胸には如何な想ひがひそんで居たであらうか、かうした語り草がなければ、隅田堤は只千住通ひの荷車馬の通る道なのである。市場へ買出しに行つて歸つてくる八百

屋の青菜も美しくはないであらう。

木母寺には梅若塚がある、緋の衣に紫の袴、稚兒輪に結つて倒れて居た美しい子を思ひ浮べさせる、何となく淡い涙の出る樣な言傳へである。名を聞いただけでも神秘的な物語りでも有りさうな水神の森から船に乘つた、花誘ふ樣な冷たい風が吹いた、船が岸邊を離れる時ゆらり一搖れ搖れる、船に乘る快樂は實に此の一瞬間にあるとつく〴〵思つた。あゝ此の快樂、船に乘る人は誰も誰も味ふ遠い離れ小島に流され給ふたやんごとなき君達も、干魚にふくめた松葉ではかない便りを其角と約した英一蝶も、乞視日本男子業旭日影翔南極天と壯志滿々として出掛けた白瀨中尉も、同じく此心持を味つたに違ひない。水神の森は最早離れた、昔と今とを引離す時代の流れの樣に私と森との間には淼々とした水がある、四十九里でなくとも惆悵の情を起さずには居られぬ、あゝ懷しい水神の森、其處には綠したゝる森はないけれど、青白くずんだ池はないけれど、其處には何者かあるやうな思がする。大工が入つて宮の手入れをして居たきり何もなかつた、けれど何かある何かあると思はれて仕方がない、空はどんより曇つて來た、やがて來るべき天變地異でも意味するやうだ。あゝ此の煙突が黑煙吐く鐘ヶ淵の暗い囹圄に無形のくさりにつながれて居る人が、そも幾人あらう。又冷たい風が吹いた、此樣なのが春逝く夕とでもいふのであらうか。

船に乘る心持を言つたのは面白かつたけれど、英一蝶と、白瀨中尉とを一しよに並べたのは聊か驚いた（評者）

○夕ぐれのひとり

金澤　山梔

コバルトに光つた醫王山が見える……。

美しい空と光つた山と長い緣側と只ひとりある私と語るものは、ひとりもないけれど此所にも人生がある、私はいつからとなく夕暮此所へ立つ子となつた。

空が美しい明日の大漁を知らせる雲は紅く〱彩られて其間が水色のリボンを結びつけたやうに華やかで屏風にはつてある色紙がちやうどあれのやうだと思ひながら瞼を閉ぢると善福寺の鐘が鳴つてきた。午後六時の空の色とあの鐘の音とそこに何か密接の關係があるやうで鐘が鳴ると空が美しくなるやうに思はれたり空が彩られると鐘が鳴り出すやうにも思はれて刹那から刹那へつゞく響を數へる。美しく澄んだ水の中へ不意に石ころを一つ落したやうに靜かに〱消えゆく日暮の空氣を振動させるのがたまらなく嬉しい、柔しい尼さんの居られる庵室に泊めて貰つたやうにも思はれる、あゝ音波が漂ふ、刹那が跳る、私は凝乎と柱に凭れた儘響を數へて居るとひとりでに淋しくなつて涙ぐん

で來た、荒んだ〳〵血汐も涸れつくした今は反抗心ではないけれども何だか人と交はる事がいやになつて終日人と口をきかずに離れて暮して居るけれどもつひ淋しいとも思はないのにあの鐘をきくと何だか淋しくなつて。私は幼ないから鐘は淋しいものだと思つた、善福寺のおんまい樣が私を可愛がつてくれて境内の手洗水のところで惡戯をして居ると本堂から手招きをしてよくそこで遊ばしてくれた、廣いうす暗い線香の香のしみるやうなところで、無口なおんまい樣と只ふたりお佛樣の前に座つて赤い達磨樣のお掛物の說明をとぎれ〳〵にきかして貰つて居ると鐘撞堂から不意に鐘が鳴つてきていつもより響きの大きいのに急に母を思ひ出してワッと泣き出したのは、七ツの頃だつた。冬の夕方炬燵でお母さんから昔し話をきいて居るとゴーンと響いてきて俄に恐ろしいやうな淋しいやうな氣がして灯をつけて頂戴とせがんだのは十位の時だつた。あの頃は憶病な子で夜映る自分の影法師すらひとり見る時は氣味が惡くつて泣いたものだ。今でも自分の影法師には泣けるけれども恐くつて泣くのではない。

鐘はまだ止まない。

物に感じやすい大きい姉は始めて上京した其四月は毎日夕暮になるとは泣いて居たといふ「程近き護國寺の鐘は故鄉の鐘を思はせて」といふ手紙がよく來た、次の姉の始めて上京した時には「江戸川べりの櫻美しく」といふ華やいだ書きやうであつた、來年出るといふ妹はどんな風に感じるだらう、この四月の夕ぐれを。

鐘は止んだ、けれども餘韻はなほ腦裡に殘つて居る空は紅いのがうすれて紺靑色の雲が湧いてきた、私はまだ去らない。

窓によりて鐘を聞く、詩にも謠にもいく度か作りふるされた材である、この君の奇禍に罹りて足痿となつたのは二年前のよし、一室に籠りて鐘聲を聞くといふ事すでに悲むべし、されど文はいまだし（X）

誌友會雜感

▲一時過ぎてからであつたか、一人の仕事師らしい男が、紙を被せた花束に一通の手紙を添へて、受け附に置き去つた。蔽ひの紙をはねて見ると目も醒むる許りの花束であつた、桃色の封筒は無名である、唯優しい美しい女文字で、寄附する旨を書き添へてあるのみ。河井樣に伺へば何やらお心當りあるらしくうなづかれたので、早速花瓶はと見るとお誂へ向きなのが床の間にあつたから、卓上にとその花を飾つた。

▲森田草平樣のお話、それは立ち聞きに過ぎなかつたけれども、矢ツ張り我々標的を失へる新しき人々の、叫びたくて藻掻き〳〵而も叫び得ないところを、殘りなく物語つて下すつたのであらうと、心強く感じた。

▲佐藤まず子樣御姉妹の常盤津も義太夫も、受け附に遑ない爲能くは聽かせて戴けなかつた。嘗ては『煤煙』の中に現はれたる人の、霞の衣を踊つた時、私は柱に背を凭して、踊の稽古の此の上なく辛かつた昔を思つた。癖のない、枯れ切つた其舞振り、異々の聯想を生みながら私は唯見入つてゐた。（斷崖の人）

篠笛

蘇生法師

樂也者鬱於中而泄於外者也、金、石、絲、竹、匏、土、草、木、鳴るもの豈八音のみとせんや、われ人なんぞ鳴らざらむ。

金田よし子君より、「かなづかひのまちがひの多かつたことは私も呆れてしまひました、さうまでとは思ひませんでしたに……。人に書いて貰つたんだらうつてあんまりな。近い内一度改野たけ子川崎道江さんを訪ねますから、それまで心のありたけお疑しておいて下さいまし、おや女だつたか、まだ若いなつてお笑ひ遊ばずかも知れませぬ。改野さんてば先日仰つてゐましたわ、しのだとみ子様をたんと此頃お可愛がりなさるつて、噂はふじ山よりも高うございますよ、或は誰かさんに怨まれるかも知れないことよ。私なんか可愛がつても甲斐がないからこなされるは承知のことだけれど……」と申越されたり。

第三者なる改野川崎に逢はば君の詩の自作なるを證し得べしと思へるにや。君が十八ならざることは君みづからかつて法師に言へるにあらずや、改野の目は法師の目に非ず、改野、君の若きに驚くともわれあづかり知らざるなり。篠田富子を云々するに至りては、人格露出、また遺憾無しと申すべし。われもと感情の人なれど、何を求め得て篠田富子を愛し、何を求めがひなしとして君をこなすと言ふか。まされるを採り劣れるを捨つるは選評者の任なり、君の友なる蔦の葉を毎號六號に組み入るゝが鍾愛の證を示すものとすれば、毎號君を三才に採る醉者は豈君を愛する人か。むかしは某詩人をさなくして卒果を手にしてちまたに遊び十ばかりの女の子の羨ましげなる色を見て、「目をつぶりてわれにキスせしめよさらばあたへん」とすかして、其キスを傍人に賣りたりき。法師は西の國のかしこき詩人にあらず、君はた林檎を羨み見るほどの人とも覺えず、沈默をちんまく、昨夜をふうべとよめるは到底辯護すべからず、いはんややれだゝみをはじようとよめるは奥津城をおきつじやうと爲すにひとし、思へ、苟も詩を作る程の人にして捨小舟をすてこぶねと訓ましむる者ありや。君の先蹤なる山田西崎(きく子)の二人すら、居るをいる堪へるを堪えと書き、似而非を知らず、形而下を知らず、水口相貝をよみ得ず、わが言ひとり君に酷なるにあらねど、ねがはくは愚劣なる揣摩を遏うして怨嗟の聲を發するよりは、先づ修養せよ。

試みに早川花子に、1青端　2獨樂　3楷　4凍傷　5鬼才　5馬醉木　7瑞穗　8黨を樹ての八語を讀ましむ、「1せいじ(何だかわかりませんの)2こま　3よめません　4とうしやう　5きさい(天才以上の才)6ばそ　7ずゐほ　8とうをたて」。知るべし、楠正成は人を以て之を造り忠義に用うるものにして、滿洲に横行せる馬賊は馬どろぼうなるなり、諸孃まことに賢し、タクタク(綽々)としてヨヨク(餘裕)あり、詩文立ちどころに成る、欽ずべき哉。

往年、醉者の教へを受けて詩を文庫に出しし時(水野葉舟服部嘉香溝口白羊北原白秋與謝野晶子君等皆同人たりき)相呼ぶに「爾汝」を以てし一たびも醉者を先生と言ひしことなく、白犬みづからよろこぶとにはあらねど、われ等を待つ寛宏にして絕えて制肘せざりしかば、ほしいまゝに延びほしいまゝに蔓りて、或時は無情刻薄なる評語を慍りながら終に周圍を離れず、今なほ其蹤に從へり。學問に交るにあらず人格によりて

友たりしなり。おもへらく、この心をうつして諸孃にのぞまん。諂諛はわが事にあらず、迎合また能くせず、むしろ死に至らざる鞭撻をもつて且導き且たすけんと。

内藤鳴雪翁『ホト、ギス』に詩經の詩を拔いて、忘れてゐるよ其昔、ワタシをチヤホヤかしづいたを。頼みに思ふセナ達は耳が遠いかたゞ見てぢやなど、拙惡無殘なる譯を載せつゝあり。字句の註解はやゝ感謝すべし、其譯はひとり古人を辱しむるのみならんや。わが學は尋常小學四年の課程を踏みしに過ぎず、時計の面の數字を讀みえずアルハベツトの順すらしらねど、わが知れるほどの文字は人も知りわが解し得ることばは人すべて解し得べしと思ふを以て『詩經俗解』を讀むを耻とすると共に諸孃の素養を疑ひ實力を侮るはわが初より爲し得ざりし所なりき。悲しいかな諸孃の中の或者は「菁菁たる莪彼の大陵に在り」を解し得ざりき「有北」「有昊」を知らざりき。

長曾我部菊子が『黄金杯』を讀めるはすでに知る『サロメ』は奈何。山田邦子は今はさすがに『卽興詩人』を卒業せしならん、『背教者』は如何に。浮華なる二十八代集を辿らんよりは素樸なる萬葉集に行け、『紀』を繙くに先だちて『記』を見よ、都大路に花やる暇あらばせめては『文選』のはしをだに覗ひたまへかし。『今は古書堆裏に沒頭する時にあらず、生きたる文字生きたる詩に就かざるべからず』といふか、銅鐡の額よく大霧を作す者あり、願はくは人に囚へらるゝ勿れ。

四月三十日、夜來の雨止んで庭なる牡丹花の壞れし朝なりし、母家より鍵の手に建てし小家に移さるゝ身となりぬ、故父の初めて母を見し室、ついで娘のはじめて兄に見えし室、今はわがしばらくの家たるべく與へらる。その夜。

新婚旅行の歌

丹頂

姉樣のゝ中へ入れて下すつたお手紙ありがたう、えゝもうちやあんと讀んでからくれたの、隨分常識をかいてるわね、人の手紙を見るなんて。これすなはちエベン信者の秘密を破るつていふんだわね。だから今度の時にうんとうんと油をとつてやつて下さい。

姉樣の寫眞屆いて？△△さんにあげるのですもの、ハコセコだつて帶だつて飛切といふ所でらん遊ばせ、八代さんよりはちつと肥り足りないようねつていつたらおこつて。

ヤヘイ（八重子）さんから屁が來るつて言ふの、ぢや、からでヨーキ妃日本で八代ヤヘ子よ、いゝでせうつて言つたらうゝむと言ふかも知れないわ。

夢二さんは私を筒袖姿にかいたけど、ホヽ、私まさかあんな小學生でございつて風してないことよ。あのねあのもう少しあの、ハイカラなの、袖だつて元祿で。

先達て學校から歸つて來てどんどんと足踏み鳴らして襖の外から、ねいさアんと聲かけてがらりお室を明けたら、見たことのないハイカラさんがすまあして姉さんとお話してるでせう、びつくりしちやつたの私。だつてお客樣があると知つてりやおとなしく入つて行くんだつた。でも姉さアんおなかゝが空いた、お菓子、お菓子とねだれこまなくつてよかつたわ。

で、姉さんの背中へかぢりついて「え、誰アれ！クラスメート！それとも外の方？」て聞くと、「御覽なさいな恒子さん、あなたが居てもかうなんです、いまにおつぱいなんて言ひ出すから」……つてうそうそ、姉

さんは瀬井戸へ行きはしまいし、何時うそを買つたらう。ひどい事。お客様が「まあつうちやんですか、油をこぼして先生をころがしたつてね、あのお話きかして」つてお茶椀をとつてついで下すつて、めし上れつておつしやるでせう、大河内つね子さんよ、もとの三宅露草。沼倉ふく子さんて方が美人だと評したこと御存じ？え丶まつたく其通りよ。姉さんだの白百合さんだの、醉茗先生のとこのおうたさんだのと一しよにとつた寫眞にあつたつけ。

醉茗先生とこのおうたさんは私知つてるの、唐澤秀子さんと二人で話友會の用でお伺したらいらしたの、寫眞にはお羽織が一尺ばかり退却してお肩が拔けてゐるの、いつもさうか知らと其時氣をつけたんだけれどその時は召していらつしやらなかつた、今度は氣をつけて見ようと思つてよ。

さういへばたつた今、うちから五六軒さきのおてふさんてかあいゝ娘がお嫁にいくので私やじりに行つたの。私の時はあのおかもちを背負されることはまつぴら、帶はお立にしてとお母さんに約束してよ。

一寸々々、いゝ歌敎へて上げませうね、それは私の方の先生のことなの、そりやおくさん孝行でそのホネームンの時月給が少くて困つたらうといふ所で皆が作つたの。

一、アタシの先生のいふこときけば、ぼくはオクサンと新婚旅行よ、
　何て間がいゝんでせう。
二、それも電車ならまだよいけれど、二人揃つてテクテク行くとは、
　何てまがいゝんでせう。
三、公園の茶屋に腰うちかけて、シラーと二人で甘酒一杯づゝ、何て
　まがいゝんでせう。
四、それでも立派にすました積り、あまり歩いてはオクサン可愛そと
　何てまがいゝんでせう。
五、お錢使へばわけないけれど、二十圓の月給では惜くて使へぬ、何
　てまがいゝんでせう。
六、五日に一度はお湯にも入れ、そしてお白いベタベタつけろとは、
　何てまがいゝんでせう。

うそな本とかアタシ知らないことよ。

あなたアタシのことをヒヨツトコだつて姉さんに仰しやつて？うそでせう！ね！！念のため寫眞とつて上げろつていふからいやよちつたの、特別に鼻を高く寫してもらへつて言ふんだもの、量つて見たらこれだつて六分はあるわ。

アタシ鼻の低い人嫌！（あんまり高くてもいやだけれど）兄さんのお嫁さんには背の高い鼻の高いのをと思つて、いつ貰ふのつてきくと二十五圓で喰へるかいつて、口惜くてたまらないけれど兄さんの鼻は私のよりちと高いの、姉さんのも量らしてと頼むけれど逃げてだめ。いゝわあしたの晩、夜中におきて鼾をかいてる最中に曲尺をあてゝやるわ。

姉さんはいまあに私をうつちやつてよそへ行くんだつて、かま ないわアタシ、あの人お嫁に行きたくなつたんでせう。

　　櫻散る日、谷町のつうちやんより、
　　　からすかんざゑもんさま。

そして「うちの姉さんの言ふこときけば、私飛行機で新婚旅行よ、何てまがいゝんでせう」と書きそへてありますの『うちの總子はくろだけの竹の中から生れ出て、竹足竹馬竹の獨樂、凧も上げそろ赤りボン、やんちや、やんちき、それでおきれうは三五夜中の月の眉……』

（からす）



和歌

與謝野晶子選

○（天賞）　岩代　百合子

葉かげなる青き無花果しのびつゝ物を思へる青き無花果

○（地賞）　豐後　散る花

新しき櫛に油のしまぬごとくもどかしきかな君を待つてと

○（人賞）　神戸　島谷允子

消えずあれわがくらがりをたまさかにてらすと見ゆるうすき桃色

佳作

○　小石川　山田濱子

あやめぐさ池のほとりに少女たちむれてさゞめく青あらしかな

○　廣島　香川玉代

小雨降る低きひさしに白鳩の淋しく鳴きてたちばなの散る

○　大阪　不破幽水

春日さしなたねさく日は我むねも胡蝶の如くあくがるるかな

○　熊本　白哀子

君あらぬ室の淋しさ花むろの花とく〳〵散りし思ひに

○　常陸　古島花子

二十しぬわが世の中の大きなるおどろきも來よよろこびも來よ

○　牛込　平塚白百合

少女子のいまはのさまに椿おつかはたれ時のわが前のまど

○　靜岡縣　壽賀

おもしろく花をかざしてたまゆらのうまいするまにたそがれしかな

○　福井　明ノ星

われに似る淋しき花と手にとりぬお納戸色にぬれし露くさ

○　福島　多都子

棧ぬしをかいま見んとてした枝に片手かくれば花のちりきぬ

○ 岡山 なぎさの子
背くより倦めるはかなし花柑子にほふ日ながら起きも上らず

○ 大阪 田野しか子
たゞひとりわがすむ家に影引きてこの頃青き絲柳かな

○ 岩手 ひなげし
かりそめに言葉交せしそれのみに君の偲ばゆ戀のたゞひか

○ 出雲 長崎百合子
溢れ來る涙をもてし滲ませし文はふたゝび書かぬ世となる

○ 神奈川 木村涙花子
涙ずるやつれし頰さへ玉のごと木の間の月に見ゆる夕ぐれ

○ 山梨縣 鷹谷久子
蒼褪めて何か見つむるたそがれに似たるさびしき我心をば

○ 長崎縣 翠草
悶えつゝ二とせ經たるわが戀を別かれて後に君に言ふかな

○ 伊豫 渡邊文子
春の野に草摘む少女さゝやきぬ摘めども人を忘れがたしと

○
花かげの雨にぬれつゝ小鳥啼くそれにも似たる戀のなみだか

○ 下總 小出よし子
君といふ器はよろし美しく燃ゆる若さを飽くばかり盛る

○ 渡島 田山清子
雛罌粟の花に能く似し人なれば風のまにまに戀を置くかな

○ 岡山縣 赤木しげ子
悲しみに亂れし心鳴る如く夜の三味線ひきいづる人

○ 京都 三宅壽賀子
綠色上白みたるひぢつきにひぢをつきつゝ物思する

○ 渡島 川原華子
みづからを岩間の草になぞらへぬこのさびしきを問ふ人も無し

○ 伊勢 駒越くに子
心みなかなしきものに捉へられ青き丘へと泣きに通ひぬ

○　靜岡　はるさめ

うすれゆく日かげ淋しき夕暮にわが文のせし船の出で行く

○　秋田　佐々木貞子

わが戀ふる君し居まさば海こえて獅子の住むてふ國もとはまし

○　大分縣　小屋露子

しろがねの春の小雨をくゞりつゝ羽をうちふる燕かな

○　肥前　川部靜枝

芍藥の紅く芽ぐみてひと夜さの小雨の中に春の來りし

○　青森縣　掛端杉女

木瓜の花昔思へと咲き出でぬ思ふ甲斐なき今と知らずて

○　關柴　川邊の柳

あちこちにましろきすげの笠見えてつばめの群へる春の夕ぐれ

○　福島縣　舟木知惠女

春雨に庭の櫻は散りそめぬなき姉をこふる少女子の家

○　伊勢　露木雅子

われとわが破りし戀をうたへるか風にちれる花をいたむか

○　名古屋市　江口乙女

なつかしき少女子のゐる心地して若草萌ゆる野邊に逍遙ふ

○　北見　白椿子

髮みだし泣きもくづるゝ人の子を落花とだにも見かへらぬ君

○　尾張　佐分華影

ふけてゆく時計の音を數へ見ぬ衣の裏の紅絹をぬひつゝ

○　鶴岡　野口菊子

ことごとな人は云へども我ひとり潔き處女を百合にたとふる

○　仙臺市　橋本淑子

十七の春をむかへし梅の花うす紅に咲き出でしかな

○　神戸市　川口登茂

街中の小暗き家に妹と二人箏など彈きて過ごしぬ

○　伊豆　渡邊やす子

戀人の胸にも似たる夕映をあかず眺めぬ初夏にして

○　淺草　夕つき女

春の日も淋しく聞きぬひとり寢の曉き方の木母寺の鐘

○　淡路　内海千鳥子

いたく子の日に美くしく生ひもゆくこのゆく春に母のわれ泣く

○　哲女

天地に美しきもの見出でつる十九の年をかへりみて泣く

○　京都市　中野絹子

何となく胸苦しき日來し方のあまたの愁目にも見えつゝ

○　美濃　井上絹子

ひたすらに濁れる世をも捨てはてぬ神のなさけに生きんとぞ思ふ

○　兵庫　豐田德子

世の常の男の如く平かに居給はずして涙の多き

○　下谷　島貞子

霧雨のやはらかに降る春の夜の道をあるきて琴爪を買ふ

○　京都　要司村福子

夕闇に消えむとすなる比叡の山もの思ふ子のおもかげに似る

○　本所　喜久子

少女てふ美くしき名はいましめの繩をかくすなるもゝ色の衣

○　大阪　白井尾上

雨降る日友に文かくしら紙にたちばなの香のしむこゝちする

○　福岡　すみ子

たのまれぬ男心と悟る身の袖にかゝるは何の涙ぞ

○　岡山市　大山しげ子

湯の宿のおばしまによりつくぐと別れし人を思ふ春の夜

ふゞき野

○女とは淋しき名なり三十の年よりやがて衰ふるてふ
丹波 白桃

○摘むもをしつまずば人の踏みにぺしな忘れ草のむらさきの花
下關市 木本蘭子

○夕ぐれを圓き柱に身をよせぬ思ひなやめるゆく春の人
有馬 光枝

○流れゆく紅の花留めむとすれど甲斐なき朝の水かな
島根 なつ子

○夜もひるも鶴嘴をもて兄たちが荒がね山を掘るが悲しき
神戸市 足立はる子

○夕暮の雲の行へをはかなみてかすかに歎くこの心かな
根室 齋藤ふじ

○月を見て櫻散る宵別れたる戀しき君を思ふなりけり
宇都宮 松井女史花

○何となきうれひいだきて窓のうちいにしへ歌を思ひつゞくる
新潟縣 成見涙花子

○なんとなくあこがれながらわが追ひし影のやうなる春の夜の月
芝 島みどり花

○大木の間より見ゆ春の海一重櫻のしろくちりつゝ
横井雪子

○何となくなみだぐまれぬ智恩院のゆく春の鐘そぞろひびけば
長崎市 永井主子

○美しき牡丹傾く朝の雨夢くりかへす我が心かな
伊豫 高橋政子

○南は青き山なり北すれば砂白き河われの故郷
信濃 いね

○月かげのさしいる棚に金文字のはげし本などならぶさびしさ
香川縣 蘭の花

○果て知れぬ大海原に捨小舟あるにも似たりあぢきなきかな
長野縣 三村紫

○都より花の音づれ絶えたれどわが信濃路は春の暮あく
德島縣 長濵眞砂

○行く水のせせらぎにくし山吹の花の影さへ散る心地して
淡路 加藤菊子

○さま〴〵に思ひまどへど今はたゞ少女てふ名のやすきをとれる
沼津 春の子

○遠方に燈火ゆらぐ苫舟を眺めつつ行く春の夜の磯
山口縣 椰艮美奈子

○あまたある美くしき燈の消されつつ一つのこれる如き淋しさ
備前 佐久間緑子

○なにとなくさびしき日なり戸によりて遠き汽笛をなつかしくきく
備前 佐久間りん子

○わが里の潮田の橋のかすむ日に近づき來る君が傘かな
秩父郡 はすゝき

○小雨ふる窓にもたれて物思ふわが黒髪に花の散るかな
岩手 清子

○山川の溫泉の宿のおばしまに河鹿をば聞く黒髪の人
上野百合

○君思ひ淋しき夕琴とりて戀の歌など口ずさむかな
宮城 馥子

○春の日や緞子の椅子に身をなげてものうき時の鶯をきく
下總 高吉くに子

○來し方を思ひて歎くならはしにいつとはなしにわれつくりつつ
府下 小島美雪

○君故にうきも辛きもしのびつゝありし昔を繪ぞと思へる
新潟縣 岩本芳子

○相みし日別れし日などおもひつゝ一人さまよふたそがれの磯
美作 水田邦子

○はる〴〵と丘に咲きたり櫻花薄紅にたつ雲のごと
備中 白百合乙女

○遠近の蟲の音繫むきあけがたに君をしのびぬはかなき秋よ

○　大阪　多野なみ子
紫の藤のさかりにきてみれば花の中より青海の見ゆ

○　大阪　田野藤子
櫻花にほへる頃の都路のたびねのねやのうぐひすの聲

○　和泉　金田よみ子
夏姫の衣の袖やふれつらん藤ほろろちる紫にちる

○　前橋　みどり
赤き灯におもてそむけてうなだれしうなじさびしき逝く春の人

○　ふもとの子
思ふことみな筆にして快よく眠りにつきぬやよひの五日

○　兵庫縣　柳川みきの
月光を背よりあびつつ道をゆく心地こそすれ君と語れば

○　静枝
小き蝶小雨の中に生れきぬ眞紅に見ゆる紫蘇の葉の上

○　下ゆく水
人の世の惡きをぱさけし山里も都こひしき春の夕ぐれ

○　大阪　あや
くれなゐの色のふかかる我花も痛ましきかなはら〱とちる

○　常陸　久木野花
わかき日は今夕榮の雲にて消えぞゆくなるいかがすべきぞ

○　相模　中村貞子
櫻花下ゆく舟に鼓うつ春の宵こそなまめかしけれ

○　渡島　宗原美津子
絶えずきく人の噂も悲しけれ戀にやむなる弱き心に

○　福島　春子
老いたれば髪の白きを悲しとも思はぬといふ伯母の君かな

○　静岡縣　高尾
初夏の森にかくれて人待つに紅きがわびし我帯の色

○　茨城　田村波津子
煙ともやともわかぬ春雨をこよなく戀ふれ草に似るかな

○　信濃　保科しげは
あはかなき夢に別れて歩み行く野にそひながる初夏の川

○　備中　雨の花
醉ひし時醒めて淋しき今日の日の來るとし我は知らざりしかな

○　神奈川　うすみどり
うつくしとうれしげに云ふ妹の丹の頬に似たる梅の花かな

○　山梨　吉田露枝
山里はさびしといへる京の子にやぶ鶯の聲きかせまし

○　同　同
ま盛りのさくら花みん人もなし深き山路のあはれなるかな

○　上毛　小澤野の花
盥につゝみし玉を見る如し朧月夜の遠き灯火

○　千葉縣　押尾ろく子
蛙なくかなしきやみに蛙なくわれの戀路のそれの如くに

○　近江　鈴蘭
少女子は墓なく今日を過ごしけり牡丹の芽など摘みほぐしつゝ

○　伊豆　西島行野
再びは相も見がたき人なれど面影われをはなれぬものか

○　名古屋　瀧本逸子
櫻花ちりて流るゝ夕川に月もうかびて蛙なくかな

○　能登　清枝子
美くしき君のいさゝか苦しむは空に一片雲あるに似る

○　露子
ゆく春の夕月めでて行く君のそでに匂ひてばらの花ちる

○　茨城　浮舟女
ますらをの君とおもひてたのみしは世を知らざりしわれの誤り

○　静岡縣　みどり子
都なる美くしし人を忍ぶなり雨の夕に風の朝に

○　神戸市　森枕愁孤
世を思ひ身思ふときに黒髮のあまり長きがうとまるゝかな

○　石川縣　英子
一言を云へば一言ものを云ふ氣の取りにくき女なる哉

○　失名

戀ふること戀はるてふこと知らぬ身は母のかたへにやすらかに眠る

○　山口縣　閑静の姫小松

左手に落椿おき春雨の底かへりこし小き妹

○　備中　小見山春子

ましろなる閨にわれ居てヴヰオリンを彈けるが如き春の雨きく

○　新舞鶴　菅幸子

をり〳〵は何思ひてかほゝゑみぬ桃の戸に寄るうら若き人

○　土佐　桂花

美しき砂踏みて行く少女子の素足のあとに夕月のさす

○　陸前　浮草子

瀧の音春の日かげのみち渡る山ふところのつゝじ藤波

○　山口縣　椰頁美那子

ちよ紙の鶴に息をば吹きこめてわれは眠らんつばさの下に

○　八戸町　八千代子

わが知れる鼓うつ子を首かしげ惡しざまに云ふ趣をめづ

○　周防　熊田科代

親たちのやゝ老いたるが誕生の宴ののちに泣きたまふかな

○　神田　石田美子

うら若き命をかけて戀したる君がみ歌の千首二千首

○　千葉縣　坂本その子

幻は金の帶なりかなしみをあとなが〳〵とたれてきえゆく

○　松本市　矢口貞子

相坐せる友は人妻幼子を抱きながらに死なんとなげく

○　東京府　岡野よね女

からたちの花に霧ふり日曇る街のはづれの朝はとゝぎす

○　徳島縣　佐川蕭

傘の印は丸に割井げた七八つおなじ春雨の道

○　青森縣　佐藤正子

母に生きし命をあげてこひしかる君にゆだねん少女子われは

○　伊豫　田村ため子

あぢきなし近きにし兄の夢さめて淋しき風の窓を打つ時

○　沼津　一舟

重き熱病めるが如き心臟の響覺えぬ唯きのふより

○　和泉　深見富美子

川添の里に咲くなる山櫻女の馬子も駒をとゞむる

○　近江　小倉蒋榮

二十歳そふ冷たき壁をうすぐらき一室に日毎さゝやかれつゝ

○　失名

若草のもゆるがやうに育ちゆく姿とおもへ少女子の戀

○　東京　島葉子

あまき香の煙草のけむり紫に衣を這へばこゝろよきかな

○　岩見澤　清川ゆき子

物おもひうつらうつらと行く路にかなしさ添へてあかき花ちる

○　播磨　紅雀女

咲く花を哀れとぞ見るやがて又春をもすてゝ散るを思へば

○　安藝　美登利

花の香の身にしむ如くなつかしき姉君をこそ我は得てけれ

○　京都　田中多津子

若草の香を嗅ぎながら疲れたるわが目を擧げて夕やけを見る

○　山梨縣　鷹谷とみ

柔らかき芝生の上にやすらひてかすみの奥の鶯をきく

○　牛込　酒井輝子

さらばとて君が淋しく笑みませしいまはのさまの忘られぬかな

○　金澤　むらさき

けむりとも見ゆる小雨のやはらかく町に降るなり我をぬらして

○　靜岡縣　水野あや子

いつはらぬ表情をして飽くばかり涙流せり誰も見ぬ間に

○　伊豆　土屋いそ子

今日の日も歎きに暮れぬ明日も見む又あたらしき惑ひ悲しみ

○　大阪　高山米子

三とせ目に兄とあひ見る嬉しさと淡きおそれと胸に渦巻く

詩

阿井醉茗選

○快樂（地）

籠の草

ふと目ざめぬ――
宵のとよめきにひきかへて、
温泉の宿の朝の靜寂。
あけがたは、
病む人の癒えてゆくごと、
靜かに――いつとなく、
なべての萬象に影のごと、
まつはれる黑き魔は
消え去りてゆく。
心地よし――
宵のまゝに濕れるタオル手に、
足かろく階段を下りて、
浴室の扉をおしぬ。
室内はもうもうと霧たちこめて、
あまく柔かに軀を包む。
あたゝかき湯槽の中の湯は溢れて、
下へおちゆくせゞらぎ、
おゝ、この心をそゝるやうなるその
せゝらぎ――
快樂のあまきにおちゆくこの醉心。
かゝる時、われはきく、
醉の如め香ひ深き、
暮れ惱む晩春のなげかひを、
わが立てる路上に――。
かゝる時きくなり。
わが立てる路上に――。

何うも散文になりさうでいけない（醉）

○薄暮（人）

小もゝ

あゝ今、
はかなく暮るゝ都會のかなしみよ、
煙はひくゝ亂れて、
小さき鳥の影は遂に見失ふ。
公園には疲れたる人靜かに散歩し、
淡き瓦斯霧の如し。
あゝ、あゝ、
すくすくと立つ白楊、
をのゝき慄ふ病院の青き小窓よ、
又赤く赤く死せる高架鐵道――
その長き連り。

詩が分つて來たのは幸ひである（醉）

佳作

○哀しき生

なぎさの子

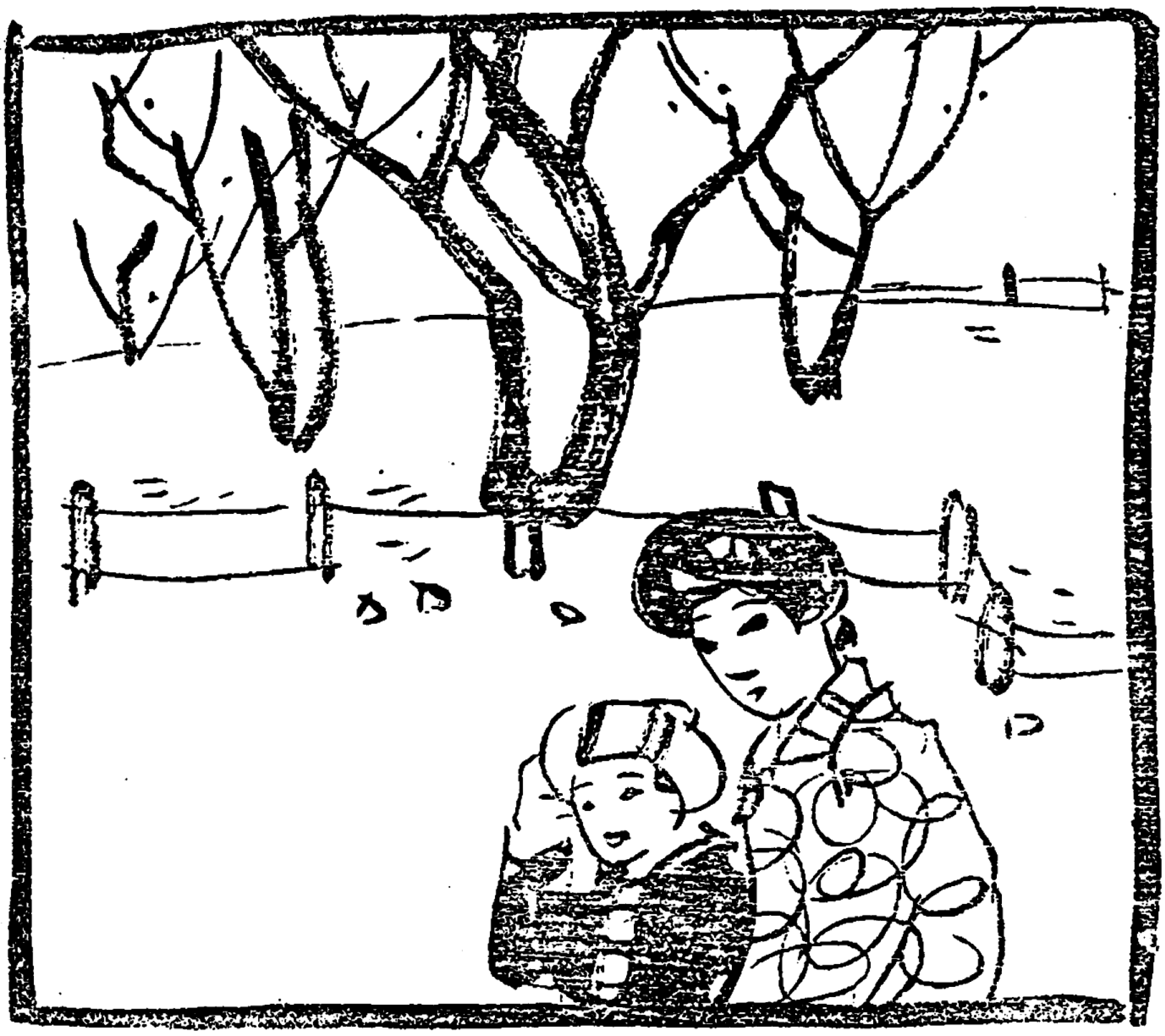
哀しき生

海蛆はみる、うすにごりたる瞳より、
海蛆はみる、をぐらきわが生の怯懦
と飢餓……
いり日、このとき、あかあかと港を
燬き、
ものゝ影、おもむろにかなしみうで
く。
ああ、わがこしかたも、ゆくすゑも、
わきまへぬ啞のみなし兒、

うでめきて、そのゆめに、縋るいの…………。
ちよ、
海蛆は、いま、あやうき斷
崖のはざまより……。

小景

褪黄色のかなしげなるく
され葉に、わづかに青く新
芽みせたる葭のしげみより
鵞鳥のよぶ聲きこゆ。
むかひぎし、廓の二階の欄
間には、
ゆめ賣る女の襦袢の紅、し
だらなくかけられて、
そのかげのうすら明りに、
蟹覇王花は、ふくよかなる
蕾をもつ。
かゝるとき、
芥ぶね、ふなあし重く澪の
にごりを遡り、
やがて影消え、潮やゝにみちくれば
いつしらず遠ざかる、鵞鳥のさけび



日比谷の梅　芝中村弘子

夜景

船廠わきの溝渠は青くうれひをたゝ
へ、
汽笛は霧のなかにあり。
てのゆふべ、ゆめみつゝ蹈
る船廠のトタンの屋根に、
あかあかと、さくらはちる
……。
榮華足り、こゝろうみ、
捉へどころも、せむすべも
あらぬさまに、
あかあかと、あかあかと、
滿開のさくらはちる……。

啼く鷗

われいくたびか死なましと
念ひにき、
そは、海とよもさず、鷗し
きりに啼く日なり。
そのとき窓に掌をかさね、
うつとりとして啼くこえ聽
けば、
のどやかに、ゆるやかに、かなしき
歌曲……。

さながら心のあやまちも、秘密も識
るとおもはれて、
さらば鷗よ、ともどもに濤に入りて
も死なましと、われはかく嘆きいふ
なり。

かげ繪

ねがへりうてば、月明り……
またねがへれば黄の壁に、ものうく
もうごくかげ繪ぞさびしけれ。
映るかげ繪は、過ぎつる日、泣いて
おくりし帆のあとか、
ぺんぺん草か、酒場裏にかふ綿羊の
頤の髭か、
しらず……しらず……いつしらず溶
けゆくは瞼の錘、
ゆめをもてくる放水の呟きは、
夜のそてよゝ跳りつゝ、たゆきわが
睫に觸るゝ。

ひとり身

したしきもの、慰むるもの、われに
はなし、
戯ぶ兒は、かくまでにてましやくれ
て、
つくる科――うすわらひ――
鼬のごとき密覗をしてかげぐちきく
はらだゝしさに髪梳きさして、肱を
てすりに投げやれば、
鷗らは、いたくおそれて泳ぎのき、
また近よらず、
かすかなる溜息は髪にかゝれど、
しらぬかれらの遠巻きにうちむらが
りて、聲ものどかに啼くかなしさ。

作物としては無論天位の價値はあるけれど、只一つ怪むべきことがあるので、入賞は許し難い、剽窃といふのではない、無論努力した創作であらう(評)

○四月の夜の情緒

京都　三宅壽賀子

物語のやうな春の夜の情緒に
夢のやうな月がさす
微温るい風は黄水仙の花にむせび
香柑の甘き馨をたゞよはす――
遠き街のとよめきは――
潮鳴りのやう夢のやう……
すべて匂ひと色の響とを
薄綿につゝんだやうな春の夜の淋し
さ
心は甘き悲哀に沈んでゆく――
古い〳〵歌が私の唇からすべつた
時
軟かいベッドの底に身を埋めた時
ハーモニカの顫へたやうな曲節に
フランネルの手ざはりに――
黄色いランプの輝きに――
記憶は……
幼ない日の幻影をちらつかせ
悲哀しい愛情の手をもつて
私をだきしめようとする――
甘えるやうな四月の夜の情緒に
夢のやうな月がさす……

青い影畫

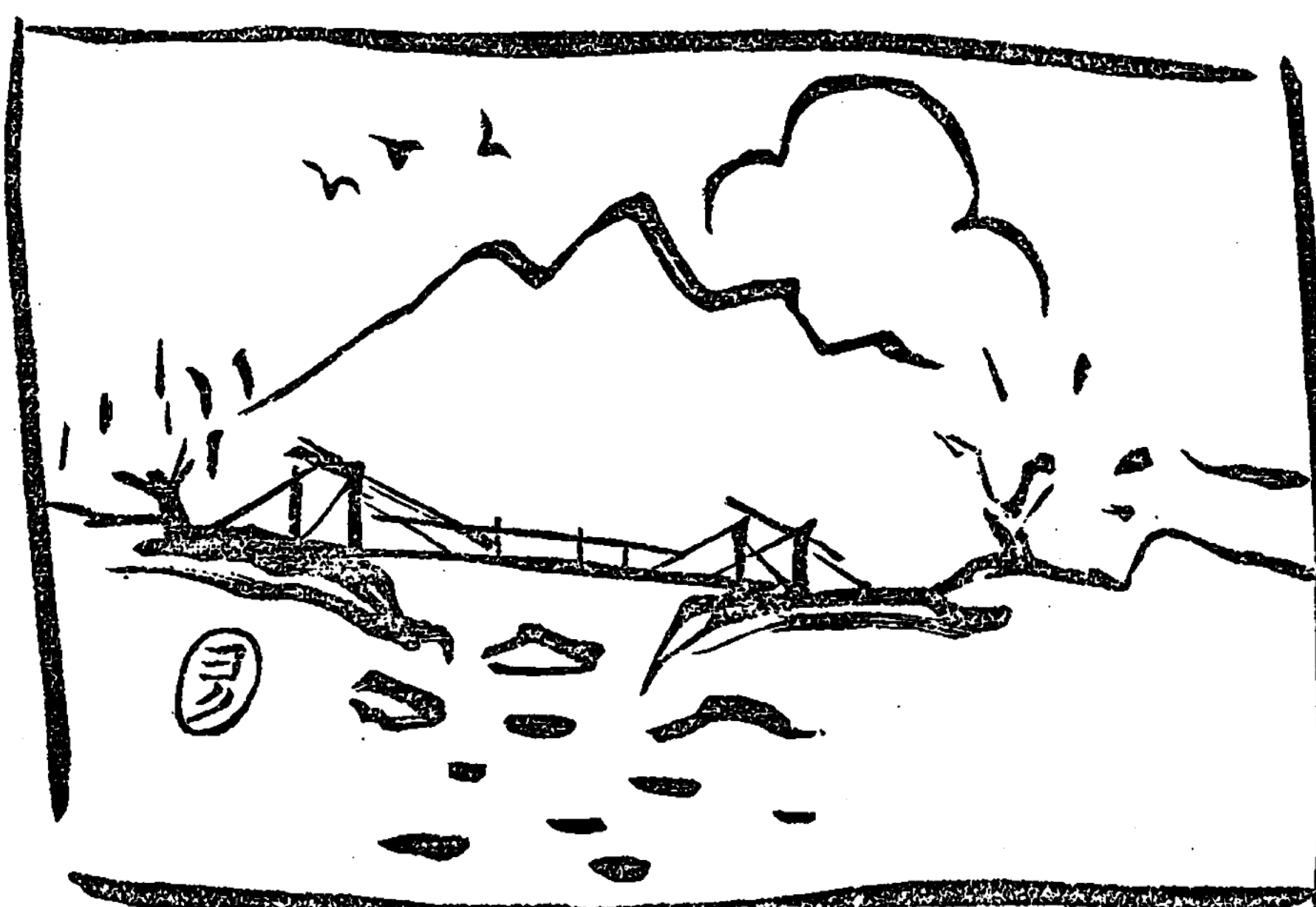
窓の夕日の反映は――
私の影を白壁にうつし

その影は青い夢を見てゐる
ヒソ〳〵と窓の嫩葉が囁いた時
私の視線は乳色の雲へ放たれて
ゐた
あはたゞしい晝の心が――
ふいと――
森の灯のやうに……
夕べの淡い星のやうに――
闇に吸はれてゆく青白めた花瓣
のやうに
靜かな〳〵心に溶けて行く
自分の呼吸をきいた時
溫かい涙はわけもなく流れて……
空虛の胸にしみて行く……
靑い影畵のさみしさよ

新しい句が續出するけれども、殆んど模倣まるだしである、分つただけは進歩に相違ないが、まだ作の力が極めて弱い(評)

○四月の野の朝

廣島　後藤壽美枝

乳母車にねむつて居た綠子がゆり起
された樣に

雲と水　愛媛縣宮田賴枝

四月の野は今夢を捨てゝ新らしい朝
のうたを唄つて居る。
なつかしみある四月の朝の野の
面よ。
東の窓には白い山茶花が散り
ともすれば春を惜む樣に竹藪の
中で老鶯がなくけれど
それでも子守る少女が唄ひなが
ら紅の落椿を絲に連ね、
絕ず朝かいま見る遠山が紫して
初夏の夢を冥想する樣な
暖かくあつさみある日光は
さびしい心に調和よく映る
四月の朝のなつかしみある野の
印象よ。

詩らしい氣分はあるやうだけれど、口語の扱ひ方が如何にもまづい(評)

○夕の顔

高尾

崇嚴な
華やかな
そして淋しさうな

悲しさうな
夕日は靜にく
金扇をたゝむ樣に
山の彼方へ沈んで行く
私は或る時、或所で敎へられた
かなしみの歌を無意識に謡つた
ばら色の執着の空はすゝり泣く樣に
うすれて
魔の影は暗い冷笑ひして後から迫つ
てくる
あゝまつてく
私の歌のすむまで
　晨恐の額ふせて
　夕べなげきの歌うたふ
　少女なれば
　紫ぞふさはめ帶の色
あゝもう
暗い冷笑ひは私の足元にも肩先にも
後にも前にも廣つてしまつた
歌は中々盡きないのに。

然うまづくはないが、春の空がすゝりなくやうにうすれるはをかしい、すゝりなくといふ文字が流行するものだから、何にも彼にもすゝり泣を使ふ人があるが、少しは使ひ場所を考へて貰ひたい（評）

○悲しき心

土佐　はざくら

いつも、いつもわがふるへ姿を見守
つてくれるかの山々、
若い心をそゝるけれど、
三方をとりかこみて、
夢もゆるさぬ立姿。
渺茫たる青海を、
煙のこして走り去る船はあれど、
われひとりつれなき天地を守て——
着物の洗ひしるの如な、
女の髮のあかのやうな、
餅のあんの腐つたにほひの樣な
この世の中に立つ吾胸の淋しさよ。
なつかしき夕の星の如きわが心、
人にゆるさぬ誇はあれど、
さびしきかな——。
山のいたゞきにも、
谷間のながれにも、
野末のすみたも、
春の光はやはらかにそゝがれてゐる
暗きなげきにすゝりなくは、
われと、ほそながきわが影と、
いたづらにをのゝく、
かなしきかな、あをざめ心、
いたましくみつるいのちは、
いつの日ぞ——。
さびしく、暗き思ひに泣くわが胸の
うちよ。

邪道にさまよつて居ないだけ却つて好い（評）

○逍遙

京都市　しづか

髮吹く風は森の樹に
露をふるひてすゝり泣く
寂しかりけり洛陽の
影踏み迷ふひとり子は
野にいでぬ千草萱草
横折り伏せる死かばねの上
春の草さ青に出でゝ
空色のやゝ淡き忘れな草



散文（其二）

編輯局選

○印象

尾張　佐分華影

「……やーよ杉野ーやーよ杉野ー一呼二呼三呼、呼べど探せーどあーら浪のわーき立ちておそひ入るばッかりなーりー……あゝ無慘と呼ぶ間もあらせず、響くや一發中佐の身はー血煙おほひて、殘るは唯一片の肉ぞこれ……」

「秀ちやんツたらおいッ」

「エ何なの……」

「さう耳の側で大きな聲で唱はないで頂戴な」

「耳の側ぢあないわ横よ」

「でも同じ事よ、鼓膜が破れさうだわね」

「アラ酷いのね」

「酷かアないのよ……でも面白いのね」

「喧ましいと云つてる癖に面白いつて、私も高等一年の人の聞きかぢりですの」

「さう、今月の少女の友の繪伽は、毅坊が杉野兵曹長になつて金棍持つて一寸顔を顰めましたと云ふのがあるのね」

「さうね美代ちやんがアラアラつて」

「一寸顔顰めましたと云ふ所が振つてるでせう」

「もつと唱ひませうか、紫式部でも？」

「もー澤山よ些とも本なんか讀めやしないわ」

「…………」

「秀ちやん」

「はア、姉さんあのね」

「なアに私が云はふと思つたに」

「東京の印象つて云ふ印象と云ふ事は何ういふ事ですか敎へて下さい」

「東京へ引込つて云ふ事は盗人や惡い事した人が巡査等に連れられて」

「あらまあ姉さんホヽヽ、さうぢあないのよ何うかしてらつしやるわ、少女世界に東京への印象つて云ふのがあるでせう其れですよ其の」

「あーあの印象、印象なのさうね秀ちやんによく解る樣な言葉がないか知ら、印象とは……先生ぢあないから上手に云へないが、あー秀ちやん今迄に何か綺麗だつた事、悲しかつた事嬉しかつた事、面白いとか腹が立つとか、困つた事とか何でもいゝわ幼い時の事でもよく胸にしみこんで忘れやうとしても忘れられない樣な事ないの今でもよく其時の事が現はれてくることとないの」

「今別に考へても何にもないが、頭を打つた時は痛かつたわ」

「まー嫌だ、あゝどういつたらよいか、あのね私の印象されて居る事を一ッ話すからよく聞いてらつしやいよ、私の十二の時秀ちやんが五ッの時に母樣と秀ちやんと二人海水へ行つたでせうそして私が茶の間で遊んで居てふと後を見たら眞黑いたら黑色人ほどの眞白い事は雪より白い洋服着て立つてた五ッ位の女の子が居るでせう何處の子かと思つて吃驚してよく見たら秀ちやんさ後から母樣がいらしつて、其の事今でもよく思

ひ浮んできますよ目に見える樣ね、それから學校で一度口惜しい事を人から云はれたが其一言が今でも可笑しい位忘れられないの、まあこんな樣な事よ大きくなれば解るわ六つかしく云へば感覺の腦裏に殘留する事解つて」

「一寸解つたわ、ね姉さん昨日買つたシャボン玉吹きませうねお嫌？」

「あゝ四時まであちらへ行つて下さい姉さん知りませんよ本を讀みますから、默つて居て頂戴」

拘引は聞いてるけれど引返といふのが有るか知ら、むかし山田邦子若杉濱子の二人に焦點つちや何の事、抽象つてどういふ事と一々質問されて弱つたけがこの人は人から口惜いことを言はれて忘れずに居るやうなのが印象だと敎へてゐる「家」を「家根」とは言はぬと同じやうに、思ひそれ自身を「心」といふまい。辭林にいんしやう印象、物の面に印したる形跡、對照の意識せられたる狀態とある、第一シャボン玉吹く令妹がそんな事きく筈がない(X)

○おてんば日記

京都　とし子

學校を出てから二週間ばかりたつた、まだ寂しくてならない、毎日のやうにお友達に手紙を出すので、お母さんが「まるでそれが仕事だね」つて、昨日もおつしやつたが、今日もGさんとAさんに出した、ポストへ入れて來て、机に向つてボンヤリとしてゐると、二階から覺束ないオルガンにつれて唱ふ聲がする兄さんと弟とだ。

　髑髏を包む骨ならず、血潮を湛ふ肉ならず、

……………………

ドラ聲をはり上げていらつしやる、三高の東征軍の歌だ、フレーーフレー!!三高!!「櫻花の匂かんばしく、關の以西に幾年か、覇者の譽れを荷ひたる我三高の……と云ふ應援歌を歌つて一千の健兒が應援する男姿ー此度一高及早慶に見えんがために東上するのである、よく文壇や女學世界なんかで見ると、柏葉宗に歸依しておらつしやる方があるが、京都ぢややつぱり三高が勝つてほしい、ウロ覺えだがつゞける

　霞も咽ぶ東臺の花下蔭に立ち迷ふ、
　滓濁の巷よそにして、我九天の雲呼べば、
　東海の空時雨して、北斗の前にひれ伏さん、

……………………

「勝つて歸へればいゝがなあ」と、弟の聲がする「おいキャッチボールをやるがはいらんか」と、兄さんがおつしやるので、二つ返事で裏へとび出す、久しぶりだから面白くて、一生懸命になつたのであつい「ちよつとシャレたボールを出すね、」つて、兄さんが………それやこれでも小學時代には、ピッチャーで强打手だつたもの。

お優しい辭若先生なんかびつくり遊すだらうが、事實やつたのだから仕方がない、京女のあられもないつておつしやるだらうが、御安心遊ばせ球はゴムなり、ラケットで打ちますの、ホヽヽ、女學校へ入つてからでも、下手な所からテニスは嫌ひで、第一高小からゐらしたSさんHさん等も、一度ベースがして見たいわねつて言つてたのを、T先生に聞かれてしまつて「まあ女が野球をやるなんて米國式ですね」つて大笑された、其の時私等はあんなテニスより何程面白いか知れやしないと云つたが「敏子！とし」おやお母樣だ、私は京都式のヘーと云ふ返事がきらひだし、ハーもハイも好ましくないので、近頃新案のヒヨコを用ひて、奥の間へ行く、「あなたは女だてらに」つて、今にもお口から出さうだ、一つすまして、「何の御用でございます。」

醉茗先生が驚くかどうかは知らぬが、私は野次の歌のなつてないのに驚く「髑髏を包む骨ならず」どくろと骨が別物だとは知らなかつた「牛をくふべきビーフならず」「色を溶かせる赤ならず」あとからあとから名句が出さうでお氣の毒でならぬ、花かげに巷が迷ふもをかしいが春しぐれが降つて來るといふのも受取れぬ但し京都ではさうどすと仰しやるなら文句は無し（かちす）


畫學生　府下岡野伊智子

○三月の日誌

上野かすみ

夜、母樣も妹も針箱持ち出して三人でランプをかこむ。まんなかへはいつて小さい妹はいたづらしてゐたがむづかり出して何とすかしてもきかぬので母樣は寢せ終ふ、妹も。裏の池で頻りに蛙が鳴く。

二日「いゝお天氣になつたから張物したらいいだらう」云はれて縫ひかけた帶を其まゝ置いて庭へ出る。灰色の雲が所々にさまようてゐるけれど太陽は青い所へ拔け出て暖い光を放つてゐるいかにも滞だ張り板が一枚では餘り、はかどらないから隣のおばあさんのところへ取りに行く庭前へ行つてのぞいて見たら紅い布が張り付けて椽の柱にたてかけてある默つて來て仕舞ふ、かわくまで溫まつた樣に座つて袖につぎあてる。

午後曇つて雨風の樣な冷たい風が強く吹くので内へ引込んで、又帶を縫ふ祖母樣が疲れた瞳を私の方に向けて「上の山の方で嫌な鳥が鳴くね、」と低い沈んだ聲で被仰る。

桑原へごみ捨てに行く、路の青くなつたのに氣付いた、晝すぎは矢張黑

ずんだ雲が向の山の間からづん〳〵押して來て美しい紺青の空をたちまち包んでしまつた、東の山の頂きに、暮れの光が輝いて妙な色をなしてる、それが今にも矢の樣な雨が落ちて來さうな空に映えて、いかにも物すごい。

大槩日のあたりが早くなつた山と山の間のくぼんだところから太陽が昇る色々の事が胸に浮んで心がおちつかない、自然針の手がとまつて終ふ、機屋の方でしきりにさゝやく聲がする、若い者の心はみんなさうですよ、はじめも終りもわからない、只これ丈よく聞えた、若いものゝ心何の話しだらうきゝたい樣な氣がした、夜妹のお手玉縫ふ。

五日は端午祭り十時頃からパッタリ近所中の機音がみんな止んで夜の樣な靜かさになつた田舍の寂しさをしんみり味ふ事が出來る樣で晴々する妹逵がお手玉取るのを、ぢつと見てたら、いかにも面白さうだから借りてやつて見る一、二、三四、手がふるへて落ちて終ふ、向ふの山からは相かはらず倚頰が、わになり斜になりして上つてゐる桃の根元のふくじゆ草は今年も又ふつくりとした花を見せずに散つてしまつた。

田舍の人だけれど、田舍の文になつてゐない、自分といふものを考へぬのだから―考へたくてもないのだらうけれどもまるで神さまだ(X)

○五月晴

伏見草花

六月十一日晴　起きぬけにきうりを二本もいだ。鉢の金魚を、猫がねらつてしやうがないから裏の古井へ放してやつた。此井は、十年前から廢されて有るのだけれど、水はなか〳〵清い。中のぐるりには、苔深くむして此頃は水色の冷た相な名も知らぬ草花が咲き亂れてゐる。放し終つてのぞき込んでつと頭を上た拍子に咲き廻つてゐる紫陽花に、髷がさはつた、今迄眠つてゐたらしい山蝶は、驚いてまご〳〵と飛び去つた。袖をかき合はして見るともなく其處に佇んでゐる。

十二日晴　お隣の池と此方の庭との堺にも紫陽花が咲いてゐる。緣から足をぶら下げて、靴下を編んでゐたら「一寸旦那はん見とおみやす、蛙がそら、めゝづと喧嘩して、ほゝゝ」と、昨日迄の別邸守のダミとは打つて變つたなまめかしい聲が、はつきりと聞えた、隣に紫陽花の向ふから。私は、すぐ編物をほつて、すはだしのまゝ、飛石傳ひに忍び寄つて、垣の間からそつとのぞいた。眼下は青々と蓮の葉が茂つて、紅い髷がまばらに見える。女の顏〳〵と心であせつてゐるうち、ふと、すぢ向ふの石燈籠の陰から、其聲の主は現れた。私は其夜、何だか眠れなかつた。

何で眠れなんだのかちつともわからぬ、尤この君はまだ二十に足らぬ未亡人でいらす(X)

○ある日の一節

志奈子

昨夜おそく旦那樣からの電報を受取つた。お歸京は明後日かと思つて居たのに。八時といへば、かうしてをられない。今朝もまだ足元がふらふらするのを、無理に床をはなれ、花のとつてくれたお湯をつかひ、鏡の前に坐つた。うつる姿の自分ながらこの一週間ほどに艶のなくなつたのが、よくわかる。白いものを、一寸はいて、髷に櫛を入れて立つた。「奧樣お牛乳をお上り遊ばしますか」といふ。欲しくないから、お歸へりになつてからと思つてやめた。七時半頃勇吉を新橋へお迎へに出し、蕾のゆるくなつた薔薇の鉢を花に持たせて、お書齋へ移し、お香を入れてお歸へりをまつ。ベルのひゞきと勇吉の聲に、急ぎ玄關へ出た。豫定よりもお

歸へりの早かつたのは。霞島の次に。大阪の方の事件が。原告の讓歩で話が容易く纏つたからとか。「顏色がまだよくない、留守中はどうであつた。」と仰つしやる。あゝこのお言葉、胸にこたへて涙の出るやうな、いつも此優しいお辭を聞く度に、こんな心地がする。唯ハキ〳〵しないだけであるのを、是非にと仰つしやるから、明日診て頂く事にして、田口に電話で、榊先生へ御都合を伺はせた。中山樣から、御歸へりといつて電話が來た。「どれ、客のない內に」と留守中に來た手紙を持てお立ちになつた。

小さな足音がして杉本光子さんが「をばちやま。」といふなり膝に、つづいて奧樣も、ニコヤカに、入つていらした。かつては、リボンの色までお揃ひにした仲の濱子樣、今も隔てのない杉本の奧樣とは、いつまでも話の絕間がない。話の中に「おはやれにならないのは、きつとおめでたいので御座いますよ」と御自分の其折の樣子を御話になつた。まあ、そんな事であつたら、どんなに嬉しいだらう、式を擧げてから六年、是といふ不足のない自分の、物足りないのは此事であつた。いつぞや、音羽の紅葉の歸へりに、强いて雜司ケ谷に、廻つたのは、人の言葉の何となく、眞に思はれて、人に悟られぬやう、鬼子母神の神前に、心をこめて、祈つた事もあつたものを…………。

まじめに書いてあるからまじめに評する、おめでたいのが事實でせう、けれどヒトのからだぢやなし御當人どうしてわからないのか(X)

○のろひの焰

本所　喜　久　子

破壞！破壞！　大なる破壞だ。

濛々たる黑煙よ、汝は何でそんなに悲しさうに流れるのだ。飛べ！飛べ！風にうづまけ。黑煙の流れよ。

涙にかふる紅粉の面、一夜の夢に女の命を奪ふ生地獄の責苦の煙よ。

滿都に灰を下して泪を分かて！

燃えつくせ、燒きつくせ、風にうづまけ黑煙の流れよ。

おゝ、のろひの焰よ、焦がせ焦がせ天も地も。

女の念の燃ゆる焰よ。親の爲に兄弟の爲に夫の爲にしぼる血涙の、今湧き立つて天にのぼる、あゝ、のろひの焰よ！立て、立て今立て。今こそ立てのろひの焰よ。革命の血の價は知れど、泪の價知らぬ冷血の聾に今こそ思ひしらしめよ。

靑ざめた小鳥よ、免れよ！のがれよ籠は破れた。籠は破れて汝の前には、今ぞ立つなる火の柱が。導きませる火の柱に汝はのがれよ。

一睡の宿は主に乞ふな。今は春だ。たとへ軒端や草床に臥すとも、春のめぐみの大いさは汝の血よりもあたゝかく、友禪のしとねよりも心安いであらう。おぼろの月の情こそ、冷たく絕ゆる灯かげよりどんなにか濃やかに深いであらう。

おゝ、あはれなる靑き小鳥よ、籠は破れた今のがれ出でよ、一睡の宿は主に乞ふな！あはれなるかな靑き小鳥よ。

ちぎれ〳〵の雲間から、うすく淋しく星が光る、不安さうに月が照る。

（四月九日）

吉原の大火を祝福するはよし、烈々たる火炎天を焦してわが君の心を焚くこと深甚なるはよし、君は人妻にあらずや、何ぞ君自身の解放を叫ばざる、何ぞ君等に來る夜を呪はざる。娼婦に落つる涙あらば、うつしてすべての女子に泣け、あはれむべきものはすべての人妻なり、豈北廓の三千人のみと爲さんや(X)

○ある夜

牛込　わかば

九時が鳴るのにふと氣がついて本を閉ぢた。うすら寒い宵だ。青白い月の光が廂越しに縁をながれて障子にふるへて居る。ア、今夜もなく、クウ……クウ……と、よく故郷で夏の夕方、忙しい一日を漸く終つてから、みんなが臺所の板の間にあつまり、大肌ぬぎで夕飯をやつてゐる時など、何所ともなくないてゐるのを、自分はいつも、しみ〴〵と身にしみて、遣瀬なげな感じをさへ起して聞いたものであつたが、この間から四五夜つゞけてなく蟲の音は、私をして丁度あの頃の氣分にかへらせるのである。

赤いきいろなランプの灯かげに、何か一心にしてゐる妹をながめた、今の瞬間に於ける妹は、私にある大なる暗示を與へてゐるさまのやうにも見えるが、落ちつかない今の心は何物も容れる事が出來ぬ程しびれてゐる。何でもよい、カツと私を驚かしてこの頃の氣分から、ぬいて呉れるものはないか知ら、溜り水のやうな此の胸！私は苦しう御座います。過ぎ去つた者は決して思ひますまい、わが愛づる歌も詩も一切口にしますまい、只もう進むことのみつとめませう……とまで思つた事もありました。

せめて、私に戀に泣くほどの熱烈と執着さとがあつてくれるとよいのですけれど。人なつこい私は、誰れでも戀しくなつかしく思ふかはり、其中から溫かいあるものは得られますが、戀する人は幸福だとは、今でも思つて居ります。戀に破れて能登に歸つた冬子さんは永久戀に生きる人でせう。朝な夕な艦の上の人のために祈つて居られるものを。

弱い神經衰弱の人が書いたやうだ(S)

○或る人へ

神戸市　綠髪子

若き血潮の湧くまゝに戀する人よ、凡ての物を捨て戀に生きよ、熱烈に……、それが出來なきや始めつから戀なんかせん方がいゝ。女に誠なしと云はれて腹の立つ人はあつても事實があればこそ何ともいへないでせう、戀に捧げし命なら戀にすてたらいゝ、それもできなけりや、頸でもくゝつたらいゝつて、極端でせう。

ですけれ共中途で戀を捨てゝ而して悔いて泣くのも愚でせう、背いた人は背かれた人の苦痛を思はないのですね、慘酷ぢやありませんか。然し多くの若き人の大方は僞の子となつて、背いた人の方が多いでせう。

そりやあ男にだつて幾度となく女を欺むいた人もありませうが……僞と云ふ文字を女から去らせたいですの、什うも極端に走りさうですね、あゝ考へるのも厭になつて來た。

たえず動揺する頭を靜め樣として努めて眠らうとしますけれど、やはり駄目です。それで覺めては無意識に筆とつて書き續けてゐるのですもの、何を言つてゐるのか解らないでせう、弱き子に！舌かんで逝け……と遠い血の人は敎へましたが然し苦しむで人に心配さしてそれでもなほ生きてゐなけりやならないのです。病める胸に無慘な印象を與へられた傷ましい心、私はまだ幸です。

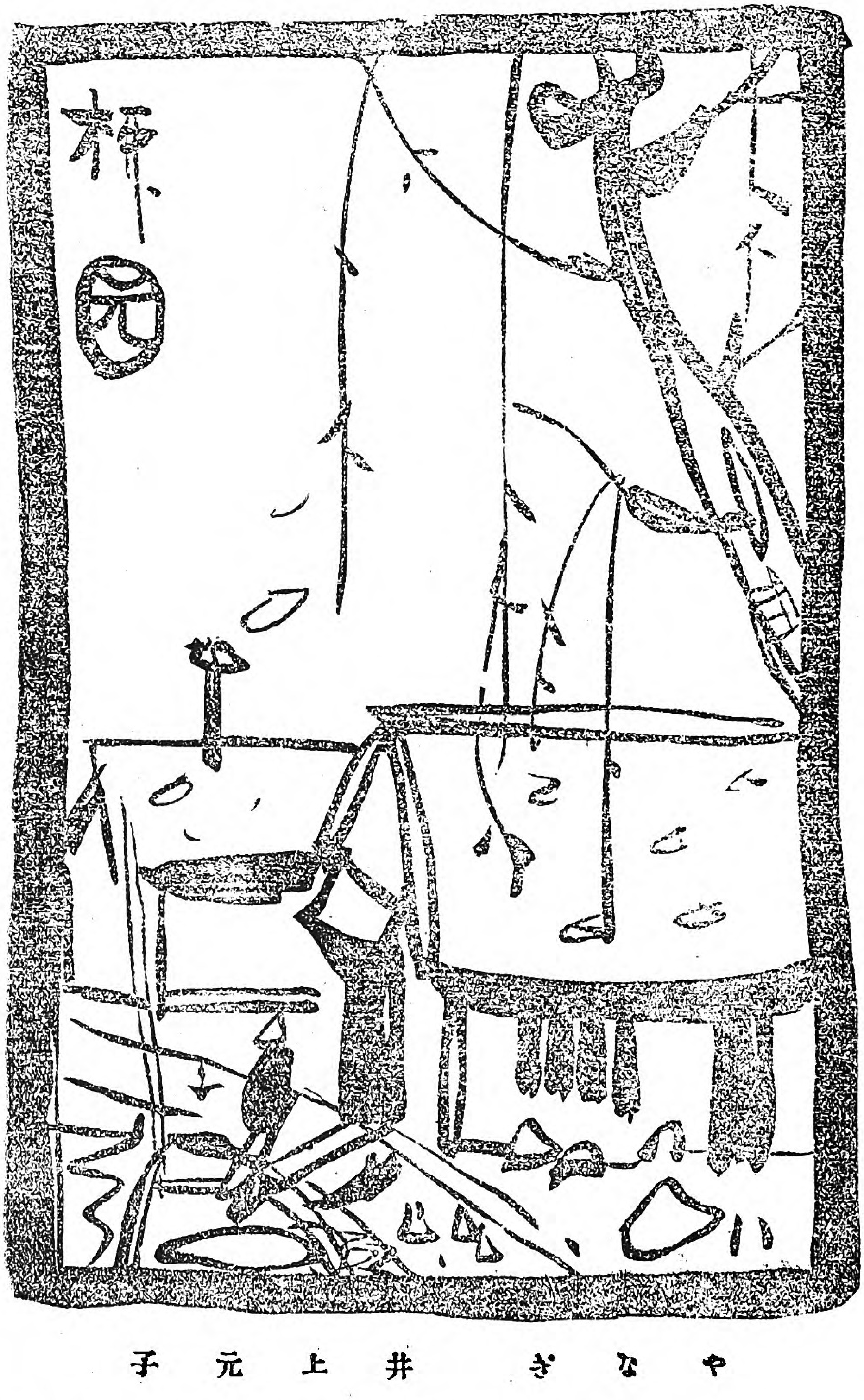
○看護婦の生活

石田美子

私の今をりますのは神田の××看護婦會ですわ、何しろ看護婦會なるもの丶元祖ですもの、なか〳〵盛んなものですよ。

え會長ですか、女ですの。さう四十幾歳ですわ、老嬢ですよ、尤も所二百人あまりの人を指揮して、會長の一言、否も應も言はさない人ですもの、確にえらいものですね。

それわね……隨分辛い職業ですよ。年中知らない家許り雇はれて廻るんですもの、悔しい事も悲しい事もありますが、永くをりませば。さうでもありませんが、其當座はね、それこそ一擧一動にも注目して批評されるんですもの、耐りませんわ、はあ幾らよくしてあげた積りでも、病家側では看護を普通と思つてますわ、少しの失敗でもありましたらね。大變ですよ、往ゝ其度に氣苦勞しては壽命が縮まるつて仰るの。え全くですわ。



やなぎ　井上元子

新参の中こそは元の病院生活が戀しくなつてはそつと隱れて泣いたものですが、此節のやうに古狸になつてわね……知らない家へあがりましても、二三日も經てば最う馴れたものですわ、旨く口先でね……ほゝほゝ

全くですわ、それでも口上手かつて仰るの、まあ〳〵そんなに皮肉らずにお聞き遊せよ、病者に對する同情ですつて、それは女ですもの血もあれば涙もありますよ、然しね年中自分の仕業となりましてはね、呻き聲をきいても悶え苦しむ側にをりましても實の處早く癒して樂にしてあげたいよりは早く自分で樂をしたい方なんですよ。

死人ですか、別に何ともありませんよ、芋屋が芋でも洗ふやうに消毒し

てあげます、でも流石に自分の看護した方を思へば冷い涙も浮びます、え此點は全く醫者も同樣ですわ、何れ家内安全世間多病を祈る方ですもの、偶りの同情、苦痛です運命ですわね……何れ自活する女に幸福の人はないでせうが、これ程慘酷な職業はなからうと思ひますわ、年が年中呻き聲歎き聲の中に埋つてをるのですもの、華かな生活が戀しくなりますよ。此頃は切に〳〵樣になりました、血潮湧く少女の身にはあまりに相應ぬ業ですもの……。

○耳の感覺を失つた人に代つて

芝　東野歌子

長い間親しんだベツドの上から降りた時は、手も足も自分のものとは思はれなかつた。氷嚢を二つも三つものつて居る樣に今に頭が重い。疲れた。からだも心もすつかり疲れて了つた。

ふと或事を思ひ出して、あわてゝ寫眞帖を繰つた。

お召の二枚がさねに、大きく芭蕉を織り出したゴブラン織の帶を胸高に締めた、若い女のスタイル。

夭死する人は寫眞の影が薄くなると聞いた。しかし私の寫眞は未だちつとも變色して居なかつた。不安と恐怖に慄へた胸がやつと落付いたけど、華かな微笑は浮ばなかつた。寧ろ何となく云ひ知らぬ寂寥を覺えた。

だしぬけに柔かい手が肩にさはつた。美佐子だ。

「…………」美佐子は體や手を動かしては可笑しい身振りに笑つて居るけど、私はあんまり淋しくつて如何して笑顔を出來やう。つと起つて窓に寄つた。云ひ知らぬ悲哀にたまらなく胸を押へて——。

外はもう何時の間にか、薄暮の褪せた色が漂ふて居る。見上ぐる空は茫と煙つて、宵星の燦めきも見えない。さゝやかな風が何處からか、若葉の香りを持つて來る。誰やらが薄茶の味ひ——、と云つた樣な新綠の香り——。

森の奥の若楓の下にひとり立つて、思ふさまかいで見たかつた程好きだつた此の香り——。

——さう今の私には何の情趣も起らない。むしろ淋しい記憶を呼び起すのみである。

人の心をそゝり立てる樣な飴屋の笛の音も思ひ出される。其はいつも暮れ行く此窓に凭れつゝ、美くしい憧憬の夢から醒めた時、向ふの四辻から流れて來るちやるめらの聲が、おだやかな私の胸にひた〳〵と押し寄せて來ては、輕い哀愁を誘つたけども、其時私は胸を押へる程の冷めたい涙を未だ知らなかつた。

——淋しい記憶——悲しい記憶——がしきりに胸を苦しめる。

三春の行樂は、花吹雪と共に行く水に流れて、墨堤十里葉櫻に道が暗くなつたであらう。私の二十の春もわづかに自覺し得た許りで永久に葬つて了つた。

未だ紅入り友禪の帶も、燃え立つ樣な緋縮緬の腰帶も、ふさはしい私の體から取り去るのは、あまり痛ましくつて、考がへた丈でも涙がこぼれるのに、もう私は薄紅色のスカーフを捨てゝ、カドリツク敎の尼樣の樣に黒い布で以てすべてのものを包まなければならないのですもの……

——だつて此のみつともない敗殘の影を今更どうする事が出來ませうかつては人の心の奥の奥の私語まで、聞き出さうとした此の耳だつたのに。昨日久しぶりに調べたお箏の音すら遠い〳〵冥府の樂の調べ程にも聞えなかつた。

聰私は生れて初めて熱い涙を此の窓に落した。だいぶ誇張して書いてある誇張と分るだけ此作は上手でないのだらう

○火鉢

小石川　清水あき子

私の郷家に百ゝ紅で出來た火鉢が五個ある。妙な格好で一として丸く無い。瓢の如で盤の處で大きく成つたのや、髷形をつぶしたやうなのや、バケツの破れて曲つた如なのや、それは〳〵變に出來て居る。併し其の根の形ゝ儘が面白いと言つて、祖父は非常に愛して居たさうです。法事のある時は屹度自分で土藏から出して來て布巾で幾度も〳〵拭く。そして艶布巾を丁重に掛けたり、銅のオトシを拭く。銅に灰の拭き疵でも出來やうものなら、「惜い事をした」と嘆息する。胴は黒光りして居る。塗つた漆の光澤がある。「漸く本光りに成つて來た」祖父は獨りで讚めて居る。祖母や母の忙しなく立ち働いて居る傍へ來て、「火は未だ出んか？」恁う祖父に急かれて祖母は「火どころではないわに、口取やお壺も出來んに。あゝ忙し……」やきもきして言ふ。祖父は「火鉢の掃除ができたのに火を入れとかんとナ、客が見えた時愛想がなうて惡いから」ぶつ〳〵さ言ひ〳〵客間へ行かれる。煙草を二三服吸つては火鉢に目立つ埃を吹き拂つたり、布巾を掛けて居られる。「お爺さんは火鉢氣狂ひだ」厨所ではお婆さんが母に呟いて居られるのが聞える。

八幡祭の時も火鉢が持出される、お正月もお盆も屹度客間に構へづけられる。五箇でなくとも時に依つて二つだけの事も、三つの時もある。來る客に祖父は「三分二朱で買つた樣なものさ、今時なら恁うして五兩でも買へることぢやない」定まつて自慢する。幾度も聞かされた客は「又始まつた」位に思つて居るらしい、鼻で蔑む如な笑ひを見せる。けれど初めて聞く客は多少の好奇心にかられ、愛想に「左樣でせうとも五圓でも買へますまい。仲々風流だ、面白い凝つた材ですねえ」と讚めたりする。すると祖父は「先づ掘り出し物ですて」と得意げに言ふ。「で、三分二朱とは素敵に又安値でしたねえ」と客は訊く。祖父は煙管を掌で輕くはたく、「實はね、「もう十六七年前ですが、私の遠縁の人に金を五兩用立てましたんさ、すると期限が來ても返して呉れません。赤の他人でなし其儘にして二年ほど過ぎましたと思ひなさい。其處の亭主が死んだと言ふ騷ぎ貸した金は先づ奉納ときめてぶつつりとも言はずに居ました。すると二た月程過ぎて内儀さんが私の家へ來まして、誠にすみませんが、亭主が死んだ後は私一人で、伜は東京へ行つた切り、音沙汰もありませんし、しますから御借りした五兩は私が稼いで少しづゝでも御返しします。何卒左樣御願ひ致したいんですが……。恁う言はれましたから一も二もなく承知しました。さう話がついて月に二分持つて來たり、一分持つて來たり、二三ケ月つゞいたり一月間ひを置いたりして二年半ばかり過ぎました。暫く内儀さんが見えんがと思ふて居たら夜逃げしたさうです。私の貸しは未だ三分二朱殘つて居る。他へ行く見込みと見えて、三月ほど前に火鉢を一つづゝ私の家へ運び込んで、「御借りの抵當と言ふ譯では無いが預つて置いて呉れ」と泣く樣に頼んで置いて行きました。其が斯の火鉢なんですて……。其後行方不明で未だに知れん。若し今日にでも來られたら返してやる考だ。三分二朱は私は貰はいでも戻しますとも、其れ迄は私の品と言ふても宜い譯だ。して見ると三分二朱で買つたになるかなハヽハア。

私は重い其火鉢を土藏へ納める時は、屹度運ばせられた。出す時は祖父ばかり出す。私は十年も前の其つらさを未だ忘れません。

○田舍の朝

南千住　吉田清子

夕日もいつか西の山影に入つた、野に、畑に、田に、出て居た女達も三人五人つれ立つて高聲で話しながら、我が家々に向ふのである。夜は五六間先きの可成り大きい百姓家から、布織る音がちやきちやき聞える裏の納屋からは、わら打つ音、大勢の女や男の笑ひ聲、面白い節の歌をうたふのが聞える、それでも四隣はしんとして、夜は車の音さへ聞えない。あゝもう此うした田舎の生活もあきあきした、又都が戀しくなる、でも開けはなした廣い座敷から、青々した山や野を眺めて居ると、うつとりして、氣が遠くなつてしまふことがある。自分は何如して此う物にあき易いか、自分一人で氣病して好んで此んな田舎にくるのも、單調なる生活に倦いてのこと、ふつと目が覺めたら、もう土間の方で、お祖母樣が粉挽いてる樣子だ、六十からのお祖母樣が、毎朝早くからの働きぶりを見ると、自分などほんとうに恥しい、床上げて顔洗ひに行つたら、下男がかけひの水取つてくれた、今朝はもやがおりてるので、山も家もはつきりしない、何だか息苦しい朝だ。時計を見たら五時だつた、粗末な低い垣根のめぐらしてある、だゞ廣い庭におりて、水まいて居たら、本家の姉妹が寄つた、美坊か春坊も早いな、くりや、くりや、くりくり、早くこうよと祖母樣は大きな聲で呼んだ、やがて三人は出かける。垣根越しから見て居たら、後から又二人道づれになつた、紺の筒袖に赤いけだし出して、めれんすの太いたすきを掛けて、わらぢばきの五人が、申合した樣に白い手ぬぐひかぶつて居る、そしてしつとり朝の露にぬれた道を、大きな聲で四隣憚らず歌ひながら、白いもやの中に薄れて行く、五人の姿は何かの繪で見た樣だ。まだ晴れねえ樣だなあ、今日は此れ雨になんなきあいゝなあつて、手も休めずひとり言云つてる、私が一寸振り向いたらにこにこ笑ひながら、れいの大きな聲で、お前、飯食つたかあつて言つて、勝手の方からみそしる煮る香がする。

○ふる心

土佐はざくら

幼兒の心の樣に思ふとすれど、其色が毒々しう思はれる霧島の赤い花に背を向けて、絶えず散る梨の下に立つて居る私の髪と云はず肩と云はずに、花はひらめきつゝ白く散る。地に投げた影の頭の形が見た樣ないづこいづれの日にか見た樣な氣がする。灯影の淡い二階の障子に映つた黒い影を見たことがある樣にも思はれます、それは幻のやうだけれど――。丁度あの障子にうつつた黒髪の影のやうだと思ふと、イヤな氣もしますが急に重みを覺えました。

紅い飾が氣になると云つた人もある、雨が降るとひやかした人もあつた。何しろ八年振りだもの――。

白い花がほろほろ散る、暗い思の胸を辷り落ちて、芳醇な草の香をかぐと私の頭は甦つて、甚い痛みを感じます。

たまらなく座敷にかけ上つた、白の襖青の壁、春とは云へど室内には暗い影が漂うてゐます。

頭を枕にあてがふと髪が重い。

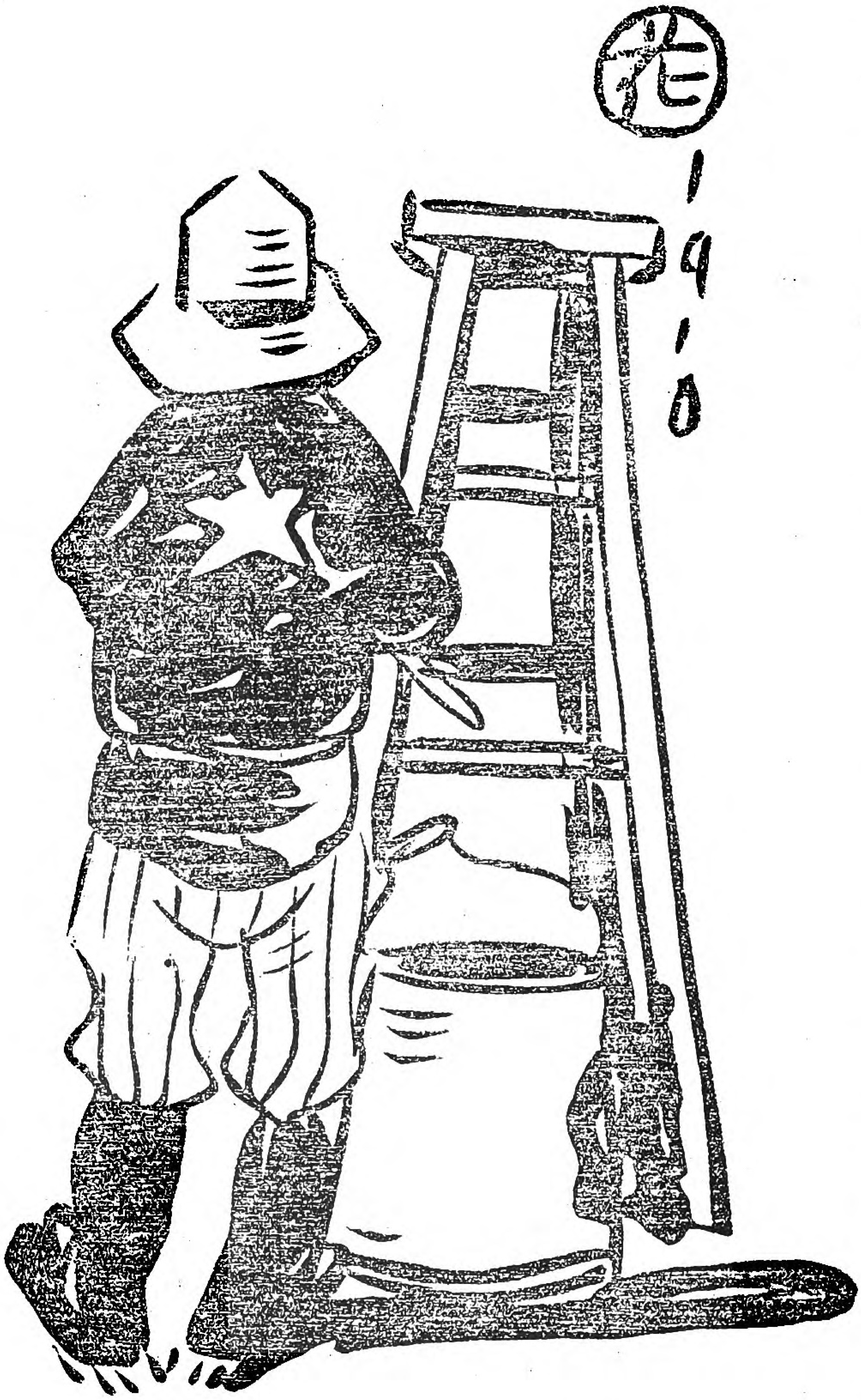
昨夜の事でした。人間の樣には思はれぬ程冷い心地わるい足をなでながら痛む頭をたれて考込んでゐる私に「又苦しがつてゐる樣ぢやないの」と火桶を隔てた母が云ひました。「私の樣にこんなに弱い者は、三十迄活きるよりも、四十で死ぬよりも、いつそ今の中死んぢまつた方が――」と冗談らしく云うて笑ふと、側の兄も私を見て笑つてゐた。母も默つて淋しい笑を見せてくれたが目がうるんで居りました。けれど私の胸は不思議な歡喜を覺えずには居られなかつた。

「ねえお母樣、私はお母樣と一緒に死ぬのよ」今朝母と色々の話をして

た私は斯う云ふと涙がいつぱいになつてきて、默つて母の前を逃れ出ました。

破壊された私の胸は、風に鳴る電線の様に強くふるへてゐるのです。

三味線の哀音につれて唄ふ主は喉を送り出る吾聲とも聞いたであらうが、聞かされた私はしやくり上げて泣きました。三代記の時姫は恩ある親を捨てゝ愛人にかしづくと云ひました、愛人の爲に親を殺さうと誓つたのだ。どんなに苦しい、強い優しい心でしたらう。けれど私はあれを聞く毎に、強い疑を時姫の心にいれずにはおられません。



掃　除　　田邊花子

二度人に嫁ぐ其刹那は悲みに閉されてゐる人があつても、日を經るに從ひ昨の惱は夢に忘れて、やがて今日の歡樂の初戀を裝ふ女の心を痛まずにはおられません。私も女の一人だけれど、汚れた女の足跡に近づかねばいゝでせう。いつも熱い涙を見ない日はないけれど、其度に袖口でぬぐうてしまひます。胸のもや〳〵を火の樣な文字にあらはず人は幸です。暗い心に泣いて解けがたい謎に苦みつゝ一人我のみ暗い天地を守らねばならぬ、悲歎とおどろきとに充ちた私の心は、自分に侮辱を與へると同時に、世人をも冷視憎嫌するの

です。昨の私は人にも自にも只優しうありたかった。今愉悦の心は熱い涙と共にこんこんとわき出ます。

而して憤つて泣いた後は、よりどころない胸の寂しさにふるへます。涼い足と熱した頭を抱へておどろき易い心には、昨の記憶の鮮明なるを歎きつゝ悲みます。

ある時は深い沈默にかへつて涙を流し、ある時は熱ある言葉を唇に独す、自分のふるへ姿がありありと浮んで來ます。

枕をすげかへて頭の重いのに又氣附きました。

○地圖

羽前　深山木

青や赤や黄や濃き薄き色彩によりて、地球を環れる六大洲と三大洋と幾多の群島もあまさずをさめし世界地圖よ。

私には歐洲諸國の名都よりも、中央アジアのあたり、印度の佛跡や、エルサレムの靈地や、太古の文明の面影ときく金字塔の殘れるニール河の畔エジプトや、それらの地名の小さな文字がどんなに私の心をひきつけて、憧れさせるであらう、けれどもそれよりも、なほわが戀ふるはアフリカの大沙漠である。沙漠へ行きたい、日月は地平線より出で地平線に入る、黄沙茫漠たるサハラの沙漠よ。何千年の後、人類滅せむとする時ひとり復活りて、終りに近づいた世を見るやうな氣がしまいか、あゝ沙漠へ行きたい。

私は駱駝を驅りて、沙漠を往來する隊商のやうに、沙漠の旅をつゞけて孤獨の生を終りたいのだ。

あゝこの遠きあこがれごゝろ。見るたびに愛誦の詩集をひもとくやうな氣がする世界地圖よ。――けれども私は何時沙漠を見られる。？

○子守うた

さつき

勝々お山の鬼はなぜにお耳がお長いよ――

お母ちやんのポンポンにゐたときに――

琵琶の葉かやの葉たべました――

暮近い西日を脊にうけて一心に讀書して居た私は、細い長い涙をふくんだ此子守唄を聞いて思はずも立ち上つた。

外に面した小窓を明けた、いつか涙は頰を傳はつてゐた、あゝあれが此間きいた大黒屋の繼子かと思つてじつと見守つた、又一雫續いて一雫。

まだやつと九つか十位十一とはならないであらう。

脊の低い普通の子供の七つくらゐしかないが何處となくいぢけて、顏の色の赤い髮の毛も赤い力のなさゝうな眼つきが一しほあはれをひくやうに見える、三ツ身それとも四ツ身か、前が合はないで赤黑い辨慶の下卷が見えて、砂で黑ずんだ足に、草履のやうな下駄はいてゐるのが如何にも寒さう。

大柄な赤ン坊を平術でおぶつて、短い手をやつと後に廻して、身體をゆすぶつて、風が吹けば今にも泣き出ずかと思はれる顏つき。

あゝ可愛想にあんな小さな兒におぶはせないでも、あれだけの構へしてゐる大黑屋、子守の一人くらゐ置いてもよさゝうなもの。

「大黑屋樣は質屋だけあつてそりや、つましいのですつて、あの兒も先の御内儀樣の時分には髮も綺麗に結つて白粉もつけてちやんとしてゐましたから、あの兒も少しは好い兒に見えましたがね、此頃ちや見る影もありませんね、矢張り爭はれないもので段々繼子じみて來ましたね、それで此頃うそつきになつたんですつて、此間も御内儀樣がうあ

の児はどうしてあゝ虚言つくだらう、一日増しに憎らしくなるばかりだつてね、髪結樣に話しましたつて、矢つ張り子供心にもひがむんですね」

と松がお隣りの女中に話してゐたのを聞いた事があつた。

虚言つきにしたのは誰の罪だらう、親の方で別けへだてすればこそうそもつくやうになるのである、先妻の児なら一層大切にしなければならないものを、あゝこれが世間普通の人情なのかしら、なさぬ仲とは皆かうしたものなのか知ら、あゝ罪つくりだと、人事ながら私は思はず袖をぬらした。

それでお耳がお長いよ——
きいちやんはいゝ児だねんねしな——
よい〳〵四つ谷の天王樣
なく〳〵と成田の不動樣
笑ふと草鞋をはかせます
よい〳〵よい児だねんねしな
、、、、、、、、、
細く長く又うたつてゐる。

○北國の友に

露木雅子

二年ぶりでやつと再び都の地をふむ事になりましたから取りあへず御知らせいたします。今日此頃の東京は全く花の色、花の香、花の雲におほはれて、何だか家にぢつとして居られない樣な心もちに誘はれては毎日〳〵彼處こちらに走り廻つて居ります。然し久しく田舍に引籠つて居りました爲に、すつかり身も精神もおくれてしまひました私には、都の著しい進化と人々の華々しい服裝を見て、はじめて「ひろく世間を見多く字を知る者は不幸也」と申す言葉の眞味が解りました。活動の都のちまたに立つて、四方八方にはしり行く電車の數々を、只ぼんやりと打見やりながら、この鈍い頭腦を少しでも鋭く、何事にも消極を尊ぶ田舍人の心を、今少しつよく確かな方に向かはしめたい等と思ふ瞬間は、私もまた昨日の雅子らしい點もござりませうが、また身を顧みれば全く御恥しい一人の赤毛布なんです者……ゆふべも十七の春にあなたと御そろへの濃紫のお被布きて撮りましたあの寫眞を篋底から取り出してぢつと眺めながらつひ泣了ひました!

あゝ美知代樣!あなたも私も未だ獨り身の心安い起臥に安んじて居ります身の上で居ながら、どうして斯く迄無意味な涙に胸をかき亂すのでございませう!?昨日も此家の從妹をつれて上野に參りましたが、十五の少女はたゞ花の美しいのと百千の色どりにつゝまれて動く男女の只面白くて嬉々として歌ひ笑つて居りました。巾廣の深紅のリボンをかざして騒いで居た過去の自分を現に見る樣な心地がして、はては花を見る一瞬間にも眞の我を忘れて自然をめで親しみ得ない身の不幸をつく〴〵天に恨みました。

花にいむべき嵐にも、花の香色をうばひとる雨にも、一點無常の感を抱かない少女のあどけなさを羨み乍ら歸りました。其中には幾分かはつた御消息もいたしませうが昨今はたゞ驚きの眼を見はつて一寸も靜寂を許さない都會の有樣を凝視して居りますばかり!!北國は未だ御寒いでせうね。折々は御たよりを願ひ度いものだとE子夫人が少し皮肉つていらつしやいましたから其まゝ御取次を。同夫人も少し世帶やつれが見えて何となく人づまのあはれさを感じました。ずつと前能く希望にかゞやく理想の御物語に新入のA樣を魂消させたきのふの意氣ありやなしや?

兎に角同窓の方々の消息は便を改めて申上ませう。

ちやあ御機嫌よろしく。さよなら！

○しばゐ觀に往つて

越後　星野小百合

ショールの中に深く埋めた顏を亦思ひ出したやうにうなだれた。蒸し暑い湯殿の息の様な空氣に涙の痕はほてつて、汗ばんだ後れ毛が襟筋にベタ〱食着くのが厭で厭で堪らん。今忠信が……忠信に化けた狐が悲しい述懷を續けて居る。氣拔けのした様な體で觀て居る後ろの人の怖ろしい眼をチラと覗いて益々恁麽所へ來たのが怖いやうな、馬鹿〱しい様な——結局來なけりあ宜かつた——と眼を移すとSさんもMさんもまるで夢中になつてる横顔の——えつ忌々しい！今度から誘つたつて來やしない！恁う呟いて、前にもうグッスル眠入り込んで居る男の子の顏を話しでもしてるやうにぢつと見た。其内に役者がチョイと見榮をした所で上から派手な幕がキリ〱と下りた。大鼓がドン〱鳴り出す、休みから起きた蟲の樣にグジャ〱と頭の蠢く中を寂しい目附の女——多分芝居茶屋の女中であらう——がうろつき廻つて居る。SさんもMさんもホッと息をついて、今蘇生つたと言ふ風に話し始めた。少したつてあなた恁うしたの？氣分でも惡かないの？まあ鬱い何だか頭痛がずるわ、Tさんハンケチ持つて居て？額のあたりを拭き乍らSさんは二階のたくさんの顏をじろ〱見て又じれつたいと言つた風に幕の字等を讀み出したMさんは袋から梨を摑み出して皮をむいてパカンと剝がした大きなのを右手で頰張り乍らお食りよ……突き出されちやあ——食はれやしない。カン……カン！幕の向うで音がした、二人は愕然して向き直つて膝のあたりを直して居た。

私丈は——何物にかやさしい罰ひを受けるやうな氣がした、さうしてよくも知らぬ人達と一所に恁麽所へ、而も衆目の中に座つてるのが——何だか自分の誇りを傷けられたかの様に——濟まない——と思つた。

拍子木の音が忙しくなつて來た。

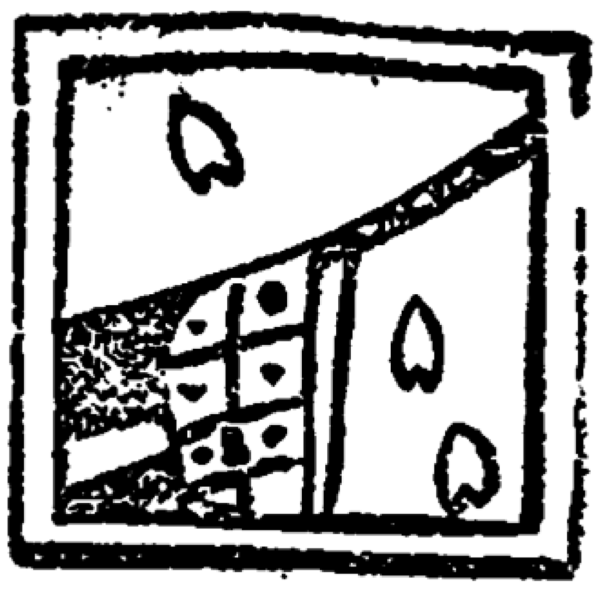
借り物でなければ似せ物である。長岡あたりで興行する三文芝居を大まじめに見たのだとすれば、笑止でもあるし、これだけの考へをもつてる女なら、てんで行きさうもないと思ふ。……(X)

○菜の花の咲く頃

近江　鈴蘭

打ち見る大地は、一際白く見える道路の他は眞黃に色彩どられ、其れが照々たる春光を受けた様は、一目見るさへ目眩るしいやうである。ぷーんと微かな香が息を吸ふたびに身内へ這入つて來て、ほんのりと氣持ちよく醉つたやうな快感を覺える。時、此の黃の大地の中の白い一筋道を、紺絣に黃木綿の兵子帶に菅の小笠をかろげにかぶつた伊勢道者が、十五六人も行く〱、喰つ付いたやうに草履をはいた足取りは、急ぐでもなく、たむゆでもなく調子よく步るいてゐる。行樂に憧くがれて、東西に車を走らす人を見向きもせず、與へられた己のが健脚もて、彼れ等は、崇敬する伊勢神宮に參拜するのである。其の純なる姿を眺めて居る……とやがて、「ヤ——トコセーイ、ヨーイヤナ——アレハイナ——コレハイナア——ソラヨーイトセ——」と、むつくりと、ふくらみの有る若かやかな男聲、道者の一人が段物か何かを一節宛云ふと他の道者連が、ヤートコセーイ、を唱和する、斯うして長い東海道を伊勢に詣でゝ又、此の唄を唄ひ乍ら歸つてゆく、何と云ふ原始的な唄なのだらう。門に彳んで此一行を見え得るまで眺めてゐる——と又次ぎの一連が來て、賑はしく唄つては行き過ぎる、飽かず見惚れてゐると、長いと云ふ春の日も暮れ近くなつて、菜の花が、ぽーと白みがゝつて來る、今夜は何處で彼等は宿るのだらう。私は道者の聲が通り初めないと、心から春だと思へないので、是れを聞くと如何にも春らしい悅ばしい笑つて見たいやうな、歌つて見たいやうな氣になる、又人にも逢ひ度くなる。

今夜はどこで宿るだらうつて大概女の足だ五里も步くとへこたれるにきまつてゐる、心配するがものはないでせう。(想)



俳句

内藤鳴雪選

（天賞）○噴水に人集ふ夜の櫻かな　島根　なつ子

（地賞）○琵琶抱いて花橘に我泣きぬ　山口縣　椰良美那子

○菜の花や馬で川越す旅の僧　岡山市　桃のむら女

秀逸

夢の國うつゝの里や春行きて　岐阜　葛の葉

水音の力も抜けて初櫻　長崎　永井圭子

菜の花や馬に高荷の嫁道具　福岡　井上みよ子

灯火や雛の影の濃く淡く　出雲　長崎百合子

我が縫ひし花見衣や春深し　大阪府　不破幽子

春の夕牛追ふ人は少女なり　廣島縣　武田富美子

春の香や山には若き女房たち　同　貞廣はな

春雨や窓の下行く簑の人　同　香川玉代

花の雫嬉し涙に似たりけり　横須賀　加藤楓子

風に散る高き社の櫻かな　土佐　桂花

薫風に美人の髪の長きかな　廣島縣　兒玉民枝

眞葛野や菜の花渡る鐘の聲　山口縣　椰良美那子

夜の街の花なつかしき灯かな　備前　佐久間緑子

風呂たいて花の客待つ彌生哉　岡山縣　坂本緑子

月の瀬やどこもかしこも梅の花　上野　百合

飛び〳〵に家ある岸や春の水　福岡縣　ひなどり

京に居を移して梅雨となりにけり　伊豆國　土屋いそ子

靜かなる浪音もして七日月　静岡縣　壽賀

櫻月猫たはむれて花のした　岩代　百合子

塵紙に歌書く人や春の宵　渡島　川原華子

客送る柳の門や月おぼろ　淺草　夕つき女

濺かゝる岩に不動の若葉哉　大分縣　小屋落子

御意なれば一さし舞はん櫻かな　下關市　本間蘭子

只一人繼もなくして春の逝く　神戸市　足立はる子

醉ひし妹落花の雨を浴びに出る　伊豆國　鈴木けい子

蝶二つ同じ夢見る牡丹かな　深川　小もゝ

朝がすみ春の女神のかづきかも　土佐　はざくら

ゆら〳〵と上る煙や春の雨　青森　掛端杉女

若僧や櫻散らして高足駄　丹波　野の花

寒月に梅が香透る障子かな　淺草　ゆふづき

雨降りてわが春惜しき夕べかな　伊勢　露木雅子

梅咲いて由緒あるべき古墳かな　岩代　羽入駒子

香焚て客もてなすや梅の庵　朝鮮　河野きよ子

春月や障子にうつる松の影　新潟市　吉澤キシ

此朝はうぐひすなきて晴れに幾　北海道　鴻上靜枝

遠山の櫻も見えて二階哉　失名

鳥の音はいづくの空ぞ宮若葉　大阪　田野しか子

花散る日夢みる人の顔の上　北見　白椿子

行く春や笹の葉末に雨の音　根室　齋藤ふじ

鶯や急がぬ旅の夫婦連　沼津　舟の子

春雨やゆた／＼歩む牛の顔　朝鮮　夕照子
繪馬堂の御太刀に蝶のとまりけり　芝區　島翠花
小窓より櫻散り込む茶釜かな　徳島縣　長濱眞砂
池の邊の羊の群や草若葉　和歌山縣　龍田君枝
漸草や草よりひゞく晝の鐘　長崎縣　河部靜江
みちのくに暮れ行く春を惜しみけり　東京府　岡野よね子
裏口に橋吊したり桃の村　西多摩　岡野伊智子
曉をつげる上野に落葉かな　本郷　城本みち子
春の夜や御佛の灯もおぼろにて　茂木芳江
陽炎や草紙干したる石の上　播磨　紅雀女
ゆく春の歌一つだになかりけり　下總　小出よし子
腰元が袖で灯かばふ春の庭　京都市　田中多津子
春日和三層樓に花見して　廣島　後藤壽美枝
牛曳の悟り顔なり花吹雪　山梨縣　鷹谷とみ
雨によし花によし京は詩にもよし　牛込　枯葉
花の下石屑散らす石屋哉　尾張　新美靜枝
暗けれど青葉の陰に鳥の聲　和泉　金田文子
小あんまの東風に向ひし歩み哉　大阪　田野靜子
出水に巣立ちそこねしひばりかな　紀伊　中田靜惠
鶯の歌よみ馴れて春ふかし　備中　白百合乙女
藤棚の下に立ちたり女繪師　新潟縣　岩本芳子
春の鳥井戸の廻りに姦しき　大井町　小島美雪
朧月傘をさしたる太郎冠者　山口縣　閑靜の姫小松
陽炎や馬に沓打つ麓道　橫濱市　中島留舟
尼寺の鐘のひゞきや花の暮　大阪　岡本春子
紅梅の雨や小路を蚋の飛ぶ　備中　小見山春子
春の雨拗ねし處女をからかひぬ　茨城　浮舟女
和子二人衣更させ玉ひけり　越後　藤原鍋女
春の雲化粧鏡にうつりけり　愛媛　宮田ライ子
春の雨女が絞る袂かな　麻布　小倉うた子
高殿の灯火凄き春の宵　岡山縣　赤木しげ子

畑に富み田に富む里や啼く蛙　上毛　小澤碩子
逝く春や歌よむ窓に雨暗く　丹波　大槻房枝
草笛も聞えて永き日なりけり　新潟　昔幸子
風呂借りに來る人多し春の宵　靜岡　はるさめ
瀬を上る鮎の早さよ雨の中　愛媛　宮田頼枝子
牛曳は牛に後れて桃の道　茨城　田村波津子
鞍取りて馬の背さます若葉かな　信濃　百瀬清子
春風に浮かれて高し蝶二つ　失名
春の夜に星をかぞふる妹哉　渡島　宗原美津子
朧夜や小太刀試む美少年　渡島　田山清子
孝女の碑建つる評議や暮の春　土佐　秋の花
聞き馴れし君の聲なりおぼろ月　渡島　文江
青簾晝寢覺めたる少女かな　伏見　阪よし子
おくれ毛の妹に吹くなり汐干風　土佐　千代子
青柳や鍬洗ふ女の岸に立つ　大連市　大内雪枝
十八丁奥に寺あり春の山　山口縣　白菊女
戀猫や棚の雛を蹴て落す　西多摩　岡野よね
暖や我は羊の如くにて　麻布　吉田かつ子
夏の川只勇ましく流れけり　根室　齋藤ふじ
春雨に文箱の紐のぬれてけり　甲斐　鷹谷久子
髪けづる我手けたるし春の風　甲斐　早川忍子
鼓抱きて柳をくゞる女哉　大和　靜子
草餅や隣りのちごに一包み　紀伊　廣畑英子
小雨して灯影なつかし春の町　備中　雨の花
星一つ流れて寒し那須の原　名古屋市　水野千枝子
彼岸會や六條樣へ傘と傘　越後　藤原竹子
なの花や明くるに早き里の空　枯葉
蝙蝠や蟲喰ひ鐘に小雨ふる　越後　成田登與子
花一枝折れば風ある月下かな　伏見　阪芳子
金扇に花の吹雪を掩ひけり　常陸　永井千代子
美姫負て春の山坂下りけり　すゝき



初作

編輯局選

○接木（地賞）

靜枝

降つて降つて降りぬいた春雨も、今一寸東京の方へ逃げたと弟の注進！　すると妹が姉さん試驗よと、迫る、水氣が多い時が接ぐにはよいと、祖母上の仰せ、まゝよ物は試しやつて見ませう。此間前の大工に頼んで背戸田の柿を接いで貰つたのを見て、あんな事誰でもしてよ、と口走つたお蔭で、到頭今日は試驗の一役。

ではしませうといへば弟は僕が手傳ふから成功したら少年一冊よ、なんて走り出した。

やがて鋸、ナイフ、藁と運ばれた、ナイフに露が砕けて、照る日の陰が美しい七色となつた。祖母さんの仰せで、月夜柿と、最上柿と定まつた。

後の子守と猫とが珍らさしうに見て居る、やがて、弟が周りの草をとりのけだした、私は小さい鋸をとり上げて引き出した、碧い色榮えた苔が次第に落ちて行く。柿の鋸粉が、スミレの莟に止つた、なか〳〵引き切れさうもない、弟が姉さん上へそれてよ、なんて評しだした。やがて青春の望みを若芽に見せたまゝ、柿の木は倒れた、おゝまゝよ野生の望みを遂げんよりは美はしき果に導いて、あげますよと、勝手に祈つた。ナイフをもつて、一方へ甘皮の處を傷け、又一方へ刺し、接柿と、うまく合し、藁で卷き立てた、それで一本へ二種類の柿が接げた事になつた。それでも心配なので萬一を思ひ、夏蜜柑の根本の土を運んで、四方から埋めて、接け接けと、上から、たゝいて置いた。

桃栗三年柿八年、此果は誰の口に入るであらう。

夕陽落ちて、牛の聲長閑なり。

面白くて書いてあるといふことが分る（評）

○或る一夜（人賞）

横濱市　松田千代

雨がしと〳〵と降る或夜母上樣は弟をつれて、伊勢佐木町の曲馬を見に行かれました。家には母上が出る時願つておいた婆樣と、私と二人であるが老年と話も合ぬ故、だまつてゐたが餘りたいくつになつたから、卒業式にする白い襦袢の袖を縫つておかうと、呉服屋から新モスを買つて來て縫はうとした。しかし裏がなかつた、自分の裁縫箱を開いて見たが、思ふ樣な切が見つからなかつたから、母上のお歸りを待つ事とした。次になす用事も無く自分の室へ入つて机に向つて、考へるともなく今日學校でテニスの面白かつた事を思ひ

出した。「ほんとに内藤さんはお上手ね！」、如何にしたらあの様な玉が出るだらう、一度でもよいから出して見たい、内藤さんの出した玉は誰も受ける者は無い、ほんとに羨しい事」などつまらぬ事を考へ出して本を見やうともしなかつた。其れもあきたから下へ下りて店へ行きましたら、小僧は未だ仕事をしてゐた。時計の具合が悪いのかむつかしい顔をしてゐる、かあい相であつた。吾家は三年前に父が死んだ故に、母の手にて職人を置いて商賣してゐるが、母上がおるす故職人は何所へか遊びに出かけて姿も見せぬ。夜はだんだんとふけて、時計がやかましく四方の壁から鳴り出した、しかし何時だかわからず、最後の時計が十時を打つたから十時なのでせう。小僧は急に元氣を出して、店をかたづけ始めた。一人でかあい相だから手傳つてあげた、其内に職人がふら／＼歸つて來た様だつたが、家には入つて來なかつた。すると表にヴァオリンをひいて「間がいゝんでせう」の歌を歌ひながら來た、母上も歸宅し給ふ、面白き今夜のお話を伺つて後寐た。

四方の壁から時計が鳴り出したといふことは何でもないやうで、一寸何かの暗示を得たやうに思ふ(評)

○米搗き

山口縣　菊ケ濱の春月

をやみなく春雨がしと／＼と降つて妙に淋しい日であつた。徒然のあまり脊戸へ出て見たら助やが米を搗いてゐた。私は何だか急にお轉婆がして見たかつたのでとう／＼三百程つて助やに願つたら「ハヽ……お孃樣が米搗き！三百程つて搗れるもんかい。なか／＼えらいもんだぜ？じやあ助が此所で數へるとしようつて莚の上に趺をかいた。私はヘン！と云つて早速ダイガラの上にあがつた。此の時松陰先生の事を思ひ出して眞似て見たかつたので傍のレンドの上に文壇を開いた。かうして見る内にいつしか百程搗いたのだ。助やが大きな聲でヒャーク！同時に下女の春やが來てまあお孃樣つたらホヽ、まさか松陰先生でもござんすまいに……つて。冷かされて極りが悪るかつたので思はず文壇をたゝんだ。そして尚も眞面目に搗いてゐた。

丁度うすの邊りの傍の戸に四寸四角位の破れ穴があつた。そこから鷄が一羽頭を入れて杵がコトンと下る毎に頭を引込める。杵がギーッて上ると又入れコトンと下るとツッと引込める。丸で電氣仕掛の樣だ。其の樣が餘り面白かつたので暫く搗きつきして見てゐたがやがてツイッと逃げてしまつた。この時二百六つだつた。やう／＼我にかへつてもう九十四だと思つて一生懸命になつて搗いたがもう駄目だ。息がはづんで足が疲れて來たのだもの。それでもせめて二百五十位はと思つて我と我が心を叱りつゝ尚も續けたが四十三でどうしても搗かれなくなつた。たつたあと七つだがそれさへ搗く勇氣が出なかつた。ダイカラを下りる時以前から大きな足が餘計大きくなつた樣な氣がした。

お孃樣の米つきは見ものでせう(評)

○母を失ひし友へ

浅草　千枝子

御手紙拜見致しました、御母樣が御永眠遊ばしたとの御事、まあほんとうに御氣の毒樣です事、定めし皆樣御なげきの御事と御推し申上ます何卒宜しく申上て下さい。あなたは、不運／＼と御云ひですが、それはもう御兩親の御滿足な方から見れば不運には違ひないけれ共、私の樣に十二歳くらゐで兩親に別れる樣な人も世にはいくらもあります、ましてあな

たには御やさしい御父様が御有りではありませんか。両親にもいやまさる誠の神生ける天の父を知りて愛せられる子供と成つて暮す事の出來るのは何より幸福ではありませんか、其上に身體も丈夫で人なみに讀み書きも出來、神様の御惠みに依て私とも姉妹と成つて實に幸ひではありませんか、世には、あなたの知る通り、にがき藥を呑んで日をおくる人もあり、身體は丈夫でも精神の病氣な人もあり、身も心も共に健全でも、彼の水害にあひし人々の様に今日の衣食住に困難して居る人もあるではありませんか。之等の事をよく〳〵考へて神様に御禮をなさい、決して悲しんで日を送らぬ様にね、御自分の成す可き事を忠實に御盡しなさい。申上たい事は澤山有りますが、又其内折を見てゆる〳〵認めます、何卒御身を御大切にして決してわづらはぬ様にして下さいね私も蔭ながらあなたの幸福を祈つて居りますよ、では左様なら。

〇鰆の黄味焼

紅子

女子文壇　初作



洗濯　京橋　鈴木よろづ子

十七年ぶりとかで、東京から叔父さんがいらしつた、私は寫眞で知つてたばかりである。

さア今日こそ、何でもこしらへてご覧よと母さんに云はれて、早速ノートをくつて出來さうなものを一つした、夕飯の時出したら「さうか、それはご馳走さま、なに、鰆の黄味やきだつて？成程、やあこりやうまい、結構々々、えらいものが出來るね」つて私を見ていらつしたが、やがて「兄が居たらさぞよろこぶだらうな」と獨り言のようにいつてお箸をお置きなすつた

母さんは、チラと私を見てさびしく矢つて居らつした。

見せまいと我慢したが、逐々たまらなくなつて、お汁のおかはりを機會に、臺所へ逃げて來て、ハラ〳〵おつる涙を拭ふた、私にはもう、あきる程のかなしみであるけれどやはり……。

〇飴屋

近江　植村春月

川端の枝垂れ柳の涼しい木蔭に、いつもの通り飴屋さんが陣取つて、こ

れから飴細工が始まり左樣と言はぬばかりに、例の大きなブリキのラッパをプウ〳〵と吹き立てたので、近所中の子供は耳を欹てた。

するとニ三ヶ月前からこのプウ〳〵と、お馴染になつて居た、幸坊、富ちやん、吉松の三人が、眞先に驅け出して飴屋の前に並んで立つた。飴屋の小父樣は鍮計りの飴を鍋の中から摘み取つて、日に燒けた赤黑い手で夫を練り始めた。箱の上には繪具を溶いた小さい汚ない小皿が二三枚と穗先さの切れた筆が一本轉んで居る、いつの間にか田舍者が四五人足を止めて少し口を開いたまゝぼんやりと眺めて居る、柳の枝はさらり〳〵と搖れて電車は北に走つて行つた。頓て白く練れた飴を麻柄に粘けて、いつが代にも磨いた事のなさ相な、黑い齒にそれを啣へて、咲いたら臭さ相な呼吸を一吹き吹くと、ぶつと膨れたので、あちら伸し、こちらを引張り、切るやら、曲るやらして見る〳〵、犬、猫、狐、烏、布袋、達磨など色々の物が作られて並べられると、田五作らしい者が一人「うまいもんだナ……」と獨言のやうに賞めた時には、七ッ八ッの首が飴箱を圍んで居た、可愛い六ッばかりの小娘が「猫おくれ……」と、一錢銅貨を一ッ投げ出した。

筋向ふの小僧が茶色の襦袢一枚で盛に水を撒いて居る、人力車が五六臺がら〳〵と東へ、隣の子供は祖母樣をねだり始めた、富ちやんと吉松が見えなくなつたのも大方母親をせびりに行つたのであらう。

○水仙

横濱市　石黑香代

淡いスキートな香が或る物をそゝるやうに、どよみのない、空氣を流れながら、一種のメロデイーをして、私の鼻をうつて居ります。ふと、こんな事を思ひ出しました。もう餘程前姉が寢物語に話してくれたので御座います。昔希臘に木靈と云ふ女神が林の裡に居りました、其女神はナーシサスと云ふ美しい男の神樣が大へん好きでした。けれどナーシサスは木靈を好きとも何とも思はないものですから、悲しくて悲しくてとう〳〵聲ばかり殘して身體が段々消えてしまひました。ナーシサスは其樣に木靈を嫌て自分の姿を水にうつすのを何よりの樂しみとして居りましたが之もとう〳〵水仙になつてしまひました。私はこゝ迄記憶をたどつた時知らず〳〵あまい香を追て水仙を見ました。もだへにつかれてかつくりと首を垂れた姿はあの心強いナーシサスとは思へませぬつれない男をうらめしげに仰いだ時強い日を怖れてほつとうなだれた木靈はきつと之に似て居ると思ひました。

○親しき友へ

本鄉　前野幸子

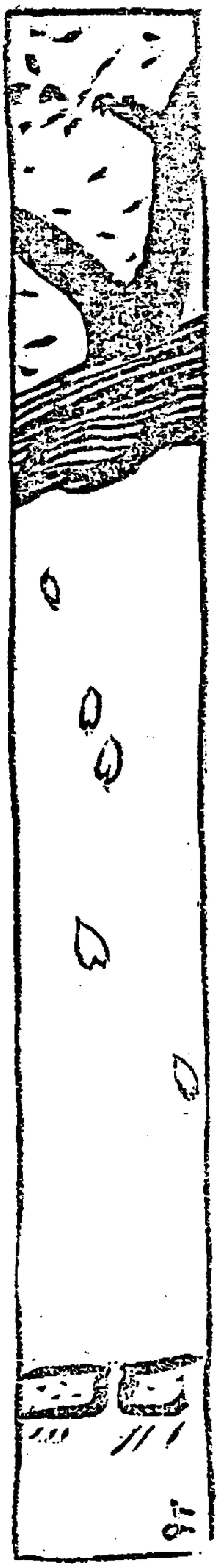
妙子樣其後は久く御無沙汰致しました、許して下さい、私はあなたを忘れる樣なそんな心はございませんの、ねえ妙子さん私の心を知つてますわねえ。若しもあなたが東京に居らつしやるのなら、どんなに嬉しい事でせう、私は殘念で堪りません、何故東京へ來たのでせう、妙子樣やお祖母樣のそばに居れば私は何の苦もなく居られるものを、東京へ來てから一日も面白いと思つた事はありません。妙子さん察して頂戴、いくら親のそばとは云ひながら義理ある人がつらくあたるでせう、御兩親の揃つてゐる方を見ると羨しくてなりません、私も母さへ生きてゐたなれば今頃はこんな悲しい事はないと思ふと、胸が一杯になつて涙が止度なく流れます。今でも私の頰には涙が流れてゐます、田舍で生れた私はいつまでも田舍で暮らしたいと思ひます、くらい山の中でもよいから行きたうございます。あゝ又いつもの愚痴を並べましたどうか許して下さい。

妙子さんたとへからだは、離れてゐても心はお互にはなれないでゐませうね、そして、いつまでも妹と思召して可愛がつて頂戴、一生の御願ひです、いつになつたら、會はれる事でせう、屹度どうにでもして會ひませうね。末筆ながら小母樣によろしく願ひます。

●初作●募集●

初作とは初めての投書と云ふ意味です、此欄は卽ち初めて投書なさる方の爲に設けてあるのですから、文章を書いて見やうと思ふ方には何より好い稽古の場所です、振つてお作りなさい、そして遠慮なく投稿なさい、記者は出來得る限り揭げます

誌友くらぶ



誌友會に就いて

○記者様誌友會の御陰にて皆々様に御目通り叶ひ恁嬉しい愉快な想ひは生れて以來有りません殊に平塚白百合様山田邦子様其他の諸孃當日御役目御苦勞でした内藤千代子様水野仙子様臼井花子様飯島銀子様小瀧しげ子様松井靜代様甚だ失禮致しました御免し下さいな(下谷、桂子)

○記者様誌上で御名のみ存じ上げて居つて御目に懸る事は出來なかつた皆様にもお蔭様にて誌友會にて御目に懸りどれだけ嬉しう御座いましたらう厚く御禮申上ます、幹事の皆さまにも御禮申上ます、今から來春を樂んで居ります。夢女様、艸雲雀様、つゆ草様、雲井の雁様失禮致しました(赤坂、靜江)

○京橋の千代子様會の時は失禮致しました、何卒これからもよろしく、山田邦子様や平塚様や常に御したひ致して居りました水野様などの御尊顔拜す事が出來て、ほんとに私としては嬉しいわすられぬ印象をあたへられた一日でございました(東京市、黒田紫蘭)

○若葉にそゝぐ五月雨の露ぞ繁き七日、上野韻松亭に第二回誌友會は開かれた、會する者百人あまり、花ゝ競ふレデー連の華かさ、時勢おくれの自分は只く羨望に堪へない、誠に此日友もなく、隅の方にプログラムを見つめて居るつらさ、隣に人は居ても、口を聞て呉れず、吾れこそレデーなりと云はぬばつかりに濟して居る、折角の餘興も興がのらぬ、耳に殘つたのは平塚さんの細く永い美しい聲、折から耳元近くでつき出す鐘に、袖別つ、あゝ樂しみに樂しみ、待ちに待つた誌友會も、何だかもの足りない樣だ……願くは幹事の諸姉様よ、此次の時は、今少し打とけて、親しくは出來ませんでしようか、夫れに少し休みの時間を多くして、名刺交換でも其場でやつたらいくらか親密に出來ませんでせうか……あまり惡口ばかり云ひましたが御心におかけ下さいませぬ様に願ひます(澁谷の里、落葉)

○都の第二回誌友大會には、あやにく雨でね、さぞ皆様お困り遊ばしたでせう?晴天ならば、お仲間入さして頂きたいと存じまして、常陸野より六日の夜行列車にて、上京する心算で、何かと準備など致して居りますと、ポツリポツリ大雨が降つて參りました其の口惜しさ、全く失望致してしまひました。されど青葉の上野の小雨する日美はしき貴孃方の床しき集會、一入華かにはた詩的であつたでせうと、三十里へだたり居る北の山里より、千里眼にはあらずとも、まのあたり見ゆる心地がいたします。此の常陸でも、水戸か土浦か下館あたりで、誌友會をお開き遊ばしたいと思召す方が御座いませうか?(西茨城郡北山の里、波津子)

○誌上の姉様方五月七日上野にありました誌友會私參上致しまして姉さま方にお目にかゝり度う御座いましたわでもあの雨で行かれませんでしたの實に〳〵殘念で御座いました不束者ですが以後よろしく御交りを(本郷區、細川しげ子)

○記者様誌友會面白うございましたよいづれ蔭の葉様からお話しになつたでございませうがほんとに愉快でございましたわ(岐阜、二三四)

○交際

鳥取縣八橋町字八橋町

藤田せつ子

●●●●●●

▲山陰の海より　愛する諸姉君よ私は二月より

愛讀者の一人となりました何卒ゆくすゑながく御交り下さいませ、私は數年前母を失ひ淋しい月日を送つて居ますあはれなさけある諸姉君よ深きお交りを願上ます。

○　兵庫縣川邊郡長尾村口谷阪上留造方　みどり子

▲教科書　誌友の皆樣以後よろしく御交際を願ひます。猶女學校の教科書なら何でもよろしいから送つて下さつた御方に相當の御禮と妾のにくき寫眞とを御送りいたします。

○　橫濱　千鶴子

▲橫濱の皆さん　何故文壇上で當市の方は振はないんでせう日々に他國の人は來り其につれての新しき風物に接してますのにあの山の手の高層なる洋館の如何に歐洲的なる事よ、かくして私達は直接に間接に新らしい空氣にふれてますのにね皆樣ますく振つて頂戴な。

○　府下北多摩郡砂川村　橫田秀子

▲鶯鳴く里より　私は茨城縣ですが只今は當地に居りまして小學校時代からの本誌を唯一の友として居ります皆樣何卒御交際の片端に添へて下さい。

○　備前兒島郡八濱町大字八濱　松本雅子

▲嶮き國より　親愛なる誌友諸孃方妾は備前の片田舍に住む不束者ですが以後宜しく御見捨てなく玉章及び繪葉書の御交換を幾重にもお願申しますきつと御返しは致します但し永久的に御交り下さる御方を希望致します男子僞名の御方は一切御斷り申します。

○　山口縣吉敷郡仁保村　栗林芳子

▲茶の湯生花の趣味　おなつかしい誌上の姉樣方私始めて投書致ましたからよろしく願ひます私は今月から此の淋しい片田舍に只茶の湯活花を趣味として暮らして居ります何卒諸姉樣繪葉書や玉章の交際を永久に願ひます。

○　大阪市南區東神田町八五六　曾我ふじを

▲初めて　御なつかしき皆々樣方、私は、二年ほど以前より女子文壇の愛讀者なのよけれども今迄皆樣には御親しく御交際を御願ひ申しました事はありませんのだけどね以來はどうか御見捨てなく御誰樣にても意のお優しきお方は繪葉書なり御手紙の御交際をお願ひしますわ然し決して男の御方は嫌ですよ御文通して頂いた御方には屹度く御返事を差上ますわお望みに依ればつまらぬ田舍者の寫眞ですけれど御交換も致しますわどうかね皆さん御交際を願ひます。

○　伊豫別子銅山通り高藪局區內　川村芳野

▲鄕に歸りて　誌友の皆々樣私も本誌の愛讀者でありまず昨年都に遊學して居りましたが病氣のため退校しまして今はこんな片田舍で淋しいライフを送つて居ます誠に不束な者ですがヱハガキ雜誌寫眞レターの御交換をお願ひ致します

○　長崎市今御龍町三七、山下方　松尾貞子

▲長崎より　誌友の皆々樣私ね當地某女學校に昨年迄通つてゐた者です不束者ですが永久に御交通ねがひます御玉章下さいました諸姉樣方にはきつと御返事致します何卒御交際下さい。

○　北海道後志壽都郡渡島町　齋藤悅子

▲若葉をわたる風も　なつかしき頃となりましたが誌友の皆樣には御かはりも御座いませんか私は始めて投書いたしましたからよろしく御願ひいたします、私は病氣のため學校も半でやめまして淋しい田舍に暮して居る者で御座いますの御情ある諸姉方どうぞ末長く御交通をお願ひします。

○　京都市油小路五條北入大森與兵衞方　あやめ

▲京都より　誌友の皆々樣毎度お美しいはがきや御心込めのお玉章を有難う存じます相も變らず取り捨てにして返事も送らない方が澤山あるのはほんとに殘念でなりませぬ何卒々々。眞心から御交際をお望み遊ばす方は美人繪葉書か御玉章御交換を御願ひ申ます但し初めての御便りは必ずく封書にてくはしく御望みをお記しを願ひます尙永々御交際をして頂きました土佐の捨小舟樣只今の御住所お知らせ下さいなお願ひです。

○　神田區五軒町二十番地　山中さゆり

▲神田のかたほとりより　始めて皆さまに御交際を御願ひ致ます昨年よりかげながら皆樣の御芳名はお慕ひ申して居ります何卒不束ものですが誠の妹と思召してお導き下さいませおひまの

をりにはお手紙お恵み下さいませなおねがひ致します。

○　西多摩郡瀬戸岡村五百二十七番地
岡野ヨネ子

▲私も本年一月號より光榮ある女子文壇の愛讀者となりました、昨年小學校を卒へたばかりの至つて淺學文盲ものでありますが以後誌友くらぶにて諸姉樣よ宜しく御交際を願ひます。

○　大阪府下泉南郡春木
磯うつ波

▲私は磯うつ波を友として淋しい生活をして居る少女です皆樣のうちで哀れと御思ひ下さる方は一片の玉章を御めぐみ下さいませ。

○　仙臺市空堀町五番地井上方
佐藤蔦子

▲仙臺より誌友のみな樣方お變りなくつて？さうさうお花見ね、うれしいわ、私東京に居らつしやる方、本當にうらやましいのよ、早く私も東京に歸りたいわ、仙臺のみな樣おふるひ遊ばせなお近い方はお遊びにおいで下さい、みなさんレターおめぐみ下さいませ。

書籍交換

○　大分縣玖珠郡野上村五五三
橘爪梅子

▲所有の物。女子文壇三巻二號（明治四十年二月一日發行）
△求むる分。女子文壇六年六號（明治四十三年五月一日發行）

○　群馬縣新田郡木崎町赤堀村
小澤碩子

▲持つて居る書物。虞美人草、鏡花集、一巻內彈アンナカレニナ、不如歸、黑潮、琵琶歌、雜誌は本誌の他文藝倶樂部、文章世界各二十冊位有り
△望む書物。鶉籠、逍遙先生の桐一葉、鏡花の白鷺、鏡花集三巻、晶子女史の歌集何にても、女子文壇四十二年八月一日發行五年十號。右何れも葉書にて問合せてからにして下さい。

> **木版畫と三色版と**
>
> 木版畫と三色版との畫をあつめて畫帖をつくりたいとおもふ、一人の力で多く集めることは不可能ゆゑ、皆さまに御不用の畫があつたら雜誌から切取てなりと戴きたいと存じます。
>
> 常陸、下妻、大寶村　横瀬夜雨

○　三河知多郡成岩町天王瀬古七十一
榊原庄市方　榊原銀子

▲持つてゐる本。「蕪村句集講義」春夏秋冬と「子規書簡集」上下「一葉全集」「呪はれたる女」「東京遊行記」「修正銀行簿記學」其の他文藝雜誌もあります。
△讀たい本。現代自然派の小説をお持參之御方は御貸與下さいませんか。

○　群馬縣藤岡町六丁目
中島屋方　羽路朶榮

▲讀みたい書物。「渚」「獨步集」「葉舟小品」「ゲエテの詩」「フランス物語」「あめりか物語」「都會の婦人」「小品」
▲持つてゐる書物。「自然と人生」「青蘆集」「紅花（歌集）」「平家物語上巻」「若葉集上巻」「婉蓉東西南北」「泡鳴著海堡技師」「文と詩」「マダム振り」「婦人世界」四ノ十三

○　岡山縣淺口郡六條院村西三二〇一
金井龜

△讀みたい書。乳姉妹、筆子、濱子、新ホト、ギス、脚本春日局、女夫波、天うつ波（以上小說）少女、婦人畫報、女子文壇（以上雜誌）の內どれでもかまひませんから不用でしたら
▲所有の分。伊勢物語、經濟教科書、催眠術全書、日本小地誌、三宅敬造先生の女子習字帖、澤田吾一先生の中等算術教科書前後編と交換して下さい。

○　愛媛縣溫泉郡荏原村
高橋政子

△求むる分。晶子樣の歌集ならば何にてもよろしく又德富樣の寄生木、藤村詩集御持の方は十日又廿日と日を限つて御貸し下さいませんか御禮は當地の繪葉書又は昨年三月頃よりの女子文壇にて御必要のがあれば御送り致します。

○　三重縣四日市々新丁味岡末松方
やよひ

▲所有の分。婦人世界、新婦人、女學世界、記事文美文其他婦人用雜本
△求むる分。英譯不如歸、神社佛閣、各地名所エハガキ、婦人風俗、小說雜誌色々、上等の絹ハンカチ絲にてあみしショリ（何にてもよろしく）御交換下さい、私は四日市名所の寫眞をつけ

て御禮の品をきつと御送り致ます。

○　岡山縣淺口郡鴨方千六十五
　　　　筒井松子

△見たい書物。「一葉全集」御持ちの方は御貸し下さい御禮にはきつと手製の爪入をお送りいたします。

○　京都府加佐郡河守町金屋六十四
　　　　荒川かね子

▲所有の分。「紅葉全集」卷四、花袋の「名勝旅行」（畿内の部）小杉天外の「新夫人」蘆花の「自然と人生」晶子の「女子のふみ」
△求める分。文藝倶樂部の增刊（三三年前）「ふた昔」桂月の「關東の山水」「風葉小品」藤村の「藤村集」等いづれにても前記の書と交換下さいまし、求める分の書を御送り下さる時御住所と貴女の御望みの書と御知らせ下さいまし、早速返送致しますから。

○　大分市小物座町一、二五六
　　　　原田みを

村井さんの食道樂（春夏秋冬何れの巻にてもよし）御持合せの方は私の臺所重寶記と御交換下さいませ、但し豫め御一報を願ひます。

○　府下玉子町上十條一、五三二
　　　　高木姫百合

▲私の新金色夜叉青龍集とが不用になつて居りますから少女の秘密日記、少女の戀御不用の方が御座いましたら御交換下さいませんかひ御願で御座います。

○　土佐國土佐郡本川村
　　　　夕の花

▲持つてゐる書物。「秀才文壇」「本誌」「文章講義錄」「文章世界」「文章新辭典」「日記新文範」「言海」「天紙の大鑑」「土佐日記講義」「徒然草講義上下」「詩的小品文集」「東京苦學遊學案内」「女學世界」「婦人世界」
△讀みたい書物。「己が罪」「後の不如歸」「寄生木」「戀」「ハイカラ令孃」右交換を願ひます尙御照會の節は先拂にて御よこし下されても受取ります。

○　埼玉縣入間郡勝呂村字石井
　　　　野口ます

▲持つてゐる書物。「不如歸」「新魔風戀風」「閨光」「新桂川」「滑稽百譚」「大笑百話」「閑話集」お伽話「腰折れ雀」「取換草紙」「不思議の屛風」「文藝倶樂部昨四月ヨリ十二月マデ」「少女友第一卷一號ヨリ四號マデ」「增刊花衣」「增刊少女大博覽會」其他雜誌
△讀みたい書物。「乙女の秘密日記」「少女小說捨兒」「褐色の花」「黑潮」「夢二畫集」「ヨヘイ畫集」「婦人畫報增刊現代名流婦人」本誌增刊「今の婦人」「婦人ノート」

○　鹿兒島市山下町九〇
　　　　是枝みち子

△見たいもの。皆樣のお中に「少公女」御持ちの方が御ざいましたら次の書物の何れかと交換下さいませぬか。
▲持つて居る書物。露子の運命、松風村雨小公子、長者星外各雜誌。

記者より

▲第百號所載小說『河岸』『花』『北の空にて』等は凡て剽窃でした北海道上原ふみ子と云ふ名で來た原稿です、之を摘發して下さつたのは橫濱の愛讀者外六名の方でした、此處に其勞を謝します▲美作の石田邦子さまからいろ／＼記者に同情して下さつたおハガキを頂きました、おん爵申上ます▲ゆかりさんに化粧問答はハガキでも差支ありません▲土佐、梶原重子さま誌友會を祝つた繪ハガキ有りがたう、御病中の由お大事になさいませ▲わざ／＼賞品のお禮書お送り下された方がございます、確に拜見▲旅順、きみ子さんに、餘り漠然たるお尋ねでお答いたしかねます▲山口縣、松尾しづかさんに誌友くらぶの原稿は半紙に書いて下さつても一向差支ありません▲京橋、牧野初枝さん、三河、槌谷とめさん、其他澤山の方々から紀念第百號の發刊について御祝詞をたまはりありがたう存じます▲在米、ひふみ。京都府、並河龍子。春水、梨花。河原時子。山田花子。札幌、靜子。新潟、石津樹素子。淸川ゆき子。豐後、中村るい。長野まつ子。はつゆき女。松本、矢口貞子。林田しげえ。宮城縣、ときいろ。廣島縣、高田梨葉。以上の皆樣方からのおたよりは逐一拜見いたしました、別にお答はいたしませんが一寸御挨拶まで▲赤インキ、鉛筆などで書いた原稿、ハガキへ細字で何十行となくつめこんだ原稿、用事を綴つも一しよに書いた原稿、卷紙へ書いた原稿それらは凡て遠慮なく沒書しますから能く御注意して下さい。

繪葉書

○　京橋區弓町二十　鈴木方
　　　　山田百合子

五月一日號に香町の愛讀者樣の御忠告は御尤もで御座いますす私は昨年四月から本誌愛讀者の一人と加りまして誠に悅しい次第で御座います御思召のある方は、私の樣な不束な者でも愛して手紙や文章の御交際を願ひたう御座いまする、其の繼り御忠告文にある樣に只御祭りの樣に初め二、三通の御交際は嫌で御座いますから其の御含で末永く御交際を御願ひ致度いのでありませす、次に皆樣各地の繪葉書を御送り下さいませ私も必ず種々な繪葉書を御送り致します。

○　伊勢四日市上新町

坂倉れい

私も昨年四月よりの愛讀の一人となりましたが家には父母と兄姉と私の五人暮らしでございましたが不幸にも昨年の冬兄に死にわかれ本年四月又々姉には歸らぬあのよの人となりましたから家中は追々とさびしくなるばかりです血あり涙あり同情ある諸姉さまよどうぞ末永くヱハガキの御交際なし下さるやう御願ひ致します。

○　京都市東高瀨五條下る都市町

古田露子

△所有の分。當地神社、佛閣、名所、舊跡、風俗、美人、各地有名なる風景、其他寫眞版、三色版等數十種あり

△求むる分。善惡を問はず如何樣の種類にても宜しく繪葉書に趣味ある諸姉樣御交換を望みます卽時發送致しますから御住所貴名明記を分けてお願ひいたし置きます。

○　熊本市東坪井立町二〇

松岡友子

なつかしき誌友のかた〴〵と繪葉かきの交換を御願ひ申します私は繪はがき狂氣です幾久しく御交際を御願ひ申します御返禮は必ず當地名所にていたします。

○　大阪市東區內平野町二丁目林方

岡部きよし

▲所有の分。大阪名所

△求むる分。各地城跡公園そのほか名所名品なにとぞ御交換下さい。

個人消息

○土佐の川村芳野樣、伊豫の山中春子樣、誠に失禮では御座いますが私書物の交換はお願ひ致しましたけど永久の御交際はとても不可能ですからかたく御斷り申し上ます。備前の近藤巴子樣、お望みにより女學世界二冊と女子文壇二冊三月四日に發昭して置きましたがお受取りになりませんでしたか、其の後も一度葉書でお尋ねいたしましたけれど矢張り御返事が無いので御案じ申して居ります　お約束の「玉蟲」はモウ宜しうございますから御安心下さいまし、福井縣の北二葉と仰有る方男子とみとめましたから御返事差し上げませんでしたどうぞ惡しからず。（大阪、高山米子）　○美濃の葛の葉さん先月の此欄に金澤のむらさきさんを男だと思っていらつしやるやうに書いてありましたがあの方は女で御座います、少さい頃からの私の友達で御座ります。一寸こゝで證明申して置きます。（金澤山梔子）

○誌友の皆樣に御尋ね致します、私は、名古屋藩士族田中家生れで同藩士族平野と申す家へ嫁に行きました・ぎんと申す今年六十四歳の女の方を尋ねて居るのですが、何分にも住所が知れません、其方の夫たる人は珠算の師匠を、二三十年前東京で致して居ったとの事です、其後、故鄕なる名古屋へ歸つたきり音信不通となりました、其平野ギンと申す方御存知ならばお知らせ下さい（磐城、小野けい子）○東京のみやこ鳥樣お差支なくば御住所お知らせ下さいなお所不明なのでお返事差上る事が出來ませんから（新舞鶴町敷島通り五條東入辻伊三郎方菅幸子）

○丹後の方に　仲田品子樣伊志子樣竹田雪子樣たみ子樣河村まさ子樣、おなつかしうございます。私も丹後なのよ、それでね、いつも丹後の方の御名を見るのが實にうれしいんですよ、新しい詩歌の湧く時——どうか努力して下さい（京都新町通り岡田樣內。田中多津子）　○小石川餌差町の中山千代子樣貴孃は岡山縣ではありませんか同姓の方はよくある事ですが若し岡山縣でしたら昔しの友です舊情を溫ためませう御交際なして下さい此間餌差町へ手紙を出しましたら受取人不明の封盞をして空しく歸つて來ました御所をしらして下さい（駒込東片町六六服部方美知）○國分光子樣に、當地誌友會に就ては私も兼々色々と考へても見ましたがあなたの處と此處とは十餘里も隔つて居るでせう誌友と申しましても三里行つた處に一人五里行つた處に一人位しか有ませんおそれが汽車も電車もないのですからこんな不便な地で集る事は困難に思ひます尙他の誌友の方の御意見を伺つた上で發起致しませう。（寶榮村。加藤菊子）

雜報

皇后御參宮

畏くも　皇后陛下には、五月十八日午前八時四十分新橋御發車にて、伊勢太廟參拜に向はせられた。之を歷史に徵しても、皇后陛下の太廟に參拜あらせられたることは前例がない、實に有史以來未曾有のことで、全くわが皇室の敬神の念厚く渡れらせたまふよりの御事と拜察しまつるのである。

愛國婦人會總會

愛國婦人會總會は五月九日午前十時半より日比谷公園に開かれた。此日　皇后陛下には御臨場あらせられ『本日愛國婦人會總會に臨み、益す會員の增加するを見るを喜ぶ』との御令旨あり閑院宮妃總裁殿下には奉答文を捧げられ、午前十一時半式を終り、餘興に移つた、此日會する婦人無慮二萬、日比谷原頭に時ならぬ花を咲かせた。

翌々十一日には九段偕行社樓上に於て茶話會が開催された、來會員一千五百名、會長初め幹事の貴婦人達は來賓の接待に努め、非常の盛會であつた。

明治四十三年末の調査に依れば、愛國婦人會員の現在數は七十九萬八千八百九十二人なりと

文藝委員會成る

前々より官邊の稍題となつてゐた文藝委員會は、いよいよ文部大臣監督の下に成立し、其委員の顔ぶれも任命された、此文藝委員會の結果が善ければ所謂文藝院と稱すべきものも出來るであらう。さて其委員の顔ぶれは、左の通りで多くは學者側・評論家側であつて、純粹の創作家は餘り加つてゐない。此會が出來たに就いてさまぐ\の問題も起るであらうが、兎に角吾等は各種文藝的事業が起つて、文運の進步して行くのを願ふより外はない。

委員

正四位勳二等功三級 醫學博士 文學博士　森林太郎（鷗外）
正四位勳三等文學博士　上田萬年
正五位勳四等文學博士　芳賀矢一
正五位勳六等文學博士　藤代禎輔
正五位文學博士　上田敏
正五位　德富猪一郎（蘇峰）
從五位文學博士　姉崎正治
正六位　佐々政一（醒雪）
文學博士　幸田成行（露伴）
巖谷季雄（小波）
井原敏郎（青々園）
大町芳衛（桂月）
塚原靖（澁柿園）
饗庭與三郎（篁村）
島村瀧太郎（抱月）

幹事　文部省專門學務局長　福原鐐二郎

日の光

△六月は日の光の强いことを意識される月である、五月の日光はまだ春らしく柔かいところもあるが、六月になると日光は全く夏らしい强烈な光線を投げる。

△今年の五月は近年になく不順の氣候であつた或はむやみに暖く、或はむやみに冷い。東北では雪の降つた地さへあつた。

△五月中旬山形市に大火があり、北海道にも大火が多くあつた、鑛山が燒ける、山林が燒ける市街が燒ける、北海道の火と云ふと何だか大きい盛んな火を聯想する。

△自働車に乘つて富士登山を試みやうとする外國人がある。

△夏のうすもの（肩掛）をかけて步く婦人が多くなつた。

△パラソルの色が派手になつて、又色がはりのパラソルをさす人も多くなつた、男子の麥藁帽子と共に、都會の初夏の空氣をすゞしげにする。

○『婦人の友』の飛躍　從來羽仁吉一、羽仁もと子夫妻の編輯されてゐた雜誌『婦人の友』は六月號から一大飛躍を試みて、理想的の婦人雜誌にするとの事である。羽仁氏夫妻の『婦人の友』に於ける信用は確實なものであるが、更に一步進めたなら純潔な好雜誌となるであらう。

○曙會　金子元臣氏主幹の曙會では每日曜午前に本郷弓町の自宅で國文の講義がある。

新刊

○さくら月　溝口白羊

『少女』主筆溝口白羊氏の少女小品集である、小

品と云つても寧ろ小説に近いもので、現代の若い女の心持を書いたものである、悲いもの可笑しいもの、眞面目なもの、意味の深いもの、とりどりに其味がある、近頃此種の出版も多いやうだけれど、皆薄つぺらでいけない、またかたくるしすぎていけない、『さくら月』は少しもかたくるしいことはない、現代の新しい女の胸にも、しつくりとはまるやうに書けてある、此意味に於て『さくら月』は少女の讀み物の中では代表的のものであらう、與平の挿畫も皆好い、體裁も淡泊なうちになつかしみがあつて氣持好く出來た。(定價金四十五錢、本郷東片町本郷書院出版)

○東京印象記　　兒玉花外著

寺門靜軒の江戸繁昌記あつて以來、既に五十年を經たる大都會の狀態は、何人か描寫せなければならぬのであるが、此處に詩人兒玉花外君先づ第一着に印象記に筆を染めた、此人にして初めて興味ある印象記が出來るであらうと思つたが、果して本書は現代の東京を描いて、尤も色調の強烈なものであつた。著者が詩人であるだけ何處か降した處がありはせぬかといふ疑もあるが、比較的此の『東京印象記』の描寫は忠實でもあり、而かも何處か一道の眼を射るやうな光彩があつて、本書の內容を貫いてゐる。中澤弘光氏の繪も宜い。(定價金七十五錢、麴町平河町五金尾文淵堂出版)

○現代講叢　　春陽堂

高田三郎讃、中澤弘光、鏑木清方、太田三郎、岡野榮、杉浦非水、齋藤松洲、織崎英朋、井川洗崖、橋口五葉など當代の畫家約二十名の新作を木版、寫眞版、コロタイプなどの、或は色刷にし、或は用紙に釐擇をして思ふやうに原作の妙味を發揮しやうと努めた畫帖である、版畫と云ふことや、浮世繪と云ふことが問題になつて來た昨今のことだから、本書の如きも定めし一般の歡迎を受くるであらう。(定價金七十錢、日本橋春陽堂出版)

○壁畫　　水野葉舟著

葉舟氏其後の小說を集めたもので ある、載する處壁畫以下九篇、何れも氏が近來の新境地を語つてゐる、惜しいかな本書は過ぐる日發賣禁止となつた、四六版四百頁。(定價金七十錢、日本橋春陽堂出版)

○南總里見八犬傳(一)　　國民叢書

國民叢書の第二篇である、八犬傳は我國小說中の巨人とも云ふべく、此の如き大部の小說を分冊にして置くのは、讀者の爲に甚だ都合の好いことである。(定價金二十八錢、本郷區妻戀町村瀨春院出版)

○簡易强健術　　川合春充著

此書は著者自らの經驗を書いたもので、生理學や醫學の理窟を說いたものではない、人として健康を願はぬものはなからう、何うしたら健康になるかといふことは本書に就いて見れば、能く分る、說明も丁寧すぎる位に詳しいから何人も實行することが出來る。(定價金六十錢、神田錦町二丁目春秋社出版)

○東京の色　　柴田流星著

東京の色とは、即ち東京といふ都會に住んでゐる人々の生活の調子とも云ふべきものを指すので、下町の娘とか山の手の女學生とかを小說風に實寫したものである、本書も發賣禁止された(定價金六十五錢、麴町洛陽堂出版)

誌友の噂

△長曾我部菊子は近々歸省する。

△誌友會の噂、問題になつた山田邦枝子の銀杏返しは全都に隱れなき新橋の伊藤とらの結つた者ださうです、朝六時から起きてわざわざ結ひに行つたといふので當日の噂とりどり。

△前島優梨子は誌友會に出京すると云つて樂しんでゐたのに故障が出來て來られなかつた當日の雨は其爲に降つたのだといふ。

△小說壇の雄將、妙子と梅子とは双生兒と云ふことである、しかも二人とも創作に優れてゐるのは珍しい。

△八代やゑ子は大阪へ行つた。

△以前の太田らく子の君、今は北光主筆松村英一氏の夫人となつて過る日一男子を擧げた、誌友會にも見えてゐた。

△吉田紫花は松韮紫花となつた。

△要司村福子は京都誌友會の熱心な發起者だが第二回も無事に開いた。

△岐阜の篠田蔦の葉も今度は大骨折であつた、該地の新聞も盛會を報じてゐる。

編輯通信

新文章

次の増刊の『新文章』の原稿は愈よ五月三十一日を以て締切りました、今回は全部を開放して投稿家の手に委ねましたから、定めし皆樣と同じやうな考を抱いておる方々に、歡迎せられるだらうと思ひます、內容の大要を次號で發表し得ることを記者は樂しんでおます。

誌友會の記事

誌友會の記事に就いては、東京の方も未だ別記が澤山あつたのですが、あの通り限定の紙面が一ぱいになつた爲め、掲載し切れませんでした、なほ京都、甲賀誌友會の記事は本號編輯の締切までに到着しませんでした、神戸の誌友會は事情あつて取消されました。

紙面の刷新

本號から本欄が多くなりました、從來の雜錄と稱したものも本欄に合併しました、而して愈よ本誌が若き婦人方の代表的雜誌であると云ふことの旗じるしを鮮明にし、意義ある發展をしたいと思ひます。

原稿募集

雜錄欄が本欄に合併されたに就いて、從來の雜錄欄に載せたやうな各種の原稿を募集します、告白でも、日記でも、感想でも、實話でも、何でもよろしい、長さは二百行內外で總ふりかなつきにして下さい、金五圓以下一圓以上の御禮を呈します。

○女子文壇 定期號 投稿規定

▲投稿は凡て女子に限る▲原稿には必ず『女子文壇投稿』の文字を書き添へること▲原稿は凡て女子文壇社宛、未納税は斷じて受付ず）に送ること▲小說と、詩は振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は三十行乃至五十行、初作は三十行以內▲各種類毎に一人一篇限りとす、和歌、俳句も一人一章限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、半紙、原稿紙、罫紙に限る▲別に本欄の原稿を募る、長さは二十四字詰二百行內外とし總振假名をつけること▲圖畫は毛筆畫にて薄き日本紙に認め大さは二寸に三寸一人一枚限。

◎投稿は毎月十五日到着を以て嚴に締切る

○女子文壇投稿各種懸賞定額

▲小說と散文は、天賞金參圓、地賞金壹圓五拾錢、人賞金七拾錢を呈す▲『詩』は天賞金貳圓、地賞金七拾錢、人賞金四拾錢▲『和歌』『俳句』『圖畫』『初作』は、天賞金壹圓、地賞金五拾錢、人賞金參拾錢を呈す▲『本欄』は金五圓以下壹圓以上正金にて呈す（但し二頁以內の短きものは此限りにあらず）▲賞品發送は作物發表の翌月以後とす定額金壹圓以上の創作當選者には價格相當の物品を贈呈し、金壹圓以下は圖書切符にて贈呈す。

▼女子文壇定價早見表

每月一日發刊・年四回増刊

冊數	定價前金	郵稅	合計
一冊（一月分）	拾五錢	壹錢五厘	拾六錢五厘
三冊（三月分）	四十三錢五厘	四錢五厘	四拾八錢
六冊（半年分）	八拾四錢	九錢	九拾參錢
十二冊（壹ヶ年分）	一圓六十六錢	拾八錢	壹圓七十四錢
定期及増刊號とも	定價前金	郵稅	合計
増刊一冊	貳拾錢	壹錢五厘	貳拾一錢五厘
半年分（八冊）	一圓二十三錢	拾貳錢	壹圓三十四錢
壹年分（十六冊）	二圓三十八錢	貳拾四錢	貳圓五拾三錢

申込注意

注文は總て前金のこと。振替貯金にて振込の時は必ず右誌代金の外に登記料金壹錢増しのこと、用紙は最寄郵便局にて無料にて呉れます。郵便爲替は中橋和泉町局宛のこと。郵券代用は必ず壹割増のこと。（收入印紙謝絕）。最寄書店にて品切の時は直接發行元へ御注文を乞ふ

▼廣告掲載料

申込期限　發行前月十五日

等級			
壹等	一頁參拾圓	（十頁廿四字 三十二行）	
貳等	一頁貳拾五圓		
參等	一頁貳拾參圓	半頁十三圓	一行四拾錢（但行五號活字 二十四字詰）

取扱所　博報堂。電報通信社。弘報堂。文明廣告社

明治四十四年五月二十五日印刷納本
明治四十四年六月一日七年第七號發行

不許複製

編輯兼發行人　野口竹次郎
印刷人　松本忠
印刷所　東京國文社

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　女子文壇社
（電話京橋六〇七番）（振替貯金口座壹七貳九番）

特約販賣　東京堂、北隆館、上田屋、至誠堂、東海堂、良明堂其外全國書店

◉濕氣と冷氣は婦人病の原因

人の健康不健康は一は天性又は遺傳に因るとあるも、平素養生に注意を拂はぬ爲め病氣に罹ることが多いものであります。殊に近く來るべき梅雨の候には濕氣と冷氣とを催すもので、此濕氣と冷氣は婦人病の原因と爲りますから十分の御注意を願ひたい。古來梅雨の候には邪氣拂ひと唱へて藥湯を造りて入浴した位で梅雨の養生には特に注意を拂ふたものです。毎日々々降り續く霖雨の爲めに室内に垂れ籠る御婦人は、何方も身體だるく、頭はおもく氣は鬱し眩暈又は睡眠を催ほし心地のわるいもので、自分で自分の身體を持餘すものなるに況して濕氣と冷氣が添ひますから、夫れが原因と爲り種々の婦人病を惹き起しますから、此季節に於ては身體の弱い人は勿論たとへ健かな御婦人にても中將湯を服用するの必要があります、中將湯は鬱を散じ氣分を爽快ならしめ且つ冷込を豫防するの特効がありますから、梅雨の季節に之れを常用すれば能く邪氣を拂ひ婦人病に罹ることはありません。尚ほヒステリー症は俗に云ふ血の道のことで最初は頭が重く氣がふさぎ次で頭痛が起り、[illegible]となりもう一歩進む――

些細の事が氣にかゝり過去の事や取越苦勞をする樣になりますが之には中將湯が最も有効であります。津村順天堂には内服藥としては中將湯あり、外用藥即ち子宮坐藥としては中將球があります、此兩藥を併せ用ゆる時は藥効は内外相應じて一層著るしい、さて中將湯の功能は

◉婦人神經(ヒステリー)血の道にて氣鬱ぎ癇高まり物を苦にし夜眠れぬ人
◉月經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人
◉逆上頭痛眩暈、肩凝り腰足冷え◉息切れ手足痺れ水腫れ
◉十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經前後に下腹痛む人
◉白帶赤帶滯下多く顏色蒼白き人◉冷症にて難産の癖ある人
◉産前何となく常ならざる人嘔吐産後古血の滯り或は日立惡く
◉此外子宮血の道月經不順に起因する諸病にてぶら〳〵と惡き人

子宮内膜炎とか白帶下、赤帶下、こしけ、子宮痙攣、子宮炎、子宮加答兒、膣炎、膣加答兒子宮糜爛、前の惡臭、前の瘙痒、月經時の疼痛及び夏人の痳疾に罹り居る時等に中將湯を服用して中將球を兼用するの必要があります

どういふ時に中將球が必要か

◉中將湯、中將球は全國到る處の藥店にて販賣す、若し無き時は病人の容體詳く書き添へ、本舖、東京日本橋通四丁目津村順天堂へ注文せられよ中將湯には數種の加減藥ありて、本舖は其病症に應じ適當の加減藥を發送する

中將湯代價　五週分二圓五十錢、三週分一圓六十錢、二週分一圓十錢
一週分六十錢、四日分三十五錢、二日分二十錢
中將球定價　百二十個入五圓、六十五個入[illegible]、二十個入[illegible]、九個入五十錢、三個入二十錢